

ISSN 2188-0638

The Fulbrighter
in
Nagoya

No.34

February 2025

Nagoya Fulbright Association

The Fulbrighter in Nagoya No.34

目 次

1. 巻頭言

2. 講演会

テーマ：Have Fun!: 国際社会の狭間で枠を飛び出すスタイルを求めて

講演者：四国学院名誉教授 加瀬豊司 (Toyoshi Kase, Ph.D.)

その他のエッセイなど

3. 会務報告

1. 巻頭言

2024年11月9日の総会、講演会は久しぶりに対面で行われました。講演会は講師として長年フルブライトの活動に名古屋ブルブライトアソシエーションの幹事として、積極的に参加している加瀬豊司先生（四国学院大学名誉教授）にお願いしました。最近の講演会とは異なり、先生の個人的な友人なども含めた参加者が46名にもなるという盛会ぶりであった。

今までのニュースレターの編集の仕方としては、講演していただいた内容について、加筆等をしていただいて、それを掲載するというものでしたが、今回の場合、講演の内容だけでなく、加瀬先生が様々な形で発表されたエッセイなども含めて、このニュースレターに掲載しております。加瀬先生の多面的な側面などを皆さんが理解できるのではないかと、このニュースレターのまとめ役の塚田がお願いをしました。加瀬先生が書かれたものに関しては、ご自身のスタイルがあるので、一切、編集を行っていません。また、全体を読んだうえで、内容紹介も兼ねて、解説文を書こうと思ったのですが、先生の話題の広さと深さを変にゆがめることになるのではないかと思います、あきらめました。

なお、講演の中心的話題は、2024年4月19日亡くなられた娘さんについてのことです。父親が娘のことについてこれほどまで書くことが出来るのかと、感動的なものでした。一読をお勧めいたします。他のエッセイあるいは論文も加瀬先生の幅広い活動の一端を垣間見えるもとして、個人的には楽しく読ませてもらいました。そして、それぞれのエッセイの中で触れられている加瀬先生の留学体験などは、同じフルブライターとして、アメリカの大学・大学院で学んだものとして、大いに共感するものでした。

講演中の加瀬先生



加瀬先生の娘さんの親友も最後にスピーチして、思い出話をしてくれました。



参加者の皆さん



2 講演会とさまざまなエッセイ

テーマ：Have Fun!: 国際社会の狭間で枠を飛び出すスタイルを求めて

講演者：四国学院名誉教授 加瀬豊司 (Toyoshi Kase, Ph.D.)

その他のエッセイなど

講演会は以下の要領で行われました。

日時・会場：11月9日（土曜日）3時～4時半・椋山女学園大学（外国語学部棟 416 教室）

演題：Have Fun! : 国際社会（言語と文化と人間）の狭間で枠を飛び出すスタイルを求めて

講演者：四国学院名誉教授 加瀬豊司 (Toyoshi Kase, Ph.D.) Fulbrighter : All-expense

Fulbright Graduate Program 1974-76 MA: ワシントン州立大学 (Dpt. of English/American Studies) Ph.D. (博士) : 州立メリーランド大学 (文学研究科、アメリカ研究

2024 年度フルブライト講演会 (Nagoya Fulbright Association)

日時・会場：11月9日(土曜日)3時~4時半・相山女学園大学(外国語学部棟416教室)
名古屋フルブライト・アソシエーションおよび日本イーストウエストセンター中部同友会
演題：Have Fun! : 国際社会(言語と文化と人間)の狭間で枠を飛び出すスタイルを求めて
講演者：四国学院名誉教授 加瀬豊司 (Toyoshi Kase, Ph.D.) Fulbrighter : All-expense
Fulbright Graduate Program 1974-76 MA:ワシントン州立大学(Dpt. of English/American
Studies) Ph.D. (博士) : 州立メリーランド大学(文学研究科、アメリカ研究専攻)

レジメ：

言語と文化と認識の使い方

- I. 文化とその認識と届け方をめぐって騒がしくなった世界→整理が必要
 1. 言語：方法論的拘束 (methodological restraint) : (例) 新渡戸稲造『武士道』
 2. 文化：文化構築主義(変化)と文化本質主義(文化を固定するステレオタイプ)
 3. 認識：暗黙の前提 (tacit assumption) は「厚い記述」(ギアツ)で→「批判的自己省察」(reflexivity、フルブライト) : 自文化中心主義→要“文化分化分解”
- II. 発信の広域流通語としての英語
 1. 言葉の組み立て(段落：パラグラフが内容発信の決め手)
 2. 英語を取り巻く評価論 (→ ← ↑ ↓)

“エピソード”な出来事←社会経験

イントロダクションとして①【初めの出会い】(現地の現場の現実)：

子どもの世界：幼稚園(登園)の出来事→リアリティー(社会や人間の深層心理)を認識をする。<大人の学校教育：xenophobia:そんな英語を何故知っているのか。日頃反応出来ず、笑えないのにアメリカ50年代の大統領へのジョークに笑ったのは留学生加瀬豊司のみ>
→共有：親子でこの国でやり抜く「原動力」にする→もう一つの共有：アメリカの(教育)システムを節目まで使う(卒業や修了)

→相異：価値観を「修得」(アメリカの幼稚園・高校卒業)→人格形成・性格形成、<対象を「学習・研究」(大学院)→方法論と思想(思考力+想像力)形成>

→位置づけ：両親に同伴したフルブライト・キッズの「幼稚園留学」(と親は思っている)
→自己決定のアイデンティティー(AFS)と個別/共通カルチャーを使って open discussion

②【小1で帰国。小学校生活あれこれ】(再入国ショック：re-entry shock)

*育った意思表示(帰国挨拶時の“素”の第一声は) *集団登校時の高学年児童の説明を聞かない子ども達→Hold it! ←言語の重要性 *冬は体育館の暖房スイッチを←設備ありが当然
*一斉教育にフラストレーション→解決に対する感謝→Kiss! *教師に対する“試し行動”

(仮想のジオン公国で二重丸) <親も換骨奪胎：子守歌は疲れて寝るまで自分で歌う>

*小6で英検2級面接：こんな“チビ”が、ほんで私んらが落ちるんだと待合室で高校生/短大/大学生から嫌味。入室会話では“Do you like English?”→“Why?”and/or“Why not?”

③【中学・高校時代】

*文化摩擦には普通に中学生“low profile”で。父親の親友の音楽教師(瑞陵高)のオペラ『魔笛』を毎年観劇。偕子は落ち着いて物事に動じない自分をしっかり持った子、とその先生談

*高校生になり自分で AFS 受験：面白さとタフな性格が功を奏す。最終試験は1泊の面接試験(何度も“再面”に呼び出され試されるのが受験生)。異文化・異言語の中でやり抜く高校生が選考基準。合格、盛田奨学生にも合格。高2の夏、アメリカの高3に飛び級して在籍

④【アメリカの高校で】、

*最難関だったらチャレンジが面白い(アメリカでは高3→SAT(大学進学適性試験)受験。

Language 部門；アメリカ人も知らない語彙満載の超難関英語試験で勝負)←“当然”低く見られ同情される(これ嫌)日本人→通知表には。教師の評価(学年トップ)は実力主義と向上心を評価→しかし本人の反応は・・・。<豊司は何故ベストペーパーを見てこないのか by ユダヤ系アメリカ人指導教授>*学校祭で(カタカナを使ってお金儲け)*クオリティーで高めるコモン・カルチャー(招待 D.C.往復の旅行手段：better to travel hopefully than to arrive)*誉めた話ではないがcafé-barに(成人は21歳)、ナンパされそう←確立しているアメリカの社会規範(厳しさは日本の飲酒運転)を活用した智恵で危機管理(I'm 16.)

*卒業アルバムの書き込み(原文は冊子に)は至るところでアメリカのコモン・カルチャー：fun, fun, funの連続。「クラスメート」で偕子とディスカッションした男の子達は“猛烈な”女性(terrific woman)、でも面白かったと。「教師」から頭脳明晰、ユーモアのセンスがとび抜けている、「事務職員」からはいつも笑いと笑顔でやってくる生徒と、過分の評価も

<ここで大学生生活(海外の高卒卒で、受験、合格)の前に講演のもう一つの焦点を挿入>

“ヒストリック”にクラーク博士から(系譜)

⑤【ルーツ探しとその継承に札幌農学校に行った孫誉(ほまれ)関連の具体的な逸話の数々は旅日記に。そして折に触れこの家系史の“流域”で国際的要素を内在化していった偕子にもふれる】→系譜の国際的価値の「継承」は孫の具体的なルーツの旅、偕子の場合、時の流れの“流域”で長い時間をかけ、しみ込んだ家庭内での時折々の「伝承」と思っている

*親族関係(系図)は「血縁」をまず中心にする。北海道の「地縁」や歴史の「時縁」は南部藩。南部藩は会津藩を支援して新政府に敗れる。落ち武者の一人、曾祖父佐藤昌介は志を立てて東京に(東京英語学校)、そこで元南北戦争「北軍大佐」のクラーク博士の熱烈な演説が志を抱かせ、そのクラークの薫陶で育った3人の“つわものboy達”：一期生愛弟子佐藤昌介(札幌農学校→北大&総長34年間。「組織をつくる」)、国際人新渡戸稲造(国際連盟事務次長「演説して世界をまわる」)、信念の執筆家、思想家内村鑑三(儀式、風習、偽善か

ら完全独立し、物事それ自体を純粋に極める事に徹する。それを内面化させ“原点回帰”、そして作品化。書いて残す)

* **ウィリアム・スミス・クラーク博士**：黒田清隆らによる開拓使の北海道への招聘に応じる(北への北軍の思い入れ!)。マサチューセッツのアマスト校学長職9か月を札幌農学校校教育のため来日(50歳)。ピューリタンの「メイフラワー盟約」(p.37)が教育共同体の理念。

* **佐藤昌介**：組織人として、廃校方針の札幌農学校→官立(帝国)北海道大学に。この組織化に邁進→内務大臣井上馨と西園寺公望大臣に直接陳情。同郷の原敬の協力も受け現北大に昇格(1919)。* 学業、生活の背景は(奨学金のない時代<留学申請、却下>)。辞表を“たたきつけ” Johns Hopkins University に私費留学(同大日本初の農学博士1886)。学友、後の大統領ウィルソン(国際連盟設立)と同席。妻(陽)：淡路藩の稲田藩主の妹→吉永小百合主演の映画『北の零年』、NHK スペシャル『お登勢』。同郷の原敬の計らいで、「留学通信・アメリカ事情」等を頻繁に執筆しその原稿料が留守中の妻の生活費

* **新渡戸稲造**：佐藤昌介に呼び寄せられ Johns Hopkins University→アメリカだけではいけないと独ハレー大学(同大博士号)に、国際連盟事務次長になり世界発信、1924年アメリカの「排日条項」に激怒→カナダへ。そこで客死(バンクーバーのUBCに新渡戸記念庭園)

* **内村鑑三**：人間の自己矛盾性(oxyoron)を掘り下げる執筆多作。「書いて残す」思想家

クラーク教育が結実 特記に値する「三羽鳥」の人間模様や人間関係の詳細は本文に。纏め：

1. 失意の「元サムライ」達の復元力/回復力(レジリアンス：resilience)に火をつけたのはクラークの**国際教育と人格教育**(厳しさで育つ師弟愛)
2. 最高の価値を目指し、突き詰め、やり通す力量形成→活力に溢れ、仲良く“ケンカ”し、議論して刺激し合い「切磋琢磨」。人生に“大志”がある限り、優劣の相対的評価や能力のつぶし合いはしない。勿体ない。自分の特性を生かし、極め、お互いの特性を清々しく応援
3. この歴史はリアルな“**社会実験**”→薫陶のもと、覇気と機会の融合で“卓越性”が生まれた

<閑話休題>

大人になってから

⑥【**海外の高卒卒(日本では高2)で受験し入学した大学英米科**】

「心から笑える南山大学親友4人に恵まれ」 林昌子さん(アメリカ高校盛田奨学生)から

⑦【**就職した県庁国際課**】 その都度その都度聞いた逸話をもとに (felt reality)

* 県庁女子職員の制服：知事の品位を下げてはいけないので*セントレア空港の滑走路の長さの知事説明：NYの Empire State Bldg.は Tomoko's initiative *職種上多岐に渡るので広く仕事スペースが必要と越境→“焼き畑農業”いわれた→家でも越境あり<父親は後かたづけ、整理整頓が上手になった>* (留学中から) ユーモア感覚とウィット力↑の言葉人間→海外での父親の教え子・本人・知事との邂逅：伊勢志摩サミット時のオバマ大統領アメリ

カ大使館員（教え子）県庁国際課（本人）やNY愛知県県人会での教え子、本人、現知事と

⑧【人間借子】

*親の欲目と言えば、娘は内外のマイナスは原動力として使い、思考し判断し、言語力を駆使して皆と（双方向）仲良く、刺激し合い、面白くやっていく（自明性は退屈と）という“国際街道”を半世紀走り抜けて行った生涯だったと受け取っている（She knows her own way.）

⑨【終末期】

*自己運営の招待パーティー3回（両家、親族、職場）*主人の浄土宗の菩提寺に対する敬意と自作の戒名「加河院藝誉借宗大姉」（絶対変えんどいてよ、と）←言葉が仕事なので。好意的な評価は結婚式司式者、丸亀教会三谷保牧師の最後の書簡（読ませていただきます）

⑩【一家総出の国際交流がもたらした知と智】

*言語は reality-maker *言葉は国際交流の華 *言葉を国際交流に落とし込む *国際的価値の普遍性→不偏に存在：“往来発着・行住坐臥”の日常世界の中にも。*言葉による発信（reality-maker）の基盤にフルブライトの言う“free and inquiring mind”（自由闊達）があり、根っこには理性（reason）と正義感覚（justice）*フェイクが横行する世界には、言葉のレトリック、人間性のレトリックの奥底まで鋭く見抜く洞察力がある *そのため“obviously untrue”の「ノン・センスの虚構世界」を設定し、次にそれが緩なす「全体像」を鑑賞する余裕が欲しい * “真逆の真逆”といった深い発想性と豊かな鑑賞力が深い「fun」をうみだす（Tシャツのロゴ紹介：Be Happy. Don't worry.→Don't be happy. Worry.） *戦争の反対語は国際交流、この社会実験は冒険家が必要 *国際社会には人物交流（フルブライトの基本方針）*ケネディーは「アメリカを友にではなく、友情を友に」と（AFSerへ1963）

《補足》 瑞陵高校（元英語科教諭）にまつわる親の思い入れからの「推測」

*愛知県（名古屋やトヨタがあり日本の真ん中なのに世界に知られてない）瑞陵（五中）出身の杉原千蔵とその家族の等身大のモニュメントは世界発信に足り得る。設置者は現愛知県知事（銘あり）。英文は借子がチームで。もう一つの瑞陵に対する思い（小学・中学時代は毎年瑞陵高の学校祭・記念祭に来ていた。更に瑞陵の同僚であり親友の音楽教師の演じる『魔笛』の「ザラストロ役」に毎年招待され観劇、その9年間、類似する“サムライ精神”を魔笛のモチーフ、“試練を通して本物の人間になる”との価値観を9年間、楽しんで聞き続け、互いに重なり合い響き合う価値観を内在化していったのかもしれない）は強かった。

国際交流の原点になった太平洋戦争の戯曲化

⑫【内面史の方法論：Methodology】

*他者の内面を扱う（human subject）事の著者性（authorship）の限界と可能性

⑬【原作としての語りを語る：Narrative】

*参与観察（participant observation）という密着取材（putting into the shoes of others）からの言語化

⑬ 【Annotated Essay：詳細註記と書誌情報】

* 個人化 (individualized) という quality が確保。要説得性のある叙述力その上で余す事なく言語化 (spell out)

⑭ 【脚本 (家) (として) の Script】

* 舞台化成否に関わる前段階としてのやり取りの迫真性 (verisimilitude) 構築

凡例：

本報告は、2024年11月9日(土)「名古屋フルブライト・アソシエーション」講演会発表によるものである。国際交流の総集編としてこれらの冊子体は、特に焦点をあてた分野(モノグラフ: monograph) 2冊とその大本を支えている1領域を付け加えて集大成したものである。製本については2023-2024年のまたがる執筆時期は幅があり、頁番号も独立させた、いわば“semi-detached house”のような構成になっています。それぞれに共通した強点は重複記事として組み込まれています。

大筋は日米関係に関わった加瀬家を自己言及の対象としその系譜の80年間の国際交流を中心としています。これらの3部作(トリロジー: trilogy) は区分が入っていますので、お読みいただける場合はどの冊子領域から、またそれぞれの叙述は段落(paragraph) 毎の単位(cluster) にレイアウト方式ですので拾い読み可能な編集とっております。

講演会記録・報告：

少し長めの前置きになります (foreground)

昨今、とみに使われる「文化」という言葉は本来、物事を分かりやすくする伝達的手段であって本質そのものではないとの前提で“文化”と「見え消し線」を付けた。また「life」の綴りの真ん中に可能性を含む“if”が象徴的に存在し、社会の思い込み(暗黙の前提)を超えるその広がった世界を大切にしたい。言葉の更なる世界にも「wife」の中央に“if”ありとパロディー化したりして人生を“にんまりさせる”「fun」という「諧謔性」がある。言語の修辞法に国際交流史を乗せ、広く日米社会、また絞り込んだ身近な体験の両面を融合させ深堀りの歴史記述をしてみたい。国際性の理念・理論操作ではなく、現場(フィールド)に深く(in-depth) 入り込み、足と口を活用した参与観察手法(participant observation) を極力実践した。ただ“社会実験”とでもいうべきフィールドに関わる国際性の理念や方法論は少し重厚に論じ、現場の現実に起こる出来事や体験は逸話としてエピソード風に<コメント>を挿入しながら語る。キーワードや用語類は相補的に意味確定をさせるため日英語の(バイリンガル) で記した。

ここで言い訳のような私事の説明を事前にさせてください。昨年の夏、日米関係のルーツ継承を念頭に11日間の北海道旅行し、その私家版に纏めた事がきっかけになり、講演の題材

と思い、その方向で本年初頭より準備をしていました。本年 4 月に入って長女偕子（ともこ）が食道がんから腸に転移・増殖し、54 歳で早世してしまいました。アメリカの幼稚園、アメリカの高校を卒業し、帰国後大学は日本での英米科、そして社会人として愛知県庁国際課在職中の事でした。幼少の頃から国際社会が周りにあり、継続して国際環境に関わってきた人生でしたが、こんな形で突然の“断絶”になってしまいました。身内の事（familial relations）で恐縮ですが、両親に先立った娘に敬意を払い、国際交流に関わる“家族史”は偕子を中心として語ります。親の気持ちの上では、娘がこんな形で帰ってきたと受け取っています。方法として、人生に生起する出来事自体にスポットを当てる共時的（synchronic）な扱いと同時に、血筋に関わる家系史は社会の流れを中で世代を超える通時的（diachronic）な取り扱いの両面に触れてみる。

国際性の原点は「少年よ、大志をいだけ（Boys, be ambitious.）」のウィリアム・クラーク博士にさかのぼる家系史があるが、そこでの社会の現実と関わる生身の人間模様の「切り口」を学究的な概念（concept）を超えるそれを日常世界の「notion」と位置づけ、両者を内容に応じて使う。このノーションは言い換えれば、概念の実践機能用語で、それは日常生活世界に類出する。まわりくどい説明になったが、その観点からいえば本稿においては生活用語の「高さ」「深さ」「広さ」「長さ」の 4 つ（一部基軸に「近さ」を含める）の角度から国際性の理念と実践を語ってみたいと思っている。期待としては、同じものを異なる視点（間紙の詩参照）から見てそれぞれ新しい部分を掘り起こしてみたい。この方向で、具体的な講演の焦点は、「人間、文化、言葉」の豊かさを日本に住みアメリカに長期滞在し、現在も日英語と異文化の狭間世界を乗り越える“超越次元と普遍的次元”を追い求め、①自家史としてクラーク博士の直弟子（札幌農学校一期生）の曾祖父佐藤昌介による帝国大学組織化（高さ）を振り返り、極めて接触が密であった 2 期生の新渡戸稲造の国際連盟舞台（広さ）と人間の内面化に徹した思想家内村鑑三（深さ）に連なり、②戦争という極限状態を契機として生まれた Fulbright（米大学院）と AFS（高校留学 American Field Service）のアメリカ発の国際プログラム（Fulbrighter や AFSer）に親子でそれぞれ関わり（近さ）、さらに娘はソニー会長の盛田奨学金も重ねて受賞し、私大英米科を卒業後、公務員として国際課に勤務し、現実の国際社会の行政に関わり、③7 世代目の孫（誉：ほまれ）に至る 150 年の（長さ）を構成要素にした悲喜こもごものライフ・ヒストリーに“再訪問”する試みでもある。そのための言葉の基本トーンは、書き言葉は固めに、話し言葉は柔らかく（面白く）へのこだわりをモットーにし講演会関連はその方向で努力してみる。生業の言葉の世界が共通項としてあるので・・・。

多岐・多層の国際関係で筆者が今も強く感じている事を率直に言えば（blunt avowal）、“おもしろないと、やってけん！”。乱暴な言い方なので本音は押さえ、檄文的な言い方を出来るだけ避けるため多言語でマイルドにしてみたい。話の認識で言うと、長短に関係なく面白く

ない話は“dull”、そして長い忍耐力が強えられるのは“killer”。典型的な言語修辞法は、短い言い回しの巧みさを通して深い韻きをもたらず金句。長くダラダラするのは禁句。「簡」にして“要”を得る」(“Brevity is the soul of wit.”)。収斂させるのは要点に纏める文体：precis writing。一方、“表層，深層，基層”といった多層面を持つ複雑な物事・事物の記述は、当然長くなるので文構成を考え、論旨の理知的な展開が必要(「厚い記述：thick description」。他の表現にすれば expository writing)。いずれにしても、受ける側 (audience) に締まりのないダラダラ話は相手に我慢を強いる事になるので、文体の吟味 (Style is the Man.) が肝要と思っている。

長短に関する日英語の決定的な違いに一言。“短い話は良く長い話は良くない”はすべての“話”は忍耐の対象と言った日本的ステレオタイプの思い込みがある。皮肉っぽく言えば、言語生活の“知恵?!”としての対応は、適当に、断片的に上澄みだけ取るといった聞き流し方式。長短の言語行動については心で思っているだけではなく英語は単刀直入に評価を言語化する社会。英語にしばしば登場するのは“What are you talking about? “Do you know what you’re talking about?” これは言葉に盛る知識 (量) ではなく、言葉の組み立て方 (organization) であり、話の構成の不備への自覚を相手に促す事が中心。対人間の言葉にはコミュニケーションのやり取りや社交もあるが、ここでは双方向でより高いものを作り上げていく交わり (speech community) への努力の現れに焦点を当てる。繰り返すが、要は内容をどのように纏め上げるか構成の問題である。この展開に至ったら後は、ここに言葉の修辞法を駆使して知的な面白さで包む言葉の運用である。話の楽しさは本当に倍加させたいもの (言語に対するこういったスタイルがないと、英語修得/学習は絵に描いた餅)。国際社会への発信のためにはこういったバリアーの枷から自由にと願う。

次は目立つ事、著名な事によく付きまとう“ある社会感情”の問題である。自家系の歴史は自賛臭く受け取られやすいが (その分世紀を超えて、教科書掲載で著名になった「少年よ、大志を抱けの」クラーク博士による札幌農学校こと、現北海道大学への旅行は、漢語で言えば“鴻業”と感じ、訪問は何となく気が引け保留状態になっていた。55年たった昨年夏、先人の足跡を孫への継承の必要：imperative を思い立ち 11日間の訪問フィールドワークに“55” (ゴーゴ) と思い実行した。ともかく今回直接言及はするが (“no sting attached”)、それらを材料として使って価値あるものに昇華する (できれば国際交流の“普遍性”) スタンスをセットにして臨んだつもり。換言すれば、属人性 (の嫌らしさ) を乗り越え、超越し、凌駕できる次元に飛び出してみたいのが、考え抜いた本音である。

社会感情のノイズに対して少し耳障りな自意識過剰のくどい弁解になってしまったが、大胆に言語社会学が提供する (“約束する”) 「超越次元」に思いを馳せる事にした。この社会意識に対して、俗っぽく言えば、“ミーチャン、ハーチャン”の“follow-the-crowd”だけは吹

っ切りたい。自分史、家族史、家系史を大げさに特権化するのではなく、その歴史の中身に自己言及する事により、それが再起し、本来の自己理解に変わり、大きな観点に「還元」し連想していくクオリティーに変容させたい、と強く願っている。こんな相互的な「自他の社会性」に着目し、その物語性を高めていく知的作業 (sophistication) をフルブライト (Nagoya Fulbright Association) 会長、塚田守椋山女学園名誉教授は『ライフストーリーセンター構築によるストーリーの社会学研究』(2013年科研費研究報告) で次のように述べている。

～「自分史のエッセイ」「自分史作品」はその相互作用の要素が少なく、対話ではなく、書き手の「モノログ」であり、共同作品とは言えないという議論があるかもしれない。しかし、研究代表者の塚田は、「自分史のエッセイ」を書く、読む行為の中にも、「他人の視点」「人間関係」「読み手」などを強く意識しているという点に注目し、インタビュー対象者の語りと同様な、「語られた物語」でもあるとみなしている。(p. 100)

この心構えがもたらす相対化により対象が清らかになり、すっきり集中できるはず、と考えている。次は内容を構成する言語的展開。現場の経験を体系化する際、表面的にスルーし、そのままハッピーエンドに行く手法ではなく、窮地に追い込まれたり、広く人生の緊張場面に遭遇し、そこからの葛藤 (二つの間の dilemma や三つ間の trilemma) からカタルシスの深みの次元に到達したい。これは演劇、特に悲劇の手法 (dramaturgy) によく使われる手法。ここに費やされるエネルギーと同様もしくはそれ以上に、言語人 (ホモ・ロクエンス : homo loquens) としての人間は、極めて複雑に言葉を操る高等技術を持っている。そして言葉を社会生活の道具だけではなく、さらに言葉自体を目的とした言葉 (言葉の言葉という「メタ言語」 : metalanguage) を使うだけでなく、その言語行動自体に「快楽」すら覚える。それにより双方が緊張を超えた人生一般への笑いや自分の馬鹿馬鹿しさへの笑いを自他共に分かち合うのも意義ある事と思っている。時としてドロドロの国際社会に対して、個々の経験と言葉は現実を乗り越える効果的な隠しワザを持っている。さらに国内版としては漢語・漢文の古典語は冷静・沈着化に至る落ち着き生み出すと思料し、それがピュアーに本質引き出すもう一つの (alternative) “資本”と位置付けている。この方向で、自分の娘を引き合いに出し言語の世界との関連で具体的に語りを続ける。(娘が生存していれば内面の成り立ちのこんな語りに対し“禁止令発布”かもしれない、天国の借子さん、お許しを。馬齢を重ね過剰配慮! ?の父より)。

次は、言葉が生きて働く現場の現実の「動域」フィールドにリアリティーとして生起する“緊張(苦)と諧謔(笑)”に焦点をあて、認識の“動揺”をもたらす言動(ズレやボカシ、意外性や肩すかし、追い打ちとドンデン返し、反語、反転、逆説等々)を自由に使いこなし、自文化からくる思い込みやそれを反映した「暗黙の前提 (tacit assumption)」を解体してみる。使い古された概念であるが、こんな脱構築 (social prison break/deconstruction) がもたらす

新しい意味世界に着目し、かつ焦点を当てる。ともかく面白・可笑く本音を語ってみたい(できれば) と思っている。

こんな切り口で人間と社会の関係を考察、ひいては国際広域流通語である英語の修得・再修得を引き出し得る現・次世代の活躍に大きな期待を寄せている。本人、子ども、孫と広がる海外旅行・研修・留学(語学研修から学位取得)と広がる移動がもたらす異文化と異言語の話題が尽きない昨今の日本。日本語と英語が相補的に働き、意味設定を明確にできる利点を持つ「バイリンガル」記述(詳細は後述)に加えて、自国語の漢語の中には心憎いほど人間性を描写する精度が高い場合があるので、常用漢字を超える豊かな文語表現(古語・古典)も一部、敢えて利活用と前述した。これは後述する内村鑑三の当時の文体に良く窺われる。ともかく使いうる言語の諸相を総動員して、何とか深みの次元に隠されている“普遍に近いもの或いは普遍といえるもの”に近づいてみたいと思っている。

総合的に理念で纏めれば、国際性の深層面(in-depth dimension)は日常の自明性が持つ月並み(cliche)で退屈な(stale)世界を揺り動かす「動域」であると認識している。現実には潜む別の現実への気づきにより、人生に新しい視点が獲得され、新しい枠が形成され、自由な発想が保証される事を望んでいる。言語を駆使し、自由に考え、自由に語り、自由に書く楽しみがこだわりのない最高善と思う。講演タイトルの2語文「Have Fun!」は人口に膾炙された英語の日常表現であるが、気の利いた日本語一文への翻訳は極めてしにくいので可能性と限界を含み持つ英語の機微な趣旨をそのままのかたちで感じ取ってください: “It has yet to come” (ここから円熟した国際交流が始まると考えている)。

Background は

1974年のフルブライトの全額支給大学院プログラムでワシントン州立大学(Washington State University: WSU)のDpt. of English with emphasis of American Studies(アメリカ研究に特化する言語としての英語)、さらに一年後更新され1976年まで2年間ワシントン州に家族(妻、4歳の長女偕子と2歳の長男宣雄)で滞在した。兼職を含め、英語一筋に愛知教育大附属名古屋中学校(附中)〈毎週昼間全日兼職〉、愛知県立名古屋西高等学校(名西)〈定時制(週半分の昼間は通訳)、全日制兼職〉、旭丘高等学校(旭丘)〈全日制兼職〉、瑞陵高等学校(瑞陵)、そして四国学院大学短期大学・大学・大学院(四国学院)を歴任した計43年間(すべての学校名は括弧内に略記)の教育世界だった。全学の国際交流委員長と大学院文学研究科長を最後に、2008年定年退職し、そのリタイア前後に全米を車で長旅をした移動による好奇心のかたまり(向上心と勝手に名付けている)が本人。

講演テーマに至った歴任校での中心とした内容を付言させてください。附中(兼職): audio-lingualism と following/shadowing で指導。form と function の融合の大切さに確信。名西

(定時制教諭、全日制兼職)：教職の大切さと人生を学ぶ。国際技術協力事業団通訳及び日本語教師。日系アメリカ人の移民母村が多い瀬戸内海地方に移り、四国学院(教授職と組織の役職)：大学人の教育・研究・組織は深いところで繋がっているとの認識に至る。研究年(sabbatical)により米国大学院で博士課程に挑戦、悪戦苦闘しながら博士号取得、同院の国際センター客員研究員。ここは当時文部省の若手官僚(Monbusho Young Fellow)の研修場所でもあった。このセンター長からはこの人たちを“使っても OK”と言われていた。一度だけ四国学院に fax を送る事務作業を頼んだ事があったが、随時日本の教育の展望等も語り合え、有意義なアメリカでの日本人コミュニティーでもあった。

ここでどうしても書き記したい“特記事項”がある。センター長は博士論文(dissertation)の指導教授の一人。日系アメリカ文化をテーマとしたアメリカ研究(American Studies)分野の学際研究(interdisciplinary research)。日系アメリカ史に特化した「歴史」とそれを記述する「文学」の融合、そしてフィールドワークは太平洋戦争後にワシントンD.C./メリーランド(筆者の学籍大学地)に定着した日系人。この「地域探求」。こんな指導も受け、この骨組みで博論を仕上げた。3年前、日本の高校教育に明治以降の大改革、その指導要領の柱は「学際融合」と「地域探求」。Funとしてのこの事実は最新の日本の高校の骨組みでアメリカの大学院での博士論文ができる日米国際関係?!

緊張時代の日系人に繋がるこだわりとあやかり

2007年夏はアリゾナ州フェニックス近郊のヒラリバー(日系人の強制収容所)の47°Cからアラスカ州からプロペラ機で北極アルーシャン列島のダッチハーバー(白人系とアジア系ミックスの現地の方々の自・他アイデンティティー研究)マイナス45°C、プラス・マイナス100度の温度差間の移動を含むアメリカ11州を、大学の6か月のサバティカルの内3か月の5,000マイルの旅(第二次世界大戦に関わる日系アメリカ人史のフィールドワーク)をした。更なる翌年春に同じ目的で3か月間、更なる5,000マイルの車での旅行をした。そして最後は、リタイア後も“これでもか”とアメリカ全州に取り憑かれたように陸路マイルレッジを増やしたいった。

個人的な話で恐縮するが、極地から日本に還ってほっとしたのもつかの間、温度差の隔たりの故か、ついに後述の「MRI」のお世話になる羽目に：通常二本ある椎骨動脈が現在一本がふさがり、今も一本の単品で生活している)。それでそれなりに1年間健康管理に真摯に励み、人生最後のアメリカ長旅に。今度は通常温度内地域(南部)をゆっくり旅。大学訪問、講演会、友人のお見舞いをしながら老夫婦で移動生活の2,000マイルをした。総走行距離にすると12,000マイルの2万キロ、教職を離れ合計9か月間の路上生活を楽しんだ(quite a fun trip)。こんな旅のヒントは下記の文豪から得た。

ノーベル賞作家スタインベックは晩年に「アメリカの作家として、アメリカについて書きながら草と木とトブの匂いがかがず」(『Travels with Charley』を引用。拙稿「同窓生からの便り」The Fulbrighter, No. 27, Winter 2007)と反省し、愛犬チャーリーとの10,000マイルの車旅行。加瀬シニアはスタインベックより陸路2,000マイルプラスと変な競争意識を感じ、この軽い競争心の中にある種の面白さも感じ、このfunの世界に“わるのり”する回転ずしならぬアメリカ一周旅行と皮肉を込め自嘲し、自分を眺めていた。しかしフィールド随所で出会う人達の存在は、言語社会学系の人間にとっては新鮮で exciting。

経験 (experience) を体系 (expertise) で括ると

広がりや長さがある物事は深さと高さに到達するために人類学者のギアツ (Clifford Geertz) は何層にも絡み合っている社会の事象の理解のためには「厚い記述」(thick description)が必要といつも力説している。講演者・筆者の一つの生活世界に触れさせてください。ここ2、3年お世話になっている医学機器MRI (Magnetic Resonance Imaging)の頭字語(acronym)にヒントを得、多様な音の反響より体内の画像をつくるが、全米各地の日常世界が刺激するMobility (移動)、Research (研究)、Intellectuality (知性)の三要素がこだまし合い、心身のワクワク感が妙にくすぐられ、増幅され今も余韻が残っているのがアメリカ長旅であった。この感情は世の芸術家という「感情」という高度の価値観にまで高められたらと今もって大きな期待を抱き続けている。ただ正直、頂点を感性か理性に焦点を当てたらよいか今も迷っている。

あれこれの自己紹介はこれくらいにし、次は本講演の原点であるフルブライト・プログラムに同伴した家族達に国際交流生活がもたらした影響から。前置きの説明責任(accountability)は本来、事前説明責任と思うので輪郭を叙述してみる。今までの認識枠の変更、特に子どもの発達諸段階での人格、性格形成といった、時として衝撃的な異文化・異言語体験を感じたまま、ありのままの3G:「現地の現場の現実」(felt reality)とそれがもたらしたその後の展開の歴史記述(historiography)である。特に人間と社会と言語の関係性(Relational Studies Amongst Human Agency and Socio-cultural Milieu and Language Behavior)に焦点を当てた。話の筋道として基本的な時系列:「起点」「経過」「結果」があるがその相互の関係性の濃淡により前後したり、体験を解釈し、体系化したコメントを挿入し、厚い記述スタイルになっている(このへビーな文体に謝辞: Thank you for your patience in advance.)。

無機質にならないよう現場で人が綾なす出来事(eventful:日本語のイベントは催し物の語感が強いが英語では「重大事」と本来重い言葉)にサタイアー(風刺)やパロディーの助けを借りて肉付けが講演者の努力と受け取っている。こんな形で随所に日英語で意味領域のズレがある場合には“linguagewise”として一口コメントを付記する。「ずれ」を笑いの原因と結果とするのは「笑い学」の理論でもある。

用語（コンセプトとノーション）はバイリンガルで

移動の副産物として、日英の言葉を新しく学び直しの機会が生じる事。既にしてきたように専門用語（nomenclature/technical term）は分かるようで、分かりにくい漢字を含めた言い方が使われる事が多いが、意味を補完する意味で（括弧）内に随時、日英語によるバイリンガル表記を追記した。方法として、必ずしもそのままの翻訳ではなく、趣旨・意味・要点を考え発展的な意識も試みたり、現場用語や俗語っぽい表現も含め意味の臨在感の高揚に工夫した（鮮明にするため頭韻（alliteration）を踏んで頭文字をそろえる“涙ぐましい”努力も）。初めから領域が共有されていればモノリンガルであってもそれぞれ輪郭や概念が浮上し、コミュニケーションが成立する。この事は通訳を交えないアメリカの学者と日本の学者同士が“Oh, yeah!” ⇔ “うん、うん！”と満足そうに“話し合っていた場面を目撃した事を覚えている。この意味では理系の人達同士はスピーチ・コミュニティーが成立しやすいと思う。記述の方法論を終わり、次からはエピソード風の具体的体験・経験の報告が中心。

子どもの世界は出来事で一杯、驚きから始まる性格形成

記述方法の堅い話はここでやめ、最初の1974-76年の2年間の子連れ留学（「国際コミュニケーションにおける文化と言語」：「子連れ」アメリカ生活記（瑞陵高校の『研究紀要第5集』、1985に記載）で親として困った事から話を始める。前述の二人の子どもの内4-6歳の偕子（ともこ）を悼み偲んで（愛知県庁国際課勤務中、2024年4月18日に54歳で早世）を中心に述べる。偕子をはじめの2か月間程、家の外に出てない。旅行と喜んでやってきた終着点は異言語、異文化のアメリカ。子どもなりに初めて見る世界を観察していたのかもしれない。しかしここが毎日の生活の場（類似話の挿入。フルブライト60周年記念特別寄稿の際お世話になったり、フルブライトのアーカンソー大学訪問のアレンジで大層お世話になった生方（うぶかた）フルブライト委員会職員も親に連れられ小5でアメリカに。やはり3か月家から出なかったそうだ。いただいたお悔やみの一部です：「～小さなことから、大きなことまでいろいろと共通点があるのには驚くばかりでした（私の妹は倫子と書いてともこと申します）このように偕子さまと共通点がたくさんあることを再確認いたしました（中略）偕子さまは素晴らしい推進力とご才能にあふれたお方であることを知り、ご生前に一度でもお目にかかりたかった、と思いました。素晴らしいお嬢様でいらっしゃいますね。病が憎いです・・・」。11歳の小学生は知らない言語には園児偕子より警戒心が強いと感じました。4歳児も言葉がないと遊べないし、異質なものを識別できる年齢が障害となり、部屋の中でテレビにはしる。がここも英語。たまに2歳の弟宣雄が家に連れてくる小さな子と言葉関係なく多少遊ぶ程度。幼稚園に行く年齢であったが、本人は気乗りしない。幼稚園の案内があり行った際、近くのアメリカ人母親とその子どもにうちの娘と一緒に幼稚園に行ってくれないかと頼んだ。幼稚園（Edison Preschool）との手続きを済ませた2日後、その女の子が“Tomoko, let's get going.” 2か月ほど一緒に出かけて、それなりに楽しんでい

るようだった。幼稚園の先生は幼児を面白く引っぱってくれ幼稚園生活を楽しみ始めたようであった。

2 か月半ほどすると幼稚園で絵が上手とよく貼り出されるようになった(日本の女の子は真似がうまく絵上手)。ある朝きりっとした表情をして迎えに来てくれた。その子曰く、“I’m not your friend anymore!” それ以降はメキシコからの留学生の子と一緒に通園。クリスマスの頃幼稚園から妻秀子に折り紙を教えに来て欲しいと依頼があり出かけた。以前一緒に行っていた子がかつかつと秀子に、“I’m Tomoko’s best friend.” はじめは親切、競争になると離れ、関係が変わると自分の売り込む、こんなアメリカの現実をみた幼児体験であった。

一年も過ぎ家でも英語が増える。最初覚えた英語は単語ではなくセンテンス・レベル。“Raise your hand if you know it. Keep raising your hand.” (日本では高校あたりで“rise”と“raise”の違い、“keep”の後の動名詞云々)と家でも口ずさむ。現場の英語使用域 (language register) での生の英語は「易から難」の発達原理では説明がつかない。現地の現場の現実は“felt needs”が優先先行。確かに音声英語は後発であるがその分、視覚理解は発達していたようだ。家でもスペルをよく聞くようになったので、折に触れ文字を教えた。ある程度の基礎が分かるようになったので、テレビの「Sesame Street」番組は面白おかしく場面設定がなされているので文字の綴りと発音と英語特有のリズムとイントネーションも結果として身につけていったようだ。話ことばと書き言葉と英語の絵本に興味も倍加の時期にもなった。幼稚園の先生も Sesame Street のように元気ハツラツ (animated) で指導されていた。言葉が分かる仲間も増える、本当に言葉の限界は世界の限界であるし、大人も同じ真理といたく納得。

急速に自立して積極的に友達に接するようになり始めた。クリスマスには、1 か月程前“trick or treat !”の連呼で近所をまわり、candies をかなりもらってきた事に味をしめ、近所の子にクリスマス・キャロルの歌詞の読み方(この時期字を読めない子もかなりいた)も教え(中には難しい「Away in a Manger」も含まれていた)近所の家々を回りから多くのお菓子をもらって大満足。楽しみながらいい物を手に入れる。ハロウィーンからクリスマスへと時期はずらし(ポストモダン流の「差延」か)、“芸は身を助ける”の共通要素を軸にしたビジネス感覚の始まりかとも思えた。悪事ではないので親は成り行きに任せていた。ただ年内、毎日回り、最後は“You don’t have to come anymore.”で終了した。この頃大きくなったらアメリカ人に英語を教える!と息まいていた一面もあった。

一方 2 歳の直雄の方は家族住宅に落ち着く間もなく翌日から、英語と日本語の区別なく、虫を踏んでは“I ふむ it”、“I see your underwear.”とからかわれても“Nani nani naniyo !”と大声で元気いっぱい。子ども集団のミュージカル風の“I don’t care!”も息子の大声に刺激され、アメリカン・キッズも“Nani nani naniyo”になった。こんな共通の遊び言語をよく砂場

で耳にした。次に子ども達を同行させた親が見た国際社会にも一言。

同時期、日本人主婦が見たアメリカ女性達（瑞陵の1985「研究紀要」の一部を抜粋）

一言で言ってしまうえば、彼女らは遅しく、働き者でそして可愛らしいという事だ。私たちは中流の学生用の家族住宅に住んでいたが、約80世帯の内、専業主婦は10%程度であった。夫か妻が正規の学生で、片方が全面的に働き、子どもは（中・高女子生徒が大半）に預けているというやり方であった。片方が学位を取ったら、立場は逆になるのであった。端で見ていて、「大変だな」という気がしていたが、彼等は無理なく自然にやったのけていた。（中略）アメリカの“working mother”は他人を意識したり、自分を自分で意識するナルシストではない。テキパキと、しかも割り切って働いているようであった。実にさわやかで、常に前向き、進取の精神で代表される“go-ahead”（ゴー・アヘッド）主義が生活に定着しているようであった。

一方では金・土の夕方にもなるとあちこちでパーティー（その多くは簡単なティー・パーティー方式であるが）が始まる。その中身は決して大げさなものではない。日常生活の延長上のカジュアルな雰囲気とするものであった。しかも中心となって音頭を取る人もいないし、時には主催者すら判然としないものも多かった。結局、他人から指図されて云々といった他人指向型ではなく、皆がめいめいにその場の雰囲気を盛り立てる自主性・自発性を身につけているとあって良いだろう。こういった自律性の中心を占めているのは何といても会話に基づく社交である。パーティーの中心は特別、お客様に用意したもてなし等ではなく、「ことばを媒介とした知的会話のやりとりの言語交際であった。（中略）

この意味で私達日本人が美意識を中心とした「目人間」であるとすれば、彼らはことばで始まりことばで終わる「ことば人間」といいだろう。であるから、パーティーは“ことば”人間の集まる機会を提供すれば足りるのである。そのため、主婦は豊富な話題と共用、とりわけ、話術にたけている程チャーミングとみられるという」。（中略）

私の知る限りでは、アメリカの主婦は夫のために働き、夫の才能を売り込み、そして夫には上手に甘えるキュートな女性達であった。あいさつ上手で笑顔を忘れず、ユーモアとウィットに富むたのもしい女性がアメリカのレディーの一般的な姿である。

再入国日本と再入国文化ショック（re-entry shock）

学位取得後1976年の2月、今上の娘は帰国すれば小学一年生に間に合う事等々諸事情をあれこれ考え、帰国する事になった。もっといたら、最後アメリカ人になったらとかいろいろありがたい社交言語で引き留めてくれ、友情を感じたが、「あなた方は帰れる国があつてうらやましい」とベトナムから来ていた友人の涙交じりの言葉が焼き付き今でも離れない。国際情勢の緊張した空気が身近なところまで漂う移民国家、アメリカの一断面を垣間見た。自分なりにヴォルテールの言葉「自分の庭を耕せ」と言い聞かせ帰国。

帰国日は東京の親戚の内に一泊したが、夕食後借子は「アッ、デザートのアイスcreamは?」。「可愛い!!」と急いで買いに行ってくれた。親のこのヒヤリは翌日東京のフルブライト委員会に挨拶に伺った時にも。「お嬢ちゃんジュース飲む?」。借子「I don't want it!」。「あらまー、はっきりしている事」。この会話が帰国報告の第一声だった。

音声に関しては宣雄の方が帰国してからが大変であった。2~4歳までの2年間で言葉はほとんど英語。年齢は丁度借子が渡米した時の年齢と同じ。息子にとっては記憶にない国で同じような顔かたちをした子どもが自分によく分からない言葉をしゃべるという事実直面した。2年前の娘とは逆の発見であった。日本語を使って近所の子と上手に遊べない「ボク、アメリカジン」とアイデンティティーを真剣に問いただした事もあった。早くアメリカに帰ろうとよく言っていた。少しずつ覚えた日本語であったが語順が違う。米はアメリカでもカリフォルニアの「ニコニコマイ」を食べていたが当然帰国したのでご飯が主食。「ばっかりごはんがいい」と。しばらく日本語の言語構造にまでこんな影響が出ていた。一番厄介だったのは音そのものであった。英語の[i]は日本語の[い]と[え]の中間位の音であるが、本人は英語の[i]が固定音。ある時おもちゃの機関銃から火がでる見て、「火が出る、火が出る」と興奮しているのだが、近所の子には「“へ”が出る、“へ”が出る」と聞こえ大笑。本人は何がおかしいのか分からず大声で繰り返し、周りは笑いが止まらない。英語の[i]の音は「い」と「え」の中間音といわれるが、これは日本語から見た位置であって、英語から見れば日本語の音の方がどちらかに移動しているに過ぎないのだが。

長じて息子は身体表現と社交を上手に使い借子の友達が来ても交わりの中心(entertaining)は弟の方、また友達が来るとすぐ家に挙げてお茶とお菓子(大事なお客さんのためとっておいた高級品だった!)をどうぞ、どうぞと大盤振る舞い。学校生活もアクションが中心。ある時、授業中ふざけすぎて運動場にだされた。朝礼台の上で踊っているのを校長先生を見つけ、事の顛末を担任の先生から聞いた。また(本人にしてみれば)悪意のない悪ふざけはテニス・スクールでも。所属するその民間テニスクラブで会員とコーチの食事会で自己紹介。父親として「子どもがお世話になっています」と挨拶。「あの一、“ひょっとして”宣雄君のお父さんですか!」「何かしでかした」と感じ、真相を聞いた。他の子の順番のコーチボールを素早く手で取って遠くへ投げる悪ふざけだった。レッスン中爆笑になるので楽しんでいたようだ。親は平謝りだった・・・(実害のあるふざけ: practical jokeは困る)。今はその分いろいろな人と面白く接し、笑顔を絶やさない。友達も多く人気者。人からもしょっちゅう相談を受け、今、丁寧に相談に乗る気さくな牧師をしている。臨終の借子曰く「宣雄は本当に優しい、そして大器“大大”晩成」と。幼少時の二人は言語体験の違いの故か、後の性格形成に大幅に異なる影響ありと認識している。

借子の方に話を戻す。帰国後半年ほど過ぎたが、まだ問題がある事に借子の父親授業参観日

に気付いた。授業中、先生の話に集中していない様子。家に帰って本人にただすと「先生の話は退屈 (dull)」と (日本の感覚から言えばいい先生だし、セサミーストリート流のアメリカ人教師を期待するのはどだい無理な注文)。一番嫌なのは自分のやりたい事をさせてくれない。同じことを一緒にしなくてはならないのは“quite strange”と画一教育に反発する。アメリカの Edison Preschool 最低ではこんな本が読みたいといえ自由で読めたし、いつも4つか5つの中やりたいことが選べたと。選んだ後-は選べず必ず指導がある事は当たり前であったが、自己選択がもたらす責任は小さい時からきちんと教えられるのはアメリカ式の基本。

ともかく、ここは日本でそれなりの理由があるので早くなれるようにと言いつ聞かせた。またこんな事もあった。通学団の登校時、6年生の責任者が皆に注意を与えているのにガヤガヤして聞いている。すると本人は大声で「Quiet! Hold it!」と英語でどなったら、皆びっくりして急に静かになった。人がしゃべっている時はその人の時間であって騒ぐことでそれを奪ってはならないと権利意識でとらえている。言いたい事があれば、話し終えてから順番に言う“fair play”の“turn-taking”の考え方が根底をなしている。またこんな事もあった。近所の中学生が自分達より小さい子には話しかけ易かったので、アメリカ帰りしたばかりの娘の英語を試そうと、あれこれ英語を使って話しかけてきた。しばらく黙って聞いていたが「あんたたち、それ英語じゃない」と一言。

帰国後、あれほど嫌がっていた先生の事も、帰国後4か月目、体育時間に先生に抱き上げてもらって高い方の鉄棒にぶら下がれた事がきっかけとなり、急に先生が好きになった。次の授業中に突如、スタスタと前に出ていき先生に kiss してきたという。その夜先生から電話があり授業中児童にkissをされたのは初めて、今晚は顔を洗わないで寝ます(日本的fun?!)、との事だった。嫌いであった人がある時に好きになったら、それなりの表現をする、というアメリカ的感覚からすれば当然の事なのだが・・・大きくなってその話をすると自分はなぜあんな事をしたか分からない、と言った。冬になれば早く体育館に暖房のスイッチを入れて頼みに行ったり、しばらく、ちぐはぐの事をしていたが一年後にはすっかり“日本人らしく”なっていた。学年末の通知表を見たら、偕子は日本語がペラペラとしゃべれ、また読めるようになりました、と書かれていた。“スラスラ”ではなく“ペラペラ”と外国人向けの表現であった。

またこんな事もあった。先生はいつも私の答案を“見ないで”二重丸をくれるので、「知っている国を20書きなさい」にガンダムの世界の“ジオン公国”をいれた。ここも二重丸。本人曰く、どうせ先生はいつものように、いい点をくれるから面白いからやってみただけ。教員の娘なので点を引いてもらえと話したが、面白いから作戦でやっただけ、と試しの実験、そして点数はそのままに。

高校受験

偕子の自主・自発の自己管理には一貫性があった。高校入試については、県立高を志望していたが、私学も念のため受験。よくあるパターン。本人は嫌がったが一応受け、合格。後日日程の公立校受験を前にして、私、公立受かるからと手続きはいいと。娘の自己決定に押されて手続きをしなかった。担任の先生から皆さん入学金を払うからと指導があったが、本人は、聞かない。「本当にいいんですか」と再三学校から連絡があったが、結局払うのは止めた。体育以外はオール5だし、英語は余裕だし、私、受かるからと涼しい顔の偕子だった。“当然”塾などはいかない子であった(ただテニス・スクールとピアノの習い事はさせていたが)。

進学は県立の伝統高の御三家、旭丘、明和、瑞陵(後述するが、大好きな高校)のどれかに行きたいといていたが、明和高か中村高の組み合わせの学校群を選び合格後の行き先は本人が選べないのが当時のシステムだった。合格発表は親子3人で見に行く。まず本人がと言って先に一人で行かせた。とぼとぼと下を向いてがっかりした表情で一言「だめだった」。失望した親を横目で見ながら「うそ、うそ」と。「本当にもー」とつぶやきながら、皆で合否の掲示を見に行った。明和高校に決まっていた。通学は、駅までは自転車でそこから名鉄瀬戸電で一本。近場であり便利なので喜んでた。自転車の購入で個性が。欲しいのはペダルを前から下へ踏む方式ではなく、逆、つまり後ろ向きにこぐ自転車がいいと。面白い「後ろ漕ぎ」自転車と思ったが、力の入り具合が進行方向の逆なのでエネルギーがいる。特に雨の日は大変そうだった。親として「捨て金」もしなかったし、しばらくして音をあげたら毎日の通学であるので普通の自転車購入と思っていたが、一言も自分の自己選択に弱音を吐かなかった。よって子どもの一貫性については、自己の選択に助け船を出さない冷めた親をやっていた。後でも触れるが本当にお金のかからない子であった。おかしな趣味の高価な自転車購入以外は。

帰国直後の宣雄同様、偕子もアメリカに帰りたいたいと言っていたが、親は、基本は日本での義務教育が必要と思い、またアメリカに行く機会もなかったのが基本的に分別のつく年齢(英米で言うところの age of discretion)までは日本でと考えていた。ただ国際技術協力事業団(OTCA:コロンボ計画)の通訳との関係で途上国・新興国からの研修員やアメリカ人宣教師の友人がよく自宅に来ていたのでそれぞれ訛りのある日本語や英語に子どもは触れたりして国際的な雰囲気は常時身近にあった。中学が終わるまで“bedtime story”として毎晩アメリカで買い込んできた絵本を読みきかせた。絵本は“fun”の世界が一杯。上手に次は何、どうなると期待を持たせる。英語の絵本はどんでん返しの話が多い。最後「ハン!!!」。「あーん!!!」

余談になるが、親の“おまけ”は子守歌。子守歌は自分歌って疲れて寝る歌とだまし小学校3

年間だまし続ける事が出来た。4年生の時誰が入れ智恵をしたかは今もって定かでないが、真相を知り、「もぉー！！！！」で子守歌は止めた。ただ娘とは中学卒業まで父子では英語で会話をしていた。小6で英検2級に合格したが、面接の待合室では持参の漫画を読み続けていた。待合室の女子高校生達や短大生達から「こんな“ちび”が受かって、わたしらは、落ちるんだ！」とこれ見よがしに言われたそうだ。また実際の面接試験では小学生を前にして、入室会話の糸口にと試験官の配慮と思っているが、“Do you like English?”と質問。“Why”と問い直したそうだ。面接官の予想とは裏腹に借子にとってはこのやり取りについては“どうして”そんな(2次試験に現れた小学生の子どもにとって)当たり前の事を敢えて聞くのか、がこの子の意識の中心。話のやりとりで内容が繋がるので「正」というのが語用論(pragmatics)の「正誤条件」、試験官側にとっては“子どもらしく”Yes, I do.が応答期待であったのかもしれない。言語学で言う「語用論」では、面接試験官の期待から来るこの発問設定そのものは正しい事であり真実な妥当性のある配慮、その意味で“真偽条件”の「真」である。しかし相手にとっての適切さの観点、つまり正誤条件からいえば、「誤」であり、その両者の狭間をはぐらかして面白がっている借子がここにもいた。

国際コミュニケーションは語用論で必ず顔を出す「意味的整合性」と「文法的整合性」のズレは面白い世界でもある。平たく言えば自分にとって「当然」は相手にとっては必ずしも……。それを瞬時に感じ、逆手にとって借子はfunの材料にしていたようだ。さらに同じ考えで、もう一步突っ込みをすれば“Why not?”も適切な答え方でもある。かつてフルブライトが学長をしていたアーカンソー大学での国際交流の意義の問いに対して、一言、端的に“Why not?”が思い出された。

アメリカ AFS 留学高校生をして

借子は高校生になった時、アメリカ高校留学1年プログラムで世界一難関な AFS (アメリカン・フィールド・サービス) プログラムの試験を受けた。ティンエージャーの長期留学なので資質として高水準とタフな性格とが要求される試験。その分最終の面接は一泊で行われ、その期間中何度も「再面」と言う形で面接官に呼び出され、可能性が審査される方式であった。本人曰く、「面白かった」。緊張より楽しんできたようであった。合格し、更に愛知県の高中生対象、ソニーの会長である盛田奨学生 (The Morita Scholarship Foundation) にもパスし二重の奨学生になった (ここでもお金のかからない子)。高2の夏渡米 (ペンシルバニア州のピッツバーグにある North Hills High School)。日本での成績が良かった事と AFS 合格者の二つの評価によりいきなり AP (Advanced Placement) という“飛び級”で高3クラスに入った。郊外にある落ち着いた大規模の高校で、1年間のホストファミリーの父親は会社員、母親はその高校教師、借子と同級の女子高生と兄二人の家庭で家から歩いて行ける距離だった。

ホストファミリーと D.C./メリーランド州在住の義姉間の借子の“品定め”論議

当初ホストマザー（ペンシルバニア州、ピッツバーグ）とワシントン D.C.郊外のメリーランド州居住の義姉（秀子の姉で昭子（あきこ）との間で手紙のやり取りがアメリカ在住同士で頻繁にあった：1 か月半経った頃、義姉が二人の往復書簡での会話を記録した手紙を送ってきた。まず冒頭から偕子のホストドーターへ “What are you talking about?” <本文前述> を聞いてから、ホストマザーはこの子はアメリカ生活に入っても大丈夫と確信したとの事。義姉は父親は娘を国際人に育てようと小さい時から英語や人との接し方等によく注意をして育ててきたはずと説明。そういうわけではっきり意思表示をする。以下は偕子をめぐって、ホストマザーと義姉の会話である。

「実は日本人はあまり話さないとないと聞いていましたが、いい事ですね」。「偕子は小・中・高の時から学年で1、2番の優秀な子なので、周りをしっかりみれ、積極的にやってくれる子なのであなたたちはラッキーですよ」と義姉の談。「偕子はお父さん子？」「そうでしょうね、私の妹も大変子煩悩ですが、ともかく、娘は恋人が出来るまでお父さん子、できたら母親に共通点を求める」。ホストマザーは即答して「確かに面白い事を聞きました。実は偕子は夫を完璧に味方（相棒）に付けて、パパのなんでもお気に入り、娘の思い通りになってしまう甘いパパ（wrapping around her finger）にしてしまいました。私の娘もびっくりしています」こんな調子で家庭滞在を楽しんでいたようだ。厳密に言えば、安心できる居場所があって、外国で楽しんで生活ができたホストファミリーに感謝している。もちろん偕子の渡米前から非常に長い手紙で家庭の事、家族の事、地域の事、学校の事等々を家族全員が丁寧に書いてくれていた。我々に対する心温まる配慮にも感謝。学校ぐるみで全米の AFS 留学生同士の旅行があったり、卒業アルバムに AFS の個別頁がありその世界規模のクオリティーを再認識した。AFS (American Field Service) は戦場（フィールド）から出発したアメリカ産の高校生留学プログラムであるが、世界認知をはたした時期（1963年）ケネディー大統領は当時、AFS に「アメリカを友とするのではなく、友情を友とせよ」とグローバルな視点を演説もしている。

ここで義姉の国際交流について日英語それぞれ1段落ずつ触れる。彼女はワシントンの在米大使館の日米交流に現在も深く関わる国際貢献（大使館の liaison）をしている。毎年ワシントンの桜まつりでの「サクラ・クイーン（アメリカ人）」の日本公式訪問の引率を続けている（今夏も）。他の諸行事にも指導的役割を果たし、家では日本の伝統工芸「木目込み人形教室」を開校。またスミソニアン博物館にも工巧技術の貢献もしている。時折、教室の生徒（ほとんど中高年の在米日本公館の高官夫人や近郊のアメリカ人家庭婦人や地域の日系アメリカ人、他）を連れて毎年日本訪問もしている。飛行機のポケットにある機内雑誌「Wingspan」に上記の内容が手際よく纏められていたので、原文の一部をそのまま抜粋する。掲載文中の本人の一言から始める。

「You could describe me as a goodwill ambassador interfacing on many levels with the

diplomatic, cultural, and Japanese communities.」に対して、インタビュアーは「Japanese doll masters see their cherished figurines not only as representatives of national ideals of culture, beauty, history but also as small-scale diplomats...She also works as a Japanese doll restorer at the Smithsonian Institution. Among her various skills is using these elegant dolls to build international bridges of diplomacy.」

留学先 North Hills High School での学校生活

娘に閑話休題。部活はテニス部に入り公式戦にも出場していた。顧問の先生から未成年であるのでエントリーに親の承諾書にサインと手紙が来た（自由な国アメリカは想像以上に年齢の制約は厳しいと痛感した）。本人は自分の運動神経の位置づけを自覚していたので、その分練習を重ねて日々努力していた。達成感や爽快感を感じたのは対外試合の中盤戦で[6-1, 6-0]で勝ち進んだとの事、“どうだ、すごいだろう”と嬉しそうな手紙が来た。ともかく毎日の部活で体が鍛えられ、よく食べ良く動き良く学び理想的な高校生活と親は日本で安心していた。ただ本人は足が fat legs と手紙が届く。自分で選んだ高校留学なので、自分なりの異文化交流に意見を付け、あれこれ手紙を書いてきた。そんな中、至急日本のグラフ用紙を送れと連絡があった。それはやっぱり数学の授業（特に geometry：幾何）は手紙の時間。日本で進んでいたのは、数学。先生は日本語で数学をしていると思っているので堂々と日本への通信作業に勤しむ娘であった。

ただ世界史は「who」と「what」の暗記の対象ではなく常に「why」と「how」の論述エッセイで苦勞したらしいがそれなりにやり遂げたと本人からの手紙にあった。この事は本人が中間報告として盛田国際教育振興財団の発行の留学生冊子に「多様なアメリカの高校生活」と題して寄稿記事が掲載されているので抜粋する。

H.R.が始まるのは何と7時45分です。15分のH.R.の後45分の授業が5分ずつの放課をはさんで7時間あります。5分の放課なんて教室に行くのが精一杯です。4時間目の後、30分の昼食（AFS生はランチチケットがもらえます）があり、2時25分に7時間目が終わると私は部活に行きます。夏休みの終わりの2週間前からテニス部に入って真っ黒になって走り回っています。（中略）私の時間割は美術、世界史、スピーチ、スタディー・ホール（自学・自習の研究）、化学、英語、数学です、（そして）世界史は暗記だから、と思っていたら先生が“内容を掘り下げる”人で少々悩んでいます。英語は「LANGUAGE SKILLS」というクラスで主にSATの準備をするクラスです。アメリカ人ですら知らない単語に取り組み文法を勉強します。4日に1度の割合でテストがあるから大変です。2学期（2期制です）には英文学をとります。（中略）友達に割と多くいます。夏休みにパーティーや映画、ドライブなんかに行っていた友達と部活の友達、それに同じ学校に通う2人の留学生がその主なものです。英語の授業とはいえ、高3に飛び級したわけだし、はたと考えた借子こは“試し”に最難関に挑戦、アメリカの高校生が大学進学するには「SAT：Scholastic

Aptitude/Assessment Test」という学問的適性試験が必要要件。アメリカ人も知らない単語等が続出し、自分にとっても彼らにとって一番難しいのが language (英語言語) 領域。ダメ元を覚悟して勝負に向かう。結果は3年生で「A」をとったのは Tomoko 一人だけと皆の前で褒められた (encomium)。

本人はアメリカ人を尻目にかけ、勉強をしようと頑張った訳でもなく、ただ腕試し (tryout) してただけだったので、先生の絶賛の言葉に「ボカン」としていたそうだ。通知表を親に見せるのは嫌いと言っていたが、この時だけは「英語教員の父親への誕生プレゼント」と前置きして、生まれて初めて自分から積極的に通知表 (Student Progress Report) を見せる事にしたと講釈付きの航空便が届いた。担任の先生から評価は：The student grade in language skills is A. 先生のコメントは、偕子は勉強するし勉強が好きと：Tomoko has the only A in language skills. Congratulations! I told her she wanted do even better than other students. The difference? She studies and she wants to learn. (下線は筆者)。手紙の別紙には先生は分かってないと：私は、勉強は嫌いだし、向学心等はない。今回のこの事はアメリカでアメリカ人が一番難しいとされている領域だったので面白いからやってみただけ、と冷ややか。教師のプライオリティーは勉強領域。皮膚の色は関係なし。日本人としてでもなくただ高校生として頑張った事が最終の関心事。枠で評価が決まるのではなく、このような実力主義はうれしい事である。こんな個人主義 (individuality) にエールを送る。

余談になるが、こういう高校生は日本での歴任高にも一人、二人いた。英文の長文解釈・理解でパーフェクトなのでそこに満点をつける。答案を返却すると必ずここはこうだから部分点を増やして欲しいと生徒が交渉に来るのが常。しかし、こういう子もいる、長文和訳に漢字を一か所書き間違えたことが分かったので点を引いて欲しいと。全体として正解だし、その漢字の間違いは全体に影響を与えないし、マイナー部分なので問題ないと何度も説明する。最後は不満顔で引き下がるのが常。答案返しは皆の前でするので。そばで聞いていた生徒は「きざ〜」と反応。本人は極めて無欲。偕子とのやり方は異なるが、こういう子達には心理的な達成感がないと言ったらよいのであろうか。

高校生偕子の生き抜きタイムは学校祭。奨学生であるし家からも時折援助もしていたので金銭的に困っていたのではないが、お金儲けを考え付いた“money-making for fun”。それはアメリカ人の名前をカタカナで持参した筆ペンで何百人に書いて一枚 1 ドルで呼び込み、対面で販売。200 人くらい売れて 200 ドルゲット。ホストマザーに言ったら自分で稼いだお金は大切に貯蓄 (saving account に) しなさいと。しばらくして新しいテニスシューズとテニスウェアを買って後は貯金したと聞いている。テニスグッズも自分のやり方で自分で稼いだお金だったので至極満足した様子が伝わってきた。

クリスマス休暇は首都圏訪問

クリスマス休暇には前述の叔母のいるワシントン D.C./メリーランド州に招待を受けたが、行きは訪問への期待が長く感じられるようバスで、帰りはできるだけ長く首都圏滞在で飛行機と旅程に注文を付ける（叔母宅では早く来て欲しいとの別の期待があったが）。借ちゃんらしいと理解。これは格言もどきの英語表現に似ている（It is better to travel hopefully than to arrive.）。叔母宅の 21 歳の娘（アメリカの成人は 21 歳になってアルコールは解禁、日本での飲酒運転同様、アメリカは個人の飲酒に対して年齢が極めて厳格（「対、人」と「対、店」。この子はコーネル大の優等生。賢く（wise）二人は（ここは悪賢く clever）に他人の ID を悪用（日本人は若く見られるので、年齢差は見破られず、バーに潜り込めた。“案の定”男から執拗に迫られ、どうやって身を守るか一瞬困ったが即、“I’m sixteen. と大声で（fun for wisdom）。相手の男と店に緊張が走り、即店から追い出された。こんな話を義姉から聞いた。この秘密の話は過ぎた事とはいえ、日本の親として（津田梅子の時代には、子どもを外国に行かせる親は“鬼”と言われていたそうだ。現代とは隔世の感ありだが）はほっとした、まさに Good Relief。

卒業アルバムに書き込む最後の言葉達

話の焦点を借子の Norh Hills High School（卒業アルバムのタイトルは“Norhian”、高校名の省略は NH）の卒業時点に移す。借子にとって NH 自体が現場の国際交流の現場であるが、この高校生はごく普通の現地の高校生。よってこの 240 頁からなるこのアルバムに登場するのは国籍ではなく教育課程の中にいる共通の子ども達。それ故このアルバムには余白がない程ぎっしりと。卒業生仲間がお互いの高校生活を振り返りそれぞれ書く自署（autograph）で埋め尽くされている。アルバムには autograph を書く白紙の頁もある。そこには所狭し、と奪い合い。たまたま、気が付かずにスルーしてしまった（と思う）頁もあったが。まず簡単な自己紹介や挨拶を簡単に済ませ、後は本音を上手に書く書く！先生もしっかり書いてくれる。短くありきたりの文で終わる子はいない。200～500 語、精彩を欠くありきたりの無機質文は当然失礼。こんな高校生活の側面にも言葉を尽くす。まずは社交の言葉と友情に感謝。大規模高なので借子以外の留学生もいる。みんな学友。これから進路は多岐になるので、別れを惜しむ言葉と住所&電話番号、そして遊びにおいでと、ここは日本の高校生も同じ。気の利いた惜別文の一部を teenager の英語を原文のままランダムに挙げてみる。同時に autograph して下さった教職員の方々からの原文も一部のせた。今回の講演タイトルが“Have fun”なので、至る所に顔を出す「fun」に下線を施してみた。

友達から：*To the cutest little girl, I could have ever met! *I’m so glad that I met you here in NH. *We had some fun time in gym class. *I sure will miss you, Tomoko, such a talker! *You always made me smile, made me laugh. I know I can say how great of a person you are.

You are so special in your own ways. The fun we had. *Tomoko, you wild woman, you!!! I'm pleased to add you to my friendship list. To my buddy! All the fun things me, you, Jody (host fam daughter) ~and the boys did together. Keep in touch. *Well, Tomoko, how was it? Was it fun? Exciting? Wonderful? Hope you have fun summer. *It's been great knowing you. It has been a fun year. I'll never forget some of our discussions. *To the sweetest girl I met this year in Gym class. Remember all the fun we had running around and all the talking we did. *Tomoko, stay as nice and kinky! 先生方から: *Tomoko, I truly enjoyed having you in my class. You're such a fabulous student with sharp mind and great humor. *Keep up your artistic work because it is so beautiful! 事務室の方々から: *You brought happiness and fun with you. * You always came in the office w/smiles and laughter.

留学体験を執筆

帰国後再度、娘は盛田財団の文集に寄稿する事になった。今回は自分自身の留学体験の評価が中心。日本の両親に宛てた月ごと手紙には「あれ送れ、これ送れ（特に日本の雑誌類）」の依頼に加え、学校生活の様子から、娘は本人流で勉強もし、部活や友人関係も良好の留学生活と思っていたが心理の深層面では3つの事に自己反省（critical thinking）をしていた。それらは、親に連れられ“Fulbrighter's kid”の幼児アメリカ体験、自分で手にした AFSer でアメリカのハイスクール体験、そして、日く抜きがたい“日本人性”とそこから来る自己意識との関係である。親が関わった人間フルブライトの「批判的自省察（reflexivity）」の観点から見れば、子どもが正直に自分を内省し、自己吟味のクリティカル・エッセイ（critique）を書けるまで成長したと「親流」の受け取り方をしている。周りの状況、情報伝達、他人の言動評価は、ある意味、し易いと思うが、自己を対象にして正直に自己を見つめ、それを自分で書く自己言及は challenging。少し長くなるが、寄稿文より直接抜粋・引用する。自嘲を含み、風刺を含み、高校留学の功罪を余すことなく吐露（“Tell It Like It Is”）した寄稿文だった。若干檄文のトーンあり。

2 回目の掲載記事（article）のタイトルは「得なかったものと得たもの」。盛田冊子には「3人の留学生たち」と個人ブースが充実している「アメリカの学校図書館」の写真が載っている：

私の場合、留学前に、語学については2つの目標があった。1つめは3カ月で日常生活、勉強等何一つ不自由なくやっていただけの英語力をつける事、もう一つは半年で完璧なアメリカ発音を身につける事である。幼児期にアメリカに滞在していた経験があり、また帰国後も中学卒業までは父と英語で話していた為これらの目標は難なく達成できると考えていた。結果、1年経って達成したのは当初の予定の3カ月分のみであった…それで何故この様な結果しか得られなかったのか。それは「プライド」というものに帰因すると考えられる。私は AFS 生でありしかも盛田の奨学生である。日本での成績も良い方である。それに加え

て先記の通り、多少恵まれた幼児体験をもっている。これらの事から私は無口になっていた。失敗を恐れていたのである。間違っただけは言いたくなかった。

もう一つあったのが、日本人としてのプライドである。いつも、日本人を代表しているという事を意識していた。日本人の良いところを認めて欲しかった。学校において日本人の優秀さを示そうと思ったら、まず勉強であろう。そう考えた私は、日本の高校教育がいかに進んでいるか（これは事実であるが）示さんと必要以上に勉強した。部活動にも力を入れたがその以上に勉強に力を入れた・・・成績は、だから、確かによかった。教師には誉められ、他の生徒達には一目置かれるようになった・・・。

留学中に取った単位が日本の学校で認められる訳ではないのだから。勉強等落第しない程度まで手を抜いて、その分もった形には表れてこないが、しかし真に貴重なものを得る努力をした方が良かったのではあるまいか。「無口で頭の良い日本人の女の子」が上の事に気付いた頃には、すでに半年以上たっていたのである…そのような視点から見れば、この失敗も一つの貴重な体験であったのだろう。あるものをひとつ失った事によって、また別の物一つ得たのである。考えてみるとこの1年で得たものなんと多い事か。

留学に出す親としては、前述の“年齢詐称”で云々は武勇伝とか fun の世界ではなくヒヤヒヤもの。迫ってきたこの前述の boy に対して借子は社会の反応を利用し、その危機管理は“attaboy”（その調子）。ともかく身のかわり方については、未成年高校生は、“もう本当に”勉強に時間を費やして（面白く勉強すればいいし）、落ち着いてアメリカでの国際生活を過ごして欲しいのが親の本音：No risk-taking at least in high school days.

盛田奨学生在が高校留学の帰国後の体験談には「父母のことば」の欄があり、“親子”執筆になっている。借子の親部分の内、言語に関する部分をソニーの盛田昭夫会長の討論・議論の大切に積極的に同意し、その一部を引用した。ここに英語教育を促進するスキルと国際社会日本の必要領域と位置付けている。“Still Be Friends”と題した内容を抜粋する。前半は盛田昭夫著『Made in Japan—わが体験的国際戦略』朝日新聞社、1987 から引用。後半は筆者の国際的言語使用の表現：

箱根の会議は、いわゆる日本的な和気藹々の、ややぬるま湯的雰囲気の中で進行的なため、私（盛田氏）とブルメンソール氏による激しい意見の対立と応酬は人目を引き、特に日本側出席者の度肝をぬいたようだった。（中略）＜次はテレビ局との取材＞～われわれ（盛田氏とブルメンソール氏）はテレビカメラの前で二人の意見の相異その他について、冗談を混じえながら、あれこれ語り合った。それを見ていた一部の日本人は、会議で激論を戦わせた後、我々がなお友人同士であることに（下線は筆者）ひどく驚いた様子であった。（中略）日本人が欧米の人間と理解を深め合おうとするなら、アメリカ人がことあるごとに問題を取り上げ、精力的に自分の意見と信念を主張するように、日本人も思うところを遠慮なく発言する必要がある。（中略）ただしそれはあくまで日本人の一人よがりではなく、相手に分か

る論理での発言であり、議論であるべきなの言うまでもない。政治家も官僚もビジネス人も、日本人はまだまだこの点では不慣れのような気がする。

下線を付けた箇所の英文の方は・・・We could still be friends.となっている。議論すると感情論に発展したり、friendship が消えてしまったり、一方、友達だから、親だから分かってくれる、察してくれる、と甘えたりすることがよくあるが、「友達と思えばこそ・・・説明しようとする」。(中略) また、「相手にわかる論理で・・・は相手の前提、相手の文化を使って、という事になり、異文化理解にも通じる。国際人の重要な素質の一つである。(中略) この点で娘は積極的な自己表現型の性格の持ち主に変化・成長した感じを強く受けた。

在籍年数における日本システムの狭間で

日本に帰ってからの偕子のフラストレーションと歴史の皮肉については長い間国際社会間での高校教育の互換性の問題だった。偕子の進路はシステムの丁度狭間で割り切れないものがあつたが、現在は国内との整合性を付け高校期間は3年間で卒業で問題にならなくなった。しかし当時、合理性の中で育った本人は腑に落ちない。毎日の生活の事でもあり、フラストレーションの度合いが本当に大きかった。不合理最後の年は言え、当人にとっては1回限りの人生なので、敢えて他の記事と重複して(内容のアクセントは変え、表現も若干変更)繰り返す。要は、日米合わせて2年半でアメリカのハイスクール卒業、日本で半年2年生のクラスに戻され、授業はたるいし、かつての友達は皆3年生で受験で頭一杯。しかも後、まる1年、高校既卒業者が2学年後半をリピート。在米1年では帰国生の分類には当てはまらないし、フラストレーションを起こしていた(また逆こぎ自転車か)が地元の南山大では海外の高校卒業者は受験資格ありを年の瀬も迫った頃知った。「原級留置」から抜け出すために急遽、詰めて受験勉強。結果高校2年生で南山大学の英語科と英米科の両方に合格し、英米科に進学。高校の学年の分類はともかくトータル3年という期間で終了し、18歳で大学1年生。少し大騒ぎし(much ado)のバタバタの半年であつたが皮肉なことに、次の年から、留学期間が日本のシステムにも参入、そして高校から大学にだす調査書に「留学」という項目が新設された。国際教育が生み出した狭間の時期、兎も角ここは「結果オーライ」。明和高校に対しての付言：担任の先生は賢いし、自分たちの心の底を理解してくれる。一方、明和生は自由な雰囲気の中で自由に勉強する事を選び、努力する校風で気に入っていた。明和の制服のセーラーの白い襟を外して持参、そして留学先のフォーマルな機会に着ていた。明和への思いの偕子流儀と思う。

時代はさかのぼるが幼稚園に関しては渡米前、半年間通園とアメリカのエディソン幼稚園の在籍期間を計算して“やり直し通園”無しで卒園させてくれた。卒のための卒にとらわれないミッション系の幼稚園の方針であつたのか、県立の高校より幼稚園の方が進んでいたと今でも思っている。教育のシステムの狭間では何かが起こるし、少しずつ実質に沿って変化があるのも時代時代の特徴と受け止めているが、困難な状況には、自分でコントロール出来

ないもの (uncontrollable) と出来る (controllable) ものがあある。娘は両方の視点を吟味し見それぞれに合った対応をしていたようである。出来る事はきちんと (confidence)、出来ない事は正直に認め (honesty)、その心理は自分自身の本当の力量に応じて (“her own true worth”) 行うのが出発点と感じている。

学生時代

大学時代は日本にいながら親は四国と離れていた住んでいた。時折夏冬、実家の木の伐採に帰ったりしていたが、偕子の学生時代はほとんど知らない。ただ今回の臨終から早死の期間と形見分けの機会に大学英米科の親友 (腹を割って話せる同士の bosom friends、“心友”の方が当たっている) 同士の南山大英米科の5人組 (偕子を含め) の事を知った。言語系のクラスメートなのでしっかり、本音のお悔やみのメールをもらった。その後も偕子行きつけの和風レストランで交わりの時を持った。友人・知人は社交やお付き合いが多かったが、この親友・心友グループの中では食事、ディスコ、グループ旅行等もし、はじけ、自分の「素」を出し、最高にはじける程信頼をしていた。ここは直接友人達にメール文を通して語ってもらう (ファーストネームで呼びあっていたのでその順で。挨拶部分は除く)。講演会の最後に偕子と同じ盛田奨学生で高校留学した林昌子さんに死を目前にした偕子の「言葉人間」の最後について南山5→4組を代表して直接語ってもらう (予定)。よろしく！

*サトコ (大沢悟子、ベルギー在)

偕子さんとは私がベルギーに引っ越しをするまでやく6年間昭和高区の高辻のアパートでルームシェアをしていました。大学時代をふくめ、20代を共に色濃く過ごし、いろいろな面でとても影響をうけた特別な友人でした。(中略)

7、8年前にベルギーと愛知県の交流何周年かでブラッセルで愛知県主催のレセプションがあり、それを偕子さんが仕切っていて私と夫を招待してくれました。残念ながら偕子さんは別の出張でベルギーには来られなかったのですが、大村知事に偕子さんの大学の同級生であることなどの話をし、知事が偕子さんに絶大の信頼を置かれているのを感じました。私も彼女の仕事への姿勢や情熱にはいつも勇気ももらっていました。

7年前くらいに私が里帰りした際に久しぶりに会い、その後コロナもあって、しばらく連絡が途絶えていて、そして突然の宴の案内メールが届きました。あまりの突然の知らせにしばらく茫然としてしまいました。すぐ本人とLineでビデオチャットをしました。偕子さんはいつもの調子で皮肉たっぷりのブラックジョークで変わらない姿だし、にわかには信じることができませんでした。色々な偶然が重なり、急遽日本に帰国することができ、偕子さんに同級生たちと一緒に会いに行くことができました。5人の同級生が一同に揃ったのは32年ぶりでした。その日は私の一生の宝物です。

*ナオミ (旧姓宮井、ベンダー直美)

私はアメリカ人の夫と子供3人の家族5人でアメリカのワシントン州シアトル郊外に住んでおります。日本を離れて27年になります。公立高校で教員をしています。大学時代を振り返る時、なかよし5人組無しで南山の思い出を語ることはできません。以下、箇条書きで偕子さんのとの思い出を簡単に書かせていただきます。

- 大学入学当初、教室に髪の毛の長い、スタイルのいい女性が座っていて、長い爪で器用にペンをくるくる回して講義を聞いていて、「素敵な人だな、でも近寄り難いな」というのが最初の印象でした。
- 当時、偕子さんはディスコによく通っていて、私も何度か連れて行ってもらいました。高いヒールにミニスカートで楽しく踊る偕子さんは本当にかっこよかったです。一度、守山のお婆様宅に朝方、帰宅して泊まらせてもらったのを覚えています。
- 夜な夜な遊んだ翌日のテストでも偕子さんはいい成績を取り、「ずるい」と言うと、「簡単だから勉強するまでもない」と彼女らしい返答でした。
- 偕子さんが、大学をしばらく休んでいて、心配していました。ある日事務室に行くと立っていたのは偕子さんで、顔を見てびっくり。発疹の跡が顔中にあり、痛々しい。「この歳で水疱瘡にかかってまったわ」と苦笑いしていました。
- 一緒に沖縄に行きました。二人でバナナボートに乗ると、運転手がわざと私たちをバナナボートから振り落としました。私は、びっくりしたと同時に大笑いしていましたが、偕子さんは水の中で、「髪と顔が濡れた」と言ってブンブン怒っていました。
- 鶴舞にあるマンションに、時々泊まらせてもらったのを覚えています。私が、国際結婚に母親から反対されていて、とても悩んでいた時期があり、偕子さんは長々と話を聞いてくれ、うちに帰りたくない時には泊まらせてくれました。
- 偕子さんが実家に泊まりに来た時に、翌朝、母に駅まで送ってもらいました。母に対する偕子さんの礼儀正しさは抜群で、普段見せない偕子さんの一面を見たことを覚えています。母もあの時の偕子さんを昨日のように覚えていると言っていました。
- 偕子さんと、どんな人と結婚したいか、どんな人と結婚したくないかと話していた時、偕子さんも私も「ハゲは嫌だね」と言っていました。お互い、髪が薄い人と結婚し、後から二人で笑いました。(ご無礼をお許してください)
- 偕子さんの卒業式のチャイナドレス姿<本人がタイで買ったが、気に入らなかつたので自分にきちっと合うように作り直させたとの事：加瀬秀子談>は、皆の注目の的でした。卒業式に5人で撮った写真を、偕子さんは大事にとっていてくれて、最後、4月1日に会った日に、私たち一人ひとりにプレゼントしてくれました。あんなに大変な状況の時に、用意してくれて、待っていてくれたんだねと、後で、みんな泣きました。
- 卒業旅行に5人で下呂温泉に行きました。脱衣所でぐずぐずして、温泉に入るのが一番遅かった私を、先に温泉に入っていた偕子さん達に、水鉄砲で水をかけられ、「直美ちゃん、セクシー、キャーキャー」と言って、一番張り切って冷やかして

いたのは偕子さんでした。(笑)

- 4月1日に、偕子さん宅へお邪魔した時に、偕さんが皆んなで写真の整理がしたいと言って、一緒に写真を見ながら思い出話をしていました。すると私の実家で撮った写真が出てきました。私はすっかりこの日のことを忘れていたのですが、偕さんはしっかり覚えていて、この日は、皆んなで私の実家でたこ焼きパーティをし、途中で私の母が帰宅し、「せっかく遊びに来てくれたのに、たこ焼きだけじゃダメじゃない」と母が言って、冷蔵庫からたくさんの肉を出して焼いてくれたんだと教えてくれました。その写真は偕子さんからいただきました。

最後に偕子さん宅で、4月1日に5人揃って会うことができたのは、本当に奇跡的でした。卒業後、5人が揃うことはなかったのですが、偕さんが最後にみんなに会わせてくれたんだなと思っています。これから、毎年4月に偕さんを思ってフェイスタイムで集まろうという事になりました。

マキ (高島麻紀)

偕さんの法要、納骨、形見分けに参加しました。私は30歳で結婚して以来専業主婦で、現在は夫と2人で名古屋におります。

私から見た偕さんは、一見クールで斜に構えているように見えて、実は面倒見がよく、気が回り、とても優しい人でした。アタマがよくて本当にかっこよくて。私にとっては永遠の憧れの存在です。

素晴らしいお嬢様をこんなにも早く亡くされ・・・。(中略) どれほどお辛く悲しい思いの中にいらっしゃるのか想像もつきません。

*マサコ (林昌子)

ともこさんとは、高校時代に留学した際の盛田国際事業団の奨学金の授与の場にて出逢ったのが最初でした。帰国してからの報告会で再会し、まさか南山大学の入学式で再再会できるとは、そして同じ学部だとはと、驚きました。

賢いともこさんと、短い間でしたが人生の糸が絡めたこと、大学で仲良くなった5人の友人と、ともこさんのおかげで再び人生が重なることができたこと、、、感謝しております。亡くなる18日前に南山大学時代の5人の友人が奇跡的に集まりともこさんのご自宅で最後の時間を過ごしました。私達は、泣いてはいけない、それはともこさんが望むことではないと、パーティグッズ売場で、変装の鼻メガネなどを買い込み、ともこさんと再会しました。「なに？その格好、いま流行っとるの？」これが、ともこさんの冷静な一言。彼女らしい。その後、みんなでワイワイ笑いながら当時の写真を見ながら写真の整理を手伝いました。あんなことあった、こんなことあった、、、と思い出を語りながら。とても、キラキラした美しい時間でした。50代になった私達が、20代に戻って笑っていました。病気のことに関しても、ともこさんは涙など一切浮かべることなくご自分の運命を冷静に受け止めそれ

すら上手にジョークにしていました。

最後までかっこよく

最後まで美しく

最後まで賢く

私達は大切な精神的な宝物をともこさんから頂きました。私に関しては、(他の友人もおそらく同じ経験をしたと思います)ともこさんと皆との再会の後、、ココロの中のどこかにあった扉が30年ぶりに開いた感覚でそこから暖かい何かが溢れ出してきて訳もわからず涙が出るでも悲しみではなく、暖かく優しい感情が涙とともに溢れ出してきて、、これが「友情」という愛の感覚なのだとこの歳になって初めてわかりました。その扉の鍵を渡してくれたのがともこさんでした。ともこさんと人生が少しでも重なることができたこと、ともこさんと友達になれたこと、心の底から感謝を申し上げます。

後日両親と仲良しさん達と会食、追加メールには、「ともこさんの賢さとウィットはお父様から、ともこさんの美しさはお母さまから、素晴らしい友人と関わられたこと、幸せに思います」と過分の評価。

一人減って4人なってしまった南山4/5人組、思い切りはじめて本音と本心で行動を共にし、気がつかないお互いの潜在意識を掘り起こし、笑いの絶えないお仲間だった、とその雰囲気伝わってきました。親としてもこんな形で学生生活を楽しんでいた事を知り、感謝にたえない、と同時に英米科よろしく海外での活躍を頼もしく感じました。話の中に知的雰囲気、またカジュアルな言葉のやり取りの中にも言葉の質が伝わってきました。短くてもいいクオリティーのある言葉と友情の人生は、一生の宝。南山の子達本当にありがとう！

加瀬で通した社会人

国際間の借子(行政)と40歳まで県立高教員の父親(教育)の人的関係一言。借子は県庁国際課で結婚後も名前は「加瀬」で通していた。就職後も「加瀬」は珍しい名前なのでひょっとして加瀬先生のお嬢さんとかいろいろ会う人から聞かれた。同じ日に何度もこんな事があったと聞いていたが、名前にまつわる加瀬関係が連続したある日、同じ質問に「『父はああいう性格ですので、いろいろご迷惑をおかけしていると思いますが・・・』と言っておいてあげたから」と“まじめな”テレフォンコールがあった。またある時瑞陵の卒業生が学生時代のバイト先で同じ質問に。「それではあなたは加瀬先生のところの」と言葉がそこで詰まったようだ。一瞬の躊躇の後「お子様ですか」と丁寧に“おこさまあつかい”された。日頃の連絡はなくこの自立した“職務専念”の娘公務員から、この手の事と国際交流の面白い話(冬季長野オリンピックや「愛と地球博」での)だけは積極的に言ってくる一貫性に徹した娘だった。こんな調子で、面白い話題は親子で面白がっていた。しかし忙しい時は家に仕事を持ち帰っていたようだ。仕事の情熱と使命感は大きかったと思うが(今の日本にかけてしまっているようだ)、ただ八面六臂まで頑張り過ぎると親は心配。

真面目さの中で意表を突いたり、“虚”をつく偕子の癖は思わぬところで飛び出す。ゼミの先生の指導もあり、通訳に特化した県職に就職した後、学校に遊びに行き日頃から尊敬するゼミの先生の授業に参加。授業中質問しまくり、授業後、ご飯に行こう誘われ、歩きながらの冗談は“ぶっ殺してやる”、だったと夜電話があった。四国学院でも卒業生が来て、授業を受け、若干質問する元ゼミ生はよくいるが、たぶん手を変え、品を変え質問攻めして嬉しがる（これも fun!?) のは偕子だけと思っている。本人は実害のない fun (banter) と思っていたようである（ゼミの近藤先生御免なさい）。

少々の緊張と笑いを伴う師弟愛の話はさておき、狭い地球と感じる話もある。オバマ大統領がセントリア国際空港経由で伊勢志摩サミット会議に 8 年前出席。在日アメリカ大使館に就職した四国学院卒のゼミ生がいる。サミットの際オバマの愛知県の担当になった。偕子との協力体制とは思っていなかったが、愛知県庁はオバマ大統領の在県中の担当部署は国際課（偕子は課長代理）で緊密な連絡を取りながらの仕事であった。いい感じでの双方いい感じの職務と思っていたが、共通の「ウン」が帰国の際の空港での見送り、外で見送りであったが二人とも Air Force One、大統領専用機を見送ったら終わりと思っていたらしい。職務は最後の給油機が飛び立つまで見送りと気付いていなかった。言うまでもなく、そのようにしたが、二人とも長時間外でかなり日焼けしてしまったと共通感情で結託したそう。笑い話がおまけに付いた国際交流の一コマ。

海外体験の功罪

ここでもう一度、偕子の幼児期の体験を「要素還元」すれば社会のリアリティー（“I'm not your friend anymore.”と折り紙の講師をした母親に“I'm the best friend of Tomoko”の衝撃発言）を幼稚園（Edison Preschool）時代に知ってしまった事から、洞察力が付いたのはありがたい事であるが、人生を“斜めに”見る習慣もついてしまったようだ。

よく似た 2 つの経験（一つはやはり心理面、もう一つは社会面）の事としてアメリカ初体験（the first port of entry）を父親もした。WSU の最初の修士課程の sociology の授業で教授が院生に質問：「外国人嫌い」は何とというか、誰も答えないので「xenophobia」と言った。授業後アメリカ人院生達から“何で外国人のお前がそんな単語を知っているか”と。もう一つは US history の授業、ほとんどの先生がそうであるように知的 joke や humor が多い。初め分からなかったことが多かったが、ある 1950's の社会風潮：画一性の講義。あまり大統領が un-American の代表のように communism を言うので、ある閣僚が問いただす、communist とは誰の事ですかと。大統領曰く「他人の物を取り上げて返さん奴らと。であればそれはアメリカジンですね」と。アメリカ人院生は一同「シーン」、声を出した笑ったのは加瀬のみ。Native American/Indian に後ろめたさを感じる彼らだった。アジア系の人間

は低く見られ知的側面でも、情報だけくれば終わり、知的貢献を望んでいない類似の現実をこんな形で、親子で体験。皮膚の色、ナショナリティー、出自で社会貢献を決めて欲しくないもの。一言付け加えるのであれば、かけがえのない個人 (individualism) に焦点を当てる思想が定着して欲しいと強く思う。

父親はアメリカでは学業に専念し、取えて目立つ事はせず、むしろ学び取る姿勢の日本人をしていた (modesty by keeping a low profile)。時代はさかのぼるが、博士課程で博士号候補生 (candidate : 博士課程を修了し、総合試験合格後) になり博士論文 : dissertation の起案書 : prospectus を提出する時期になった。論文審査委員のユダヤ人指導教授に過去の起案書を研究事務室に行き、平均的なものを見てきた、と報告した。「なぜ凡庸レベル (mediocre) を見てきたのか」。ユダヤ系アメリカ人指導教授から「何故ベストペーパーを見ないのか。そう姿勢だから、日本人の学者はいつまでたっても低く見られ、積極的に知的世界に貢献できない」、卓越性は皆が目指すものと非常に厳しいアドバイスであった。ユダヤ人と日本人は、自分たちは世界で特殊な存在との共通認識があるが、私達ユダヤ系は常にトップを目指している、と。このユダヤ人教授は日米比較研究の第一人者でNHKにも出演したり、文化庁から紫綬褒章も受けている。いつも厳しいが、いい経験をしたと心を入れ替えた。

続けて言うと、借子も父親も厳しさの中でも本当に良い経験の方が多かった。借子の Edison Preschool、North Hills High での経験や家庭滞在、親類や友人達は何ものにもかけがえのない“terrific”な体験と総合評価をしている。機会を与え、それらを可能にした Fulbright、AFS、Morita Foundation に大きな謝辞を述べたい。父親の弱点分野に関して、高等教育での教授からのアカデミックの指導と教授と“学友の友情の和”に感謝している。先ず 1974 年 WSU での最初の履修指導。エールの秀才、レジェンダリー的存在と言われた指導教授、Dr Blackburn から Toyoshi はフルブライト奨学生だから語学の英語不要と“有難い“扱いとそのぶん philosophy (哲学) を取りなさい、と。将来要所所で必要になってくるし、博士課程に進めば哲学的なリーズニングは日常 (daily routine) なので今から準備しておきなさいと履修アドバイス。すべての学問 (discipline) の根っ子がここにある (今にして思えば、grounded theory. Ph.D.の総合試験と博士論文での詰めでの段階になった時ヒシヒシと感じ、いたく納得)。アメリカの高等教育の一年生なのでそのようにした。この先生からは段落 (paragraph) の展開を個人的にも何度も指導を受けた。次は UMCP (University of Maryland, College Park 本校) で博士課程の EDPA 811 (Education Policy and Administration) クラスで、書評 (literature review/critique) の論述 (critical writing) が苦手、と言ったら担当教授、Toyoshi が困っているのでライティングのディスカッションに変えようと言ってくれた。全員 OK してくれて、2 時間半の授業は「how to write」に。critique の critique も合わせて皆で議論。最後は私が一枚にまとめるからと来週の授業で全員の配付。博士課程修了に近い大切な授業をこの一留学生のためにしてくれた友情 (academic friendship) は感謝に

たえない。この批評学の宝物を掲載する：

日英語で（日本語訳は加瀬）。題は「Questions to Consider about Analytic Argument」（文責に基づく議論について考える際の質問項目）

2. Explain the author's deep meaning rather than simply summarizing what the author has said（単なる要約ではなく著者の深い意味を説明しているか）

What is his/her intention?（著者の意図）

What is its importance to him/her?（重要性）

3. Places the work in the context of other work that is being done（先行研究との位置づけ）
Reveals the author's perspective in relative terms i.e. What contribution if any have they made to the field, or is there work and extension of …（領域に対して著者の知見・貢献を明らかにしているか）

4. Assesses how well the author has done what they said they set out to do. And what if anything did they leave out and include:（著者が述べた目的を賢明に達成しているか。必要な何かを落としていないか、含めているか。）

Organization（構成）

Methodology（方法）

Primary Sources（一次史料）

- ……Did they use all that were available or did they indicate what limits there were to the primary sources they had? Did they leave out anything important?（資料・文献を使いこなしているか。資料の限界があればそれを明記しているか、大切なものを落としていないか）

Do the interpretations grow logically from the primary source data?（原データから論理的な展開がなされているか）

5. Places the book in the context of its time.（時代の特色との関係は）
6. Evaluates the quality.（with regard to genre, writing, clarity, style, creativity, originality, insight, and significance）（質評価は、領域、記述、明晰さ、文体、創造性、独自性、洞察力、重要性）
7. Make suggestions for future research or …（将来の課題に対する方向付け。今できない事の言い訳にはならない、“手抜き”に対して嚴重注意：academic honesty に対して caveat があった）

「How to Evaluate a Critique」（クリティークに対する評価）

1. Does the critique clarify what the object of the critique is?（クリティークしようとしている目的を明確にしているか）
2. Does the author document and explain the points they are trying to make?（著者の要所を文章化し説明しているか）

3. Does the author have anything useful or helpful for the author of the work which they are analyzing? (分析している作品の著者に対して有益か有用か)

4. Does the author do anything more than summarize the content of the work being critiqued? (クリティークしている作品内容の要約以上のものを提供しているか)

*この厳密な方向で頑張り、博論 (Dissertation) の最終口頭試問の第一声は“Entertain us.” 論文に基づいて 2007 年に書籍出版 (『Nisei Samurai in Washington, D.C. 文化変容と人間行動』) したが、「entertainment」の世界は演劇が一番と思い、日本で「ヤンキーさむらい」と日系アメリカ人を keyword 化し、舞台化 (2015) に至った。口頭試問の 7 人のアメリカ人教授に観劇して欲しかった! 最後この世界を「戯曲研究」という形で 2023 年脚本家と共著して書き下ろし出版 (日米比較文化研究会)。厳密性と諧謔性の狭間にあるのは歴史文学とその論述と定義し現在もこの historiography に多大の興味関心を抱いている。

総出の国際交流に

学術話を終わり、ここで日米関係ではほぼ直接的に関わる国際交流についての広がり言及する。筆者の母と実妹のアメリカ訪問、そして義姉は後述のクラーク博士のマサチューセッツ大学アマスト校訪問。さらに義兄 3 人とクラーク博士の一期生、佐藤昌介、日本初の農業博士号取得のメリーランド州のジョーンズ・ホプキンス大学を訪問した。義兄の一人はその報告書と佐藤一族の私家版を出版する等々、様々な形で家族ぐるみの国際交流から逃れられないのが日常の生活世界であった。家続きでもう一人のヤング (小学高学年から文豪ドフトエフスキーが大好きな“文学少女”。そして音楽と体育が好き) で雪浦愛沙というペンネーム (pseudonym) を持つ娘 (間紙に登場) がいる (この子は 2 度「丸紅名古屋合唱団」の練習にも見学参加し、一部ピアニストの先生が連弾をしてくれた。この合唱団のコーラス指導は大学教授、時系列を無視した挿入話になるが、娘の死の報告をコーラス練習時に告げた際、“さむらい”だねと感慨深く一言)。

愛沙 10 歳の夏休みに筆者の 1 か月アメリカのフィールドワーク (半分以上 WWII 時の日系人強制収容所の西部の跡地) に同行し、いろいろな人たちに会い、人生にとてつもない刺激と示唆を受けた。色々ある中、歴史のいたずらか、神の必然かはともかく、やってきた国際交流に引っ張られ、はまり込んだ。しかしこの普遍性のある豊かさを「家族びいき」の国際交流に格下げしたくない。思わぬ出会いと発見は人類の共通の楽しみ (serendipity)、緊張や葛藤 (ジレンマやトリレンマ dilemma and/or trilemma) の後 (It has yet to come, but it is coming soon.) はアップグレードになったリアリティー。と同時に言葉自体がリアリティーを創る側面も大いに大切にしたい:「言語構築主義」(Language Construction of Reality)。

全ての機会を捉える国際交流教育

次に、歴任教での国際交流関連に触れさせてください。フルブライト留学に連なった南部元

附中教諭、そして元副校長、その後小学校校長の伊申先生（転任校時、自ら体を張って不審者を取り抑えた使命感あふれる学校長。校長室では、子ども達に南部藩出身の宮沢賢治「雨ニモマケズ」の英語版が暗唱出来たら校長室でやっごらんと、オープンで国際的指導を熱心にされているこの校長先生の専門は英語でなく、音楽）。こんな背景を基に今は愛知教育大学で教職を目指す学生たちに、学校教育の有意性を情熱を込めて教鞭をとっている。

高校教員時代（瑞陵）ではアメリカからの AFS 奨学生の受け入れも担当。ある優秀な AFS 生を受け入れた直後、こんな異文化間の摩擦があった。学校に派手なマニキュアをしてきたので、日本の高校段階では高校生は質素が共有する方針と異文化間の力点（目を付けるところ）を丁寧に説明し、理解が生じた。その後、このアメリカ人留学生は口で「爪を噛み始めた」。家に帰ってからリムバーで綺麗にと指導したが、本人は“I'm biting my nails.”（苛立ち・焦燥を表わす英語独特の慣用表現）と。両者大笑いし、固い握手で決着。今振り返れば娘もアメリカの高校で同じような humor の AFSer（その後も）と重なり今、苦笑い。言葉の修辞法は海外留学生の武器、戦争の武器ではなく言葉を駆使する「fun」の言語構築主義に世界がコミットすれば good relief が・・・(by laughing away)。

教員が直接指導できない領域で大活躍できる高校生もいるから学校社会は面白い（担任は出来るどころ、しかるべきところに連絡したり、お願いしたりが、それが仕事。当然そうだが、教員が全部抱え込んだり、変な競争意識で特有の能力をつぶさず、大きな次元で貢献できる未来を最重視が大切と思う）。瑞陵で担任した生徒、小さい頃から大須のスケートリンクで滑っていた。当時リンクはいつも大混雑で人と人の間をぬって滑るスケートを楽しんでいたそうである。高2の時アムステルダム大会のショートトラックで優勝、その後もカーブ、スピード、タイムの微妙な関係が特色のショートトラック種目でオリンピック「銅メダル」、今筑波大教授。

スポーツ関連での間接指導の話題。四国学院での専門領域での指導に加え、テニス部の顧問をしていた。ある社会福祉学科の学生（柏井正樹）がテニス部に所属。技術もセンスもいい学生で就職は地域の民間テニスクラブのコーチ。しばらくして相談を受けた。日本プロテニス協会の公認コーチの試験を受けたいと（当時、加瀬は当協会理事の主催する蓼科と千葉の館山でのテニス夏季と冬季学校に通っていた）。それでペーパー試験を暫く家庭教師のような形で教え、合格した。結婚もし、将来故郷（島根）に帰ってジュニア育成に専念と帰郷。その時母親に連れられ来たのが、錦織少年。極めて負けん気の子ども、練習試合で負けるとこの試合やり直して欲しいと。普通のコーチであれば「試合は試合、負けは負け」で終わりになるところであるが、体育系出身ではなく、社会福祉出身のコーチ、「10分やるから、そこで負けたら完全敗者」と特別許可。将来の錦織国際選手に成長。ところが柏井コーチ 53歳の若さで突然死。戦略脳のコーチ学の本『戦略脳を育てる』を出版したばかりのこれからの若手育成の有望コーチであった。世界の錦織は全国紙に尋常とは思えない心のこもった

長い弔文を書いた。柏井コーチの8年間の忍耐の指導がなかったら今の自分はなかったと。たまに錦織のコーチをコーチしたと故意に威張って！?!?見せる。だれも信用しない、初めは。どんな地方の学校にも将来大をなす児童・生徒・学生や院生がいる。やはり学校は面白いところ！愛知県関連で言えば、加瀬は両親が県立名古屋聾学校（現特別支援学校）教諭、県立高教諭。県庁職員と3代にわたる県の公務員。割愛するが、教育話題満載の学校現場の話は尽きない。

ねじれが生じたもう一つの国際関係

アリゾナ砂漠周辺の昼間42°Cの環境に設置された日系人収容所（ヒラリバー）を訪れた。ここは他の9か所の収容所と違い現地ガイドが同行義務。理由は当時政府がnative Americanの話し合いなしに“Indian Reservation”に施設をつくってしまった。他の収容所ではNative Americanの人達は先祖に対して尊敬の念を抱き、背景に関係なく跡地を綺麗にしてくれているが、ここは違う。モニュメントはライフルで撃った後やライフルの弾、ビールの空き缶が転がっていた。初めに言葉を尽くさなく強行するやり方とその結果について前述のペンネーム少女は当惑顔。10歳児にこのリアリティーに何を感じ取ったのであろうか。朝暑くならない早朝時間（3時半）に迎えに来てくれた日系人、跡地見学後、有料のガイド・エスコートには訛りのある日本語で「お嬢ちゃん、何が食べたい」と聞いた。すかさず「ウナギ」と。こんな砂漠地方にジャパニーズ・レストランがあるかどうかと思ったが、ニコニコして「バンザイ」と言う名の日本食レストランで朝“遅く”8時、ウナ定を食べに連れて行ってくれた。“熱い”時は鰻かと納得。普遍的価値の共有も国際交流の一端と受け取りスタミナ・フードで英気を養った。

ここで娘偕子の最後の食事の事を、時間を無視して鰻関係で敢えて挿入話を入れる：臨終に体力減衰で通常の食事が取れなくなった時、鰻を食べたいと。しかし食道もガンにやられ喉を通らない。ミキサーで鰻汁にし、ほんの少量“飲んだ”だけだった。スタミナ汁で生命を保つことはできない現実。親としていたたまれない現実。死を前にして一言も苦しい、痛いと言葉を発しなかった我慢強い子だった。本当に。

前の話に戻し少しさかのぼる話から始める。四国学院大の英文科は10年以上アメリカの中部大西洋日本教育視察団：MARJiS（Mid-Atlantic Japan in the Schools）のK-12：幼稚園から高校教員の受け入れを15年以上してきた。その参加者の一人は大学のある市役所の職員として採用もされている。ペンネームの娘とその方宅への訪問、ゆかりの人達との再会と家庭滞在を楽しんだ。アメリカ西部・南部を移動中この子はエネルギーのでるものをいろいろ考えて注文し、エネルギーを付け、夏の30日間滞在ホテルのプールで泳ぐのが夕刻の日課（日本で5年間スイミング・スクールに通い、大会記録者）であった。初めは決まって周りのアメリカの宿泊客から何となくyellowと一緒にプールにと眼差しを感じたが、バタフラ

いで勢いよく泳ぎ始めると雰囲気が一変。子ども達もそばに来て質問攻めの交わりに。この国は皮膚の色も実力で変わる社会と痛切に感じていた。社会のリアリティーでポジティブに膨らむのはこういった日常の社会経験。

愛知県庁国際課で

海外出張は1974年発行の家族併記のパスポートであったが、1986年以降1996年の2回の数次旅券、その後は10年有効の3冊のパスポート、その最後のパスポートは2023年10月を最後に有効期限の2026年をまたがずして終了の人生だった。留学、個人旅行、ゼミ旅行、ほぼ毎年の海外出張、新婚旅行と出入関係のスタンプがぎっしり詰まっている。この記録から県知事の通訳と国際課業務での国際交流は数えきれないが、訪問先での通訳以外の仕事も多い部署だった。国内外の多事多端な職業であった。そんな中で言葉を駆使して楽しみながら、毎日仕事をしていたと思う。セントレア空港関連で知事と部局の方々とアメリカ出張の際、こんな話の電話トーク：「今日知事と仲良く“ケンカ”した」神田知事が「偕ちゃん通訳で滑走路の長さをフィートに直さなくてもいいように計算してあげたよ」と。「知事、こんな数字の話は受けませんよ」「あんた僕に向かって何言うの」、「ここは私に任せておいて」と言い張り、知事は「好きなようにせい」と諦めたと聞いた。「愛知県の新空港の滑走路はエンパイア・ステート・ビルを倒して横並びにすると9個半になる・・・」。聴衆は拍手喝采、「偕ちゃんこれから僕のゴーストライターやって」等々と後日談。そんな信頼し合ったフレンドリーのやり取りしながら仕事をしていたそう。今年になって一度緩解した食道癌が内蔵全部に増殖し、気が付いた時は余命1週間から3週間と知った。ほぼ臨終時、神田元知事が自宅までお見舞いに来てくれ、生前のお別れが出来たと夫妻ともどもうれしかった、と聞いている。

次に現知事と同行した偕子関係の2つの出会いを記したい。知事と偕子関係にはこんな話も。偕子が他の出張と重なり、知事のベルギー出張に同行できなかった事があった。前述の南山親友5人組の一人（現ベルギー在のベンダー直美さん。思い出の甲文はqv：その箇所参照。）を知事に紹介、本人は知事さんから本当に良くしていただいたとのうれしい報告だった。

もう一つは時を挟んだ奇遇な事である。家族で1974年にアメリカに出発した際、名西高の生徒達が名古屋駅まで見送りに来てくれた。その時の一人から先月連絡をもらった。その時、小さな幼稚園（金城）のランドセルを背負った幼稚園児の偕子の姿が今でも強烈に印象に残っていたそう。それがNYでの県人会（木村会長は現知事と高校での同級生と聞く）で成人した偕子さんであったとその教え子（原田はる枝さん、看護師をしながら高校に通い、その高校時代から英語が大好きな生徒で、英語リレーション・コンテスト等にも出場、全国2位、大学卒業後、高校教諭を経て、今はNYのNPO法人、「国際理解教育推進協議会」職

員として活躍) だったと、あの時の偕子と奇遇な出会い、そしてその時の様子を興奮気味に克明に報告してくれた、それは一時帰国した今年 9 月の国内電話はだった。現知事の近くで本当にいい姿勢で会の進行を見守っているスラっとした女性が、その人が何十年前の加瀬偕子と知り、後は盛り上がり良い会話と皆で記念撮影が出来た、と。こんな形で再会する国際交流の道はやはり「血」と感じたそう。敢えてそのまま最後までその時の様子を黙って話を聞き、「生きて会ってくれて本当にありがとう」、「えっ?」、「実は 4 か月半前に・・・」の消息に「ええー!!!」。NY で生前の偕子に会い、その報告を兼ね日本に来たら死んでいたのだった。モードが変わった長電話になった。教え子は NY のユダヤ人コミュニティの隣に住んでいると聞き、現知事設置者のパネルと等身大の「杉浦千畝」(五中: 現瑞陵高校) の家族のモニュメントがある県立瑞陵高の正門(ほぼ敷地内) に案内した。当時父親には偕子から「ユダヤ人関係にとてつもないお金をつぎ込んでしまった」大盤振る舞い (largess) と連絡があった。確かに道路側から見ると高校ではなく、博物館の入り口のようなレイアウト。そしてそこは小公園のような佇まいであるが、戦争中の緊張をはらんだ歴史空間でもある。

瑞陵との偕子との関係は前述の学校祭に 9 年間参加したり、そして父親の親友であり、同僚の音楽教師が演じる『魔笛』のザラストロ公演にこれも 9 年間招待を受けた。小学校・中学校時代の瑞陵関係ですっかり瑞陵ファンに。今回、名西高出身の原因さんからこんなメールをもらった「瑞陵高校正門の銅像は素晴らしかったですね。そこに偕子さんの思いが込められていることを知ると殊更、意味のある立派な業績とと思いました」。国際交流の裾野は世界史の展開にまで厚く、熱く発展とを感じる名古屋の暑い夏の一時、それは偕子に焦点を当てれば、教え子を介して、園児と社会人、生と死が複雑に絡み合った長い空間と遠い空間の迫間の出会いと出来事と受け止めている。国際交流はその普遍性への広がり発展する側面を常に持っている。その観点から常時廻り周りにある日常世界に触れていく大切さを再認識している今日この頃である。具体的に言えば、設置者の大村知事が「愛知」から「世界」に国際発信する歴史の大きな一コマ。職業と研究の経緯で感無量: 筆者は元瑞陵高教諭、後アメリカ大学院での博士号取得指導教授はユダヤ系アメリカ人、親はアウシュビッツで殺された。)

広がりや深みの国際交流

偕子の末期にフルブライトの集まりが名古屋総領事館主幹領事の家で持たれた。正直、気分が乗らなかったがフルブライト (Nagoya Fulbright Association) の役員でもあったし、国際交流関係であったので出席した。加瀬と名のると領事館職員 (広報企画調査官) の方が開口一番「偕子さんのお父さんですか」「“ギャー”」と大声で、彼女とは飲み友達と。「今は会えないのでいただいた名刺に一言書いてください」とお願いした: 「Dear Kase san. 今日はお父様になんとお会いしてしまいビックリ! たくさんの国際交流の知見をいただきいつも感

謝しております。ダンスも一緒におどってたのがなつかしく思い出されます。たくさんのありがとうございました。ありがとうございます!!! Rika]公私にわたるご当地での専門職同士の国際交流のお付き合いと、こちらこそありがとうございますの気持ちでいっぱいだった。

この段落で家族関係に端を発した国際交流を冷静に纏め、括ってみたい。親子の国際関係は理論化すれば「異形同質物」(allomorphic isotropy)。つまり領域は形の上では娘は行政関係、父親の教育分野。部門の違いはあるが、国際性では同じ質を共有。親子べつたりの関係は娘の自立面では嫌だろうし、かといって現実には共有場面が顔を出す“狭い地球”は不可避的な遭遇事であって、基本的に想定事とは考えていない。親子の情はあるが、国際交流という大きな観点から見れば自文化からの思いや思い込みを吟味し、それらを作り上げている「大前提」を異文化のそれと合流させ (interface)、本当に双方が理性、知性、感性を総動員して理解してみる心構え、心意気が肝要と思っている。その意味では国際交流に関わる人達は一種の「社会実験」に携わる“大胆な冒険人”と思っている。そこからもたらされるものは(間紙の詩にあるように)新しい発見 (heuristics) や解釈 (hermeneutics) であり、それを通して人生の豊かさを味合う旅人とも言えよう。その「fun」を簡潔な英語で括れば: fun for a new way of knowing, thinking, and doing と表現できよう。広く、人が海外に行けば思いがけない人に会えるのもよくある事であるが、むしろ、身近に海外旅行が出来るこの国の幸せ、この国の今の、“とりあえず”かもしれないが、平和が続く事を強く願っている。フルブライト出身大学、また学長も務めたアーカンソー大学には、大きな平和のモニュメントが立っている(今回の対面講演会にはその 100cm x 50cm のパネルを提示する。) “平和産業”としての国際交流に専念したいもの。

心温まるエールが国際生活中断・断絶の娘に

一言、高校卒業アルバムにあった言葉を噛みしめてている: “She knows her own way.” 各方面方々からのメールのエール部分を紹介させてください:

*まず最後の仕事になった下記オーストリアのビクトリア州関係の方々からの心温まる丁寧なお悔やみをいただいた(愛知県政策企画局 舩田崇国際監、伊藤奈美子国際課職員経由) ビクトリア州総督府 バーク (Burke) 長官より(翻訳は挨拶部分省略、一部要約)

(中略) I know that several of the staff at Government House held a deep respect and fondness for Ms Kase having worked with her over many years. Her diligent commitment to assist Government House Victoria during international visits demonstrated her belief in international collaboration, and she will be remembered for all that she has achieved.

(~加瀬さまとの長期に渡る州知事部局への貢献に対して深い敬意と親密の情を抱いています。国際協力に人的相互派遣の考えを入れ、その実践に献身的な働きをされたすべての事柄は記憶に残っております。)

ビクトリア州総督府経済開発・国際局 ホランド (Holland) エグゼクティブ・ディレクターより (挨拶部分省略、一部要約。日本語への翻訳は国際課による)

(中略) Ms Kase was instrumental in advancing cooperation initiatives as the re-establishment of the public servant exchange program, between Victoria and Aichi in July 2023, and in supporting the visits of senior leaders to Melbourne and Nagoya, notably supporting the Governor of Aichi's visit in October 2023 and the then Governor of Victoria's visit in 2022.

Her attention to detail and extensive experience in supporting strategic engagement contributed greatly to the success of these visits, and her kindness and good humour is fondly remembered by all who had the opportunity to work with her.

(～加瀬様は、2023年7月のビクトリア州・愛知県の間での公務員相互派遣プログラムの再立ち上げをはじめとする提携事業の促進や、メルボルンと名古屋への双方自治体の首長・幹部等の訪問に際する支援、とりわけ2023年10月の愛知県知事様のご訪問および2022年のビクトリア州総督(当時)のご訪問に際する支援に、多大なる貢献を果たされました。戦略的エンゲージメントの支援業務における細部にまで目の行き届いた注意力と、その分野で培われてきた経験は、上記各訪問の成功に大きく役立てられ、その思いやりと素晴らしいユーモアは、加瀬様と一緒に働く機会に恵まれた者すべてが、親愛の情を持って良き思い出としております。) 英語圏でのユーモア・ウィットのレベルは高い。そんな中“good humour”と評価された事は日本人の親としてもいたく感動している。

両親代筆による故加瀬とも子の返信はお二人の方々に対して下記の英文にしたためました (挨拶省略と謝辞は省略)

～But Tomoko's commitment and/or contribution was too well spoken of in your letter, we're afraid. Another “but” is that we accepted your high estimation for our daughter as a parental treasure. Something thankful was the whole phases of works for internationalization she actually enjoyed, together with her humour and wit for crisis management. Our positive thinking is “fun and quality” of which we have long been fond also as our familial aphorism.

(偕子の仕事に対し身に余る評価をいただき恐縮しております。いただいたお手紙は家の宝として受けとっておきます。ただ偕子は国際交流の仕事楽しんでしていた事と複雑な事はユーモアと機知のセンスで対応していたと思ひ全てに感謝しております。私達のポジティブ・シンキングとしては楽しめる fun と quality は家族の金言としております)

セルフメイドの自主・自立

時代はさかのぼるが、偕子の他のセルフアレンジの結婚式も特記したい。名古屋のホテルで

行ったが、その専属“白人ブライダル”牧師は止め、自分で遠く香川の三谷保牧師に依頼。「カメ」は「ニンジン」を愛し、絡みつく「つま」を捨ててはいかんでしょと（神は隣人を愛し、絡みつく罪を捨て）。香川県生まれの牧師で農村神学校出身、地域密着型の先生で、日常の冠婚葬祭、困りごと全般にも丁寧に関わってくれる牧会者。家には大きな農機具コンバインが車庫の中にあり、自分の車は外に野晒し、自分の水田で米を作り、皆さんに分け与えたり、「家に蝙蝠が入ってきたので先生取りに来て」、と頼まれれば即対応、犬が雷に驚きフェンスを乗り越え逃げたと聞けば、名前を呼んで探し、連れて帰ってくれた事も（加瀬豊司が海外出張時の出来事）。説教は文学的で国内外の文豪や思想家も引き合いに出し、人生の深みから感動を引き出す日本基督教団丸亀教会牧師。ここは、半分（以上）親の推測が入るが、偕子はアメリカの高校で、深みの「英文学」では苦勞したと聞く（成績 B、後の全科目はストレート A）自分の弱さを自覚し、そこを卓越した人を尊敬する“謙虚さ”を持っていた娘と考えている。

引き続き結婚から葬儀までについては特記する事がある。先ず結婚。当日の結婚式の披露宴は自分で司会をした。結婚当時（偕子 29 歳）国際化の課長クラスは短期間でよく変わっていた分、多くの課長の下で働いていたが歴代の課長全員（と聞いている）が来てくれた。賑やかな結婚式と披露宴だった。

冠婚葬祭のもう一つの部分、今回の葬儀に至る部分について。癌の余命を 3 月初旬医者から聞き出し、即 3 月の全週偕子の最後の集まりを計画。最初は両家の親を呼び病態を聞き絶句。これから毎週日曜日「お別れ会」をすると車いすできた偕子が痛々しかった。お別れ会は本人がいないのでと言ったところ、“嫌がる人が一人”いるので (Tomoko's Party in 2024) とした。次週は親戚関係呼び、遠くはヨーロッパから、国内も東北から、九州からと多数ホテルに参加してくれた、その次は会社関係（県庁を常日頃そのように呼んでいた）他仕事関係の方々。大きなレストランを借り切り、出入り自由で行ったが、満員になり、全員は入れきれず、帰った人もいたと聞く。これら 3 週にわたる臨終期の生前の集まりは全部偕子の招待。もちろん連絡は全部自分でした。理由を付けて「身内を誇りに思う」とよくある英語表現は好きではないが、死を直前にした一連の娘の“生き様”に対し、ただ、ただ・・・“We're proud of my daughter for all of her farewell.”としか形容できない。

自己選択は最後まで

最後は死に方。これも自分で決めるのでその通りに、絶対周りで変えないと。先ずご主人の菩提寺である浄土週に敬意を払い葬式は仏式で、ただし自分は言葉を使う職業なので戒名は自分でつくる。お寺さんにはお金を払えばいいでしょうと。この 1 か月間とてつもなく体力は消耗していたが気丈に配慮し計画通りに進んだ。因みに戒名は「加河院藝誉偕宗大姉」（「河」は加瀬秀子の結婚前の姓：河内、「藝」は坂本龍一のファン、「誉」は孫、そして弟

宣雄の長男、「宗」は夫の名前：宗邦)。この間知る限り弱音は一切はなかった。ただ一度京都で牧師をしている弟に「死んだらどうなるの」、「神は公平・公正な方なのでその時本当の気持ちを全部言えばいいよ」と宣雄牧師。「あっそうなんだ」と信頼して安心した様子だったそうだ。小さい時から、アメリカでも教会はずっと行っていたが、本人曰く「クリスチャンになるにはいい加減の気持ちではいけないので」と付け加えた。これ以降ターミナルケア施設に入る。主人宗邦、弟宣雄と妻多恵と長男誉、両親豊司・秀子が枕元に。話しかけても返事が薄らいでいた頃、最後の時間、偕子との思い出をずっと耳元で語り続けた、本当に全部。すべて分かっていたと思う。本当に安らかに、本当にいい顔で4月18日早朝息を引き取った。後、葬儀、法要、平和公園墓地と続き、三澤家の方々とも良い交わりが出来た。ご主人の三澤宗邦さんには本当に感謝している。いつも偕ちゃんの言う通り、偕ちゃんに聞かないと、と本当に包容力のある方。尊敬している。宗邦さん本当にありがとう!!

偕子の臨終を聞き結婚式の三谷保牧師から、本当に心温まる手紙をもらった。その一部を紹介する。死んだらコミュニケーションは違うモードのなると思うが、以下の三谷牧師の“宣言”は熱く偕子に届いていると思う。

「三月上旬、四月下旬の二回のお電話で、まじかに迫る死に相面しての偕子姉の生と死に向き合う人間力、その人格の気高さに心打たれつついつい何いしました。ご家族、ご両親、ご親類の方々、そして職場の方々、地上での生涯を結んだ豊かな人間関係、ひとりひとりに別れを述べて、死を大賓客を迎える如く厳かに迎え次の世界に逝かれたことを想い、胸打たれる思いです。死を真実の意味で迎え之を体験するには高い人格を要すは植村正久の言葉であります。偕子姉の姿に人間の持つ凄さを想います。『死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか』(1コリント15:55)。「死よ、驕るなかれ、死よ、死すべきは汝なれば」(ジョン・ダンのジョン・ガンサー「死よ驕るなかれ (Death be not proud))。また両親が所属している愛知泉キリスト教会の田中牧師からも偕子を偕子姉と呼ぶ(inclusive)とうれしい言葉をいただいている。最後に親世代の親族からの冊子読後の短信送付があったのでその内の一部を紹介する：～受け継いだ豊かな感性と才能によって、様々な局面で本質を捉えた臨機応変な対応力を発揮して楽しんでおられるお姿が目の前に現れてくるような思いがしました。今は主の許に召されて、偕子さんらしいどんなやり取りをしておられるのでしょうか。

偕子は国際交流で「広さ」「長さ(中断)」「高さ」「深さ」の4つの言葉を媒介とし常に「fun」に包み、楽しみながらの社会人生活だっと思っていました。そしてそれを超える次元で接してくれた人達の暖かさの中で育てられ、そのすべての方々に感謝しております。またクラーク博士から北大の父、佐藤昌介に受け継がれ、その系譜の流れとその流域で人知をはるかに超える愛に生まれ、幸せな生涯を送った“中距離走”の女性の一生、職業人として

は長く国際課で日英語の通訳、課長補佐、そして“2歩先”を企画提案し無理と思われるが、知らないうちに回りもその気になり達成するスタイルと聞いている。皆様のお支えとご協力に感謝しています。そして最後の最後はほんの短い期間、計画推進課課長だった（この年愛知県正規職員 11,000 人中、女性管理職は過去最高の比率 14.83%と報告されている）。1970年2月16日、生を受け 2024年4月19日、未明に呼吸が止まり、息を引き取りましたが神様に文字通り息を引き取ってもらったと受け止めています。偕子は 20世紀と 21世紀にまたがった半世紀を国際交流で楽しんで頑張っていたと感じています。本当に国内外の多くの方達にお世話になりありがとうございました。

国際社会の言語、文化、人間

多岐にわたる国際交流の諸側面を取り出し項目書きしてみる。

- “日本的”エリート主義 (elitism) と本来の卓越性 (excellence) をめぐって：中等教育における卓越性のマネジメント (excellence management)」考察 by spelling for open discussion
- ① 日/英語の呼称：“エリート”＜日本社会の学業について意識構造は、本来の学問的意味から、かつての胡散臭いといった社会風潮までの広がりを含む。一般的に競合しない現実の領域では英才教育として存在する＞//Gifted<accepted and established>
 - ② 二種類の社会資産：a) 努力 (discipline) すれば階層的な流動性が確保される (open for upward mobility) b) ギフテッドとしての卓越性からくる能力 (ability/competency) それ故達成意識や名誉心・功名心は極めて薄い。巷の反応は“欲がないねー”と。
 - ③ 負の遺産：「能力」という言葉に過剰・異常に反応。「勉強」という言葉に“がり勉”といった derogatory (蔑視感) な枠で括ってしまう。応用問題は弱い、努力に努力を重ねて頑張る子もいる。日系人社会にはよくある店名であるが、「勉強堂」等と銘打った文房具店は今の日本ではまずお目にかかれぬ。学校教育が将来の社会的・階層的価値を生み出す唯一の価値観とその効果のみに皆が思い入れする日本学習社会。教育の普及化の副作用・副反応。
 - ④ 学習者の心理 (該当生徒の日本での一斉授業・履修に対して“超聴解”能力から生じる対応行動様式)。ここは英語ではなく、“負の感情”の回避のため漢語表現を使って本音のマネジメントを考えてみた。ここでは次の 3 種類の漢語 (下線) が含み持つ描写力を使って人間の性格を分析してみる。

* 古典語の力を借りて深層心理を探る：教室内での意識は他事に：バレない様に「韜晦」(とうかい) 行為 (自分の才知、自分の能力、自分の到達度をごまかして分からないようにする) のよくある行動様式は該当教科の副教材 (辞書、参考書、地図帳・年表等々) で“自主学习”という隠れた内職。授業は半分以下の capacity で理解し、問われれば正解で答える。教師の対応はいろいろ！

もう一つは「行動は性格」に「性格が行動」(社会生活) に：「睥睨」(へいげい) 行為 (流し目、横目で社会の事象を見・鑑、斜にかまえる)。その高さの余裕の故、他人が mediocre

といった凡庸次元で自分の意識を説明できると思い込み、そのレベルで解釈したり、されたりすると精神侵害として強い嫌悪感を抱く。凡愚さに対しては生身の人間に対する皮肉 (irony) や時として辛辣な (sarcastic) レベルに至る受け答えがある。一般化された世の見識や定見のなさに対しては、その社会に対する風刺の形で表現される。鋭い洞察力は事の本質をついている事が多い。多くの文学者が使う手法でもある。低レベルの誤解や非建設的な反発はかわしたりするが、相手が気まずく (awkward and/or clumsy) ならないよう言葉の修辞法 (ジョーク、ユーモア、ウィット、パロディー) を多用する。実体や本質を失わず、具体的な場面对応である。感情論を回避する事は“Good Relief”。

最後の一つは「不羈」(ふき)：才識が優れていて、常軌で律しがたい。束縛されることなく自由に振る舞う。自由に知り、自由に語り、自由に書く、自由に行う果敢のタイプ。

*バイリンガルの現代語で：高次元の知的な critical thinking を要する言語使用域(register) にはパロディー、シニシズム、アポファシス (apophasis：陽否陰述) 等を随所・随時・随意に適切活用し複雑系・困難系の問題 (issues) 解決を目指し、やり遂げる努力を惜しまない。文才が作り出す“文彩” (trope) のアリーナも“fun” for complexity。そして言語の修辞法は人間関係から来る圧迫や人生の負荷からの解放に収斂 (convergence) する。

⑥ 対応の深層心理：一般の社会全般に対する対応は、自己の心と頭の内にある mind は自立しているので、明白な self-identity、そして外に出す前の意図 (intention) も明快。ただその直截性 (straightforwardness) は“きつく”響きやすいので、対人間での他者配慮として (音声英語でいうテンション“tension”を避けるため) 上記カタカナ語でまわりを柔らかくしたり、婉曲表現を通して自己開示する事が多い。自分で確立してきた人間関係はこのような言語を活用した有益な処世術を使うが、家族関係は自己の選択ではないのでこの限りではない。内に厳しく、外に優しい武士道倫理 (適切なタイミングで役に立つ beneficial advice は特に仕事仲間から明示的な形で感謝されている)。同時に自己決定が同じ領域、方向である場合は深みの (in-depth) 会話が成立する。学問的にいえば、our familial relationships based upon 「異形同質物 allomorphic isotropy」。共有する認識のツールは弁別的識別 (distinguished feature) 力。

⑥ 気の置けない親友やクオリティーを共有する仲間同士では“素”の姿で交友を続けるが、そこにも“ドキット”とする諧謔性で場を高める (enhancement via fun and quality)。

⑦ 自分で選んだ社交一般：レベルを問わず、息抜きとしてちゃっかり楽しむ。はじめて。人間性透視した上で相手に合わせたり、距離をおいて社交をするが、レベルが共有できる相手やグループには「素」を出し、深い友情が結ばれる。物事の一貫性を尊び、人間にある嫌らしさを嫌う。ここが日常のさめた意味世界。後者は南山仲良し5人組。

⑧.行動規範の根底によくある価値観：深層にある真相

損/得、苦/楽、美/醜、好/悪、賞/罰、勝/負、対面/信念、立場/本心、外観/内面、安心/不安、便利/不便、機嫌/不機嫌、都合/不都合、満足/不満足、優越感/劣等感等々がある。しかし、偕子の人生にはこんな二元論は当てはまらなかった気がする。というのは、場

面場面に適した「優先：priority」の価値判断をし、瞬時・瞬間の吟味と評価をし、funの世界に落とし込んできた生涯が借子のルーティーンだったから。

.....

「生きる」

雪浦愛沙（小学校高学年）

綺麗なものに目をとめて
私は何を思うのだろう
生きるものに目をとめて
私は何を感じるだろう

あたりまえのものを
違う目でみていたら
新しい発見をしたよ

小さい虫がいた
生きているのかも
わからない
でもね一生けんめい生きていたよ

どんなに小さいものでも
どこにでもいるようなものでも
みんなみんな
生きることに必死だった
私はね
そんなふうになりたいな

（下線は加瀬豊司）

「国際交流フィールドワーク：ルーツ探しの札幌農学校」

孫「誉」(ほまれ)と北海道旅 11 日

「札幌→旭川→温根湯→網走→阿寒→根室→帯広→静内→札幌」

2023 年 7 月 25 日 (火) ~ 8 月 4 日 (金)

加瀬豊司・秀子・誉

はじめに

北海道出発の前日京都から孫「加瀬誉(ほまれ)」を母親「多恵」が名古屋まで送りどけてくれた。駅周辺のステーキ屋さんで会食をした。元気いっぱいの誉は 200 グラムのビーフをペロリと、つい最近までお子さまメニューかなと思っていたので、成長し食欲旺盛で頼もしかったくすでに“祖親”バカのはじまり。しかし、一抹の寂しさが感じられたのは駅場面での occasion。心配“かもしれない”の三連発：今生の別れではないにしても、10 歳の誉にとって親元離れての長期お泊りの初旅で少し心配であったのかもしれないし、母親にとっても一人息子と離れる事は同じ気持であったのかもしれない。はたまた、ジジババの長距離の車旅行は大丈夫!?であったのかもしれない。出発前夜、健康第一を念頭に置き大人二人は血压計で健康チェック、誉本人から自分も血压を測ると言い出し、血压健康チェックの少年にオムロンは Go Sign:「高血圧管理手帳」に「95 (最高)、60 (最低)、85 (脈拍)」と記録を残したくう----ん> ともかく、Go! Go! Go to Hokkaido! 文責の豊司はトータルの半分はアメリカ教育育ち、今も英語(内容は言語、思想、歴史それに哲学)を生業にしているので、ホマ君あちこちに英語が飛び出す旅日記になってしまったけど、序(つい)でに英語もゲットして!また旅程日のあらかし以外の関連話や説明・解説(intellectualization)は大人の言葉になっているが、今は拾い読みでもいいので自力で読めるところから、特に必要なところは「誉君」と呼びかけて子ども言葉で書いてみた。今回「改訂版」に初版の内容に対して誉がメモした短いコメントや「あい(合、間、相、愛)の手」を<< >>内に入れた。さて最後に小学生バージョンのまとめが書いてあるので全体を理解するために、まずそちらを先に読んで輪郭を掴み、はじめに戻ったら分かり易い。

誉は、「宣雄」父親からの旅行日記の裏表紙にとつともなく大きなイラスト入りの励ましと見聞記録への鼓舞：これを書こう：「発見したこと」「知ったこと」。そして、「感じたこと」を自分の人生に重ねて書いてくださいね。親の期待に応えるべく旅日記は全期間旅行のルーティーン<寝るのは書いてからとジジババが>に

なっていた。とりかかりが遅くなる日もあったが毎夜集中して取り組んでいた。
Good Job.

この度の旅、孫連れのためのキーワードはSDG'sの中に「継承」概念。継承のスペンは10代20代30台代以上までと長期戦。このエッセイは執筆中に広がった形で三本立てになった。一つは小学生5年生誉バージョン、二つ目は訪問地報告&関連の「佐藤昌介、新渡戸稲造、内村鑑三（以後随所に「三人」と表記）」、最後はこの「三人」の人物に関するアメリカ留学の考察とフルブライトに特化させた留学事情。「ルーツ探しの札幌農学校」を基礎・基本に、「フルブライト講演」に加えて「無教会研修所ゼミ発表」、「いずみの家聖書教会礼拝説教」といった拡がり(eventful)が範囲。今回の北海道は孫連れ旅日記エッセイなので小学生(10歳)世代のストーリーが随所随所に入っているが、フルブライト関連はフルブライト講演会<「Have Fun! : 国際社会(言語と文化と人間)の狭間で枠を飛び出すスタイルを求めて」by Kase 11/9/2024@椋山女学園大学、Nagoya Fulbright Association(会長同大学塚田守名誉教授)>の“底本”として元原稿にもなっている。内容に連携がある場合は、フルブライトについての語りとアメリカ留学事情そのものを接点として、佐藤昌介・新渡戸稲造・内村鑑三達の留学と重ね合わせ、共有できる要素も考察していく。時を同じくした関係は旅行記作成中に世話人宮崎文彦氏(無教会自由が丘教会・千葉大学特任研究員)による内村鑑三の聖書学習講座ゼミ「内村鑑三を読もう」:『基督信徒のなぐさめ』(貧に迫りし時)の発表担当時(10/7土/2023)、本稿から訪問地(札幌独立キリスト教会)関連記事を数か所引用した事。更に翌年(1/14日/2024)に愛知県東郷町のキリスト教会連合(JECA)「いずみの家聖書教会」(増田育生牧師)での礼拝説教に本稿、家族ルーツである「札幌農学校」の一部を題材とする礼拝説教等々を含め多方位の冊子になっている。

はじめは早速英語談義。小学校で英語が教科になった(教科化)現代日本。日本語と英語の両方が同じ意味と意思でも、実際は別物。当たり前が当たり前に出てこないのも旅の経験。この事を言葉の世界から始めよう。誉、知っているよね「グッドスピード」。でもたぶん意味全然違う。日本人の英語マインドには誤解を招く車の旅言葉は「good-speed」。これは程よいスピードといった速さとは別物。別れそのものの挨拶:「行ってらっしゃい」が語義。いろいろ励まされ、行く人に「行ってらっしゃい」。旅行で大切な要素は、和製英語で言えばTPO<Time, Place, Occasion>。連想する言葉に敷衍し発展させれば、旅行はこのTPOのPにPeopleを付け加えて、Time, Place&People, Occasionと拡大させた方が正確のような気がする。出会う人々は千差万別が旅の常と幅。旅行をベースにして「人生」や「人世」へと連想で膨らませた古今、東西の著名な小説家(illustrious novelist)に倣い、

出会いを通して思った事、想った事また感じた事、考えた事で綴ってみた。自他への言及やそこから敷衍した逸話や挿話も随所随所に組み入れた。現代の世相に対しても批評も (critique)。そして旅を契機として、物事の前提に差異 (違) が潜んでいることに気付いた時は、(分・部) 厚い記述 (thick description) の言語スタイルにより、何層にもなっている自文化・多文化・異文化を掘り下げ、自他の思い込み (牢獄: プリズン) からの解放 (social prison break) を目指してみたいと思っている。共通体験や感情移入で少しでも歴史の臨場感が共有でいたらと期待している、そのため「連想する習慣」(the habit of association) <これはアメリカの教育学者ペラーの「心の習慣 (the habit of heart)」を振って使った豊司のアドバイザーであるユダヤ系アメリカ人フィンケルシュタイン博士の“地口”言葉。かつてこれを無断で論文に使ったら<“Footnote me, Toyoshi”>と叱られた。この習慣がもたらす深い理解 (in-depth understanding) を目指し、訪問地発の連想も多用する。広がった“往来発着”の活用の終わりには必ず共有する要素 (the common element & essentials) で押さえ、元に戻る (原文回帰・元文復帰) 事を心掛けている: ①焦点を当てた本質をより顕著にするために②方法として既知の喩話や定着している周辺情報を使う (illustrative purpose)。そして③初めの中心に戻る (原点復帰)。話 (discourse & delivery) の“糸が切れた罫”になったら、Mr. Homare Kase、“Go check”を入れてね。

ここから大人の文章表現になり難しい話になるが、ここは物事を観察し、思考し、判断しそして評価へと続く人生や学問の枠組みの背景の話なので忍耐してほしいところ。ホマレ、ジジの専門は「哲学: philosophy」と位置付ける博士、Ph.D. (Doctor of Philosophy)。アメリカの大学院で文学と歴史をつなぐ哲学を学問的に研究。日本とアメリカはフィールドワークの学際テリトリー。哲学の語源は、philo は愛、sophy は知 (智)、よって愛知。今回の旅行は愛知からスタート! 人間は、自分の発想の中に意識・思考の根底に潜む「暗黙の前提: tacit assumption」を言語化しその分析・解明・解決にエネルギーを使っている。学問領域だけではなく日常世界にも気が付くと否との関わらず、根っこに根深く根強く存在する大本を考察する事が哲学の大事な仕事。この話が大前提。

換言すれば、前提の前提なのでメタ前提と定義している。旅をすれば思いがけない事や不思議な事に会う。だからここは今まで気が付かなかった前提の発見と発掘の宝庫! そこから出発するために合成語の言葉をつくった。それを「文化分化分解」と呼び、これが言語文化「哲学」の大切な作業。通常気付かない意識下の世界を掘の下げ作業なので、何層にも絡みあい追及や探求ふさいでいる潜在意識の領域なので、その分言葉が多くいる。そのため言語が、重くなりがちなので sense of

humor/wit 等による複雑な言語記述の“解毒剤”として言葉の修辞法が常に必要と考えている。この作業を「言葉を言葉で」解き解（ほぐ）しながらの言語記述（エクリチュール）の営みと考えている。対象は毎日の食生活といった日常世界から思考や思索から生まれる頭や心の中にある事柄の大前提を取り出して、解体し、その思い込みの“自明性”を問題視する事自体こそ哲学する「言語社会学」の重荷と義務（burden & obligation）と思っている。言葉の問題を言葉で論じる事でもあるので最後まで言葉に囚われている状態とも言えよう。言葉、言葉、言葉と「言語」が常に迫ってくる。しかし言葉を超える言葉は最高の営み「太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき」（文語訳 ヨハネ傳冒頭）と確信している。

個人の経験が自賛話や愚痴話の様相を帯びてくるとは周りに嫌な感情を生み出し、自分と相手に距離が生まれてしまうので、覚めた意識でそれ自体を題材として取り扱い、飽く迄その具体的な実例を使ってひとつ上の普遍的な概念構成を狙っている。ともかくそんな“ノイズ”を取り払いつつ自他への言及話をより大きな目的に到る方法手段として多用した。まず、ものを書いたり、話したりする「情動」と「目的」を形成した体験として心に強く残っている話から始める。Dissertation（博士論文）の審査である口頭試問（Defense）の最後に、“Toyoshi, talk, talk, talk to death and write, write, write to death.”（for the thickest description!）と最後の最後まで（死ぬまで）緻密な言葉の国アメリカでの研究の厳しさを再確認したことが思い起こされた。そして感動した事は審査に関わった複数の教授から、「博士号を取得したのだから、とくに Ph.D.は専門領域は、他領域についても根っ子部分は共有する（できる）深みがあるので、対象の領域は日常世界から形而上世界までが射程。「その思索と発信のため自分で言葉を数個ぐらいいは創って（coinage）もいいよ」とも励まされた。イメージの幅を表現の豊かさにくるみ、自分と周りの人達と楽しみ（苦しみ？）たいと思っている。「言語社会学」の“快楽”の一種。

それと英語も数多く登場させたいので「歓迎」して欲しいと思っている。ただ現時点で英語の難易はかなりあるので、誉君、これから学校で習ったり、使ったりする英語の水準を目安として博・修・学・高・中と略記した。大志を抱いてそれぞれの年齢の段階に応じてチャレンジしてみてください。しかし成長段階で触れた英語はレベルに関係なく“飛び級”英語として学べばいいと思う。学校では全体として難易を考えて言葉を配列した訳です。運動競技で「フライング」はダメですが、英語圏の学校ではヘッドスタート（head start）と言って早めの取り掛かりや、できる子どもには足踏みをさせないで、先に行く（advanced placement）制度も機能しています。一応、学校の諸段階を<博士レベル（D: Doctor）・修士レベル（M: Master）学士レベル（B: Bachelor）・高校レベル（H: High School）・中学（J: Junior High）

小学校 (E: Elementary) > に分けて必要に応じてレベルを付けるつもり。基本的には、誉の将来の学校の発達段階において 10 年、20 年後を念頭に置いている。長期戦でがんばれ！英語は将来必ず世界に通じるから！世界の広域流通語であり、国際共有語として使われているから。

さて旅行主目的の中心は、親族関係の「ルーツ探索」。基礎は血の繋がりの「血縁」、そして北海道を拠点とした「地縁」、更に歴史という「時縁」の 3 つの「縁」を一つの大きな円 (共同体: community) に括れたらと統合化 (integration) を目指し欲張った。そして次世代、次々世代プラスに「ルーツ」からの「継承」が SDGs と同義。先ほど宣言した語り言語の“ネタバラシ”をすれば、「ポストモダン」風言葉の中心的意味を取えずらし、その「ずれ」、脱中心化 (de-centralization) を楽しむ (言葉の戯れ) 文体で書いたくこんな高尚なレベルには程遠いダジャレも入れてしまった。何はともあれ、結果としてはここが言葉の息抜き。そして焦点を当てる内容の組み立て (organization) は今回の旅の基本になっている現北海道大学関係がメイン。そこだけで独立したエッセイ (essay) になるぐらい多くのページをこの旅日記に割いた。

思えば北海道帝国大学には、クラーク博士から薫陶を受けた明治の“つわもの”数多くいるが、誉と血筋繋がりの佐藤昌介 (クラーク 1 期生) を中心に、今夏、ゆかりの訪問地として関わった札幌農学校二期生の新渡戸と内村鑑三を“三羽鳥”としく実際は三賢人と思っているが、齒に衣を着せないモードで「三者評伝」<訪問時間の長短に比例させた叙述分量>として論じてみた。また途中、旅の經由先で出会う地域の実体・実相も含め、言葉による修辞法を駆使し、単純に見えても人生には「うまみ」と「からみ」が複雑に巻き付き、絡み合っていてあまり考えたくない事も多い。こんな現実の社会をしっかりと見て話題化。特にその現実の背後にある前提を時として問題視し、それらの再定義も頑張って (ambitious) みた。単なる決めつけを排し、先入観や偏見から自由になった視点・観点から広がりや深いところで共有できる要素のかなたに“普遍的”価値が現れてくる事を期待している。単に旅のリポートで片付けたくない。本当に欲張ってしまった。学術的に引き締める (stringency) 要素と旅が持つ気ままな (arbitrary) 性質の両面から北の日本列島の歴史を発掘して“醍醐味”を味わってみたいのが今回のファミリー旅行の願いである。

誉君、ここから始まる日程の情報や報告は普通の口調で書いてあるので当時を思い出しながら、懐かしく読めるはず。ただ難解なのはそれぞれの訪問地からの連想から発展し、更なる連想が生んだ社会評価に認識方法に使う言語哲学の言葉。ここ

の今の苦しみは将来の楽しみと期待して次に進んでください、Go ahead, Homare.

7/25/ (火) /2023 (名古屋の加瀬家→アートホテル旭川ホテル、2 連泊)

名古屋空港 (小牧 AP) と丘珠 AP (札幌) 間、直行便 FDR(Fuji Dream Airlines) は名古屋市守山区に自宅のある地元民としては 20 分と身近な空港で便利。名古屋 AP の長期パーキングの施設もあり往復アクセスも簡単で助かった。FDA398 便の機長の札幌の天気は晴れとのアナウンスがあったが到着寸前に急に雨雲に入り揺れ (turbulence)、大粒の雨が窓をたたき「ちょっと怖かった」と誉。着陸後タラップまで大量の傘を用意しての丘珠 AP の出迎えて驚いたが、「ここから全力で北海道を楽しみたい」と少年らしい決意を持参した日記に書いていた。

県営名古屋 8:00am→札幌丘珠空港 10:08am →トヨタレンタカー (アクア新車の既走行距離 300 キロから) 4 輪駆動車。後部座席は窓が斜めのデザインで視界は悪いが、加速は最高のスポーツカー・タイプ。ハイブリッドなので燃費は化石燃料の 3/5。行程は「札幌→旭川→温根湯→網走→阿寒→根室→帯広→静内→札幌」の総走行距離 2,000 キロ<<おどろき>>。道路はどこへ行ってもほとんど真つすぐ。広大な牧場に大きな木があると決まって牛たちが木陰に密集し、涼をとり“何が悪いか”と涼しい顔で大満足。しかし (今年の) 北海道の夏はこんなに暑いとは知らなかった! 建物に逃れようと中に入ったら余計に暑かった<エアコン設備は通常無し>。

最初の訪問スポットは三浦綾子記念館：丘の上の 2 階建の家。すべての出版物と写真、ストーブや粗末な机がそのまま部屋にあり、往時を偲ぶ。小説家三浦綾子はこんな粗末な机に向かって書いていたのだ。何年か前に訪問したアメリカ南部アトランタで見た『風と共に去りぬ：Gone with the Wind』のマーガレット・ミッチェルの机もそうだった。病弱だった。だから集中して描いたと<When I am weak, I have written.>。三浦文学に戻る。鉄道での殉職の実話、宗谷本線 (旧天塩線) の「塩狩」駅を見た。許婚への結納のため乗った列車が、峠の頂上付近で連結器が外れ、下がり始めた客車を自分の体をブレーキ代わりにレールの上に……。キリストの人類のため犠牲的死 (贖罪) のキリスト教精神が根底にあり、その時の猶子を許さない緊急状況の中での行動倫理とその実践は「繰り返しのきかない生涯に対し、自分の命を燃やして生きていく」と鉄道員長野政雄の生き方が現場での殉職と殉教の“遺言”に代わった。長野政男の血に染まった聖書、この実話をもとに三浦綾子はどんな気持ちで書いたのであろうか。自然の森の中の静かな佇まい、質素にしかし堂々と、多産の (prolific) な作家としての多くの作品と、粗末な家具類が対比的な展示されていた記念施設であった。我々の訪問時に全国からの研修やセミ

ナー旅行の一群にも出会った。記念館と JR「塩狩」駅の間に殉職の顕彰パネルと
すぐ横に小さな屋根付き郵便箱に赤色で「神は愛なり 聖書」と書かれた郵便ポ
ストが周りの自然に溶け込んでいた。

7/26 (水) /2023 (アートホテル旭川ホテル朝食 V: バイキング→2 連泊)

朝食ホテルバイキングおいしい感じのラーメン・コーナーがあり本場の「札幌ラ
ーメン」と期待して頼む。冷めた返事は「旭川ラーメンしかありません」。慌てて「あ、
あ、それを」と冷や汗<<草 ww>> (他の地域に行って“石狩鍋”とは言わないぞと
負け惜しみ)→旭山動物園(大人 1,000 円、子ども無料) <全部まわり一日楽しむ。
疲れと暑さに参った。ひとり誉は気合が入っていた。ペンギンは暑そうだった。秀
子はやはり猿がお気に入り>。誉は巨大なクマに感動し、日記のスペースが少ない
ので北極熊だけを書くと前置きし、大きなクマを描いた。そして「ベルグソンの法
則」に触れていた。「恒温動物は寒いところでは体が長くないと体温が維持できな
い」と。ジジババもそうそうと追認の一コマ<老いては孫に従え>とはこの事か。

夕食：動物園隣接 café。入った店のこだわりのピザがよかった。観光地なので味は
いまいちの先入観があったが、意に反して美味かった！と 3 人が異口同音。低レ
ベルのこだわりは最悪だが、何であれ、旨さの高水準のこだわりは「おっ、いい
ね！」。もう一度行って食べてみたい。動物園の隅にひっそり佇むこの café を友達
同士と思しき 3 人の感じの良いお姉さま方が取り仕切っていた。

7/27 (木) /2023 (アートホテル旭川ホテル朝食 V→温根湯ホテル大江本家泊)

ここから大雪山国立公園にある石狩川<残念ながら時間的にここの「石狩鍋」を食
べ損ねたが、現地以外では食べないと決めた現地への意地は後で困ることに>。上
流の溪谷、層雲峡(ロープウェイ+リフト) <柱状の岩肌が長く(25 キロ) たく
ましい、高さによって植物も変わる>。文明の利器で北岳の頂上付近まで行けた。
ただ困いのないリフトにおばあちゃんは怖いと連発。結局誉は二人乗りのリフト
で寄り添い介護。帰りは登山家のようなふりをして少し歩いたがやはり文明人の
乗り物で下山。いつも思うことではあるが、出発点に戻ると何か損をしたような気
持になる。それから途中北見(ホテル近郊)で「山(北の大地)の水族館」<こん
なのありかと思いきや山と川(河)融合を会得>とその施設に隣接する日本一大き
いからくり人形の時計台。その“果夢林(かむりん)”を見学。ここは留辺蘂(るべ
しべ)町、温根湯(おんねゆ)のお迎えのシンボルタワー。世界最大のからくりハ
ト時計がチャイムで時を知らせてくれる。

夕食は温根湯<おんねゆ> (超豪華の和食フルコース+明日用のバイキングも特

別に。これはレストラン責任者が加瀬と加藤との間違いの“贖罪”のため？特別に明日の朝食まで提供。他の従業員はこんな事していいのかといぶかり顔。不思議な雰囲気であったが、明日用に揚げたばかりの大海老に箸がすすんだ）<<笑 ww>>。こんな山奥で食べる海のもの格別<冷凍で可能と野暮な追及しないこと>。鍋料理も出たが名前を聞かずに食べた<魚の切り身が入っていたので石狩鍋のような気もしたが・・・>。旨かった。変な地域へのこだわりは止めるという「こだわり」に発想の転換がここでできた。

かけ流しの天然温泉：ここの露天風呂で①誉少年はタオルを頭に浴槽のふちに仰向けに。誰かの真似ではなく自分でと。あっけに取られ顔の周りのおじさん達をしり目に温泉モード満喫。このくつろぎは世代を超えた男の温泉行動様式なのだろうか。②温根湯を「女湯」と間違えないよう生粋の男文化の温泉場の光景だった（①と②の関係は意味分らん）。しかし温泉は最高であった。くつろぎの時間を過ごせた。ここは歴史と格式のホテルの温泉。伝統と現代風の大きなホテルであったがコロナ禍で今は少ないお客。コロナ前の営業を目指し一生懸命のおもてなしで丁寧な接客>。

7/28 (金) /2023 (大江本家朝食 V→ホテル・ラピスタ阿寒川・共立リゾート泊)

初めての失敗談と誉が深刻。昨日の山登りで疲れ3人とも大寝坊。大江本家の温泉は“世界一”の一つといわれるここの天然温泉の朝風呂に入れず朝食に9時半頃急行。ハーハーとか駆け付けた姿を見て持ち場の違うホテルの人が大声で「お客さん入ります！」(fun) と叫んでくれたので入れた<<セーフ>>。「これからはこんなミスを犯さず、自分がしっかりして祖父母を・・・」<面倒を見てくださいね、と期待をジジババが>。ただ誉の日記帳には恨めしそうに昨夜見た洗面場と脱衣場と露天風呂の克明な絵が描かれていた<<ww>>。

急ぎの朝食ホテルバイキング→網走<道の駅「流水街道網走」駐車場脇のソフトクリームスタンドがあった。JAF 会員 100 円引きの幟につられて買った。こんな小さな屋台にまで店を広げるジャパン・オートモビル・フェデレーション。この時期外は“流水なく”非常に暑かったので冷たい食べもの最高、なんといっても酪農の国、北海道のクリームはコクがあり最高だった。この後のホテルでも牛乳が旨いとホマレ君くちなみに現在名古屋の加瀬家では牛乳は北海道産に変えた>。酪農製品は札幌農学校から出てきた製品でもあるので、コクのある牛乳でいこう。背丈大柄の 190 センチの日本の農学博士第一号、後の北大学長・総長 34 年の佐藤昌介から 7 代目の「玄孫（やしゃこ）：offspring progeny」の誉さん、「大きく育ててね」とおばあちゃんのたつての願い。定説では男子は 17 歳まで背が伸びるので、よく

食べ、よく動こう<「誉、太って帰ってきたね」は多恵母 8/5 の談>。

その後博物館「網走監獄」で全国版になった網走をかすめ、JR 釧網本線に沿ってオホーツク海側を斜里（しゃり）まで「天に続く道」の海岸ドライブ。そしてそこから南下して一路摩周湖に。本当に静かな湖で神秘的。<トイレが途中にないのは本当に困るもの！=景色よりトイレが気になる観光地：「何の事かは誉に直接聞いてください」>。すっきりした気持ちになり、丘を登り、木や石の階段を上り、展望台に。ここから見る全景は人をすい込み陶酔の景色。陶器ソファで長時間寛ぐ誉少年は気持ちよさそうに睡魔に吸い込まれ、半分眠っていた様子<写真を2枚とったが2枚とも目は閉じ切っていた><<ww>>。摩周湖はアイヌ語で「カムイトー=神の湖」と呼ばれ神秘の場所。展望台から見える湖水は本当に吸い込まれそうな深い青い色の湖水をたたえ、それに空の青さまで続いていた。

夕食は自然をアレンジしたホテル・レストランの個室で給仕付き。子どもは別料理でお子様ランチ風と思いきや大きなエビが付きハイクオリティー豪華版<キッズメニューと言ってごまかさないサービスがにくい>は共通の和洋のフルコース。少年気分全開の子どもに大人扱いのご馳走！前日の温泉最高の温根湯ホテルといい、もてなし最高のラピス阿寒川ホテルと続き本当に来てよかったね。このリゾートホテルは深い自然の中、阿寒川の山水をふんだんに取り入れた景観最高の立地条件を生かしている。そして大自然に囲まれた快適なホテルの部屋にはいい香りの檜風呂。ベッドにもそれぞれ、竹のすだれのような御簾のパーティションが付いていた<ストレッチ用の枕を抱いてベッドからベッドへ飛び跳ねた少年。次の少年の大興奮はこの大きな円筒形の長い枕（約直径 20cm X 長さ 110cm）の下敷きになって死んだふりして写真ポーズ。ここに写真がなく残念><<草 ww>>。

7/29 (土) /2023 (ホテル・ラピスタ阿寒川・共立リゾート朝食 V→ホテルねむろ

海洋亭泊)

今日はロングドライブ→阿寒湖→根室（北方館と北方領土資料館）。ビデオを鑑賞後、北方日本領土に対してロシアの実効支配について館長さんが直接付き添う詳しい説明を聞いた。いつもは外気温と海面との温度差で霧が発生し見えないが、異常な暑さのお蔭か？今日ははっきりと日本の本当の東端（歯舞諸島）がよく見えた。テレビカメラ付高画質の望遠鏡に案内された。複雑な気持ちで歯舞諸島をこの目でしかと確かめた。その後のビデオ鑑賞ではここで起こった歴史の「現地の現場の現実」に息をのんで、吸い込まれる感じだった。

納沙布岬<この岬と歯舞諸島間の「瑠瑠瑠（ごようまい）水道」の目と鼻の先 1

カイリ (1.85 キロ) の海中に旗があり、ここから出たら拿捕。本当は日本の領土なのにロシアの領土と言ひ、ひどいです、と誉も発言<<そうそう>>。彼らの「語り」は「騙り」(かたり) <<yes>>。訪問地の根室市内にはいたるところに「日本の固有の領土」と宣言の看板あり> 日ソ不可侵条約とは。

少し法理用語でその概念の纏めを試みる、Homare 君、中学生になったら「日本語」部分、高大学院生になったら英語になった「ラテン語」表現を、辞書を片手に努力して読んでください。今は将来の楽しみに (苦しみ?)。法治国家としての日本では絶対必要な用語。内容も大切。日本語の四文字熟語同様その中は短く本質をズバリ。そしてエスプリもきいている: 「戦争の違法化」、「征服という領域権原の無効化」、「国際法・万民法 (jus gentium) の秩序、自然権 (jus naturale) というが、平和への強硬規範 (jus cogens) が必要。強烈な実効性の担保を国際的な法理で動く国際法治ネーション国家の構築が喫緊の世界課題。

北海道に今回来る事が出来た事実には歴史的逸話がある。終戦時の北海道史のあまり知られていない実話に触れる。8月15日終戦、しかし武装解除の日本にドサクサにまぎれソ連が北海道を取りにやってくる事を見抜き、国の決定に耳を貸さず攻めてきたら戦うと決意した上官がいた。淡路島出身、この勇肌の「樋口季一郎」陸軍中将の勇氣ある千島列島での自衛戦闘でソ連の侵攻をくい止めたのだ<<すごい>>。国の決定通りにしたら丸腰の北海道は占領され日本は分断国家になっていたと思う。であれば、今ここにいない。少し時代はさかのぼるが、この樋口は第一次世界大戦時、ナチによる迫害を逃れるユダヤ人の避難民に、満州国通過の脱出路を用意。勇氣ある日本人。「ヒグチルート」と呼ばれている。

同じような挿話として、連想話の行き先を地域社会にジャンプ。身近なところで、日本の歴史の中に同じような男がいた。それは岐阜県八百津出身の外交官杉原千畝。日独同盟の中、国禁をおかし杉原はユダヤ難民への「命のビザ」を発行。終戦の5年前1940年に、東条英機を説得し、黙認にこぎつけ、ギリギリのところ2万人のユダヤ難民の命を救った<<伝記にあった。すごい>>。現在は杉原千畝の「人道的功績」を顕彰するため出身高校五中(愛知県立瑞陵高校)の敷地内正門前に等身立像の家族ブロンズ像と29枚の陶板解説パネルを高校の正門が見えないくらい広範囲に杉原メモリアルが屋外展示してある。愛知県庁国際科職員をしている娘の偕子から真剣な面持ちで「県はメモリアルに膨大のお金を使ってしまった」との連絡もあった。ユダヤ関係での更なる自己言及の話になるが、かつて筆者はこの瑞陵高校教諭。繰り返しになるが、その後アメリカ大学院博士課程での指導教授の一人は親がアウシュビッツで殺されたユダヤ系アメリカ人女性。

昼食：納沙布岬にポツンとあった食堂で誉、イクラ丼、残る二人はラーメン系の海鮮丼<<おいしかったよ>>。

根室は悲惨な歴史を引き摺り町は少しさみしく感じた。悲劇を経験した人たちは親切>。かつて北方領土は郵便局や小学校があり 1 万 7 千人の日本人が居住していたが今は追い払われて 0 人、一方ロシア人は 1 万 8 千人。この政治状況は「臥薪嘗胆」か。見渡せば、身近なところに、日本に多くの戦争関連の歴史が今も存在している。「見ざる、言わざる、聞かざる」の無関心が成立するのは、平和ボケのマインドの故か平和ボケ故に無関心でいられるのか。あるいは今の自分さえよければ、それでいいのか。日露交渉に日本は誠心誠意、“もてなし”外交。そして今もって結果は Zero。

7/30 (日) /2023 (ホテルねむろ海洋亭朝食 V→ホテル日航ノースランド帯広泊)

朝食ホテルバイキングは近海で取れた海産物をどっさり。勝手丼で好きなものをどれだけでも勝手にとおもてなし。誉は「すっごくおいしかったです」と新鮮な魚介類に賛辞を。それと驚いたには 20cm 大のきゅうり一本漬がそのままの格好でた<<めっちゃうまかった>>。誉も秀子も豊司も打合せ無しでその驚きのキュウリが共通の選択だった。暑い時にはきゅうりが一番。その昔豊司の父親「豊」から学んだことが思い出された。日く“暑い昼間のまなか元気に鳴くのはキリギリスと、そしてキュウリを与えたらもっと元気に鳴く”と。虫かごに入れ、嬉しそうにモジャモジャの口で食べる姿をうれしそうに眺めていた少年時代が再現した。こんなスモール・トークも 3 世代間コム (comm: communication) の一つか。言語使用域 (language register) が少し違うが、英語も “as cool as cucumber” <これ wit になっている? ?!! 内容の繋がりが無いのでやっぱりダメか>。

ホテルの近くの日本バプテスト同盟 1886 年創立の根室キリスト教会の日曜礼拝に出席。後述するがクラーク博士が帰国後昌介との文通がひっきりなしにあった。そこにはどこにいても日曜日の聖日厳守を誠実にかつ厳粛に、そして週日にあと一回聖書研究・祈祷会にもと激励の手紙が届く。我ら 3 人もクラーク⇔昌介のコレポン (かつて英語の correspondence からの省略語が社会共有されていた) を思いながら行った先で礼拝の民に加わった。ホテルから近い距離に教会があったが、非常に暑かったので、急ぎ礼拝堂の中に。案の定もっと暑かった。北海道最北端の根室なのに誠に今年は涼しくないと異口同音があちこちから聞こえてきた。この高橋和剛牧師はノーネクタイだったが、カッターも汗びっしょり。バプテスト教会なので本来「洗礼」には厳格。単なる礼典の洗礼ではなく本来「洗霊」であるべ

きと聞いた<<へえー!!>>。既成の組織用語だけに囚われず高い次元に超越できる自由な発想の牧師と感じた。同時に厳肅さの側面については、週報に礼拝に遅れた際、祈りの最中であれば終わってから静かに礼拝堂に入ると当然のマナーが文言化されていた。音楽界もそうだが公共空間で適切な行動がとれない物心のついた人が多い国は困ったもんだ<個人と集団間でのあるべき自他の「自由」の概念に基づく行動様式は後述する>。そんな social skill が教会から実践能力の拡がりに広がってほしい。反面、他国から自由を奪い、日本の領土でやりたい放題の政治状態がこの地域の背景に実効的にあり、公同の礼拝にもそれぞれ細やかな他者配慮 (Maintain a strict silence) がある成熟した社会行動に対して、他国からの武力全体主義がコントラスト (backdrop) としてひと際目立つ (notorious に)。駐車場にも配慮してもらい旅行者は助かる、安心して礼拝が守られて感謝。その後一路釧路へ随所に高速無料期間があり 250 キロの大移動。夕食は同ホテル内で。テーブルウト (table d'hote) のコース料理もいいが、一つに特化した懐石料理のアラカルト (a la carte) も great、しっかり食べれたし、旨かった。明日 2 連泊して訪問する昌介と妻「陽」の所縁の地、静内 (しずない) 行のスタミナになった。

7/31 (月) /2023 (ホテル日航ノースランド帯広朝食 V→静内ホテルエクレプス 2

連泊)

今日は根室から釧路の「根釧」の道。<はじめ読めるようで、読めなかったが (こんせん) >。ロングドライブ→厚岸 (あつけし) <厚岸湾で牡蠣の養殖>北斗道路で釧路<丹頂鶴飛来地から「たんちょう釧路空港」と聞いたが、ここにあるトヨタレンタカー事務所に立ち寄り道を聞く>→雨の中、有料道路でひたすら<半分以上の高速が無料>音更 (おとふけ) から占冠 (しむかっぷ) へ<このサービスエリアでのソフトクリームがクリーミーで実に美味しかった。酪農に発展させた農学校とその後の帝大、ありがとう>→平取 (ひらとりではなく「びらとり」) のアイヌの里へ。

アイヌ：沙流川 (さる) 平取流域にアイヌ伝統が色濃く残る二風谷 (にぶたに) コタン。長時間アイヌ資料館・文化博物館。誉は家 (チセ) で伝統の大きな五線楽器をこれも大きな伝統的な敷物の上で弾かせてもらう<熱心な“参与観察”>。意味なく特別扱いは好きではないが、熱心な説明と熱心な孫とのパーフェクト・コーディネートで盛り上がり、閉館時間大幅延長の大サービス<<やった!!>>。見ていると本当に清々しいのは、当事者同士が同じ方向で構築を目指す雰囲気。そして次に、アイヌにルーツを持つおかあさんタイプの方から織物の実演もしてもらった。誉日記には「特に気になったのは、アイヌの人の服です (日記には一時間かけてその絵を描いた)。これはロッカーみたいな所に入っていて、他にもありましたが、

僕はこれが好きです。すごく独特な模様で面白いです。今日の見学は本当に楽しく過ごせました」<<うんうん!!>>。

夕食：海鮮廻転寿司（昌介の南部訛りで言えば「おすす」）<新鮮なネタで誉は好物の「いくら」、豊司は「ウニ」、秀子は定番の「マグロ」>

8/1（火）/2023（静内ホテルエクレプス朝食 V→ホテルマイステイズ札幌アスペン）

朝食：バイキング。海鮮が美味しい。働く人達がここでも感じがいい。そして出かけに手作りお結び一人2個を朝食中に握ってくれた。ふんわりと握りたてとはいえ4、5時間後、しかしそのご飯が最高。北海道は寒冷地なのでコメはいまいちの先入観が徹底的に打ち砕かれ、現在我が家の米は北海道産の北米（ダジャレにもならない、北米大陸に意識過剰。こんな言い訳不必要と感じつつ、また書いてしまった）。我に返り、原野を開拓し品種に改良を加え現在の味にした先人のとてつもない努力に敬意を払った。一番物事の継続に気が行くのは秀子ババ。北海道に遍在し独走態勢の「セイコーマート」で北海道産“ほまれ”という米穀銘柄も見つけた。

昼間：新ひだか博物館・図書館（新山美恵子係長より町史からの資料のコピー提供と説明を受けた。更に旅行後も追加の情報もいただいた。感謝に耐えない）。淡路藩騒動<稲田騒動の淡路島は当時徳島藩で位は徳島の方が上で武士は「白い足袋」を履くが、作物は淡路藩（足袋は位の下「青い足袋」を履く）の方が豊富で経済的にはこちらの方が裕福。それで淡路藩の分藩独立の企てを止めれば、士族の位をやるから淡路島から出ていけと半ば命令の negotiation（この歴史は庚午事変とも称され、その時藩校「益習館」も焼失）。淡路藩は名誉をとり、北海道開拓に<<『お登勢（とせ）』にも出た>>。他の政治的思惑があったようだが、端的に北海道の静内行きはこんなゴタゴタその理由。1872（明治4）年淡路藩主稲田邦植（くにたね）は先発し、しばらくして家臣は陸路と回路に分かれて「島から島」へと大移動。この移住の中に後に昌介との結婚に至る稲田邦植の妹「陽」がいる<昌介の妻「陽（子）」とのロマンスは？現在探索中→誉の代までには知りたい！>。2005年に北の原野に向かうこの北海道移民団について題名『北の零年』（吉永小百合主演）として映画化されている。豊司の日米専門領域とし「移住史」は専門（日系アメリカ人移民史）、当然国内移住史も心おどるところ。合わせて下記の移住の動機、要因、発展話も。

静内は「新ひだか」と地名が変わったが、ここ静内と淡路島の金曜歴史ドラマが現在『お登勢』というタイトルで再放映されているので、毎週観ている。沢口靖子主

演の歴史小説（船山聲作）、貧農の娘が幼くして武家に奉公にでて、その鋭い現場の現実からの観察眼と危機的場面では立場を超える正直な言動に心が動かされる。一例を挙げればこんな事も：目上の人や目上の人に危害があるときには必死に腕や足を噛みついて阻止。それで大事（だいじ）に至らず、大事（おおごと）にもならない。こんな場面も楽しみながら、「静内」を今非常に身近に感じている。歴史としては、先発の殿は官軍側についてしまった模様。後発の藩主の妹「陽」や家臣は大混乱。そのことで内輪もめにもなった。そして経済も混乱。静内の東別地域のアイヌからサケの燻製やトウモロコシをもらって生活が出来た。＜静内の布辻（ぶし）、現在の東別方面にその子孫が居住と聞くと、「陽」の結婚相手の北大の総長、昌介さんとのロマンスは今後、この調査研究には、将来嘗に期待！）。二人のお見合い結婚は、昌介の妹「輔子（島崎藤村の永遠の恋人）」の姉「直（スグ）」と「栃内元吉（南部出身、北海道拓殖課長）」夫妻が媒酌人と聞いた。今回の訪問先の札幌キリスト教会（かつてメソジスト、現、日キ）での8/2水/2023 聖書研究祈祷会で左隣に座っていた年配（私もそうだが）女性から栃内さんと遠縁にあたると聞いた。出会いとは奇なるもの。

話を戻し、新ひだか博物館にある当時の淡路藩の入植の状況のパネルはわかりやすく、昔も目を凝らし、真剣な面持ち。藩の武士たちは袴で耕す武士の農業。袴の下から大型「ぶよ」が入り下半身血だらけの開拓初期（2005年吉永小百合主演の『北の零年』というタイトルで映画化）。慣れない開墾の苦しみの中で、第一に着手したのは学問所。この学校をかつて燃やされた「益習館（えきしゅうかん）」と名付け、現在は地域の小学校の前身になったとの事。ここでの言葉展示の掲示で知った少しのアイヌ言語：「こんにちは（イランカラッテー）」と「ありがとう」（イヤイライケレー）＜＜なかなか覚えられない＞＞。挨拶としての言語はまずこの二つでと不安を含んだ期待。言語学では交感的言葉交わり（英語は定着した言い回しがある：phatic communion）。アクセスは社交からはじまると思う。

嘗も150年前ならここ静内のサムライ子。甲冑の展示の中に稲田家の家紋である矢筈（やはず）も見つけた。思いを集中しながらこの事を心に感じていた。「すごく立派でかっこ良かったので興味を持ちました＜＜初心者マークみたい＞＞。僕もかぶってみたいです。でも重いからかぶれないと思います」＜＜うんうん!!＞＞。こんな集中と瞑想により、この子にもサムライの子の認識が芽生えはじめたようだった?!>><<笑ww>>。早速孫は京都の両親に「やはず」をイラストにし、感動の葉書を書いた。

夕刻：この頃着替えがなくなり（北海道異常気象で持参の長袖だけは手つかず）、

ランドリーに<<そうそう!!>>。少年サムライの誉は部屋で『水戸黄門』のテレビ<<水戸黄門大好き!!>>。

静内川の中流、山の上にある「真歌（まうた）公園」にあるアイヌ資料館は、来年を目指して大改装中で残念ながら工事現場しか見られなかった。静内は馬の産地でもあり、馬関連の施設も多くある。馬の横を鹿たちは山地のあちこちに跋扈しているが、馬と鹿は距離を置いて生活をしている。接近すると“馬鹿”らしいのかくわっ！さむ。地域は全く関係ないが、北海道には地名で「わっさむ（和寒）」がある。意味分らん！？

夕食：旅行中の「衣」の日常生活と将来再訪問予定の資料館の下見で時間がおしてきた。めいめいがテークアウト弁当を選び、部屋で。汽車弁の感覚で加瀬家水入らずの小さな幸せをかみしめながら。

8/2（水）/2023（静内ホテルエクレプス朝食 V→ホテルマイステイ札幌アスペン

2 連泊）

朝食：自称 80 種類のバイキングと豊富。ホテルの方から朝食後、この地域は朝に鹿が多く出没、車との衝突事故多し、と。鹿は山地での足の感覚から道路では感覚が違うので止まる。ドライバーは一旦停止してくれたかと思ひ発進。「ドン！」。鹿は周りに関係なくマイペースで進み、人は人の思い込みで判断。後述するが、暗黙の前提（tacit assumption）への省察は、多面的な知識と洞察力がある。ご当地で日常に見られる動物関係との認識のズレ（perception gap）は“異文化間コミュニケーション”の面白い領域でもある。

昨日に引き続き、おにぎり昼食に期待。やはり美味しかった。その旨ホテルの方に言ったら今や“本州米を凌ぐ特産”とニコニコの自慢顔<<うんうん!!>>。共生が確保された動物関係もさることながらこんな平和的な地域でお国自慢のライバル競争は刺激のある人間関係。一方世界に目を向ければ、この世の世界政治には醜い欲望が渦巻いているが・・・。

日高道路、道東・道央高速で北広島市を通り、誉が本で予習してきた「羊ヶ丘」に向かう。指さすクラーク博士の全身立像に連動する誉ポーズに満足顔（表紙に）。この撮影スポットの近くでタイミングよくイベントがあった。十数頭の羊の徒競走<<優勝羊を当てたら“超賞品”。暑さでばて気味の大人二人とは裏腹に誉は大興奮<<草 ww>>、無理強いされ登録した秀子の“羊券”（因みに羊応援券は「モコモ」や「メリーサン」<<草 ww>>と羊名が印刷されておりオンデマンドで選べる。過

去の実績や下馬評<下羊評?!>も囁かれ競馬(羊)場の雰囲気。応援光景はジジババ・パパママと boys & girls の多士済々が不協和音で大熱狂。かなり管理された羊競争であったが羊飼いがいないと(いても)コースを外れ、かなり羊たちは気ままの気分<うんうん!!>。羊と人間の恣意性をメタファー(metaphor: 喩)として聖書は使う。「私たちは皆、羊のようにさまよい、それぞれ自分勝手な道に向かっていった」(イザヤ書 53:6)。特に靈的な面では至る所に脆弱性(vulnerability)があるのが人間の本性。羊は露骨だが人間はそれを上手に隠すから、なおたちが悪い。羊競争は結局、大騒ぎを尻目に無欲の秀子だけが特賞に当たった。しかし豪華賞品たるや、それは 100 円程度の駄菓子だった。誉は期待と現実の落差で意気消沈<<笑 ww!!>>。ところで、ついさっき迄、写真撮影に順番待ちだった「向上心」を目指し未来を指さすクラーク像もこの時ばかりは人気(ひとけ)を失い、人気(にんき)を失いひっそり静まり返っていた。新しい環境や状況が発生すると群集(mob)とまではいかないにしろ、社会的同調圧力がなくても集団化する傾向(congregative propensity)から流行好き、特集好きな国民性が生まれるのであろうか。熱しやすく冷めやすい不思議の国、ジャパン。

夕刻：国の登録有形文化財指定の現在日本基督教団札幌教会<明治 22 年発足。札幌の美以(メソ)教会(メソジストは豊司・秀子も)>の小林克哉牧師による祈祷会に参加。誉は充実している子ども用図書に大満足。昌介は毎週、日曜礼拝を最優先、そして週日の聖書研究祈祷会も(twice-goer)。そして決まって礼拝は最前列に座っていたと聞いた。同じ最前列に誉は座って写真を撮った「すごい古い教会でそこには昔僕の先祖の佐藤昌介さんが座っていたという席がありました。僕も座りました。うれしかったです<<すごかった。すわれて良かった!!>>。こうした旅行はわくわくして楽しい北海道です」。まじめに歴史を考えていた様子に家系史に思いがいく<ジジババの欲目による願いと勝手な想像(誉が思っていることを思うメタ思考>：佐藤昌介の父親、佐藤昌蔵もクリスチャン、そこから数えてオールクリスチャン家系(昌蔵→昌介→千代子→まり子→秀子→宣雄→誉)が途絶えることなく誉で 7 代目<<すごい>>(誉本人は 6 代目の京都中央チャペル加瀬宣雄牧師より昨年洗礼を受けたばかり。琵琶湖での洗礼時に 7 代続くのは日本では珍しいので更なる継承を大切にしと同チャペル藤林イザヤ主幹牧師から励ましも受けている<<うんうん。誇りに思う>>。

この祖父母の認識を分析してみる。昌介さんと誉さんの繋がり(の重みに思いを馳せていたと、思い込みかもしれないが、この思い入れが祖父母の解釈!まわりくどい説明を英語は一語で言う長い単語がある。Homare、Don't worry. ここからは大・院の英語。長い英単語の多くはもともと合成語なので見当はつく：progenitorship

の意味ある語源は >pro (前) + geni (発生) + ship (間柄)。この結合は表意文字の日本語のように英語も長い単語を構成する小さな単位、木の幹のような大切な部分 (語幹: stem) から想像できるよ。誉君、敢えて繰り返すが、短い1語は分からなければ分からないで終わってしまうが、長い単語は類推可能、誉君。しかしこのような家族社会学の領域に言語社会学の言葉の括りはやはり大学院レベルかな。今は分かるなくても OK<<良かった、(ほっ)>>。研究とは、このような領域に言葉を組み合わせて意味の中心 (semantic domain) に言葉付けをする知的作業の事。確かにこの場合のように輪郭と方法は抽象度が高い分、知力と労力がある<<なるほど>>。確かにこの世界は学問で1番難しいところであるが、チャレンジすればワクワク感一杯のやりがいのあることも事実。社会と言葉を極める、極めようとする活躍中の研究者は世界中に多くいる、Homare。

夕食：札幌市内のデパートの「和光」のとんかつ。夏のキャンペーンで子どもは全商品半額。誉は最高の黒豚「とんかつ」定食を一人で食べた<<うまかった!!>>。曰く、「僕計算してるんだ」<<草 ww>>。旅行中屈託なく一番高いものを食べていた<<それでいいよと祖父母は満足。そういえば誉の父親宣雄も小さ時そうだった<<へえー!>>。念のため、「隔世”遺伝ではない事をここに明記しておくけど。しっかり食べて、しっかり考え、しっかり話す事が国際基準の基礎 (New Yorker は Power Lunch と称して実行)。英語のワンセンテンスの励ましは意味ある貢献：「Make a meaningful contribution worldwide!」

立体パーキングの係の人との話し合う事になった<<元国家公務員、定年後関連業界で3年、その後人生の現業を学びたく駐車場係になったそう。人生の広さを遠観し、屈託のない“参与観察人”との思いがけない出会いがあった。旅はこんなフィールドワークに思わぬ人とその「人となり」がもたらす宝が与えられる (serendipity)。意図的であれ、副産物であれ、努力の過程で自分を超える何かを与えられる。フィールドワークの新しい定点は (topos) は訪問地での遭遇。立体駐車場操作で2、3回中断があったが30分の人生長談義>>。

ここで明日訪問予定ではあるが、旅行順路を前倒して札幌独立キリスト教会の「内村鑑三」関係話を先に紹介する。ある事がきっかけになり、生き方が変わり転職に至った実話。信仰に押し出され、世の中の処世術を超え、形式や組織を超える内村の聖書中心の講義を聞き、いたく人生が変わり、国の官僚を止めて内村の弟子になりたいと執拗に頼み込む男が「藤井隆」。その一途な懇願について内村も折れ、そのようになった。面白い人物で人生の機微を機知で超越する。この世との妥協を嫌い、孤高と独立を情熱一筋に聖書信仰を貫く内村の一途の姿勢に深い信頼を置く

一方、藤井は言動で師を上手に困らせ、本質を突く笑いの共有で師弟の絆をより堅固なものにする個性派。こんなエピソードがある。「先生ハダカになってください、どれだけヘソが曲がっているか知りたいので！ 謹厳実直の内村も思わず笑ってしまった (open fun) <<ww>>。ホテルに戻り駐車場入り口の立ち話から、同じ要素によるもう一つの話が思い起こされる連想の連鎖でなかなか一日の旅が終わらない。藤井への“再想像” (re-imagine) が帰名後、関連書籍を注文し、このユーモア豊かな藤井本への“再訪問” (revisit) と自己満足している今日この頃であった。

旅の締め括りの一言話。今日の一日はドライバー役の豊司の心身にとって連想が連想を呼ぶ連続連想の好循環の旅だった。誉、秀子達はそのまゝ部屋に帰り『水戸黄門』にはまっている<水戸黄門は「水戸学」の大衆版であるがもともと一つの思想体系>。そして夕飯は皆で、部屋で。ファミリーの団欒ができた。ジジババはふと思う、京都を絶って丁度 10 日間経った札幌の夜、今お父さんとお母さんは何をしているのだろうと誉は心が“しんみり”する頃かな？ <<しんみりすけど>>あるいはホームシック？あるいはそんな気持ちを隠している？それとも全然関係ない？それともジジババが自意識過剰の現象？

8/3 (木) /2023 (ホテルマイステイ札幌アスペン朝食 V→2 連泊目)

朝食：ホテルバイキング→チェックイン時の貰った (Belated) Welcome Tea: 日程に追われ行きそびれていた時間。ジジ、マゴの男性二人のホテル cafe でゆったりとデザートを兼ねたお茶タイムが持てた<<うまかった>>。いよいよ「ルーツの旅」のハイライトの北海道大学訪問の前、太平な世の時間が過ぎてしばしのゆとりのひと時。歴史の嵐の前のひと時の静けさを堪能。“鬼”のいぬ間にミルクキーなケーキセット<<しふくの一時>>。部屋では女性一人 (absentee) が出かける支度。

北海道大学：北大文書館の山本美穂子特定専門職<ワシントン DC/MD 在住の義姉昭子より紹介>を訪ねる。逸見勝亮 (へんみまさあき) 博士、廣瀬公彦特任助教<<お話しとても楽しかった>>も加わっての説明と丁寧な案内に感謝。総長 34 年、北大の父佐藤昌介の部屋一杯の手書き一次史料 (クラーク博士の講義時間割、クラーク自身の朱筆訂正による受講ノート、日記や日誌、昌介の席次や科目別成績) 等々<<すごかった>>。歴史研究の根幹をなすこれらを単なる学校の沿革資料一覧ではなく、丁寧にアーカイブ化し、その施設としての文書館の組織化にまず感銘し感動。北海道があつてよかった。そして北大が出来て良かった。次に札幌農学校生徒の佐藤昌介とアメリカ人教師クラーク博士との教育における日米関係や昌介のアメリカ留学記等の記録文書施設全般の全体の歴史を記述する際の、著者としてのこちらサイド (著者性：authorship) の視点とそれに至る背景からはじめる。た

だ昌介のアメリカでの頑張りを「すごいね」と上っ面の記述にならないために、博士課程留学生生活の経験共有者として自分の内側から相手の内実に関与する参与観察 (participant observation) をし、アメリカ高等教育ありのままの (sweet & sour) 学校生活の記述をしてみた。そのため日米関係のファミリーの自己言及による加瀬家悲喜交々の体験も参考にし、相手の経験の深層面 (in-depth dimension) に迫ってみたいと、また老骨に鞭打って張り切った。嘗の先祖 (progenitor) 昌介はこんな事を言った：60、70 は鼻たれ小僧、80 歳 (事実英語には 80 代の人を表わす独立した単語、“octogenarian”がある) からの人生は面白い (Life is fun) <<なるほど ww>>。

先ず順序を入れ替え、こちらサイドのアメリカ留学の家庭史から。1 回目のアメリカは夫婦と幼少の長女偕子 (4—6 歳) と長男宣雄 (2—4 歳) とを連れた子連れ旅行。娘偕子は現地のエディソン幼稚園児 (Edison Preschooler) <帰国後はいつアメリカに帰るとよく聞いていた。結局高校の時 AFS 奨学金 (“エイエフエッサー：AFSer”) とソニーの盛田財団の奨学金と二重にもらい単独アメリカ留学 (明和高 2 年の途中からいきなり North Hills High School の 3 年生編入に驚き、そして卒業<<へっ、すごい>>)。ただ 1 年後の帰国時には 2 年生クラスに戻され! また驚き、誰も友達がいないと不平不満やるかたなし<<ww>>)。しかし海外の高校の卒業資格があるので高校 2 年生でも (これも驚き) 南山大学は受験 OK だった。そして「英米学科」入学そして正規の在籍期間の 4 年後に卒業<<良かったね>>)。ただ日米二つの幼稚園 (金城幼稚園半年在、帰国後“単位”互換か、卒園児として配慮をいただいた)、二つの高校 (前述の如し)、高 2 卒大学入学との「ではいり」、つじつまが合うのが総トータル年数だけ。ただ帰国の 1 年後、高校の留学期間参加が制度化 (高校から大学への調査書に「留学」項目が新設) され、微妙な“狭間”が経験できなくなってしまった。「入・退・卒」の最後の“国際間不規則出身者”で大学卒業後、県庁国際課の公務員。

生活の自分史としてのアメリカ滞在については、1974—76 全額支給フルブライト大学院留学時 (“Fulbrighter”) は WSU (ワシントン州立大学) の家族寮に住んでいた。ワシントン州の地方都市で 2 年間を過ごしたが、もう周りは本当にいい人ばかり、目があえば“Hi”のニコニコ顔<<良かった>>)。教会は近くのルーテル教会 (Trinity Lutheran) に歩いて行っていたが、ここの約 1000 人を牧会する教会のクエロ (Quello) 牧師は子ども大好きでフレンドリー。偕子も宣雄も神様のエンジェル (God’s Angel) 言われ<<良いなあ>>)、可愛がってもらった<<良かった>>)。秀子は WSU で英語と体育 (テニス) <<良いなあ～>>) の授業の傍ら教会と大学教授夫人の Women’s Club で社交三昧。正規学生<<すごい>>) の豊司は日曜日以外、

土曜日と祝日は教科書と、授業関係のある 20 冊ほどの本の一部を合冊してたコースブック（著作権のため 60 ドル）X 登録授業数をひたすら読み続け、週日は週日で授業を“ひたすら愛さざるを得なかった”。週末がはじまる金曜日を学生用語や社会人用語では TGIF (“Thank God, it’s Friday!”) と称されるが我が身には全く関係ない話であった。

二度目の正規学生留学は四国学院大学の研究年（Sabbatical）で職業と学生のふたまた稼業を選んだ。博士課程の院生（UMCP: The University of Maryland, College Park 本校）になり、アメリカの州ではなくワシントン首都圏（ワシントン D.C. の郊外、メリーランド州）で一軒家を借りて住む。この期間中、成人した二人の子ども達は短期の訪問。期間中数名の友人が日本から訪問。秀子は、豊司の登下校のアッシー君やお世話になった日本の主治医の訪問等で車で Beltway をアチコチ案内。宣雄は地下鉄とアムトラック鉄道が大好きだったが、日本での豊司の大学の同僚の訪問時、秀子運転に同乗し、ロングドライブをし、メリーランド州北端ボルチモアにあるジョンズ・ホプキンス大での学会への案内。こんな手伝い役も気軽に・気さくにしていたのが宣雄（現牧師）。一方、現場の厳しい現実だけを書き連ねるならば、豊司はどこも行けず授業と図書館通いの死に物狂い、来る日も来る日も“青ざめた馬”のように博士課程の院生生活。言語の国アメリカでの文系にとっては徹頭徹尾、言葉が勝負どころ。アメリカで英語を専門にするバカ日本人と言われた事も。足どりの重い日々も多々あった。もう一つのアメリカ関連の国際交流は、豊司退職年の夏 8 月いっぱい香川出身の娘、来未（くるみ、当時 10 歳、現誉と同じ 10 歳）を連れてアメリカをまわった。学業は終わったばかりであったので、気持ちは晴れやか。友人宅でホームステイ後、南西部、西部の南部を車で 5 千キロ、途中竜巻（tornado）で必死に逃げたりもした<<あぶな!!>>。幸い逃げ果せた。感謝。来未は日本でスイミングスクールに通っていたので、ホテルのプールで得意のバタフライ。夏休みだったので家族旅行中の白人の子ども達が寄ってきた。言葉が分からなかったので“Like this”だけお教え、アメリカ人の子ども達にバタフライを“Like this, like this”と熱心に体で教えていた。皮膚の色より実力がものをいう世界と、家族ともども良いアメリカを感じた<<すご ww>>。

話が長くなってしまったが、こんな家族全員のアメリカでの体験知から、今回の旅行で佐藤昌介のアメリカ留学の一つひとつが現実味を感じられ、身につまされる現実が脳裏をかすめてくる。公的な奨学金がなかった時代、昌介はアメリカ留学を申し出たが却下された。辞表をたたきつけ（と言われている）、メリーランド州ボルチモアにある前述の Johns Hopkins University に単身で私費留学。結婚していた昌介は家族の養育費は同郷の元首相の原敬の計らいで雑誌社に寄稿する事で稼ぐ。

膨大な量のアメリカ情報を執筆し、その原稿料を妻「陽（やう）」に。贅沢はできない、かろうじてぎりぎりの生計が妻の生活。一方昌介は、入学に際し懸賞論文に応募したが不採用、前にも進めず、後にも引けずひたすら書いた熱烈な手紙(petition)がある教授（アダム博士）の目にとまり、昌介自身の意欲と潜在能力がかわれ、聴講が許される。このやり取りの手紙のオリジナルをこの大学のアーカイブで見せてもらった。ともかく昌介はこの時点では力不足。当時のありのままの到達度とはいえ、この事でこの明治のサムライは大発奮し、この意欲が達成に至る血がにじむような努力が実り、正規院生に、そして最後は日本初の農学博士号取得者（博士論文はアメリカの土地制度問題）になる事が出来た。“健康的な”ライバル意識として昌介よりも枚数を多くした論文作成と人知れず呟いた豊司。分量で勝ち。

いつの時代もアメリカの高等教育での訓練（discipline）における質の高さと厳密な質保証は変わっていない。具体的に言えば、博士課程でも“博士号プラス”<このプラスは自己の専門性に加えて他分野の根っ子に共通するところを哲学的に考察・解明する研究作業と受け取っているが、メリーランド大学院の修了・卒業式冊子は博士号の職業的 professional degree の doctor と研究的 academic degree の Ph.D. (Doctor of Philosophy) と区別。社会に定着している英語は「Dr.～は敬称、Ph.D.は専門哲学領域（philosophy）ではなく質保証（quality assurance）の称号、内と外の厳密評価のため自己開示・公開し名前の後に「～, Ph.D.」と自署する。またアメリカでは宿泊者名を記入する際、性別に関係なく牧師の尊称（Rev.～）と博士の敬称（Dr.～）から Mr.～、Mrs./Miss～や Mis～等の選択肢を設けているのは、アメリカで格式高く由緒あるホテル<<すごい!>>。

アメリカでは博士課程の顕密な授業自体が成立し、院生もそのように授業を自覚している。昌介自身も努力は報われると授業と研究に一心不乱に頑張った。大人の研究者だから好きなように研究していなさい、と突き放すこと事をしないのがアメリカのコースワーク。「A,B,C,D,F」からなる成績評価は怖いところ。オール A（straight A）の院生にはめったにお目にかかれない<<がんばれ!!>>。容赦のない厳しさの中で最終学位取得できるのは半数以下。困難はつきもの、そしてそれが現実。その分やりがい最高度。繰り返しになるが、昌介ははじめの段階でもたついたが、それ以降は初志貫徹でやり遂げた、途中でオメオメ帰るわけにもいかない。ピンチをチャンスの真ん中で大志を抱いたバイタリティーでやり遂げた。“He made it.” 学内では後の大統領になり、国際連盟をつくった Wilson も学友、いい刺激をもらっていた。

ここで「昌介さん」から見た「陽さん」関連、陽夫人の人柄に昌介本人による後日

談話として英語自筆記録を紹介する。行政との折衝に次ぐ折衝で帰りが遅くなるがいつも待っていてくれる人がいると昌介は感謝を込めて妻「陽」の人柄を書いている。昌介自身、英語も日常言語であったので、本人のそのまま英文で<<すごい!>> (簡潔な英語であるが最後の単語 (いない人、帰りの遅くす人を返ってくる居場所を中心にそこに“欠席している人”などは英語感覚がこもった英語中の英語表現。単語の選択 (The choice of the word) がいい。: Whether in cold winter or sultry summer, there is one person always awake--even in the late hours--awaiting the return of her absentee. (良い英語、下線筆者) 淡路島の稲田藩主の妹「陽」はサムライの子。辛抱強い謹厳実直の人柄がにじみ出ている。才媛で機転がきく社交家でもあった。昌介の留学中も大きな期待と希望を抱いて待っていた。

豊司はメリーランド大学内での研究に加えて、一時期ジョーンズ・ホプキンス大も研究サイトの一つにしていた。更に大学コンソーシアムによる合同授業としてジョージタウン (Georgetown) 大学の院生とホロコースト博物館でジョイント。他、D.C.アメリカでのワシントン首都圏 (D.C.とメリーランド州及びバージニア州) の複数のアーカイブにはよく行った。それらのアーカイブには複数の地下鉄 (メトロシステム) の駅 (National Archives) を共有していた。この行き帰りの地下鉄は本当に生き返りの至福の時だった。アーカイブに関して特筆に値するのはパブリック・アイビー・リーグの一つである州立メリーランド大学の 6 つある図書館の内、メインのマケルデン図書館の地下には全フロアーには終戦後の「墨塗教科書」等貯蔵のアーカイブがあった事。大切な一次史料原本がアメリカの危機管理の観点から分散させている。いずれにしても高等教育機関に歴史文書を保存するのは研究者にとって都合がいい (そこから発展する広がりにも大学自体の図書館もあるので都合)。更には大学の専門領域と関連領域が身近に担保され調査・研究条件が整う)。理由はともあれ大学構内にアーカイブ、文書館があるのは最高。北海道大学においては幕末から明治にかけて特記に値する教育史一次史料のアーカイブがあるのは本当に理想的な環境である。木々も多く自然に囲まれ、人曰く「日本のアテネ」と。アテネは philosopher、哲学者の町。

北大組織化の歴史プロパーに「閑話休題」。文部省の札幌農学校廃校といった行政決定をひっくり返すのは並大抵ではない。困難極める方向の中、元首相原敬の札幌農学校の官立大学への組織化援助は元南部藩の同郷人として心強かったと思う。ビジョンを語り (hope against hope)、それに向かって心底努力する熱意は人の心を打つと書かざるを得ない。時の文部大臣森有礼も説得。ついに農学校が大学に昇格。行政に対して、折衝に明け暮れ、組織化に成功したのはクラーク博士による札幌農学校の一期生の一生徒昌介。そして北大の学長に (学校の制度上、学長・総長)

になった、その歴史を丁寧に保存しているのはオンキャンパスにある現在の北海道大学文書館。昌介の大学葬までがこのアーカイブに。訪問時に総合的な経緯を網羅する「展示オールでの『佐藤昌介北大の牽引者』の展示」の小冊子を誉にもいただいた<<うんうん!>>。

昌介の血をひく家系に必ずある古い本（1948）がある。昌介の息子「昌彦」が書いた『佐藤昌介とその時代』（玄文社）<<ぼろぼろだった。使いまわしてww>>。元北大副学長の逸見勝亮博士が2011年にこの旧本に、第4部を起こし「札幌農学校の再編・昇格と佐藤昌介」とサブタイトルを付け50頁の増補・復刊した。理由は新渡戸稲造や内村鑑三は全国版の人物になっているが、それに比して北大そのものをつくった肝心なめの佐藤昌介の実際の貢献の記述が少ない。そこを掘り起こしバランスを整えた、と聞いた。逸見名誉教授よりこの増補版の寄贈を受けた<<良かった>>。国からは札幌農学校廃校決定を覆すべく困難極まる北大昇格一筋に社会的に微妙な企業との折衝の話も、元副学長、また学者としての逸見教授のリアルな研究増補版として昌介一族にとって全体像が歴史となり感謝、ありがとうございました<<うんうん!>>。

更なるキャンパス見学で北大総合博物館にも行き、その途中で見つけた佐藤昌介の胸像について誉の感想をそのまま書き移してみる：「今日は北海道大学に行き、佐藤昌介像を見ました。台に<初代総長佐藤昌介先生>（表紙）と書いてありました。多くの人が立ち寄っては記念写真を撮ってすごい人気だなと感じました。こんな立派な人が先祖なので誇らしいです」「もう明日で北海道勉強旅行は終わりますが最後まで全力で楽しみたいです」と名残惜しそうだった。

ここからの旅行記の構成を文責者として自序（イントロ）として事前説明（accountability）を。他との関連で若干すでに触れたが今回の訪問地で佐藤昌介ルーツ探求に関する他の二人の評伝（佐藤昌介に関わる新渡戸稲造と内村鑑三）に言及・敷衍によるコメントを加える。今回の訪問地順序により遠友夜学跡地（現新渡戸稲造記念公園）では新渡戸稲造。札幌独立教会は内村鑑三。これら三人の間柄（人間関係・人間模様）の結論を先に述べ、個別の関係の詳細は順次後述<話題の焦点のため順序は前後する部分あり>する。

三人の間柄の特徴を総括的に述べれば、それぞれ特性のある力量（どちらかと言えば先天的（アプリアリ）な才能 competence と学習結果による後天的（アポストリアリ）な能力 proficiency を相互に最大限認め合い、そのことで生み出された相互信頼から、それぞれの領域での力点を尊敬しあい、大志を達成・実現する。意見の

違いがある時は、徹底的に仲良く議論し、彼らの優秀のところは切磋琢磨の相乗効果を知っている点で優秀。これこそ本来の能力。強いられず、自由な気持ちを三人が共有する価値観を簡単な「～ship」で表現すれば「leadership・fellowship」。この結びつきを一言で言えば、それぞれの指導力とお互いに協力し合うという力量を大きな「友情」「仲間意識 (comradeship)」という輪で括れた事。初めから自然に“自明の理”としてあった訳ではない。有為であるが故に不仲 (split-up/falling-out) になるどころか、三人の中に強い結束力 (solidarity) が醸成されたのは決然としたクラーク博士の自由教育と人格教育があったのだ。

この大本を言い換えれば、強い動機の下での底力 (ability)、一端 (いっばし) の主張 (articulation) の基礎的な力量に実を付け、そして結実 (attainment) したのは、三人の精神性の一番深いところがクラークの聖書思想に導かれた人格教育があった事。低い次元が超越できたのは、自分達のそれぞれの持ち味にそれらを超える絶大次元の絶対者に対する信頼と信仰が共有基盤になった事。この事を直接聖書の言葉を三か所引用する：「人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができますように。そのようにして、神の満ち溢れた豊かさにまで、あなた方が満たされるように。どうか私たちのうちに働く御力によって、私たちが願うところ、想うところのすべてをはるかに超えて行うことのできる方に」(エペソ 3：19-20) 全能の神の前に謙虚に、そして自分達の能力は神から与えられた「賜物：given」<<yes>>であり、与えられたそれを使って物事や事柄をなすのが一人前の大人「私たちは皆、神の御子に対する信仰と知識の一つとなり、一人の成熟した大人となって、キリストの満ち満ちた身丈にまで達するのです」(エペソ 4：13)。この順序がすべからず、凡てが最大限生かせることを知ったのは札幌農学校。「神を愛するもの、すなはち御旨によりて召された者の為には、凡てのこと相働き益になるを我らは知る」(文語訳ローマ人への書：8：28)。

人生の葛藤とカタルシスの順序を逆にして、この価値観の前に存在する試練 (困難や葛藤) に言及する。具体的には、当時の時代背景を現代社会との関連で普遍的に時代を通して存在する課題・問題点に焦点を当て、辛口の分析・論考も詳しく付け加える。北大アーカイブの一次史料、事前事後の関連書籍、家系に長く伝わる“伝承”をもとに、札幌農学校・北海道大学を起点・定点として詳述。Critical Thinking & Doing の手法に準拠し、社会風潮と人間行動の関係を明らかにしたい。人間の主体性と闇の世界に言及する辛口トーンで。ここでの“直球”コメントは話題提供として受け取って欲しい。

ここでまた繰り返しになるが、誉君への書き方、やり方の方法について事前に一言

二言 (caveat) から。ここからは大人の言葉と社会の現実が本音で登場し難解になるので、まずざっと読んで、わからない言葉は調べて、なお分からない、解らない、判らない時はお父さんやお母さんに聞いてね。英語についても。社会の厳しい部分やまずい部分で大人の社会に不信感を抱かないようにね<<は〜い>>。克服しがいがあるところでもあるから！また特に日本社会の中では大人にとっても社会風潮、社会意識、社会心理として存在しているが<<OK>>、どちらかという気が付いていても「タブー」として存在している状態にも触れる。一般の一人ひとりの生き方や特定の立場にある人達にもあまり愉快でない内容 (uncomfortable) なので避けられがちであるのを承知の上、近未来の日本の国際社会での活躍を期待して述べてみる。領域は言語と心理と、そして真理にも肉薄する事柄。理由は、これら札幌農学校出身者たちがモデルともいべき理想的な人間関係を築き上げながら活躍したから。簡単に言うと、クラークの言う「大志」の大きな方向で、時として彼らは仲良くケンカしながらそれぞれの素因として持っていた強い意志が「負」の感情をコントロールする大義を希求する仲間意識が全開し、それぞれの歴史の使命を自覚し、その大義に忠実であった事、Mr. Homare Kase。クラークの出身のニューイングランド民衆は一人が聖書の一節を朗読し (Scripture Reading) その意味を徹底的に議論に議論を重ね真の意味に辿り着く事を日常としていたのが日々の歩み。最高智への謙虚さに到達したところで仲間意識が生まれ結束するのがピューリタンの信仰。しかし自分たちの営みの上に厳粛に存在する神は厳粛。だから人はその主権者のもとで小異は捨てて団結できる「汝神の深事を窮むるを得んや 全能者を全く窮むることを得んや。その高きことは天の如し汝なにを爲し得んや。其深きことは陰府のごとし汝なにを知りえんや」(ヨブ記 11:7-8)。

前置きが長くなったが、人生が集約される昌介の最後 (臨終) の言葉から始める。インパクトが大きく人生の一番正直 (当時の言い方で「せいちよく」) になれる生涯の終着駅物語から。真野万穂牧師が臨終に立ち会い、昌介は死の床で聖書の言葉引用しはっきりと言った。「世にては艱難 (悩み) あり、されど雄々しかれ、我すでに世に勝てり」(文語訳 ヨハネ傳 16:33b)。そして「この御言葉をもって天に帰ります」と。最後にした付言は「後、羊を牧ってください」と昌介。「しっかりやりますよ」とニコニコして真野牧師。これは牧師に対していらん“おせっかい”などではなく、一貫して高等教育組織化してきた昌介にとっては、教会は明日に継続する指導者輩出の基礎であったのだ。事実、札幌美以 (Methodist) 教会の設立・献堂に積極的に関わり、この教会に籍を置く (現、日本基督) 教団札幌キリスト教会。最後までここが祈りの居場所、南部訛りの言葉による有言実行力 (human agency) で熱心にやり続けたのが人間佐藤昌介であった。

ここに関連して人に関わる職業意識と使命感について自己言及話からそれを超える崇高な次元への敷衍話を挿入する。自分の身体や精神を經由した体験や経験が、共通項として共有できる普遍的な価値観が響き合い、それが相手の人にも繋がっていったらと願っている。この意味で自他共に共有できる場所は共有し、そこに留まらず、それをはるかに超えるところ、凌駕するもう一つの次元にも筆を進めたいと思っている。こんな期待を大きくしてきた佐藤昌介の更なる上位次元を希求する思いの幾何（いくばく）かでも感じる事が出来ればと期待している。

筆者はフルブライトのフルスカラー（All-expense Graduate Program）で学位取得大学院留学後しばらくして、大学での教授職（短大・大学・大学院）を25年程してきたが、大学本来の本業は、研究を含め集う学生への授業と指導。幸い一度も休講する事なく健康が守られ、また何よりも危機が守られた事実。海外でのホテル火災、9.11 テロ遭遇、狙撃隊（スワット）と同ホテルロビーに座って事を構えた事等々を経験した。しかし最後のところで安全が確保され、テロや銃撃戦で人質に取られたり、死傷者は無し。守られ本当に感謝。学生の将来を見据え、継続して時間をかけ教える立場である引率教師は進んで人質にと<<うんうん>>、「その時、その場」では勇気も与えられたのも事実。公務員の娘借子からは「お父さんは死んでもいいけど、連れて行った学生の生命は守れ」と“有難い励まし”の国際電話。

教員は教える人の教育と研究の学校生活を保障し守り、指導がその「任務であり本務」。昌介が教会生活万般の霊的指導をいまわの時まで気にかけていたのは、それ以上に羊（教会員）の牧者（牧師）として教会の牧師の本業は牧会。この意味で教会員（前掲イザヤ書にあるように羊のイメージ）には羊飼いとして高い次元で霊的指導する聖職者が必要。教育次元に関わる教員は教職者。聖なる次元に関わるは聖職者。重要な事は「エクレシア」としての教会の集会（礼拝&祈祷会厳守）を都合で止めてはいけない<帰国後の信徒のクラークからの手紙にいつも書いてあるのはこの原点回帰>礼拝すること、集会する事で迫害を受け、殉教の歴史的、社会的事実もある。国の内外において。先達の命がけの信仰は教会の大切な遺産。この脈絡で全キリスト教世界での昌介の牧師職に対する期待は人生の最後の最後まで極めて大きかった。昌介は信仰から来るビジョン達成が社会貢献の至上命令でありその心の喜びを身をもって体験し、こういった歩みに生きる人材を傑出するのは教会と牧者のSDGsと、昌介は最大限の確信をしていたから。

昌介の故人愛唱讃美歌は66番「三一の神」歌いだしは「聖なる、聖なる、聖なるかな、三つにいまして一つなる～そして最後は「～み手の伎なるものみなは、三つにいまして一つなる」。「三位一体」（父なる神・子なる神・聖霊なる神）はぶれな

い正統 (legitimacy) な信仰。この基盤に立って具体的な「召し」を感じ、その信仰からの「希望の重荷」による展開はクラークからの聖書の基づく人格的教育とピューリタンの社会に対する奉仕精神に基礎があると考えている。ここから結晶したのが、札幌農学校の大学への組織化であった。

昌介は文字通り、アメリカ南北戦争後のニューイングランドの自力・自走を基礎に社会発展を目指したクラーク拡張路線を引き継ぎ「札幌農学校」を拡大し、帝国大学への昇格(当時の文部省は廃校方針)に苦勞した。この組織化に没頭すればする程行政の世界との衝突や軋轢、またキリスト教会内部からは「この世と迎合して官立大学づくり」との批判もあった。昌介の弁明と告白は「主のみこころであれば妥協もする」。内憂外患でとてつもないエネルギーを消耗する人生が続いた。自分の中にも葛藤も生じる。その分薄くなった社会への発言・発信としては、二期生新渡戸稲造を育てる事になるのがその後の人生。どんな人にも、どんなレベルにおいても可能性と限界がある (limits and possibilities)。他人に任せる事は思惑無く任せ、自分は自分の道を、地道に時間をかけ、必ずやり遂げる東北人、かつての南部藩サムライの昌介であった。

思い返せば、幕末まで続いた藩の時代が終わり失意とこれからは英語の時代と東京を目指し南下し東京英学校に期待し入学。勉学の途中でクラーク博士達の新天地の新しい開拓ビジョンの熱意と情熱に圧倒される。東京英学校にしてみれば自分たちの生徒を横取りされる事になるので決して転校を進めたわけではない。「希望者には応募用紙を渡すが無理に転校する必要はない」と。全身全霊で学ぼうとしていた気持ちは、単なるリクルート以上、何か違う素晴らしいものがあると感じはじめ、このアメリカからの新進気鋭スピリットのクラークの熱烈な演説に感動し、惹かれていく。このクラーク博士から学ぶため、出身の南部を後にし、逆戻りして北海道の札幌農学校に行く事になった。アメリカのフロンティアも北海道も広大な土地があり共通の夢がある。クラークより直接薫陶を受けた一期生昌介がこんな形ではじまったのだった。

後述する先輩後輩の関係への展開話の順序は、昌介と新渡戸との関係、「大志実現」を阻む人間心理と社会状況を人間の現実として挟み入れ、独立した形 (inset) で詳しく分析し昌介と内村の関係を展開する。そして最後の最後は旅の立役者の誉君への隔世代のアドバイス。それを受ける誉は advisee <覚えているかなーこの高卒レベル以上の英語。前掲したが留守がちだった昌介の妻「absentee」と同じ形。発音のアクセントは両方とも一番最後にある>。

人間関係の最初は佐藤昌介と新渡戸稲造。終始昌介の人生は北大組織化の折衝に忙殺され、世界に発信の機会欠落が組織人佐藤昌介。新渡戸稲造の能力<特に英語は昌介、内村よりできた、一番トップ>もさる事ながら、昌介はこの二期生稲造の資質に一方ならぬ期待し、後輩に夢を託し、長い期間面倒を見ることになる。先輩後輩の入学時の差はあるが、札幌農学校卒業後、苦勞して留学にこぎつけた昌介は農学博士号を取得したワシントン首都圏郊外のメリーランド州ジョンズ・ホプキンス大学に新渡戸を呼び寄せた。しかし昌介はこの後輩を弟子とし「先輩についてこい」の弟子造りではなかった。新渡戸にアメリカだけではいけない、自分にはない成長をと、一年後にはドイツのハレー大学に行かせ、ここで新渡戸は努力を重ね博士号取得。その後、新渡戸はかつてジョンズ・ホプキンス大学で学友であったウィルソン大統領提唱の国際連盟次長として国際貢献（スポークスマン）をし、結果として昌介の夢がかなう形になった。ただ 1924 年にアメリカは日系人、日本人に対して「排日条項」（アメリカに帰化する「能力」がない）と排斥。1900 年には『Bushido』を上梓し時のルーズベルト大統領も感動し何冊も買い、こんな高潔な国ならと日露戦争終結時にも大援助の逸話もある。この武士道精神を世界に発信後 1/4 世紀しかたっていない時に日本排除。新渡戸はこれに対してもうこんな理不尽な国で仕事はしないと、北米ではカナダに。そこでの新渡戸演説：「感情ではなく理性が、利己ではなく正義が」と人類と国家の裁定の基準となる日を望むのはあまりにも多くを期待するものであろうか。国際連盟の講演事業に邁進するも頑張り過ぎたのか、ついにカナダで客死<カナダのバンクーバーにあるブリッティッシュ・コロンビア大学（UBC）の日本庭園に「I wish to be a bridge across the Pacific Ocean（我太平洋のかけ橋とならん）」のモニュメントあり>。かつて東京女子大学の学長も務め、5,000 円札（1981-2004）の日本紙幣にもなった日米加で活躍した世界的逸材になった。

先輩昌介との関係は後輩を取り込むことではなく、できる事とできない事とを識別し、できない事は屈託なく他に任せ、広い心、高い次元でそれぞれが自己実現・自己達成をし、そのことでより堅固になった友情を楽しむ。ここから窺われることは度量の大きさ（caliber）成熟した人格（integration）者が佐藤昌介。話は自分に変わり、かつてフィールドワーク中にみまわれた猛吹雪（blizzard）<<すごい>>で冬は暖かい海拔下マイナス 400 メートルの「死の谷」（Death Valley）に逃げた事があった。トイレの落書きにアメリカの神学者にニーバーの言葉を見つけた：God, grant me the Serenity to accept the things I cannot change, Courage to change the things I can, and the Wisdom to know the difference. これらは、神よ、できない事を受け入れる平生心を、そしてできる事をする勇気を、そしてその関連の識別がる智恵をください。そのような人生を地で言ったのは佐藤昌介、そして洞察力旺盛で

鋭い人物。事実、農学校時代から昌介は皆から“お父っあん”<<ww>>と呼ばれていた。一方、深い教養<<すごい>>と人格、そして国際貢献に至る新渡戸は、使徒パウロの緻密な広範囲伝道旅行に因み「パウロ」がニックネーム。

もともと佐藤と新渡戸はかつて同郷の南部藩の武士の出、武家社会は潰され失意の二人はその事によって全く新しい志を抱いて東京の学校で学んだ仲。新渡戸のルームメイト、授業料が払えないのを知り、かなりの額を貸し与えた。そして自分は未納者として張り出されたが、名前を新渡戸は消してしまう。そのことで退寮処分。こんな息子を父親は心配し、佐藤昌介に今後の指導を懇願した一コマもあった。こんな経験からか、経済困窮している人達、勉強機会がなかった女性や当時昼間働き時間のない勤労青年達に無料の学校を開設している。この夜学を“友あり、遠方より来たる、また楽しからずや”「遠友夜学校」と名付けを開設し 50 年間で数千人が学んだ実績がある。社会的に恵まれない (less fortunate) いろいろな立場の人達が向学心に燃え“遠くから来る。みんな友達。「Tangentially」(ついでに補足の意、誉君、これ知っておくと便利な一言英語)ジジも 10 年間夜間高校で教えていたが、昼間は中卒故酷使されるが、夜間高校は勉強できる天国と向学心に富んだ生徒は当時非常に多かったし、また暗いうちから犬に噛まれても 4 年間新聞配達、お金をため大学進学した人など<<すごいね>>、逆境の中で強固な志を抱いて励んだ若者と過年度卒の中高年と接し、身に染みて知った経験が今もって教育の原点になっている。新渡戸の妻アメリカ人女性 Mary は共同して指導に当たり、村の人達にも開放。様々な話し合いができたが、メアリーの一番嫌な質問は「あなたはいつアメリカに帰るの」。メアリーは日本名は新渡戸万里子と称し二人の胸像の像が住宅地の中央の「新渡戸稲造公園」にあり、さらには向上心・向学心を鼓舞するパネルもあった。かつて習ったリンカーンの精神が遠友夜学の建学の精神になっている：The Malice toward None, with Charity for All! 「誰に対しても悪意は持たず、慈愛はすべての人を」。旅の最終日の訪問を飾るかのようこの普遍的価値観が時代を超えた日米史あった事に大きな感銘を受けた。

次はまったくネガティブな事。ここに個人の能力と社会心理について、心の奥に潜む人間心理と辛口の社会批評 (critique) を挿入し論じる。良くないと感じつつ、変わらないとあきらめたりして、或いはあまり考えたくない日本社会で一番もったいないと思う事は「足を引っ張り合う事」<<たしかに>>と“潰し合うこと”。それぞれの貢献を弱めてしまう事はよく分かっている。今も昔も根強く心の根底に潜む「負」の能力評価とその競争と拮抗心理から、陰に陽にアチコチに発生するマイナス・エネルギー。ここで敢えてこの相対評価を今日的課題として話題化し、内村の英語能力卓越評価を含め、これら優秀な「北の三傑：佐藤、新渡戸と内村鑑三」

達の人間関係がどのように位置づけられ、どのような社会化 (social position and socialization) があつたか考えていきたい。敢えて言えば、古今東西、老若男女に共通して人間にとって触れたくない、触れられたくない、しかし一番消し難い人間関係の深層心理を細かく解き分けてみたい。

まわりくどいが“助走”の段階から出発する。まずよくある集団、組織、社会の中の人間関係の「負」の部分を追ってみる (critical thinking で)。人の努力 (initiative) を阻害する要因はたくさんあるが、ここでは自分も身近に感じ他人からは触れられたくない潜在心理について考えてみる<<うんうん!>>。理由は心では強烈に感じているにもかかわらず、自分はそんな人間ではないと「隠しの気持ち」も働くところ。屈折する能力の優劣心理と言えよう。佐藤・新渡戸・内村の三人は向学心・向上心の強く、やり抜く動機が極めて高い人達、そして能力もある分、内面に存在する社会心理を感知する<<ぼくもなりたい!>>。一言で言えばジェラシー (jealousy: ねたみ、そねみ、やっかみ、やきもち)と多様な嫌味表現を持つ嫉妬心情。とてつもなく古くは旧約聖書記事: サウロ王と息子のダビデに関係。王の実力は戦功ではあるが女性達からは聞こえてくる囃子歌「サウロは千、ダビデは万」を討った。自分の子でもあるのに嫉妬で腹が立ち眠れない。あの手この手を使って息子の殺害を企てる<<げっ>>。同じ息子のヨナタンの友情通報もあり計画は失敗続き。後世、シェイクスピアは他人から、また自分から発するこの「負」の感情を「Green-eyed Jealousy」と“緑の目”をする嫉妬心と名付けている。太古からこの心理は激しく続いている現実。昔も、今も、たぶん将来も。

目の色合いの議論はさておき、ここで、誉君、「ジェラシー」の話は子どもの生活にもあるかも。年齢や性別を問わず。誰かが自分よりいい物を持っていたり、他人の方が自分より優れたところがジェラシーで返ってくる事があるよね。自分に備わった能力を消滅させたり、自慢したりする事は能がない言動。特に能がないのに何か他の力を借りて威張り散らす心理は、相手にとって最悪<<良くない>>。熊の「い」は胃薬になるが、虎の「い」で威張る言動では友情が湧いてこない。そして人との間柄が変になってしまう<<なるほど>>。この雰囲気人が人の交わりを蝕んでいく。こんな事で旅での「負」の連想から身近のところにも遍在するこの深層心理を取り上げてみた。誉くん、また大人の記事に戻るけど、この人間心理と社会描写については警告 (caveat) 付。映画などにある PG (Parental Guidance: 保護者の要指導) がある。人間不信や社不信に落ちるといけないから。日本の正面が世界に誇れるところは「理想希求型社会」<ここは建前だけに終わって欲しくないが>。日本は何かあるとすぐさま他国をあからさまに責め立てる「他責国家」ではない。むしろ相手よりも問題そのものの解決に向かったり、第三者的な人道主義、か

つまた平和を標榜する国でもある<<良いね>>。近年は国際間の会議等で議長国の役割を果たす機会が増えている。現代日本の国際社会の位置づけは歓迎すべき事である。

さて今度は人間の感情の社会的側面を掘り下げた上で話題の三人の意識の分析を試みる。まず卓越性 (excellence) を生み出す能力 (ability) について。一言ではっきり言えば、能力は学校制度の普及がもたらした「学力」信仰。日本社会は、ここに、ここだけに関心が集中し社会的な価値観になってしまった。相対的評価が独り歩きしているのではこの学校能力についての話題は、心に強く植え付けられ表立って自分からは出す事はせず、「社会的タブー」として隠される事も多い<<ダメ>>。心の中では自分の能力アップを願っているにもかかわらず、他を見て、他人のその能力を見て、自分より優れていると穏やかでなくなる<<たしかに>>。またよくある風潮として「できる人は良い人」といった社会評価も顔を出すので、すっきりできず、気持ちに落ち着きがなくなる。言い切れば「能力評価」と「人格評価」の区別ができない事。「属人性」に熱が入り、「年齢」に異常にこだわるジャパン。窮屈さから生まれる“パロディー”対応だけが役にたつ“fun”の世界?!こんなところから極めて微妙な日本人メンタリティーなるものが出来上がっているようだ。年齢と能力がヒエラルキーと微妙に絡み合い、「敵味方関係」にも発展し、社会においては後輩をいびったり、敬遠したり、同輩同士、更には競合する同じ組織領域に至ってはゆがんだ感情の激しさが増す。目に見えないところだけでなく、あからさまに無視し、排除、排斥してしまう事さえある。相対評価が横行する日本的信条と行動様式は困ったもの。純粹に人の能力はそれ自体の能力として認め、「人となり」や性格からくる人格評価は別物と発想できる“識別能力”の持ち主が育て欲しいもの。普遍的価値に根差す国際評価や国際基準に早く追いつけるようお願いしたいもの。正直さと勇気のいるところがここと考えている。

農学校で指導したクラークの価値志向 (value orientation) は違っていた。その薫陶を徹底的に受けた札幌農学生たちはパワーが開花し、変な意識を引きずらず、また率直に個人として (individuality) のびのびと活動していた。確立された本来の「個」に裏打ちされ、他人を意識したドロドロの競争意識を超越し、率直に協力する姿、いや協力できる姿は、そうでない現実を見た時、“もはや”美しいと言わざるを得ない。特定能力には特定の貢献ができるはず。この世の現実を達観でき、変な“否定ごっこ”がない分、両方の良さがそのまま加算され、効力も倍増される。こんな「足し算 and/or 掛け算」が北海道でクラークの指導により、その事によって日本の歴史と教育に結実したといえよう。感情に絡み合っている日本の社会構造を立体的に分析し、是非を冷静に評価し、理性を通してハイクリアーの道筋を暗示す

る手法は<<すごっ!>>、重要なのもう一度その構造を繰り返す。一言、クリフォード・ギアツの「厚い記述」(thick description)は絡み合う各層をくりぬきながらする叙述手法。その方法は「解析・解明・解釈」力を駆使し、それぞれの曲面や層の沿っての記述により、それらが重なり合って分厚く、深みのある全体像が表出できる表現技術。

他人意識した相対評価を超えて、それぞれが独自に向上し、大きな次元でクオリティーをつくる超越次元の発想と実践は、明日の国際社会で日本が評価される大切な可能性と確信している。双方がいい雰囲気(in good faith)競い合い、切磋琢磨すればそれで量的・質的な社会貢献が実現するはず。優劣感情の相対評価を達観できる度量としっかりとした内容が人生の中核に望まれる。能力と人格の評価を弁別的に(distinguished feature)識別して切り離し、それ自体の価値志向(the value orientation, per se)と物事それ自体に注意を向ける<<なるへそ(なるほど)>>。その「集注」能力といった本来の能力観(aptitude)への再志向がある。真の解決のためには、ここが必要と強く思う。とかく能力評価の本音は、心ではよくないと感じつつも、利益・不利益が絡むと目の前の世界に取り込まれやすい。このため、現実の深層心理と超越する行動変容の問題は詰めた「哲学論議」が必要になってくる。

複雑さの中和のためこんな英語の寸言がある。相手に対する最高の配慮をしつつ、単刀直入に、馬鹿馬鹿しいプライドは捨てるべしとズバリ行動変容を迫るやり方もある。本音を“優雅に”(gracefully)、単刀直入の名セリフは“I believe you love me, forget your foolish pride.”(1960年代に書いたFritz Ridenourの『Tell It Like It Is: How NOT to be a ‘Witless Witness’』から派生した歌詞の一部より)。勇気があれば事柄(ことがら)はいたって簡単であるが……。後の時代に向かって徐々にではあるが、北の3人は新しい展開の萌芽を感じていたのかもしれない。近々の具体例としては、具体的に日本の高等教育(大学)の前段階である中等教育(中・高)の早い段階(precollegiate level)において新しい方向付けがはじまった事である。

それは文科省の中学校教育の3本柱として、2、3年前から「思考力・判断力・表現力」と変わったのは明治以来の大改革(ちなみに高校教育版は「学際融合と地域探求」)。根強い日本社会の伝統は全般的に記憶力のいい人が頭のいい人、そしてそれ故勝ち組になったりする。今でも、“頭のいい人”に対する評価とその人の人格評価はなかなか切り離せないと力説してきた。それぞれの分野や領域でその人の特性が純粋に発揮できる力が真の能力と舵を取り直す「パラダイムの転換」<<なるほど>>(paradigm shift)の実践も学校現場で始まっている。日本社会においても世の中は変わりつつある昨今である。

ともかく (anyway) ここは旅行記なので複雑な認識論・行動論へのこれ以上の深入りは避け、ここでは現実な歴史の中で活躍した人物の力量に注目・注視してみる。教育領域に本当に要請されるのは、発想や意識の転換と変革の行動様式。旅日記風に纏めれば明治の強者達の「知・情・意」は彼らの「叡知」、「友情」、「意志」。それで大志を抱き歴史をつくり上げた。そしてこの力量形成の根っ子はクラークの薫陶。師弟で共有した強い信念と深い信仰は「求めよ、さらば興へられん。尋ねよ、さらば見出さん、門を叩け、さらば開かれん」(文語訳 マタイ傳 7:7) から派生した powerful thinking and doing と強く思っている。

込み入った話題から北大キャンパスの話に戻す。文書館を後に、岩手県出身者用の学生寮 (be social) 「巖鷲寮」跡地の北大生協で昼食、そしてその後博物館見学。ここでも旨いソフトクリームを。クラーク博士と佐藤昌介の胸像前で写真撮影<<したした>>。Boys, be ambitious. と惜別の言葉<<いいなあ〜>>、Lofty Ambition と高い志、校則は Be gentleman 一語の自由な北大の学風。強いられるのではなく自由に、自主・自発の精神で猛勉強の元南部藩のサムライ青年たち。

教会関係のもう一つの訪問地は札幌独立キリスト教会<佐藤昌介も教会建設委員会 (1881) のメンバー>。ここに昌介が一目も二目も置く優秀なく当時は科目ごとに点数だけではなく席次もつけ、ほとんどトップの成績、そのままの記録がアーカイブ保存>内村鑑三達の主宰する「札幌バンド」<日本のプロテスタントの三大源流 (他に横浜バンドや熊本バンド) の一つ>がある。昌介も自分の名前を連れ一緒に協力して活躍する先輩・後輩の真の友情。友情の一番深いところは「人その友のために己の生命を棄つる、之より大なる愛はなし」(ヨハネ傳 15:13)。議論はよくするが昌介先輩が自分より優秀な後輩内村に対し「やっかみ感情」のない清々しさについては前述した通り。優劣感情ではなく共有できる理性がそれぞれの“理々しさ”と“凛々しさ”。一人ひとりが堅固な芯を持ち、目指す共同体形成過程を纏めればコミュニケーションの流れが「自分の core から communication そして友情の community」。以下、この事を典型的な具体例を使い、言語社会学の観点から外挿 (extrapolation) したい言葉のやり取りがある。

前述の真ん中にあるコミュニケーション図式に必要な日常の双方のやり取りについて本音を言えば、ただ私はあの人知っている、この人も知っている。その人達とお付き合いがあると終始する人間行動がある。「認識論」風にズバリ言い切れば、相手はここに jealousy を感じているのではない、と感じて欲しいもの。日本的な気持・気分で言えばそこに「いやらしさ」が発生。穿って言えば“あんたすごいね”

は社交的な皮肉モードであって自分は「そのようになりたくない」が本心。直言すれば、自分の中身・内容や自分の言葉がないのに（ないので）上辺の尊大さが見破られてしまう事がよくある。

純粹の信仰者内村が“忌避”するのは「みてくれ (lookism)」や、拜金主義や偽善行状。自己保全に走る組織や表面的な社交とはお付き合いしない。孤立ではなく孤高。妻や子どもにも先立たれ、誤解から職も失ったこともあった<<かわいそう>>。しかし「然り」は「然り」、「否」は「否」と理性的に評価する「地の塩」を貫いた。逆境・苦境の中でも最後は、試練は天からの配剤（天の然り）で“天然”として自分を失わず毅然としていた高潔な人間が内村鑑三。

誉君、内村は愚痴を言ったり、つらい事を並べたてて、周りからの同情を乞うキャラではない。日本でよく聞く中学生の会話のやり取り「“で？”」同じことの英語表現「“So”」相手の心理は“So what?”（それで？それがどうした？）。さらにアメリカ人のジュニア世代版 “Do you know what you are talking about?” は鋭く厳しい。自分自身の言葉を使って自分なりの意見や結論がなく、周りの状況の説明によって、相手に推測させようとする「依頼心」は主体性（identity）放棄で怠慢。自分の中にある気持ちを構成する本音や本心の発信に、相手に伝わる「いい言葉：qualifier」の言語力（literacy / fluency）は聞いていても気持ちがいい。

佐藤昌介と内村鑑三の関係の背後にある一人ひとりの特性に触れる。素養があったにせよ、クラーク博士によりこれら二人の能力（proficiency）が磨かれ強固な動機に相まって明確な目的意識が涵養されたと言えよう。それぞれの方向を一言で言えば理に適う理念として組織化の佐藤昌介、個人化の内村鑑三。二人は異なる強調点に特徴づけられるが、生きた世界は二人とも突き詰める世界。相手の意見をきちんと組み立て発信し相手と共有できるコミュニケーション、更にはディスカッションで有意性・有用性のある言語行動スタイルは、国際社会に必須の武器。換言すれば自己のアイデンティティーを失わず社交的（sociableness）、この意味でもう一つのクラーク精神は“Be social.”。言い換えれば討論は双方向のやり取りがある（reciprocity）のでここは社交と定義付ける。

主体の厳格性について一つの出来事を述べる。佐藤昌介が文部省の札幌農学校廃止に対し、折衝に次ぐ折衝で汗だく、努力の甲斐があって最終的には農学校が帝国大学になった。この組織化達成の祝賀会に“芸子さん”を呼んだ。付和雷同せず、内村は「何のため」と怒って帰ってしまった。内村は日常世界万般においても峻厳さを重視する。それを聖書の普遍的価値に基礎づけ、信仰を内面化させ、堅固にし、

ブレないのは内村鑑三の「聖絶」(聖さの故、そうでないものを絶つ)思想。宗教改革 500 年に因んで発行された「新改訳聖書 2017」にこの「聖絶」という表現が頻出)。と同時に自己と社会との「関係性」については名言として定着している内村自身の言葉(普通にここでも英語)で説明がつく「I for Japan, Japan for the World, the World for Christ, and All for God」。個別倫理の厳格性と広い心の社会性の両面について、ICU 名誉教授の武田清子著『峻烈なる洞察と寛容：内村鑑三をめぐる』の中でこの両面を著者は力説している。

内村論議に戻るが、厳格で厳肅、純粋で敬虔な信仰の故<<すごい!>>、社会との関係や社交が薄くなる一般論はある。そこに徹して生きると周りからけむたがられたり、攻められるのが世の常「凡そキリスト・イエスに在りて敬虔をもて一生を過ごさんと欲する者は迫害を受くべし」(文語訳Ⅱテモテ 3:12) 特に、社会が反知性・反言語の雰囲気であると、筋が通り、雄弁であっても言葉数が多いとただその事だけでうとうとしがられたりもする。その果てには、純粋性の正論には“勝てないの”でよくある攻撃、いや「口撃」は「～者」という人身攻撃(ad hominem)に走る。英語でよく言う「name-calling」は名前を呼ぶ出欠点呼ではなく、相手個人の人格を貶める言葉。社会評価が低い「～者」と“定義づけ”、自分を安全地帯に置き、相手を低く位置づけコントロールする考えの事。日英語比較すれば、誉君、こんな風にネーム・コーリングは英語への直感と意味内容が全然違う英語の合成語(Be alert!)の一つ。

それぞれの特性から生まれる関係性が本来目指す仕組みについて、更に一言。関係のあり方は、具体的な構造の仕組みで考えれば位置づけがしやすい。具体的には物事をやり遂げる時に表面化する。自分の特性を一手段として使い、より質的に高い価値を目指す。「use~ to achieve~」<~を使って(材料として、何かを達成する「方法論と目的論」)>。無神経な自慢話はいやらしさだけが残る。広い意味では、個人に凝縮した焦点と社会に広がる寛容“の峻別能力は“自他の社会学”と言えよう。

ただ内村鑑三の辿り着いた信念と行き着いた信仰の融合スタイルは天皇に対する“不敬事件”に見られるように世人からの誤解もあったようである。あるいは徹底した厳密さと峻烈さが、日頃から狙われていたのかもしれない。<とにかく不敬事件についての社会の状況と本人との意図(敬礼はしたが最敬礼ではない)との食い違いをめぐって話題の多いところ>。

話は戻り、訪問した札幌独立基督教会に焦点を当てる。時間的な事で無理を聞いてもらい、独立教会内に案内され、ここだけに保存してあるクラークの大本のオリジ

ナルクラーク像石膏原型と鑄造された胸像を見せてもらった。口頭 (spoken) での説明は簡潔だった。聞き及んではいたが、独立教会には書かれた (written) ものが多い事。内村やその後継者は信仰を「書いて残す」のが特徴。書類はいつだれが見ても基本的な事が分かる。事実、独立教会は本当に詳細に書かれた文書がたくさん存在していた。教会でもらった二つの冊子 (『独立教報』444号を参考に『独立教会のしおり』) をきっかけになぜ「独立」なのか思った事、想った事を筆者の専門性との関わりを率直に述べてみたい。

世が世なれば社会的な緊張もあったが、内村自身、一筋に勇ましく高尚な生涯を送った人だったと思う。儀式や風習から「独立」し、それらに妥協することを嫌い、話を合わせ愛想笑いの世界は本当の気持ちから遠いので距離を置く。愛する教会に対してもこの厳格性の故、世俗化する傾向に対して「独立」。そしてその姿勢が“無教会”主義。教会の中にながら内部批判した点で“無教会教会”<<えっ>>といった方が分かりやすいと感じる。当然社会からの称賛や自己栄達 (self-aggrandizement) を避け、真理の源である神の絶対次元のみに忠誠を誓う。現代語訳の旧約聖書「あなたは神の深さを見極められるだろうか、全能者の極み<<良いね!>>を見出せるだろうか」(ヨブ記 11:7)。ここが内村の到達点であり「ヨブ記」は内村の愛読書。そしてその一貫した基準は「アモス書 7:8」にある「錘げ振り」。さげ振りはいつも垂直に下がる<<そうなんだ>>。足元や土台がブレてはいけない。この信念に徹頭徹尾生きた純粋な信仰者、硬骨漢が内村鑑三であった<<すご>>。この事ゆえにけむたがられ、避けられたりし結果として敵もつくる事に<<なぜ?>>。しかしこの事ゆえに真の味方もできる。堅固な一貫性と徹底性の特性を生かし教育畑で社会貢献する人材も輩出。二人の東大総長 (南原茂、矢内原忠雄) も然り。今日も内村研究の研修・研究の講座やゼミナールといった学習機会も幅広く開設している。

発展編に発展を重ねる。今「ポスト～」と名付けられたコンセプトが流行しているが、ポストモダンはさておき、由々しいコンセプトは「post-truth」。状況に正しいか否か、相応しいか否かの「正誤」の判断ではなく、これは本物か偽物の「真偽」の基準。「錘げ振り」といった「truth」自体を「ポスト～」と概念化して“タグ”を外してしまうとどうなるか、危惧を強く感じる場所である。内村鑑三の譲れないところと響き合うところと史料している。

世界には同じ理念で考え動く (thinking & doing) 人が必ずいる。同一線上でこの批判精神を共有する人物は”国際的な批判精神は世界に広がるインフルエンサーのフルブライト。この批判精神は自分 (自国) に対する内部批判から自他の内部変革

を目指したアメリカ上院の国際委員長、その内部批判の概念をフルブライトは「批判的省察」(reflexivity)と理念で発信したくその古典的名著は国の外交委員長時代にアメリカの他国への自文化の押し付けている(imposition)外交政策を批判した著作『The Power of Arrogance』(権力の奢り)がある。組織の内部にタブーとして潜む弱点分野が日米で内村・フルブライト両者の批判精神に多くの共通要素が横たわっている。

こんな関係学の哲学(critical thinking)の背景には揺るがない自己の基盤が根元にある。内村の根底にあるバックボーンは聖書。クラーク博士が日本を代表した黒田清隆に決して譲らなかつた聖書に基づく教育を処世術ではなく、本当に、実直に実行したのは内村鑑三。唯一の規範としての聖書に沈潜した『聖書之研究』は本当に徹底している。先入観(暗黙の前提)から自由になって本質に徹するのが本物の研究。批判イコール非難、質問イコール詰問のコミュニケーション不毛の言語状況から日本は脱出すべき時期に来ていると思う。批評(critical thinking)は大学人に不可欠な道具であり、そこから深く高い洞察力が生まれる。北海道から帰り11月のはじめ無教会研修所主催のライブ通信講座で内村鑑三著作『基督信徒のなぐさめ』研究の発表をした。内村の内面基盤の最終規範は聖書の唯一性、独自性の中に現わされた絶対者、イエス・キリストへの信仰。これを、まさに、これに特化し特有のこの絶対性を人間の(humanly speaking)告白用語で表現すれば「是態(ぜたい)」(haecceity)。まさに今(now)ここに(her)の「now-here」の質的世界。これを「no-where」と茶化した不可知論はNG。この“this-ness”(まさに「これ」の抽象名詞)に純粹性を下支えするラテン語フレーズは「聖書のみ:sola Scriptura」、「信仰のみ:sola fide」と結論付けた。古くここは宗教改革者、マルチン・ルターに相通じるところでもあると感じた。

日米交流の中にあるビジョンとしての規範・基準・基盤の表明は、大西洋を渡ってきたピューリタンの「メイフラワー盟約」文書に見いだされる。この盟約に倣ってクラークが作成した「イエスを信ずる者の契約」(1877)で札幌農学校の理念と精神がよく分かる。最後の一節を引用する：

「我らは、お互いに助け合いはげましあうために、ここに「イエスを信ずる者」の名のもとに一つの共同体を構成する。そして、聖書またはその他の宗教的書物や論文を読むため、話し合いのため、祈祷会のために、我らが生活を共にする間は、毎週一回以上集会に出席することを固く約束する。そして我らは心より願う、聖霊が明らかに我らの心の中にあつて、我らの愛を励まし、我らの信仰を強め、救いに至らせる真理の知識に我らを導きくださることを」

これまでの三人話を終わり、この関連において三人にとつてもない影響を与え、行動のレベルまでに強い影響を与えた人物クラークを最後に紹介する。日本では教科書に載り、その「少年よ、大志を抱け」は人口に膾炙するフレーズとなっている。かつては南北戦争の大佐で北軍を良く指揮していた。ある時は追いつめられた味方の軍を援助し、南軍に迫っていき敵は敗走。ここでやめればよかったのだが深追いし、今度は待ち伏せていた南軍に捕まってしまった。敵に囲まれ、捕虜かと思ったが、目配せをし、全員で中央突破、若干の犠牲は出たが、生きて帰れ<判断力ありすぎ!!>>。<アメリカで車の旅3万キロの時その地も訪れた>

こんな武勇で位をあげトップに推されたが、自分は教育の道を選びマサチューセッツ州のアマスト校の学長になった。しかし教育の場が変わることに。時の長官黒田清隆に強硬に頼まれ、失意のサムライ青年教育の為北海道へ。学長が one academic year の 9 か月本拠地を留守にするのは異例。当時ユーマス UMass (University of Massachusetts) アマスト校に遊学中の新島襄からも将来日本を担う若者の教育に是非北海道にと懇願された。ただ北はいつも正しいとこの北軍大佐は・・・は後世のつくり話らしい。船で(玄武丸)日本に向かう途中黒田と教育について歓談、だんだん激しい議論に。それはクラークが本当の教育の原点は聖書、だから聖書に基づいた教育をすると。黒田は宗教は困ると反論。一晚中激論を交わし、そんなに言うなら好きなようにやれと黒田が折れる<<クラーク博士すご>>。こんな船上徹夜会談が繰り広げられていたのだった。日本の水は泡にと大量の葡萄酒をクラークは持ってきたが集まった農学校の生徒たちを一目見てその意気込みにほだされ葡萄酒を全部処分。後日学校の様子を見に来た黒田は生徒たちの目の輝きと向学心を目の当たりに見てクラークの教育に全幅の評価をした。ここが出発点になり札幌農学校を経て今の北海道大学になったのが歴史的経緯。

クラークの授業は、マサチューセッツ農科大学のカリキュラムに準じ、諸科学を統合した言語中心のカリキュラムを構成。また実際の勉学は日本語と英語併用。が英語が優先 (predominant language)、ともかく最低限、バイリンガル。札幌農学校では英語は流通“要語”。食事はパン食がメインであるが、何故か、ご飯ものはカレーライスのみと聞く<<良いなあ～>>。若者の食べ盛りのエピソードは、クラーク先生が出張でいないとここぞとばかりに解剖用の熊肉 BBQ<<よくできたな～>>。雪の日には雪合戦。元南北戦争の軍人クラークの眉間を狙う雪玉は正確で「クラーク玉」<<すご>>として恐れていた。寒い日にはクラークと愛弟子たちが取っ組み合いにもなり、師曰く「これで温かくなっただろう。勉強に戻れ」。こんな師弟愛の中で生徒たちは「頭」も「心」も「体」も成長させたかつての南北戦争、北軍大

佐、マサチューセッツ州アマスト大学長の人間教育であった<<かっこいいよ>>。

北海道最後の夜の家族旅行に戻るが、誉は『水戸黄門』に間に合うように帰ろうと催促がふえた。最速でホテルに帰り夕飯は部屋で簡単に済ませテレビ番組<<笑ww>>。北海道ルーツの旅の最後は「静内武士の子、誉」の時代劇で幕。すぐさま恒例の誉日記を書き、腹減った、腹減ったと呟いていた。日記作成中、内緒でミスタードーナツを買ってきてサプライズ夜食<<うまかった>>。これが北海道最後の「ホテルマイステイ札幌アспен」の“simple life”の深夜版。

8/4 (金) /2023 (ホテルマイステイ札幌アспен→名古屋加瀬家)

ホテルでのバイキング朝食後、久々に歩いた。札幌の時計台(旧札幌農学校演舞堂)を見学し、帰りはタクシーで(運転士から札幌ではホテル名より、“東・西・南・北”と“何条”と言って欲しいと語気荒く“注意”を受けた)<<やば>>。

もう一つの大切な日常世界における「移動」の国際(基準)マナーと危機管理を「一人旅と引率旅」両面の心得(国内外、普遍性のある旅の達人になって欲しいと願いつつ)をここで挿入(Homare君、もう一度、おさらいとして読んで!!)。これは単に今回の旅の副産物ではなく、旅の移動における人間同士の相応しいマナーとセキュリティ。大げさに言えば人間の行動様式とその日常哲学。以下、誉に祖父母の長期海外経験から、誉に「こうだよ」といって教えてきた旅行場面での“現場実習”1/2ダースとおまけのプラスを箇条書きにしてみよう。

- ① 個人として：バイキング/キャファテリアでは絶対に slow, slow & slow, slow。足早にすり抜ける行動は国際社会で響きを買う日本人旅行者(大人・子ども共)の脆弱性(実際にぶつかる事故多し)。日本のホテルでもホテル側の人はお客なので口にはださないが、心の中で本当にハラハラしている。大きな部屋で多くの種類が用意されている場合は一度全体をまわってみて好みの品々を少しずつ取り、何度もお代わりに行った方がハイマナー。こぼれるばかりに取り過ぎはダサいよ。
- ② テーブルマナーとして：口の中の食べ物を入れて喋らない (Don't speak with your mouth full.) →この「with」は付帯状況を表す単語、高校で必ず習う。食べかけた箸を使って身振りや話の調子をとる動作に使わない。上品にいこう。さらに一言。絶対ではないが、理にかなった (reasonable) スプーンの方角と口の関係：スプーンを真横にして大きく口を開けなくてもいいように、口に対してほぼ直角にして口に入れる(先進国諸賢のレストランで観察しうる)。あまり厳密ではないが、同じ事がフォークについてもいえるよ。最後にもう一言。

皿を持ち上げて食べるのは超下品、持ち上げていい食器（コップ等）には取っ手がついている。ただしごはん茶碗やみそ汁・お吸物のお椀は持ち上げて。どんぶりも。ただあまりにも重くて大きい丼は合理的判断で（特にお子様等は安全第一でいこう。中華等のレンゲスプーンがあれば容器は置いてそちらを使う）。

- ③ リーダーとして：複数の人を案内引率：先導するときは足を緩めない（ゆっくりすると全体がゆっくりモードになる）。特に混雑場面は見失わない距離まで行って、往来の少ない場所で全体の移動を調整する中間地点を見つけ、そこで小休止。これでうまくいく。足の遅いジジババに対し、旭山動物園では誉がツアー・リーダーでこれを実地。結果は「good job、いいね」。
- ④ リーダーが留意し、発揮する“リダーシップ”は周りに人達にそれぞれ（少なくとも3つ）の段階（echelon）や傾斜を心に留め、皆がいい方向に行けるよう導く（progress）、そして明るく（People perform better when they are happy）。それらは、「はやめ」（advanced）；「それなりに」（moderate）；「ゆっくりめ」（basic）。行政の立場のある人から学んだが、人前で話をする人は同じ内容を最低3つのモードで語れるよう常に準備しておく（You cannot get your message through.）。もう一つの組み合わせが言語学にあるがこれは別の機会に：「記号論」・「統語論」・「語用論」・「意味論」。
- ⑤ 情報を持っている人に電話等で聞く場合は、すぐメモれるよう文具（筆記具や紙）を用意してから尋ねる。特に電話番号や番地の数字等相手が言いかけてから“ちょっと待って”と言ってペンや用紙を慌てて取り出したりしない様に。教えてもらう立場の人は相手を待たせないのがマナー。電話する前に必要なものを用意する時間はあるはず。
- ⑥ グループとして：集団で道をふさがらない、ある場所を占有する事は個人の権利であるがグループで公共の往来全部を塞いでしまう行動はNG。書き言葉であるので音声感情を表せないが、英語で“Excuse me”と発声されるこれら2単語は“超強勢”が置かれる。ここの言語行動については、公的空間での適切/不適切行動の吟味が必要：頻繁に往来発着があるところは一人ひとりの自由な行き来の保証が必要。その自由な動き阻害しないため、つまずきの石（stumbling block）は自他ともに危ない。
- ⑦ ホテルでのセキュリティーとして：カギを開け中に入ったらずぐ内からインターロックと少し上の蝶番（ちょうばん/ちょうつがい：hinge）で二重にロック。ノック対しては必ず、まずのぞき穴（peep hole）で確認。ドアの外は外の世界。
- ⑧ 最後は英語エアポート（AP）共通用語を：「security」、「boarding pass」、「check-in baggage & carry-in baggage」、「priority boarding」、「baggage claim area」等々。

○おまけ。一つはトイレとその関連用語。トイレは有る所でいくべし。行きたい時にするのは動物。特に急ぎの引率場面では困るので「前もって」が鉄則。トイレにまつわる学校で教えない英語二つ：Number One と Number Two。これら、子どもへの婉曲表現は自力で調べて！次は水戸黄門。昌介たちの出身はもともとサムライの世。しかし佐藤昌介と水戸黄門の人間関係はない、黄門の世界で昌介の出発点の社会状況がよく分かる、面白おかしく。そして今も昔も変わらず世の中に善と悪が（善人と悪人）存在する事。腸内細菌の世界にも：「善玉菌」と「悪玉菌」。更には「日和見菌」もいるようだ。「勧善懲悪」や「天誅思想」もある。これらは前に触れた「水戸学」思想の大切な一部。

さて部屋で一休みし、買い物を終え、AP用語を念頭に、時間的余裕を持って丘珠空港へ。空港ラウンジでまたソフトクリームを楽しむ。FDAの飛行機（19:05）で一路名古屋（20:55）に。誉は12日間で北の大地の歴史を「体」と「頭」と「心」で一杯学び、座席につくとすぐ爆睡。名古屋の夜景が見えてきた時点で“wake up”。久々に見る“偉大な田舎”と揶揄され自嘲する名古屋が綺麗だった。無事名古屋の家に到着。

誉へのまとめ 下の「粹組みと領域」から先に読んだら全体が分かり易いかも！

* 北海道の主要訪問地とその中心人物

①佐藤昌介（北海道大学と札幌キリスト教会）が中心。身近なところで深く関わった二人は札幌農学校生の②新渡戸（太田）稲造（遠友夜学校と新渡戸稲造記念公園）と③内村鑑三（札幌独立教会）<以下①②③を三人と記載>

* 途中の大切な経由地

国鉄（JR）塩狩峠駅及び三浦綾子記念館（三浦旧宅）と②根室の納沙布岬北方館及び北方領土資料館と③「静内」；昌介の結婚相手は淡路島稲田藩主の妹「陽（ヤウ）」は淡路騒動で北海道静内（現新ひだか）。才媛であり控えめの社交家で夫昌介に尽くす辛抱強いサムライの娘

* 放映された淡路と静内：映画『北の零年』、テレビ『お登勢』<<みた>>

* 貢献した三人（とニックネーム）と三領域

（お父つあん）昌介→教育、（パウロ）新渡戸→国際連盟、（ヨナタン）内村→独立という名の無教会教会と正直（当時の読み方でせいちよく）な信仰

* 訪問地の特色（人と国）

塩狩峠→犠牲死（実話に基づく三浦文学での殉教が主人公の「遺言」に<<かわいそう>>）と根室（北方領土は日本の固有の領土です）。そして静内（助けてもらったアイヌの人達）。中心の北大（早くから女子を入学させていた）

* 三人を指導した中心人物

ウィリアム・クラーク博士（南北戦争大佐、マサチューセッツ大学アマスト校長、札幌農学校校長）<アクセントのある 3B: Boys be ambitious.><<すごい!!>>。厳格で実直なピューリタニズムとニューイングランドのフロンティア拡大路線と南北戦争後のアメリカ再建思想の持主。新しい分野に立てあげる精神の上に日本のサムライ精神（謹厳実直）が結合された。それぞれの持ち味とそれぞれの能力がそれぞれのつぶし合いにならず超越できたのは深い「友情」、時として友情はひびが入りやすいが、更なる乗り越えの高さを可能にしたのは神の超絶次元。ここが三人の最終リアリティー。「能力」の言葉の元の意味は「可能性の力量」、そして訪問地出身の「三羽鳥」が発揮できたのはその相乗効果

* 言語について純粹の日本語と英語、和製英語（日本だけ通用）等々と言葉の日本社会は賑やか。英語の印象言語の一つ：頭の言葉をそろえる頭韻（alliteration）を旅行記によく使った。他の簡単な例は Many men, many minds.（十人十色）。三人は頭と心と手を駆使してやり遂げた人たち（head, heart, hand）。こんな言葉の形に色付け、味付けをして使うことを「修辭法」という。fun の一種とも

* 三人は英語でも在学中・卒業後も英語で文章を。この旅日記にも優しい英語の one sentence を入れたので・・・。新渡戸は 20 世紀の初めに世界的名著「武士道」を英文で書いた。英語圏の人達にもよく分かる「サムライ」というイメージを使って、述べたい本質：「日本主義」を英文発信。ジジはこれにヒントを得てこのやり方を「方法論的拘束」と説明、つまり方法としては流通しているイメージやコンセプトを使って（それ自体は拘束）述べるだけで、その表現やそのイメージそのものが目指す本質を表しているのではない。ただ、そのように表現しないと伝わらないから。このやり方を使って博士論文に続いて出版した学術書の題は『Nisei Samurai in Washington, D.C.: Culture and Agency in Three Japanese Americans 「文化変容と人間行動--ワシントンの日系二世ライフヒストリーを通して--」大きくなったら誉、この英文書籍読破！<<読めるかな？>>

* 簡単な英語の食膳の祈り（say grace）<一つだけ格調高い古典英語：“Thee”= You 神（キリスト教）の表記英語では文中・文尾も大文字で書く）高校になったらここにある倒置法や祈願文を勉強して

We thank Thee, Lord for this food, for life and every good. These mercies bless and grant that we may eat and drink and live for Thee. Amen.

* 昌介の歴史を収集・保存・公開する北大文書館（アーカイブ）

お世話になった文書館 3 人の先生達：山本美穂子先生（秀子のメリーランド在住の昭子姉の紹介）、逸見勝亮先生（元北海道大学副学長）、廣瀬公彦先生（特任助教）

* 新ひだか町図書館

お世話になった新ひだか教育委員会、図書館係長・司書の新山恵美子先生

*最後に誉、研究のはじめは知ろうとし（しろうと：素人）、専門家になったら苦労（くろうと：玄人）何事にも成長過程で達成すべき特徴がある！

*最後の最後（記号は方向）

あれこれと“注文と期待”の多い旅行記：人間と社会→人間の心理（+-）と社会の有様（+-）。それぞれの力量をつぶさない相互の力量形成で upgrade。連携と向上→「人間の community ↑ Japan ↑ Worldwide ↑」

旅のおわりに

旅行記は読者と共有できる要素がないと、関係者以外は興味をそそらないとよく言われるが、訪問地から生まれた意識を正直に言語化し、共通項として毎日の「短信」に書き入れて“普遍性”を試みたつもりである。「皮肉」を入れると特定の個人に対するものとして過剰に認識されやすいが、ここは昇華して社会の事象を抽象化した風刺文学の手法で描いたつもりである。受け取る方向 (recipient cognition) は自他共に一般論の社会要素として欲しい。関連・関係することがあれば、“属人要素”は関係なく参考として受け取って欲しい。この認識を英語では次のように端的な表現をする。“If the shoe fits, wear it”。

本稿ははじめアルバムの補足説明から膨らんで簡単な旅日記、無教会集会発表、教会説教、フルブライト講演、と時の流れとともに増幅した総集編になってしまった。結果論になるが孫継承が随所に現地を媒介としての“思想”（思考+想像）について言語論や認識論の堅い内容にも関連させたので、重い文体の解毒剤 (antidote) として、旅行生活の途中、何とも無い時にフト気付いたしょうもない話（良くて small talk、世間ではダジャレを特定の性別、特定の世代を揶揄して〇〇〇ギャグと<<笑ww>>定義する）を入れ、何とかしようと“悪あがき”をあえてした。ここは無視してもらい、次は昌介関係者の「身内轟頂」を排し、共有できる話、面白さを単なる語呂合わせを超え洗練された humor/wit に昇格（メタ言語）させる事 fun をそれなりに目指したつもり。日常世界の笑い、質の高い諧謔性を今後共追及していきたいと思っている（fun for quality）。

文言については小学生世代にも配慮し（継承を願い）、フルブライト講演（11/9/2024）の元原稿等も兼ねているので幅を持たせ、文体は混文。小見出しを付け、長めの箇条書き風にはせず、かといって、“discursive”に飛び回らないよう共通要素を抑え、中心話題に収斂する事を目指したつもりである。もう一つ目指したことは「広・長・高・深」。本来、元来「その広さ、長さ、高さ、深さ〜への理解」（エペソ 3：18）、は人知を超える聖書の最高智「愛」（同 3：19）の中に位置づけ

ている。この方向を目指す人間バージョンに借用した（プリコラージュ）。人間のできる限りの力量でこの高遠な方向とその歴史(value & quality)を発掘してみたい。

ここでこの歴史の流れを継承し多岐にわたる分野に関係・関連付けた社会貢献と人間模様を項目化してみる。前向きが一貫している系譜の中で、これらの職は現在も継続し、それぞれ格好の場として動いているのも多い（これら佐藤家の系図に関しては藤井茂著『北大の父 佐藤昌介：北の大地に魅せられた男』岩手日日新聞社より）：

牧師 2 人（クリスチャン 28 人）、博士 5 人、大学教授 10 人、中央省庁 4 人（検事総長 1 人を含む）、フルブライト 2 人プラス AFS（盛田奨学生兼ねる）1 人。長期海外留学 4 人に加え“時の話題”の個人：「タロ・ジロ」を生かした南極越冬隊長、島崎藤村の永遠の恋人『若菜集』、テレビで郷ひろみと二重唱するシング・ソング・ライター。なおこの北海道を舞台にした映画 2 本（吉永小百合出演の『北の零年』、金曜映画劇場『お登勢』）。個人表彰はそれぞれ「ストックホルム水大賞こと、「水のノーベル賞」、「紫綬褒章」の受賞者。早世の 5 人と長寿（100 歳）1 人。専門家の書籍発行は当然であるが、専門外の世界にエネルギーを費やす「好事家」（プロとアマチュアの良い日本語表現が見つからないので、両者を含み持つ英語で：dilettante & avocation）もいる。「文学・神学」13 巻の全集発行者の存在も付記しておく。

ここで人間模様と社会との関係を纏めてみる。系譜を構成している歴史（社会）、経緯（組織）、遭遇（接触）の脈絡の中で、後世の人達が何か大切なものを感じたり、何かを受け継いでいると思えてならない。意識的に、あるいは無意識のうちに、人生の要所要所で何かを把握しているはず、と確信している。人は何かしながら、何かしらその時々学んでいる：「Learning along the way.」。特に小さい子ども達も漠然と何かを感じたり、或いは誰かの後ろ姿を見たり、広く学びながら本当に何かを感じ取っている。文字通り、常に子ども達は確実に摂取（intake）している：「Kids learn.」である。またこの共同体はずっと親の次世代が中心となっていた。クラーク博士が持ち込み、佐藤昌介へと伝わり、次世代、次々世代とそれ以降、ずっと伝承されそのインフルエンスを実りある継承にと期待している。親世代から子世代に受け継がれた形は、次世代同士が「カワチーズ」（妻の両親「河内」から）と名付け従兄弟、従姉妹たちが親密な交わりを続けている事である。この世代間の家譜を安定して持続させてきた経緯は継承の証と感じている。偕子もこの交わりに積極的に参与、参加し、それを楽しんでいた。そして嘗も時折、両親に同伴し積極的に出席した。

系譜の中の親族の人となりや業績については過大評価や過小評価するのではなく、楽しんで (fun, fun, fun) 物事の本質それ自体に付随する可能性と限界 (limits & possibilities) を正当に評価し、吟味し、適用できる人生の豊かさが継承の質、換言すれば、継承の本来の姿と思う<<なるほど>>。筆者は文学・歴史・思想の中の「言語と認識」を生業としているので話の中心が文系の世界になってしまったが、領域を問わず、広く、深く言葉を使用・利用・活用する人生は豊かな世界に生きる事といえよう。この目指すことは、言葉を使う人間ホモ・ロクエンス (homo loquens) として永遠の課題 (権利・義務) と受け取っている。「言葉の限界は世界の限界」(ウィットゲンシュタイン) と言うのであれば、質を高めた言葉でリアリティーをつくりたいもの。さらに言い切れば、言語が現実を構築する。旅はこのきっかけを提供する格好の機会でもある。

今回は対象とした北海道の人物像が、訪問地に関係する、新渡戸稲造、内村鑑三を思いのまま連想を加え意見も交え、血族の「佐藤昌介」を中心とした旅行記とした。このトリオ北海道の他に大島正健、宮部金吾を初め、クラークの他の弟子達もインフルエンサーとして多く社会貢献があったし、クラーク博士の同伴したアメリカからの教師陣についても同様、優れた指導があったが、今夏のルーツの旅では大元・大本の Dr. William Clark を北海道教育史の出発点と到着点とした。今回の北海道訪問地以外のクラーク関連は南北戦争の激戦地、マサチューセッツ州 UMass アマスト校訪問 (秀子の姉和子)、また佐藤昌介関係は岩手県の南部藩佐藤昌介記念館、昌介の妻「陽」の出身地、稲田藩主の居城である淡路の洲本が事前背景として訪問したフィールドワーク地であった。国内外の地点と時間が線で繋がった。

家系史は文系畑と述べてきたが、一部理系人間の過去、現在、将来の活躍も念頭に置きつつ、2023 年夏の道央・道南を中心とし北大と静内地方に焦点を当てた訪問地の報告、そしてそこからの多角的・多面的な (expansive) 評言の「語りエッセイ」として書き終える事になった。こんな部分の語りであるが、大方の叱咤叱責や助言を乞うものである。

最後、“画竜点睛”として、二人の博士「Doctorate」：ウィリアム・クラーク博士と男爵佐藤昌介博士に敬意を表して「博士」そのものを話題化する。その連携は顕現節 (エピファニー：epiphany)。エピファニーは東方の三人の博士の長旅、途中当局からは場所特定後の報告要請。星 Guiding Star) に導かれ、イエスに会い礼拝、黄金 (王の王)、乳香 (キリストの香り)、没薬 (十字架の死) を献げる。博士達は支配者の暗殺計略を見抜き、別の帰路で自国へ (マタイ 2：1~12)。「現地訪問、目的の明確化、政治への関与と洞察力」があって「真理」が明らかに顕現 (エピフ

アニー)。聖書の記述の中 (Scriptural description)、留意事項無し職種・職位はこの博士職のみ。そしてその輪郭と機能を抽象的に言えば、固定観念・既成概念を超え新しい認識を誘い出し、その発見されうる本質を明らかにする本体 (entity) といえよう。具体的な応用例としては、博士号の口頭試問 (defense) 等で“My epiphany is . . .”と切り出す発表をいくつか聞いた。つまりそれは手間隙かけた研究の末、閃いた自分の論文の核となった独創的要点を自分の言葉で印象深くのべる事。そしてそれは苦しさ喜びの張りつめた瞬間、しかしそこは知的「FUN」の世界。

最後の最後に。JTB は「ルーツ探求に特化した歴史の旅」の内容と旅程の提案、そして詳しい道路情報は JAF に before and/or after で大変お世話になった。(長い付言になるが、10 年前アメリカの大学院での最終学位取得後、6 か月間レンタカーで第二次世界大戦時の日系人強制収容所の現地調査を中心にフィールドワークをし、ノース&サウスダコタ州を除き、アラスカと北極を含め、全米 3 万キロの車旅行をしたが、手配は全部自力で行った。ただアメリカの AAA<JAF と共通カード>にはお世話になった。Visitor Center で州地図はどこでも無料、そして何よりハイウェイの Freeway は文字通り無料で自動車王国。しかし今回、“あなた任せ”の旅行社アレンジの旅は発展編への自由時間が与えられ、「思い」と「考え」からの連想の習慣がつき (the habit of association)、これまた、なかなか捨てたものではないと実感した。その分話が長談義になってしまった。この頁までお付き合いをありがとうございました。旅「ルーツ」の全行程が守られ、Thank God & All of You for Everything.

心の謝辞 (acknowledgment) を述べさせてください。旅の背後に祈りをもって支えてくれた京都中央チャペル、宣雄牧師と多恵母、そして同教会藤林イザヤ主幹牧師及び兄姉、また愛知泉キリスト教会教会員及び田中秀之牧師のもと聖書研究祈禱会の兄姉の諸賢に感謝の意を表す<<ありがとう>>。また家系に連なる親族や広くクリスチャン仲間の「祈りの箱舟」に乗せていただき、ありがとうございました (イヤイライケレー) <<本当にありがとう、イヤイライケレー>>。

歴史の継承としては加瀬豊司・加瀬秀子の次世代：「神、偕 (とも) に」の長女加瀬 (三澤) 偕子と「雄々しく宣教」の長男加瀬宣雄と次々世代「主の誉 (ほまれ)」の孫加瀬誉に (2024 年、誉 BD 2 月 9 日現在)

戯曲研究:「贖罪」

Jacob DeShazer (ジェイコブ・ディシェーザー) のライフ・ヒストリーを通して

キーワード(モード&コンセプト)

融合生成モード<歴史と文学、人と神の人格的交わり、聖霊と聖書の一致>、論述モード<方法論的拘束と厚い記述>、言語モード<呪いと祝福>⁽¹⁾、語調モード<論理、語り、薫り>、意識行動<正直さと操作(subtext)>、“ブレイクダウン”による可視化<文体、私訳、博士>

そのⅠ(内面史の Methodology):加瀬豊司
そのⅡ(原作としての語りを語る Narrative):加瀬豊司
そのⅢ(脚本としての Script):山岸千代栄

加瀬豊司

四国学院大学名誉教授。Ph.D.(博士):米国 The University of Maryland 大学院。同大 EDPL (Education Policy and Leadership) 国際センター客員研究員。名古屋フルブライト・アソシエーション幹事。所属学会:日本オーラル・ヒストリー学会。所属教会:日本同盟基督教団愛知泉キリスト教会。専門領域:「American Studies (思想史、日系人論)、言語文化学」「認識社会学、評価社会学、キリスト教社会学」「英語教育&コミュニケーション」
執筆担当:そのⅠ、そのⅡ、註、参考文献一覧

山岸千代栄

詩人、脚本家。松本大学、生目台東小学校、鏡石小学校の校歌作詞。カワイ出版の歌曲をはじめ、各種公演団体に演劇、ミュージカル、オペラの脚本多数
執筆担当:そのⅢ

その I (内面史の Methodology)

加瀬豊司 (Toyoshi Kase, Ph.D.)

凡例 (legend):

* 本稿での日本語訳聖書は特に明記しない限り、基本的に新日本聖書刊行会翻訳、いのちのことば社発行の『新改訳聖書 2017』を使用。主要の四聖書: 前掲社発行『新改訳聖書第 3 版』と『新改訳 2017』、日本聖書協会発行の『新共同訳』と『協会共同訳 2018』の他、口語訳および文語訳聖書も使用する。また直接原典翻訳が重要な場合にはフランシスコ会聖書研究所の原文校訂口語訳を使う。引用する英語訳聖書はシナイ写本 (Codex Sinaiticus) を基にした Kregel 社のモファット博士訳⁽²⁾を使用する。一部に Zondervan 社の Amplified Bible も使う。

* 日本語として定着している専門語はそのまま表記し、中心となる概念や幅のある語句などは語彙の正確さ (lexical intelligibility)、意味の明確さ (semantic domain and clarity) を期して、国際流通語として英語を補完語 (doublets) として括弧を付けて (特別な場合を除き冠詞は省略) 輪郭が明瞭になるよう英語独自のキーワード (pivot word) を併記した (英語になった外来語や定着している他言語を含む)。このための日本語⇄英語の順序は意味の流れ (line of thought) により順不同。陳腐な文言 (cliche) を避け、英語特有の言い回しや本質を鮮やかな切り口で表現している表現を多用し、極力正確な全体像の把握を容易くする。そして認識をより鮮明にするため両言語の相乗“刻印”効果 (tellingly illustrative) を期待し、場面場面における適切な語意表現 (felicity) を選択した。それにより真意が浮き彫りになるよう、それぞれの言語の単なる機械的翻訳を避け、使用言語の最も適切と思われる表現 (enhancement) も付加・附属させた。

* 東京女子大学の森本あんり学長は広くアメリカの社会風潮を「反知性主義」と名付けたが⁽³⁾日本のそれは更に反知性主義の様相が濃い。日本社会の「反論理・反言語・反ディスカッション」を言葉の不完全燃焼 (aliteracy) として捉え、本戯曲研究の方法論の中に、敢えて言語学上の「頭字法・頭韻法」(alliteration) をはじめ、各種修辞法の技法、そしてまた歴史大きく把握する通時的 (diachronic) 側面と現時点で捉える共時的 (synchronic) 側面での位置付けを明確にした。パラ (音声) / メタ (高次) 言語やコミュニケーション学 (communicology) での言語コミュニケーション行為の発話 (内/媒介) 行為 (illocutionary/perlocutionary act)、言語が外延 (明示) / 内包 (含意) する (denotative/connotative discourse) 手法等をふんだんに使い⁽⁴⁾ 激動する人間の内面史を再劇動させ、言葉の行き来を動的に記述してみる。

* 本合同研究はその I (方法論) とその II (語り) とその III (脚本) をはじめてから大きなセットとして構成要素としている。ただ内容的に、三者を逐一合致させたのではなく、特性を最大限生かすためそれぞれの切り口と言葉を最重視し、それぞれが独立し、共通要素により統合 (integrity) を試みた。

論文から演劇に (from Dissertation to Drama)

本戯曲研究は名古屋東文化小劇場での日系アメリカ人をテーマにした演劇「ていんさぐの花」(4/16・17・18・19/2015) の 8 回公演、観劇者総数: 2,400 人) は構成・演出: 伊藤敬、原案・監修: 加瀬豊司、脚本: 山岸千代栄、福村芳博による演劇から出発した⁽⁵⁾。この原案の概念である「生まれ」か「育ち」かは、国際移住世界の大きな課題である。それが戦争という極限状況で「人」はどうなる

のか。「広さ」「長さ」「深さ」「高さ」(エペソ人への手紙 3:18)の視点から 日系アメリカ社会の歴史思想と人間模様を考察する。広く太平洋をまたいだ日米間の戦争から現代までの 80 年以上の長きにわたる歴史に対して、移民親子の価値観の相違がもたらす“運命”や煩悶・軋轢・葛藤、人種間の不条理に対する心の深い相克を浮き彫りにしてみた。強調点は苦難と排斥の中、犠牲覚悟で大義に向かう日系二世の高潔な精神と行動。その原作については、住込み取材を含め「オーラル・ヒストリー」のインタビュー手法を用い、日系アメリカ人史に新渡戸稲造(1900)「武士道」(*Bushido, The Soul of Japan*)の枠組みを使い、米国州立メリーランド大・院で書き上げた博士論文をもとに出版した拙著(2005) *Nisei Samurai: Culture and Agency*、邦題『文化変容と人間行動』が底本である⁽⁶⁾。

そして 2015 年、『ていんさく』公演では監修にも関わった。全体的な整合性のためアメリカで“書生”をしながら住み込みインタビュー通算 1 年の生活をしながら、ワシントン D.C.にあるアーカイブや Library of Congress で太平洋戦争時の公文書や外交文書を渉猟していた。現地の体験から出てくる“感情”が歴史の direct feel。広く日米の社会史の観点から日系アメリカ人史を位置づけ、オーラル・ヒストリーの人間の質的側面に焦点を当て内面・心理描写をした。

文化(Culture)⁽⁷⁾と方法

これらの現地・現場でのインタビューの手法と方法論を使い、特定人物の歴史記述を試みる。人間の内面の何層に編まれている(interwoven contexture)諸相を解釈人類学者、クリフォード・ギアツが定着させた「厚い記述」(thick description)の手法で描写する⁽⁸⁾。文化記述の粗い記述(thin description)を反省し thick description に、特に人間の内面の言語記述には“thickest description”を目指す。他文化、異文化、多文化は固有な輪のようなものが重層になって合わさった多層構造から成りたっているの、調査や研究に不可避免的につきまとう「限界と可能性」を念頭に置き、密着インタビューを含む長期の参与観察(participant observation)⁽⁹⁾の方法で対象である日系アメリカ二世文化の歴史叙述をした。本研究では伝達のイメージとして「文化」という概念を使うが、(内容の)本質はそれに拘束されない。方法論的拘束(methodological constraint)⁽¹⁰⁾の理由で文化に取り消し線(strikethrough/strikeout)を施す。(以下の「文化」も取り消し線があるものとする)。二世文化については筆者自身の日本人文化と共有する要素があるものの、居住・生活文化の違いがあり、そのことである種の距離を置くことのできる著者性(authorship)も確保されているのも、もう一つ的事实。日系アメリカ文化の内部の一番の深みに入り込もうと努力は試みるが、日本人研究者としては insider's “outsider”がそのスタンスである。

全生涯史(Life History)へ

もう一つの 2019『赦し』東文化小劇場での公演(8/22・23・24・25)の 8 回公演の脚本・演出等:伊藤敬(2020 年名古屋市芸術特賞受賞)、原案・原資料:加瀬豊司、取材:山岸千代栄。キャストは内藤美佐子(2019年名古屋演劇ペンクラブ賞受賞)をはじめ総勢56名、観劇者総数は 2,390 人)の原案については、筆者のアイデンティティは、前作の日米文化を「書いたもの」から、今度は筆者の半世紀にわたって内側に入ってキリスト教世界を共に「生きた者」の証言に土台を置き、対象を宣教師ジェイコブ・ディシェーザー(Jacob DeShazer)の全生涯のライフ・ヒストリーとした⁽¹¹⁾。

この生涯で体感・体得した出来る限りの内面的価値観に肉薄してみたい (by using those methodology in situ to reveal his invariable inner values)。そしてこれを原本として本戯曲研究の後半は台本化と続く。今回の合同研究は前作の続編として事実関係の社会面も描写するものその内面史は全く新しい研究である。そしてその脚本の基礎を支える全体像のためディシェーザー夫妻の伝記的な生涯も叙述する。この台本化・脚本化は合同研究者である詩人の山岸千代栄脚本家によるものである。本研究は序説部分を独立させている。ここは introduction < 目的、方法、論理、展開 > を重視する expository writing (論文・論説・解説) であるので、まず事前説明 (accountability) からはじめる。introduction は、ここを読めば全貌の把握が出来、組み立て (organization) を最優先している昨今の英文著作方式の構成 (organization) によって論じ、事前に全体の骨子を見せ (academic accountability)、次に中心人物像をナラティブで魂の叫びや祈りの言語を「語り書き」、最後は脚本のセリフ (script) で見せる。近年、人が他人の内面を書くことが出来るかという著者性 (authorship) の思いあがり問題視 (problematics) され、さらにその優越化や特権化の問題はエスノグラフィーの格好なテーマでもある。厳しい批評としては他人の内面を成り代わって描く行為は搾取ともいわれる現実もある⁽¹²⁾。それらを念頭に置きつつ、本研究では以下の三つのフェーズが相補的に機能することを期待して、書いたり、描いたりすることの可能性を大事にしていきたい。米国立メリーランド大学教授のマイケル・アガー博士はこの著者の立場を“professional stranger”とよんでいる⁽¹³⁾。本研究では方法、語り、脚本のこれら三本柱 (Triad) を組み立て、言語における限界や可能性を相互に監視しつつ、総合的な全体 (triune) を目指した。他者の内側を再訪問し (revisiting)、再想像してみたい (reimaging) のが筆者の“熱い”記述である。自己と他者の接点 (cohesion and/or coherence) として、文化的、社会的な共通要素を言語的に明示し、意味ある世界 (meaningful felicity) を構築するのが目的である。

主要人物の日常世界と内面世界

一見無関係に見える生涯の生い立ちの中に将来に関わる萌芽がある (usable past) ので、ジェイコブ・ディシェーザーとその妻フローレンス・ディシェーザーの大河のような生活史を追跡ライフ・ヒストリーからはじめる。単に社会的背景というよりは、創造主である神は人の全生涯にわたって (every walk of life) 関わるインマヌエルの神。それ故、それらの人生 (life) から引き出し、取り込んだ人生万般は必ず神の取り扱いのもとにあると確信している。前半はフローレンスの献身に至る過程を詳説する。二人の献身に共通する人間の (自由) 意志と神の摂理 (prerogative) との関係をそれぞれの時間と場所において述べてみたが、二人のモノローグを出来るだけ多く含めた。よく日本の高校の授業に登場する人と神の関係「Man proposes, God disposes.」(人はあれこれ企画し、神がそれら进行处理する) である。英単語の人生、「life」には、象徴的に言えば、“かどうか”と可能性を表す“if”が中央にある。人間が思う proposal と神の取り扱いである disposal の関係性は換言すれば、文学と神学の関係にもなり、レベルを問わずその限りない行き来自体を学際的探求と位置付けてみた。

最終的には人と神との関係性に現れる告白言語は、聖アウグスティヌスは『*Les Confessions*: 告白』(「神に向かって告白するとはどういうことであるのか」の問いに対して、「主『あなたの目には』、

人間の意識の深淵も『裸である』～沈黙があっても心情においては大声をたてて叫ぶのである」と述べている⁽¹⁴⁾。神を探求し神認識に至る実存的苦悩、その受容と離反の内的現実にはディシェーザーの「信仰」と「不信」の行き来する“重厚”な繰り返しだった。筆者の所属教会の田中秀之牧師は「神様が働いている時は葛藤を感じる」と「罪の赦し」と題して礼拝説教で語る⁽¹⁵⁾。最後ディシェーザーは、はじめは気が付かなかったが、実は自分は神から選ばれ、導かれていたとの告白に変わる。神との対話形態は「たましいの祈り」に昇華されていく。と同時に、神に対して正直な告白、そして神からの奇跡(全能者にとっては普通の出来事故「事跡」という現実の出来事はディシェーザーの捕虜収容所での体験知を徐々に増やしていくことになる。

聖書の言葉の安直な受け取りではなく正直に自己をさらけ出し、その体験からくる内面の現実にはデ師のいう「聖書と聖霊は一致する」は正直で真実な告白であり、日常の口癖(repeating)となった。事実、ジェイコブ(ヤコブ)・ディシェーザー(Jacob DeShazer)は独房で純粋に個人と神との“格闘”(ヤコブは一人で夜明けまで神と戦う)「ヤコブが一人だけ後に残ると、ある人が夜明けまで彼と格闘した」(創世記 32:24)。本当に独房で、問は問とし、疑問は疑問とし、正直に神に祈り切った生身の人間、単独者であった。これはただ単に(simple)打ちひしがれた孤独人間ではなく、神の前に正直かつ率直な(simply)一存在の関係を堅持していくことであった。そして最終段階でジェイコブ(ヤコブ)は言う:“God spoke to me.”と。しかし神との“格闘”としていろいろやってみたことは本当何か起こるかどうかが確かめてみたかった「この町のユダヤ人はテサロニケにいる者たちよりも素直で、非常に熱心にみことばを受け入れ、果たしてそのとおりかどうか、毎日聖書を調べた」(使徒の働き 17:11)。聖書の記述を中その中身で調べたり、試したりすることはその内面の動機において二通りある。一つは不平(complaint)からくる不信。「それで、彼はその場所をマサ、またメリバと名づけた。それは、イスラエルの子らが争ったからであり、また彼らが『主は私たちの中におられるのか、おられないのか』と言って、主を試みたからである」(出エジプト記 17:7)。後述するディシェーザーが読んだモファット英訳はマサとメリバに括弧を施し具体的な不信感から生じる意味を次のように併記している「He called the spot Messah (Proofs), because they put the Eternal to the proof by wondering whether he was among them or not, also Meribah (Complaint), because the Israelites had complained」。突き詰めれば「使徒の働き」箇所は探求心が中心で、不信を前提とする動機、つまり単に行動を促す motivation ではない。ここは語源的には音楽的カントを含む動機 incentive(下線は筆者)であって、目指す方向に、感謝と讃美(chant)の含意されている。献身したディシェーザーの学んだシアトル・パシフィック大学(SPC、現 SPU)のワトソン(C. Hoyt Watson)博士⁽¹⁶⁾は神が本当に語りかけるかどうか試してみた(前者の動機での try out)。ここはデ師が確信を求める動機である。それは“The only thing to do was to try it out and see if God was really talking to me.”。体験を積み重ねていって祝福の確信(blessed assurance)と讃美・感謝の中に成長する。そしてこれは聖霊(Spirit of God)による神の語りかけ、内なる啓示(the inner revelation of God)とワトソンは付け加える。そしてここにデ師の何度も力説する「聖書と聖霊の一致」とも響き合う。

このデ師自身の体験についての本研究のライフ・ヒストリーはパールハーバーの復讐から4か月後、Doolittle 中佐の指揮のもと、まったく無謀と思える陸軍爆撃機を空母に積んで日本本土を攻

撃⁽¹⁷⁾。帰路燃料切れで日本軍が占領していた中国に墜落。落下傘で助かったが捕虜に。4年間の捕虜(POW)生活で九死に一生、1945年に、捕虜収容所から釈放された、ディシェーザーの妹ヘレン(Helen)がシアトル・パシフィック大学(SPU)に学んでいたが、卒業後 SPU 大学学長ワトソン博士の学長秘書に就任した。こんな関係もありディシェーザーはこの大学に入学。ワトソン学長と膝をつき合わせて何度も話し合った。ここからワトソン博士による伝記 *DeShazer* が上梓された。本稿ではこの伝記本、70年前出版の古典的文献として扱い、「体験の語りと聖書の裏付け」の二者融合方式を記述手法の一部とした。稀覯本ともいえるこの作品は事細かにディシェーザーの心理と行動の裏付けに聖書語句を付記して随所随所にこの方法で多くを関連付け(habit of association)をしている⁽¹⁸⁾。聖書との基本的な関係付けを古くは Sentence⁽¹⁹⁾と一語でよび、このゴールはワトソンもディシェーザーも神の主権を共有し、ここを最終ゴールとしている「摂理とすぐれた知性ははわたしのもの」(箴言 8:14)。デ師はこの大学で好奇心から握手をしたフローレンスと結婚。フローレンスはいつまでもその“手を離さなかった”と評判になった。1973 年出版の *Return of the Raider: A Doolittle Raider's Story of War & Forgiveness* は実家族による資料に基づき、ピッツバーグ大学教授ドナルド・ゴールドシュタイン博士監修のもと、父親の生涯を前述の長女キャロル(Carol Aiko DeShazer Dixson)が書き 1973 年上梓している⁽²⁰⁾。多くのページに捕虜時代前後の写真や結婚前後のエピソード等が含まれている。キャロル愛子の大学時代の教育実習は両親出身の SPU でおこなった。

関連他者(Alterity)の存在と資料

身近な人物が東隆氏。終戦後進駐軍のジープに父親をひき殺され、素手で歩いているのアメリカー人を刺そうと出刃包丁を持ち歩いていた男。ある時、デ師と遭遇。「私は日本の捕虜でした」の赦しの話を聞き、とてつもない葛藤と心の格闘の末、最終的にデ師の“後釜” 牧師になった話は NHK スペシャル:『ふたりの贖罪』に放映されている⁽²¹⁾。東師が牧会していた名古屋守山教会(現在は小坂橋秀行牧師)での長いお付き合いの後、3 年前も長時間会って取材した。ほぼ同時期に東牧師に対する大阪の自宅訪問インタビューを山岸は 2 回行った。

予期していたとはいえ、もう一人の出刃包丁事件があった。しかし守られ背広の内ポケットに入っていたポケットバイブルで事なきを得たことも。さらには実行には至らなかったが、心の中は出刃包丁が秘めていた文学少女がいた。英語を一所懸命習った愛する父親を殺され、その家庭悲劇を一部始終正視し、正直に生きてきた。持って行きようのない無念さ(フランス語からの英語の心理学用語「シャグリン」が一番近い)による葛藤と嗚咽から自分の心の「遍歴」に対して思わず父親から習ったその英語がとび出し、このシャグリンから派生したこれまでの遍歴(saga)が自分のオデッセイ(odyssey)と冷静な知性と深い感性で気持ちを抑圧していたのだ。本研究は、このような形で共有する要素から発展した出来事やその受け止め方をも随所、随所に登場させた。

日米に関わるもう一つの重要な関連人物は真珠湾総攻撃隊長だった淵田美津雄(以下淵田と表記)。淵田は極東裁判は戦争の勝者がおこなう一方的な裁判でフェアでない」と主張していたが、アメリカ人にとっては彼こそパールハーバーの張本人。そのことで真っ先に死刑となるべき存在と思われていた。しかし結果は死刑を免れ、太平洋戦争時に爆撃手であった捕虜ディシェーザーも

死刑を免れた経験の持ち主。終戦後しばらくして淵田はデ師の赦しのお話を渋谷の街頭で聞き、心に衝撃を受ける。死を免れた二人の邂逅に合わせて淵田の人生を根本的に変えるもう一つの出来事があった。淵田は著作の中でアメリカの捕虜になった日本軍の兵士達の話によるとして、フィリピンである宣教師夫妻がスパイ容疑で首をはねられた。私たちはスパイではないが、「彼ら(日本兵)をお赦しください」(ルカの福音書 23:34)と祈って死んでいった話を聞く。両親を不条理に殺され日本人に対する憎しみからくる葛藤の後、これは両親が自分に語られた最後の言葉として受け取ったアメリカ人女性(Peggy Covell:ペギー・コーベル)が日本人捕虜収容所で献身的な奉仕をした。「日本人が私の両親にして欲しかったことをしています」。日本人捕虜を優しく世話する女性のこの一言が淵田にはなかった人の許し(赦し)の本質に気付かせた⁽²²⁾(四国学院大学『チャペルの招き No. 314』加瀬豊司「淵田とディシェーザー:真珠湾攻撃と名古屋空襲」)。

死を予期していた二人の元軍人が戦争という極限状態の中で新しい人生への転換が与えられ、最後二人はそれぞれ宣教師としてかつての敵国に。『赦し』の英語の題は forgiven。“for”は前を表す before <be 動詞+for(e)>から、given や give は与える意。赦しは「前」に与える意味が原義。誰が最初にするか、その正直さ・勇気が大切な原点。デ師は戦時の自分の過去と同時に自分の内面の根源的な「原罪」を正直に直視し、そのたましいの内奥からの告白と懺悔をする。この信仰を可能にした事実について、いつも完全に一致するのは「聖書と聖霊は一致」と繰り返される。終戦直後、緊張は時として和解をもたらすこともあった。元看守がこっそりデ師の集会に顔を出し、はじめは後ろめたさや、何かバツの悪さを強烈に感じていたが、デ師の無言のがっちりとした握手で一気にそのわだかまりが解けた歴史的な邂逅もあった。いろいろなところでデ師の握手に対して「I feel love.」の感想や感激もよく聞かれた。

諸資料(Sources)と記述方法+

実際の体験以外のディシェーザーの生き方を特色付ける当時の状況(the then milieu)とそこ関わる苦悩の状況(excruciation)の関係については、著者との日常の交わり現場での話や信仰生活の語りや説教を中心にし、家族による手記や二次資料の文献も参考にした。ワトソンによる伝記を参考にしつつも、ディシェーザーの内面史全体は筆者が断片的に聞いた話を繋ぎ、時には膨らませ、それらを聖句で補足(Sentence)し、記述モードは総合ナラティブ(hermeneutic narrative)にした。

諸文献に加え、インタビューや取材の記録、こまめな往復書簡(笹川資料)や手記等の書かれた記録⁽²³⁾や後述する真珠湾のリベンジの Doolittle 作戦や帝国海軍飛行士の日米の復讐の全く思いがけない発想やその許し・赦しを含め、筆者自身の 40 年間、数えきれない日米でとのディシェーザーとの話し・語り合いを原資料⁽²⁴⁾とした日常生活上の単なる偶然や怪我の功名を超える日毎の感謝を含め、精神世界や価値観から人生の見方、考え方や感じ方のその深いところ(in-depth dimension)で触れてみたい、この内面のキリスト教社会的アプローチが原案の核心とその方法である。これらを総合的に紡ぎ合わせ(contexture)、一連の流れを前述の演劇『赦し』原案・原資料として編集し叙述(historiography)してみた(演劇冊子 加瀬豊司「原案・原資料に関わって」より一部抜粋および加筆修正した)⁽²⁵⁾。

まずディシェーザーと深く関わった人物的資料から記述を展開する。記述はディシェーザー夫人や筆者を含め、直接関係のあった人物はすべて論考・論述の対象とする。筆者自身の体験自体を対象化し、体系化をはかる。筆者の内面性(internality)の形成に多大の影響を与えているジェイコブ・ディシェーザーとの関係とその関連する生活世界を分析する(breakdown)。中心人物であるジェイコブ・ディシェーザー(文脈により尊敬を込めて「デ師」、および親しみ(endearment)を込めて「ジェイク」と表記。日本語聖書の表記は「ヤコブ」と)との出会いは、名古屋の郊外での近所付き合いから始まった。宣教師として家族と共に引っ越してきたデ師は真珠湾のリベンジ(1942年4月18日)の名古屋初空襲の爆撃手であることが分かり、恐怖を感じはじめ距離を置いていたが、子らとはトランプやフラフープ等をしてよく遊んだ。日本名愛子の長女キャロルとは著者の妹、貞子と仲良しになって我が家に泊まったことも。長男ポール、次男ジョン、三男マークを飛行機見学に小牧空港に連れて行ったりもした。父親の飛行機好きにより男の子三人は飛行機大好き。間もなく英語のバイブル・クラスに誘われ、筆者は親に内緒で出席。およそ2年間、写生をするような観察者であった私は、デ師夫妻の真摯な人柄と来日した強い思いに惹かれていく。言葉のハンデイもあり当時あまり多くを語られなかったが、風采と雰囲気から存在するだけで人生を変える「本物」があると感じ、徐々に背後にある聖書の世界に圧倒され、18歳の時にデ師から洗礼を受けた。その後通訳・翻訳にも関わり、この頃から英語でよく語り合った。そしてデ師とは長く日米両国行ったり来たりする深い交わりになった。自分の人生の「if」はデ師との出会いがきっかけになっている。そして自分の後の職業にもなり、日本語と英語の言語社会や日米の国際関係の専門領域をミッション・スクールの四国学院大学、大学院の研究科長として定年(2008年)まで教え、その後2020年まで大学院集中講義(サマー・セッション)で日米関係の「比較言語文化/異文化間コミュニケーション」科目を担当してきた。

ディシェーザー夫妻の伝記部分は体言止め等を多用し簡潔に、またその社会的部分の歴史を記述したが、捕虜収容所の中での内面史は心の一コマ、一コマを詳しく描写、叙述した。捕虜の体験で何度も心が揺れ動いたディシェーザー自身の内的混迷の諸段階(developing stage)にはできる限り心理描写を重ね、敷衍し(paraphrase)、厚い記述(thick description)で書き続けた。特にもがき、罪の問題にくいさがるディシェーザーの内面描写は出来得る限りの重厚な記述“thickest” description を目指した。自分の罪の問題に返ってくることや内部に対する自己批判の方向は筆者の思想形成の根本となっているフルブライトの自己への還元思想と響き合う。フルブライト60周年記念の加瀬豊司 特別寄稿“Senior Walk: フルブライトの足跡を辿って” *The Fulbrighter* で論じた⁽²⁶⁾。ディシェーザーの正直な人間の真実の故かその心的状況の振幅(mental fluctuation)は激しい。ここを纏めて端的に言えば、神への正直な叫び(inner shouts)と罪へのクリティカルな自省(self-reflexivity: 批判的的自己省察)とキリストの義と愛と赦しへの積極的同一性(Imitatione Christi)が最後ディシェーザーの「赦し」に至る組み合わせ。しかし、ここに至るまでの本人の決意と挫折の大揺れに揺れていたことはいうまでもない。不安定な意思と心の願い(shaky mindset)に引き裂かれていたが、最終的にはこれらすべてに赦しを与えるため、最初に自分のいのちを身代わりに投げ出したキリストの十字架によって罪ある人間を買い戻した贖罪が根底にあった、とデ師は回顧。この買

戻しの身代金はキリストの十字架の血。この十字架の死は生易しいものではなかった。長い時間をかけて死に至らせるイエス・キリストの十字架刑はその身体(性)に関わる苦しみの過程も thick description の手法で描いた。鞭で打たれ、茨の冠をかぶせられ生殺しの十字架のイエスの生々しい状態も取りあげる。

遭遇した聖書(Bible as Encountered)

次はディシェーザーの人生を根底から変えた聖書について詳細に述べる。捕虜収容所の中でディシェーザーは3週間の期限付きの聖書を手に入れたものの、何となく半信半疑の気持ちもあったが、とにかく読み始めた。自分の子ども時代、母親が熱心に聖書を読んでいた姿、また今回戦友メーダーの自分にはない自分の犠牲をいとわないあのクリスチャン・ガイとしての姿に“何か大切なものがある”と強く感じ、ひょっとして自分も「その重要な何かに」辿り着けるかもしれないという思いに駆られた。身近な信仰者の存在とその言行が、はじめはきっかけという誘引だったが、次第に真剣になり、時間を見つけ次第、誰の助けもなく全く一人で聖書を読み続け、3週間で6回通読し終わった。その中で、自分以外にも誰かが強烈なきっかけが動機(incentive)になり、最後は神による圧倒的な結果になる事実(unwitting wisdom)も聖書の記事を通して知ることになった。

クリスチャンを捕え、迫害に胸を弾ませていたサウロ(後にパウロ)も石打ちの刑で「この罪を彼らに負わせないでください」と祈り死んでいったあのステパノの最後が心に焼き付いていたと思う。他のクリスチャンの死に方がきっかけとなったサウロは弟子集団には属さず、全く一人で神と(神が)関わった人物。このように全能の神はわきの人を使って何かをされる力がある、と体感するディシェーザーであった。しかしながら母親や戦友の姿が動機であったにせよ、分厚い聖書66巻を一人で読みこなすには動機と決意だけでは長続きしないのも、もう一つの現実。「聖書は自分に語りかけてくれる生きた日課だった」と振り返ったが、この述懐は人知や人間関係を超越する強さが背景にあったとの告白に変わる「キリストの愛がわたしたちに強く迫っているからである」(コリント人への第二の手紙 5:14、口語訳)。これは心を貫く真実なお方に会った告白であるが、それ以上に自分の経験、思い、感じ方では決して説明することの出来ないこと、つまり「与えられた恵み」の宣言の告白に至った体験の事実であった。ここは本稿に頻出するデ師の口癖「聖書の言葉と聖霊の働きは一致する」⁽²⁷⁾。

このことは聖書と聖霊を二元論(dualism)や二分法(dichotomy)で分離するのではなく、むしろ融合させる一致をディシェーザーは身をもって体験したのであった。つまり、聖霊による働きによって気付かなかったことに気づき、多くを教えられ、もっと知りたい期待により聖書のことばに戻る。この相互の関係(reciprocity)がディシェーザーの信仰生活であった。神が万物を創り、後は機械的な自己の法則に従って進む。よって神の介入はないといった18世紀の科学主義的な理神論(Deism)と真逆、つまり聖霊は共時的に(synchronic)今、まさにここで(now and here)働く体験からこのことを告白する⁽²⁸⁾。聖書と聖霊の聖なる一致の根源的根拠は聖書の使信「神は、私たちが行った業によってではなく、ご自分のあわれみによって、聖霊による再生と刷新の洗いを持って、私たちを救ってくださいました。神はこの聖霊を、私たちの救い主イエス・キリストによって、私たちに豊かに注いでくださったのです(~that means regeneration and renewal under the Holy Spirit which he

poured upon us richly through Jesus Christ our Saviour〜)」(テトスへの手紙 3:5-6)。聖霊は何か不思議な漠然とした力ではなく人格的な存在であって、それによって自分自身の『負』の人格が変えられていく“力動力”を信仰次元でとらえたのであった。キリスト教の聖霊なる神は人に「命令」すらする神。それは「運命」、「たたり」、「死」で止まっている神ではないから。

克服すべき自分の“肉”の弱さは確かにあった。かえって聖霊の人格的な働きにより人間の内面にあっては、良心の呵責、軋轢、葛藤による心身の試練が数多くあった。しかし、それらは将来宣教師として召しを受けるのに相応しい訓練になったはず(trainability on the spot)。しかし、しかしである。今度は、その真っ只中に欠落している最たるものは「力(power)」と示される「私は肉的な者であり、売り渡されて罪の下にある者です。私には、自分がしていることが分かりません。自分がしたいと願うことはせずに、むしろ自分が憎んでいることを行っているからです」(ローマ人への手紙 7:14b-15)。罪に対する(thralldom)気付きはあり、新しい方向が与えられたことはあったが実行力・実践力を生み出す力がない。呻きのような祈りを長い間祈っていた。それらは正直で真実の祈りであったが、(自分で)神を使って(下線は筆者)、自分を変えてください、との祈りであった。しかし、最後には、祈りは神を変えるのではなく祈っている人が変えられる事実が事実になることをディシェーザーは教えられる。後日談になるが、事実、信仰者のこの「たましいを揺さぶる力」(soul-provoking power)の原動力は十字架の血潮からと讃美。歌詞は「There Is Power In the Blood (主の血にちからあり)」(『勝利の歌』)。そのレフレインは“*There is pow' r , wonder working pow' r in the blood of the Lamb (神の子羊)*”。実体験から滲み出るこのちから(pow' r)は神からの一方的にもらったもの、人知を超える恵みの世界。この主の力は後日、宣教の任地名古屋の守山の集会になくなくてはならないディシェーザー・ソングになった⁽²⁹⁾。

関わる聖書(Bible as Challenged)

この通読の読み易さ(readableness)は長い部分もまとめて自分のものにしやすい言語的特質と独房に3週間抑留(detention and/or warehouse)され、この聖書は3週間で取り上げられ、後がないので聖書をmind(頭と心)で“食べてしまおう”と決心。それは体の中に保持(retention)するために時間を惜しみ暗記に次ぐ暗記の日課がもう一つの実体験。このようにして期間限定の聖書を徹底的に暗記して期限なしの“体内聖書”にしまったのである。事実、聖書の言葉が次から次へと出てくる無尽蔵の貯蔵庫(inexhaustible warehouse)になったのだった「〜わたしがあなたに与えるこの巻物を食べ、それで腹を満たせ〜」(エゼキエル書 3:3)。

ディシェーザーから筆者は捕虜収容所で読んだ聖書はモファット訳⁽³⁰⁾だった。当時、筆者が学生だった半世紀前に“もわっと”聞いたこともあったが、あまり気に留めなかった。デ師の学んだ大学の学長ワトソン博士はディシェーザーの捕虜収容所で「(許せない)敵を赦す」の大前提である「愛」に関する最高の聖書箇所のコリントへの手紙 13 章に言及し、“体内聖書”のようにデ師の覚えていた訳はまさに Moffatt 訳聖書だったと述べている”As a matter of fact he quotes it perhaps more than any other portion of the Bible using as a rule, James Moffatt’s translation: [Love is very patient, very kind. Love knows no jealousy; love makes no parade, gives itself no airs, is never rude, never selfish, never irritated, never resentful; love is never glad when others go wrong, love

is gladdened by goodness, always slow to expose, always eager to believe the best, always hopeful, always patient. Love never disappears]”。口語訳聖書(1955年)で和訳を付ける:「愛は寛容であり、愛は情け深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない。無作法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない。不義を喜ばないで真理を喜ぶ。そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える。愛はいつまでも絶えることがない」(コリント人への手紙 第一 13:4-8a)。DeShazerはこの「愛の箇所」を“美しい態度”(a beautiful attitude)と呼び、かつての爆撃地の名古屋に“戻る”(生きていれば)決心の中核(consecration)に結実することになる。「Love never disappears.」(愛は消えない)から。ここが憎悪で過ごした捕虜生活と正反対の価値観で、とてつもない衝撃を受けたズバリ一句の聖書の宣言のひとつ。

しかし今の自分の内面(inner reality)は憂鬱な暗闇(gloom)の峡谷(glen)「My road may run through a glen of gloom」(詩篇 23:4)。崇高な愛の励ましには癒されるが、心の奥深い現実のごつごつした谷間。ただたぶん美しい自然に囲まれた峡谷とイメージでこの詩的表現(poetic diction)に少しホッとしたようだ(good relief)。後日ディシェーザーは神学校でいろいろな訳の聖書に触れる。そしてほとんどの英訳が不気味な表現と知る。「たとえ死の影の谷(下線は筆者)を歩むとも(through the shadow of the valley of death)とKing James 訳をはじめあまりにも有名な詩篇23篇はこの訳」に驚く。いつ殺されるか分からない不安があった。それは昔学校で見た「時の翁」(Father Time: 禿げ頭で顎髭を生やし手に大鎌と砂時計を持つ擬人化された老人)の絵が見え隠れする。死の谷の影がちらついていたが、山間の谷間で少し救われた気分だったかもしれない。谷であろう谷間であろうかその存在場所はそのイメージに関する無用な複雑化を避けたこのオッカムの髭剃り流の節減法(parsimony or astringency)的表現⁽³¹⁾の背後には人格的な主の存在がある。「主が共にいる(Thou art [You are] with me)とどんな時にもすぐ隣に付き添う励ましは変わらない。広く当時流布していた訳⁽³²⁾からくる獄中での聖書通読の感想の一コマだった。

文体としての聖書(Bible as Stylistic)

20世紀中葉にモファット(James Moffatt)博士個人による、シナイ写本(Codex Sinaiticus)を基にした文語体ではない口語体のモファット聖書(1924年)については前述した。明確にしたいことは口語体による読み易さ、分かり易さは単に内容を簡単にしたりしたり、読者の言語理解レベル内に低めることではないことである。また人間の常識に合わせたり、人間の認識に妥協するのではなく、あく迄伝達の手段・方法として臨場感のある読み易さがその特色。この意味で身近な英語のバイブル。ひたすら読むことの優越性(reader's inner supremacy)のニーズのある場合はうって付けの書物。捕虜収容所の中の孤独な状態でも、専念しようとする人間には、このような没入方式が最適切(total immersion and involvement)。言葉による読み熟し(こなし)易さがあるので没頭できる。構造(organization)の観点からも、言葉によるコミュニケーションの流れと認識の筋道の普遍的要素がこの聖書に組み込まれ、編み込まれて(built-in contexture)いるのがモファット聖書。このことは読み手の力量のレベル内でよく分かる(understandable)という自己満足の世界(low level)ではなく、先ず通常の読み方で読解(intelligible)できるようにと、ありとあらゆる技巧と工夫(craft)を凝らした牧師・神学者である博士訳聖書。言語的把握の次は内容の段階(profound meaning)に自然に発展して

いく。こんな名人芸の翻訳様式は読み手と響き合い吸い込まれていく翻訳と言えよう。読み手にとっては総合的に納得・感得でき、次も読みたいという意味とそれに伴う読みの力 (further reading provoked) が湧いてくる。ぐいぐいと読み進められる。一層はずみがつきました次への好循環 (virtuous cycle)。こんな充足しそして自己完結した世界では、予備知識がなくてもディシェーザーの“ひとりぼっち”読み方に一番よく合う聖書と一人読みの特殊環境とが最適なマッチング、否、最強のマッチングになったのだった。こんな歴史的な使われ方をしたのがモファット訳であったのだ。

聖書 (text) と読み手 (audience) の一体感 (compatibility) で繋がっているとはいえ、聖書が提供する世界は人間の知識や知恵を超える絶大次元 (beyond the reach of humanity) がその領域。ディシェーザーの“気を良く” (saving grace) させた聖句がある。「私は一部分しか知りませんが〜」(コリント人への手紙 第一 13:12) の同箇所モファット英訳自体は「I am learning bit and bit」と神との人格的關係の中で段階的励まし。“step by step”という学校教師が頻繁に発する努力への励ましは、段階的に進むという継続・持続の若干気が張る教育言語であるが、“bit by bit”の「ちよびつとづつ」は親しみのある日常会話に登場する他愛もない話し言葉 (colloquialism)。こんな親しみのある語感に引きつられ、それならもうすこしやってみるかとの気持ちにもなっていく。気が張らない努力への励ましがここにある。

このモファット聖書の翻訳者はスコットランドにあるセント・アンドリュース大学出身の牧師、後ニューヨークのユニオン神学校教授である James Moffatt 博士 (ギリシャ語と釈義学専門) による個人訳⁽³³⁾ (single-handed translation) の英訳聖書。この学者牧師は言葉が生み出す感情 (overtones) や言葉の言外の意味や言葉のあやの機微 (quodlibet) に至るまで、文字通り言葉がもたらす豊かな配慮と幅のある言語観の持ち主 (linguistically gifted)。こんなモファットの言葉の“マネジメント”はディシェーザーの聖書の集中的通読に一躍買っていたようである。この聖書訳は1913年の新約聖書に始まり、1924年の旧約聖書、そしてその新旧の最終の改訂版は1935年で当時読み易さで人気のあった英訳。世界の翻訳の多寡に一言。特に英語圏での英訳聖書は列挙するまでもなくその種類が最多。ヘブライ語、ギリシャ語、アラム語の原点聖書からの翻訳は、英語翻訳者の情熱が旺盛：“多産性 (prolificacy) から生まれた多くの英訳聖書を相互照合 (cross-reference) による言葉の豊かさから本来の意味内容の質が保証される。世界の豊富な翻訳聖書の存在は翻訳自体の可能性と限界 (limits and possibilities) に気付かせてくれる。換言すれば、翻訳そのものは (translation/rendering) は言語間の語彙や意味領域 (semantic domain) の“ズレ”がかえって共通の意味内容 (semantic domain) が浮き彫り (innuendo) にされる。私訳・委員会訳の人間の議論を超えて、多くの言語翻訳のクロスオーバーによって原典本来の意味、原義に近づける最大の一助になるであろう。そのための言語素養の裏付けとなる高レベルの専門性 (expertise) が必要。ここでの学問的に要請される厳格な過程を言語を中心に詳しく述べる⁽³⁴⁾。次に弛緩の社会的側面についても論考する⁽³⁵⁾。最後は社会的位置付けについて記述する⁽³⁶⁾。

以下モファットがおこなった言語マネジメントを具体的に列挙する。日本語訳を含め多くの英訳聖書は「はじめに神が: In the beginning〜」(創世記 1:1) と副詞的なオープニングが常。しかしモファットこんな背景から聖書の全体像を念頭に置き、まず、はじめに主題を明示して読み手を“安心”

させ、次からの個別な内容に進むといった自然なオープニング (the progress of thought)。次に来る詳細を解りやすくするため新聞報道等によくある手法でもあり現代のフォーマットと共有できる。そのために、きわめて画期的な並べ方の差し替え方式がモファットの特質。創世記の冒頭の章と節を入れ替え、1章1節の前に2章4節をはじめにもってくる(章、節の番号そのものはそのまま)：“This is the story of how the universe was formed～”、そして次の1章2節に続く。そして神は1日目から7日目迄順を追った創造の業と続く。トピック・センテンスをはじめに出した組み立ては段落 (paragraph) 構成がしやすい。手頃な段落単位での展開で早く正確に読める。

モファットのもう一つの特色は、読者の認識に語りかける“人格的”なトーン。翻訳は直訳 (metaphrase) か意訳 (paraphrase) かの相違の議論は今でもよくあるが、この訳は読者に話しかける人間味、つまり認識者主体の表現方法である。聖書に真髄といわれる「ヨハネ 3:16」: 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された～(下線は筆者)の英文は“～so loved the world～”や“so much”が多くの翻訳であるが、モファット訳は“so dearly”がその表現。身近な親愛の情が伝わる。この“dear”の呼びかけは過酷な独房生活でのディシェーザーには言葉を越えた温かみが感じられたことだろう。

この手法の現代版は、2018年改訂の聖書協会共同訳の「知識のない魂は困ったもの」(箴言 19:2a、下線は筆者)にも登場する。“話しかけられ感”が感じられる(他の聖書はたましいと知識の無機質な対比や「知識がないのは良くない」と倫理的は断定がほとんどの翻訳文体。このことは人間の認識メカニズムを伝達手段として用いただけであって、言語による表現の良し悪しをいっているのではない。この方法を使ったら本質がよく解る「方法論的拘束」(methodological restraint)にすぎない。モファット英訳はこの種の表現方法が多い。ディシェーザーが読んだ英語表現の一部をそのまま鑑賞してみる。続く3例⁽³⁷⁾の下線は筆者。「This is a sure saying」。叱責を受けとれる人は「～will rank among wise men」(underline mine)。「rank」は、はっきりした階級 (echelon) のある軍人ディシェーザーにはよく解ったはず(他英訳はこの動詞を「remain」「dwell」「abide」「lodge」とごく普通の表現)。同じような英語表現が詩篇 37:23 にもある。「He [God] gives him a sure footing.」(主によって、人の歩みは確かにされる)。筆者の力説する論点を続ける。人間に理解しやすい表現そのものはあくまで方法論の次元であって、神の属性 (attribute) を規定するものではない。ただ神の摂理 (Providence) の発信はあくまで神の主権 (prerogative) であって、神の絶対次元からくる神の領分は被造物である人間が勝手に定義したり、方向付けするものでは決してない。言葉は手段であってその中に内在的に制約と可能性が付きまとう。言葉を使う人間の“分限”の克服の第一歩は、聖書言説の“つまみ食い”ではなく聖書の全体像 (アダエクワチオ) への押さえが肝要。そしてこの姿勢があってはじめて書かれた (エクリチュール) 聖書の個々の言葉が持つ息づかい、内容の鮮やかさがくり広がる (vivid) 世界に至る。「ことばは神であった」(ヨハネの福音書 1:1c)。

更にモファット翻訳のもう一つの特色。モファット訳は伝統的な聖書の章立てのフォーマットにもこだわらないと前述した。ヨハネの福音書の伝統的な 14,15,16 章の番号による章名はそのままにしておいて、ただレイアウトは「14 章」を最後にもってくる。確かに「15,16,14」の方が流れと纏めが素直に響き読みやすい。15章は「葡萄の木であるイエスに繋がる愛のつながり」、16章は「迫害予告

とその励まし」がメッセージの中心であるが、14章は「十字架の死に際し、聖霊(ギリシャ語から入った英語訳は *paraclete* のパラは共に平行していく助け主、弁護者、慰め主):「～父はもう一人の助け主をお与えくださり、その助け主がいつまでも、あなたがた共にいるようにして(14:6)～わたしはあなたがたに平安を残します(14:7a)」を与える使信が最強の約束。そして14章の最後の励ましは Let's go ではなく“Let us be going.” 英文法(parse)でいう進行形は動作の継続だけではなく、「感情的色彩」を表す。この表現から「さあ、ここから出かけよう」との様子や模様がひしひしと迫ってくる。

捕虜時代にはディシェーザーはモファット訳のこれらの特色自体は知るすべがなかった。当時いろいろ広範囲に影響を与えつつ大量の英訳聖書が出されている。教派や時代の特色などで翻訳の特色は“豊かな”百家争鳴の感があるが、翻訳自体の歴史においては神のことばに対して翻訳家は真剣に熱く総力をそそいでいたし現在も続く、謙虚に言葉と真実をもとめて⁽³⁸⁾。ディシェーザーはこのことに気付かずにモファット聖書に出会い、通読に没頭した経験はディシェーザーの獄中、獄後の口癖:「聖書と聖霊は一致する」の頻出告白は容易に頷ける。聖霊の交わり(fellowship)を通して聖霊に促され、導かれ、通読6回をし終えたこのモファットの聖書に清々しさと確かさの気分(smile of assurance)を味わったことだろう。しかしこれからの真剣勝負。

内省する自己の気付き

こんな神と自分との人格関係を身近に感じつつ、その一方で厳粛な意味で、罪ある自分の存在に目覚める。聖書を通して、イエスの十字架上の苦難は人間の罪の結果との気付きに至る。聖書の使信は自分と同質の問題。イエスは罵られ、つばをかけられ、鞭打たれ、手と足に釘を刺され断末魔の苦しみの最後は槍で刺殺された罪なき方の十字架の死。それをしていたのは他でもないこの自分。しかも、イエスの言葉は「父よ、彼らをお赦しください」(ルカの福音書 23:24)。これら一連の身代わり十字架とその死による贖いの赦しの発見(heuristics)は単なる聖書解釈(hermeneutics)の対象ではなくディシェーザーの実存的かつ積極的な体験であったのだ。聖書の「彼ら」とは自分のこと。聖書の語りかけはどんな時でも親しく(endearment)いつも近くにいる聖霊に導かれ、この罪人の自分と合致すると何度も同じ告白が続く。モファット訳聖書は章順を変えたと伝統的な聖職者達からの批判も受けたこの博士は、極限状態にあった独房の一人の捕虜人生にこんな形で貢献したのだった。この意味でこの訳は神の前の孤独者として聖書を必死に読み続け、暗記し、その環境で一对一で神と対峙し、神から答えをもらったのだ。モファット聖書はディシェーザーにとって全く相応しい降って湧いた名訳(serendipity)であったと言わざるを得ない。聖書の文言の描き方(style)に加え、過酷な環境を混じりけなしの祈りの部屋(spiritual territory)に変えた背後に何か大きく支配する働き(governance)融合関係といえよう。繰り返すが、そしてそれをディシェーザーは聖霊の働きによると告白しているし、クリスチャンはこれを神の力(omnipotent power)とその導きとよぶ。これらを総称する「みこころ」と「導き」は人間の通常の言葉を超えている。paradox(逆説)という修辞法という言葉形式でないとその意を汲めないことが多い。そしてこれらは“priceless price”(値段が付かない程最高価)な真実。

贖いの死への気付き

この身代わりの代価はゴルゴダの丘(髑髏)の十字架刑。イエスは何か電流にでも打たれたかのような急激で荒々しい大きな叫び声をあげた。聖書は人の罪の深淵に身代わりになったイエスは神にさえ顔をそむかれ、見捨てられた克明に記述する。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(マタイの福音書 27:46b)。この瞬間のキリストの神性がどうなったか、神性の一時的な棚上げ(set aside のギリシャ語のコーリス・テウ)なのか、新改訳聖書 2017 が語るように、それは最終的には人に対する神の恵みは(カリティ・テウ)、すなわちそれは神から与えられ、その中心方向を重視した表現なのか、あるいは人間への受け取りに特化した認識表現なのかの神学論議はさておき、ディシェーザーは自分の中に潜む罪に気付いていたのであった。義なる神はそれを罰する。いや、罰しなければならぬ。そして罪の代価は人間が支払うべきもの。しかしその罪の代価はイエス・キリストの十字架による身代わりの死、つまり“血という身代金”という代価によって支払われ(ransom)、この贖いが贖罪であり、このことがこの自分にも起こったのだと告白する。自分の罪の深さが赦されたのは、キリストが自分に代って徹底的に苦しんだこと。

演劇『赦し』に医学的観点から助言のあった医師であり愛知医科大教授三浦裕次博士⁽³⁹⁾から、今回十字架刑における人間の体内の変化についての説明を聞いた。五寸釘を両手に打たれ、徐々にしかし確実に両肩は脱臼し、肺を圧迫し全体が下がり、内臓諸器官のおさまりが狂い始める。そして血液中の血清が細胞間質に流れ出し、浮腫(edema)を生じ、消化管や腔内に溜まった水のすべてが、槍で刺されたことで不気味な音を立てつつ噴き出す。凝血していない血や黄味がかかった油っぽい物質も滴り落ち、体内の水がなくなってしまう。「～兵士の一人は、イエスの脇腹を槍で突き刺した。するとすぐに血と水が出てきた。これを目撃した者が証している」(ヨハネの福音書 19:34-35a)。

これらの生々しい十字架上での完全な死は人間の罪の深さに他ならない。神の義しさの前には本来、罪ある人間は滅ぼさなければならぬ、「罪の報酬は死です」(ローマ人への手紙 6:23)。聖書は身代わりの十字架上の死によって、人間の罪は取り除かれたと宣言し、最重要事項として明言する、「私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは～聖書に書いてあるとおりに、私たちの罪のために死なれたこと」(コリント人への手紙 第一 15:3)。そのためには、顔を背けたくなる残酷な死に至る苦しみが磔刑の現実、「イエスは死の苦しみのゆえに、栄光と誉の冠を受けられました。その死は、神の恵みによって、すべて人のために味わわれたものです」(ヘブル人への手紙 2:9)。イエスはその死の苦しみを緩和することを拒否し、最後まで苦しみ貫かれた、「海綿を取ってそれに酸いぶどう酒を含ませ、葦の棒に付けてイエスの飲ませようとした」(マタイの福音書 27:48)。死の苦しみを中断したり、十字架から降りてきたら罪人を見捨てることになってしまうので。この十字架の意味に辿り着くには収容所の外的要因からくる軋轢の連続とディシェーザー本人自身の内的葛藤の連続があった。

そして最後その十字架の死は神からの一方的な恵みとして与えられたと感謝し受け止め、受け取ったのだった、「神は私たちを救い、また聖なる招きをもって召してくださいましたが、それは私たちの働きによるのではなく、ご自分の計画と恵みによるものでした」(テモテへの手紙 第二 1:9)。

今の自分は捕虜ではあるが、まったく新しい人生のパラダイム、人生観として永続するいのちの水が与えられたと述懐する、「わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます」(ヨハネの福音書 4:14)。この気付きは単なる認識の拡張ではない。聖書の使信は明確にいう「天にも地にも、わたしは満ちているではないか」(Do not I fill heaven and earth?) (エレミヤ書 23: 24b)。この“充満性”の中には自分の意識や認識作用も含まれる。このメカニズムの“動的な動き”(動域)をディシプラーは聖霊の力と働きと何度も告白してやまない。ここにデ師の信仰の原点がある。

迫真(verisimilitude)する演劇手法(Drama as a Compelling Discourse)

特定人物の全ライフ・ヒストリーからの戯曲化については、その可能性と限界を踏まえつつ、生い立ちからはじめ詳細に記述してみる。歴史の直接的再現に躊躇がある場合、一つの配慮として戯曲化がある。しかしこれは単なる語り手の「隠し」ではなく、上演舞台という媒体により、内面の深いところに共鳴する要素を“劇動”させ、さらには聴いたり観たりする receptor(受容器)としての認識者の共振感情により、その普遍的要素を鮮明化、明確化する営為である。換換すればその reality が観劇者の中で(再)想像・創造される。さらに言えば、観劇者としての認識者は、舞台上の役者が一人、または対面する複数の相手を対象に繰り広げられる現前の世界や登場人物の気持ちを自分も感じ、相手が歴史の内側で生き抜いた“人間生”への感情移入(empathetic understanding)することである。効果から言えば舞台化は人の心の深いところに鋭く、素早く入り込み、そして負の心的状態を解放する。この感覚で観る人の中に巣くう葛藤が浄化され、カタルシスの次元に向かう大切な原動力になる。それ故、演劇には葛藤(dilemma)がつきもの。

演劇は体験に「人間、時間、空間」に共通・共有要素を“代行”する(身代わりとも)世界ともいえるが、人生のより高い高揚感への逆転のため悲劇に焦点を当ててきた。それは“ひしひし”とした悲劇的中身と内容は葛藤と苦悩を内包し、そしてその辛さと悲しみを經由し、内面の解放感・軽快感(saving purification)をもたらすから。悲しみの作劇については、正直、書く苦しさ、語る苦しさ、聞く苦しさ、演じる苦しさが付いてまわるが、得られる感動はまさにその劇動する情感に対面することで、内面の軽快感が約束される。この可能性に“越境”するのは良質の演劇行為ともいえる。ここに越境参加することで人は感動の意味世界に昇華(sublimation)する。ここを演劇論(dramaturgy)にリンクさせた研究の本質とした(mise-en-scene:舞台化)。

悲劇に関わせた聖書の世界には問題点を解説・説明するために悪事、悪行、悪人が導入されることがよくある(diabolus ex machina)。演劇は人の内面の世界で自己の抑圧感情や鬱積感の浄化をもたらす劇的な変化が生まれ、舞台という時間と空間の小宇宙の中で人生観・世界観を捉え直す機会を提供する。つまり自分の感性と思考で解釈し、自分の想像と創造によって世界を完成させる。逆にその分、“いやらしさ”が伝わってくるようなこれみよがし(showy)の演技や、固定観念と価値観の押し付け(imposition)は、観劇者自らの発見的な(heuristic)気付きという認識の豊かさを壊してしまう。そのため作る(創る)者と観る者との共同・協働の芸術には相補関係が相互作用するのが常態。その結果の相乗効果が舞台芸術の醍醐味ともいえよう。聖書の励ましは、人間の自

由意思をフル回転させた関与が大切という。文語訳が定着している。「求めよ、さらば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん」(マタイ傳福音書 7:7、文語訳)。

言語構築と意味形成

人間は物事の意味を模索し(meaning-seeking)、つくり(meaning-making)、持続させ(meaning-sustaining)、伝達させ(meaning-disseminating)、再現させ(meaning-reproducing)、時には破壊させる(meaning-subverting)営みをする(on-going experience of people as they are destined to make sense)。人間は人生で意味という蜘蛛の巣にひっかかっている存在(suspended in webs of significance he himself spun)といわれたり⁽⁴⁰⁾、あるいは人間は本能が欠落している(so underendowed with instinct)から不斷に意味形成機構(symbolically mediated cognitive system)がいる等ともいわれる⁽⁴¹⁾。ともかく、人は自分の生をその中で構成していく意味世界に生きている(the meaning within which people organize their lives)と言えよう。意味世界を切り取る言葉について、聖書は聖書で端的に言い切る。「世界には、おそらく非常に多くの種類のことばがあるでしょうが、意味のないことばは一つもありません、「～none is destitute of its own power of expression and meanings, Amplified Bible」(コリント人への手紙 第一 14:10)。意味を構成しているが現地の現場の現実から出発するたましいの言語はとてつもない意味がある。本質の中心は常に意味形成の努力がいる(coordinated management of meaning)。

このように人間の複雑で豊かな意味世界の叙述には、それなりの言葉が必要になる。物事の輪郭を相手に話すだけでは不十分。そこにくつきりとした線や細かい陰影を加え、心に物事の色や形や匂いや手触りをも描き出すレベルが要求される。語りが要請される芸術にはありとあらゆる言語モードが交錯する。実際言葉が使われる日常世界で使われているにもかかわらず、あまり関心が払われていない言語コミュニケーションの用語がたくさんある。日英語で掲げてみる。英語でジョーク、バンター、パロディー、ユーモア、ウィットがもたらす諧謔や緊張と弛緩。言葉を使う人間(ホモロクエンス)は言語様式を実際使っていても分析はなぜか嫌っているようだ。特に日本では。英語には、hyperbole, litotes, euphemism/dysphemism, irony, satire, paradox, tautology, aphorism, apophasis(陽否隠述)等々数えきれない修辞法があると前掲論文で強調した(『四国学院論集』“日米比較文化論における方法論と方向性:動域パラダイムとしての異文化間コミュニケーション”)。理解のたやすさのための譬え(simile/metaphor や synecdoche/metonymy)や「話し」に活気を与えるために、咄し(surprise: 意外さ)、噺し(novelty: 新奇さ)、譚し(in-depth: 深さ)といった“言葉遊び”の仕分けもその豊かさの一助になるであろう。この意味で、原作であれ脚本であれ、書くことは言葉の修辞法効果を念頭に置いた技術と技法が肝要。説得力のある意味体系(meaningfully usable)に焦点が当てられ、内容が組み立てられるが、言葉の要素(ラング)と使用(パロール)を念頭に置き豊かな言語活動に発展していった欲しいと願っている。演劇は方向性が存在し、作品は脚本化され、舞台化へと向かう営みである。聖書は人生という舞台の上で人は台本を作り、試行錯誤しながら、時として暗黙の前提(tacit assumption)や固定観念(idee fixe)を作ったりしながら自分の役を演じる役者ともいえよう。しかし人生のどこかでそれらが不安定になり、超越する存在に気付き、絶大次元の

新しい意味に生きる人になることもう一つの意味ある現実。あるいは今までの人生そのものは暫定的なものであったのかもしれない。

手段(Discourse)としての言語から本質次元へ

人間の物理的時間や心理的時間、社会的空間や想像的空間の真只中で、そのように現れてくる仕組みや隠れている人の内奥を抉り取ったり、個人個人の生い立ちや他者との関わり、歴史的環境・社会的状況(socio-historic milieu)を用いることによって神は真実や真相を顕現(epiphany)させる(use~to achieve~)。変わらないのは聖書の使信、変わるのは人物・時間・空間であるが、まさにここに変わらない聖書のことば。モファットが聖書の伝統的順序を変えてまで大切にしたいヨハネの福音書 14 章の最終節(進行形を使った派遣への奨励)がその根源になっている「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません」(ヨハネの福音書 14:6)。モファットの英訳はそれを“the real and living way”と単純明快。ここに、この不変性と普遍性を根底に、環境を問わず「今、ここでも」と真実と告白できるキリスト者の共時的な証が成立する。神の超越次元と絶大次元の価値観(value system)のもとでディシェンナーが地でいった歩みは「あなたがたが経験した試練はみな、人の知らないものではありません。神は真実な方です。あなたがたを耐えられない試練にあわせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えていてくださいます」(コリント人への手紙 第一 10:13)。関連個所のモファット英訳聖書は「~he will never let you to tempted beyond what you can stand, but, when temptation comes, he will provide the way out of it~」。人間が特定の要素や限られた現象にすべてを還元し、宿命として諦めたり、自分なりに理解し、そこに安住してしまうのではなく、人知を超え、豊かな意味世界を垣間見たい。いや到達もしてみたい。聖書を熟読し聖霊の働きを体験し続けたディシェンナーにとっては、最終的にそのような自分を人知を超えたお方に明け渡し切ったのだった。神の前に嘘を排し、偽善を排し、虚心坦懐の心的態度が欲しい。人のこのありのままの正直さ(candid honesty)⁽⁴²⁾に神は働く。この関係を人間の現実の気付きとして認識する。人にとってそれは信仰の成長。神はそれを認証するだけではなく、この過程の一つひとつ愛を持って育ててくれる存在「私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です」(コリント人への手紙 第一 3:6)。忍耐を持って慈しむこと自体が愛。神の愛(アガペー)の約束は「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。~」(ヨハネの福音書 3:16a)である。下線の部分のモファット訳は“God loved the world so dearly ~”と前述した。神は世界を愛おしく愛される人格的神。「人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができますように。そのようにして、神の満ちあふれる豊かさにまで、あなたがたが満たされますように」(エペソ人への手紙 3:19)。

こんな方向で、人間 Jacob DeShazer の体験を中心に、捕虜(POW)生活で通読した聖書と劇的回心について動的な歴史叙述(historiography)を試みたつもりである。単なるキリスト教護教論(apologia)による編集・編成ではなく、ディシェンナーの生涯の大河に焦点を当て、その中心(center of attention)は、モファット英訳聖書の内部に、内面様式ともいうべき文体のメカニズムと極限状態の環境下で告白・回心に至ったディシェンナーの内面メカニズムの質的關係を戯曲の葛藤と昇華の感動領域に関わらせ、その方法論として厚い記述手法で語り切ったナラティブの世界

(narrativity)を繰り広げてみた。最後に、英訳聖書そのものの歴史は、浜島敏の『聖書翻訳の歴史：英訳聖書を中心に』⁽⁴³⁾がその広がりをも、そして四教授合同の『英語の聖書』⁽⁴⁴⁾は英訳聖書が文学や言語学に与えた影響を論じている。こんな世界的な動きの中で、極限状態のディシェーザーを日本宣教に導いたモファット訳というこの一冊の聖書の特質と果たした役割を評価 (review) し⁽⁴⁵⁾ 原語としての聖書の固有言語に言及し、固有の言語を超え言語そのものと聖書についての論究 (essay) ⁽⁴⁶⁾を最後の註に詳記して稿を閉じる

そのⅡ (原作としての語りを語る Narrative)

加瀬豊司

(Toyoshi Kase, Ph.D.)

＜特に明記しない限り日本語訳聖書は「新改訳聖書 2017」、英語聖書はモファット訳聖書(Moffatt Bible)を使用。付随(incidental)し関連(peripheral)した話は TS(Tangential Story inserted)と略記。話法体としての談話構成は台本化を意識して緩い段落単位(paragraph chunk)にし、通し番号を付した。原作としての「語り」と脚本としての「台詞」はそれぞれの特質を生かした強調点がある。ディシェンナーの獄中での独白については愚痴、叫び、疑い、願望等が多くあり、これら愚直かつ直截的な生々しい告白をたましいの祈りとして記した。そのままの言葉の率直性の故に、「語り」から「脚本」に移行した部分や、台詞において言語表現と言語表情の共有・共用場面がある。＞

(1)真珠湾の報復

1941年12月7日(日本:12月8日)真珠湾攻撃。その後も日本軍は破竹の勢いで進撃し、日本は勝利で沸き立っていた。一方アメリカサイドでは、日本社会の奇襲作戦の考えでは到底、理解出来ないないこの卑怯なだまし討ちは、日本に対してはらわたが煮えくり返る感情と報復心をつくりだした。後、ディシェンナーが学ぶことになる神学校の学長 C. Hoyt Watson 著の古典的著作(*DeShazer*, The Light and Life Press, 1950)及びその改訂版 Anniversary Edition (1972)においてワトソンはこの喫緊の状態を次のように述べている: demand for the military authorities to do something quickly and emphatically to jar the Japanese leaders (下線の語義:ガタガタの振動・衝撃→神経に触る、神経を逆なでする。一泡ふかす)。復讐心に満ち怒れる血気盛んな若者が多数、報復戦に志願してきた。ドゥーリトル、Doolittle 中佐を隊長とする100名弱の隊員からなるパール・ハーバーのリベンジ・ミッションになる。日本がまだ制空権を握っていた4月のドゥーリトル中佐による Doolittle 攻撃計画はほぼミッション・インポシブルのシークレット・ミッション。ここにジェイコブ・ディシェンナー(Jacob DeShazer)という名の男が志願していた。後の名古屋初空襲の爆撃手。このリベンジ計画そのものは、長い間日米両政府とも隠していた。パール・ハーバーのリベンジの対象は広島・長崎の原爆にしておきたい、ドゥーリトル日本本土初空襲が真珠湾のリベンジになると、広島・長崎の正当性がなくなるのがアメリカの政治家の読みであり一般的アメリカ人への印象操作。一方、真珠湾のたった5週目に日本本土が空襲されたとは思いたくないのが当時の日本軍部の面子であり、日本国民の戦勝感情とも一致する

(plausibility)のが当時に社会意識であった。日本は日本でこういった印象操作。

(2) ジェイコブ(ヤコブ/ジェイク)・ディシェーザー

ジェイコブ(ヤコブ)・ディシェーザー(Jacob DeShazer, 1912—2008)、通称ジェイク(Jake)はオレゴン州セーラム(Salem)で11月15日に生まれた。2歳の時父を亡くし母ハルダ(Hulda)はアンドラス(Hiram Andrus)と再婚。そしてディシェーザーはアメリカのオレゴン州の片田舎に育った悪ガキ少年。幼少の頃は母親の影響で日曜学校(教会学校)に行っていた。とはいうものの、いたずらはする、盗癖もある厄介者だった。タバコはやるし、学校生活はいい加減、万引きが常習生活。運送業者が玄関先に置いていった配達物を盗んではよく捕まった。このため、いつも両親は神の赦しを祈る。弁償の繰り返し。ただ親の謝る姿だけは直面するのが辛かった。イエス・キリストについては単なる歴史上の人物で神とっていない。ただ罪滅ぼしのため、親に少しでも喜ばれようと、オレゴン州マドラス(Madras)のフリー・メソヂスト教会の日曜学校に行っていた。半分は連れて行かれて行った、これが実情。教会学校の先生からは教会の礼拝に来る時はきちんとした服でと注意を受ければ、わざと派手、ド派手の新しいベルトに大きなバックル付きの繋ぎの服。見せびらかすためだけに教会に来ていたのが少年ディシェーザー。もちろん聖書の話はうわの空であった。

(3)

学校時代はオレゴン州マドラス。そこは風に吹きさらしの大平原(Great Plains)。この小集落(人口300人)で働くことの必要性は感じていた。しかし学校はよくさぼる。しばらくして同じ州の都会、セーラムに引越す。ここの学校ではフットボールと野球に熱中。非常に元気だったが乱暴な性格だった。高校卒業時の1920年代は大恐慌の時代。大学は行きたかったが働く。羊飼をし、山や砂漠の自然、動物たちが一杯の仕事を楽しむ。日常が平地であったので高い所、特に山には憧れていた。近くの山で大声を出しているうちに、だんだんヨーデル風になってくる。自分なりに工夫し、山でヨーデルをし、歌の高い部分と低い部分の歌の高低差を自然の中で満喫。ある日、高い空に飛行機を見た。ジェイク少年は高さに憧れたせいか「飛行機は自分のもの、自分のもの」と叫び続けた。高卒後、肉体労働に就く。山林で伐採、動物の世話。1939年の5月まで一で生懸命働いて1,000ドル貯めた。その全財産をつぎ込んで七面鳥を投資の為飼った。しばらくすると売値は下落し、文無しに。飛行機好きの夢の再現もあり、1940年、給料がいいので軍隊に入る。当然飛行

機乗りになりたかったが、年齢制限で資格なし。それでパイロットは諦め爆撃手に。そして厳しい訓練の軍隊生活がはじまった。2年したら真珠湾。バイト先で、ジャガイモの皮をむいていた時だった。12月7日朝、ディシェーザーはこの真珠湾奇襲攻撃をラジオで聞く。怒り、怒り、怒りが全身の細胞に突き刺さり、日本に対する憎しみ沸点に。烈火のごとく。激怒したディシェーザーは。「畜生、ジャップめ！今に見ている」激しい憎しみが若い彼の内に日に日に大きくなっていった。先に手を出す奴が悪い。やられたら絶対にやり返すが俺たち西部の人間。俺は不良だが、正義感はある。多くのアメリカのごくごく普通の若者同様、青年ディシェーザーの心は自立心旺盛で西部の荒ら荒らしい個人主義 (rugged individualism) の持ち主。それは“Not in my backyard”：自分の家族、恋人が住んでいるところをやられたら、最後の一人になってもやる決意。理屈はいい。相手をとことんやっつける。やられたら絶対に仕返しをする。それがフェアプレイ。

(4)

当時ルーズベルト大統領は日本による真珠湾奇襲攻撃の前に真珠湾攻撃を予想し、アメリカの主要空母は秘密裡に真珠湾外に停泊させ無傷・無傷。第一次世界大戦後のアメリカ社会の厭戦気分を敵愾心を焚きつけようとずっと思っていた大統領にとってこの先制攻撃は大歓迎。事実、真珠湾攻撃直後の演説原稿も事前に用意していたという。そのように考えたのがルーズベルトの隠された作戦 (maneuver)。国民をやる気にさせ、すぐさま政府は真珠湾に対す危機演説と具体的な反撃を模索。大統領は、日本軍は南方に戦力を注いでいるので日本周辺の制海権が弱くなっているはずと分析。その隙間を縫って日本本土をすぐさま空襲する計画を練りはじめることに。ここに第一次世界大戦時のエースの軍人、Doolittle (James “Jimmy” Doolittle) が登場。

(5)

このアメリカ秘密ミッションのリクルートのため、ドゥーリトルは志願してきたディシェーザーに目をつけ、はじめから近寄って来て話しかける。ディシェーザーもドゥーリトルこそこのリベンジ攻撃に立ち向かう勇敢な指導者と惚れ込み、どんなな計画であれついて行くと言いつける。訓練を熱心に受けた。行く先はヨーロッパか日本か分からない。そしてこのディシェーザーが後日名古屋を攻撃することになる。日本軍に捕まりそして捕虜に。後述の中心となる捕虜収容所で聖書を懇願し、戦友の葬式で使ったものが、天皇陛下から下賜されたとして3週間の期限付きで渡される。その聖書を6回通読しイエス・キリストに劇的な出会いを体験する。生きて帰られ

ばこの名古屋に今度は友として来たいと獄中、献身の思いが膨らむ。死刑が免れ、餓死や病死の寸前で奇跡的に命が助かり、終戦後ワシントン州シアトルの神学校に入学。そしてそこでフローレンスに出会い結婚。生後間もない長男 Paul を連れてかつての敵地、名古屋に。宣教師として。

(6) フローレンス

シアトル・パシフィック大学 (SPC: Seattle Pacific College、後 University に) でのフローレンスの人生も、ディシェンジャーと神学校で出会い、自分の信仰生活の新しい方向へと発展する。フローレンス (Florence Faye Matheny) は 1921 年 8 月 9 日アイオワ州生まれ。父親はアーチャー・マセニー (Archie Matheny)。農夫で音楽好き。PTA で歌う。楽器：バイオリン、フルート、ハーモニカ、横笛、トランペット。母親は物静かで敬虔なクリスチャン。娘フローレンスはいつも母が膝づいて祈っている姿が心に焼き付く。フローレンスは物心ついた 1928 年、7 歳の時アイオワ州のトッドビルに引っ越した。そこでトウモロコシ、干し草、オート麦や豚鶏や乳牛を育てた。しばらくの間、牛乳を搾り、配達し、近所の人たちに作りたてのクリームを届けた。家には大きな庭があり、パンを作った。‘小さな頭’という名の一部屋しかない学校に通っていた。父は馬や馬車で学校に、また後日やっと買えた我々の最初の車、T 型のフォードで学校に送ってくれた。母は私たちの着るものを縫っていてくれた。私たちにとって、学校用の服二着と日曜の礼拝用の一着が正式の服だった。家は古く、水道や電気はなかった。水はポンプで井戸水を汲み、牛や馬のためにいつもタンクを一杯にしておかなくてはならなかった。牛や馬は信じれないほどの大量の水を飲む！トイレ用にモンゴメリー・カタログ販売 (Montgomery Ward) のトイレット・ペーパーを買った。トイレは家の外。貧しかったが、自分達は貧しいとは思っていなかった。

(7)

9 歳の時、ある朝「火事だ、火事だ」皆逃げろの叫び声で目が覚めた。黒い煙が家の傍の材木置き場から出ているのを見た。この日は 3 月のものすごい風のある日で、火はすぐに松の木に燃え移り、そして我が家にも火の手が回った。消防もなかったので火を消し止めることが出来なかった。ただ涙を流しながら自分の家が炎に包まれるのを見ているだけだった。良かったことは、親切な隣人がほとんどの家財を安全な場所に運びだしてくれたことであった。ただ地下の新鮮な肉だけが失われた。後日、同じ場所に家を再建した。毎夏トウモロコシから 2,000 の缶詰を作った。そのトウモロコシは畑から父が運んできた。皆でトウモロコシの皮をむき、母はそれらを湯通しした。姉のマーガレットはトウモロコシ

の鞘を 12 本剥いて 1 ペニー（ほぼ 1 円）をもらった。父はトウモロコシを缶に詰め、塩を加えて缶の蓋をした。父はシーダー・ラピッド（Cedar Rapids）のお得意さんに売りさばっていた。お金が入り、経済大恐慌の時代はそれで助かったと、困難だった時代をフローレンスは振り返る。

(8)

高校時代のフローレンスはバスケット選手。教会学校に出席。13 歳の時モンロー・タウンシップ中等学校に入学。そして 1938 年レノックス短大に。学生生活満喫。その分信仰は薄らぐ。1939 年短大 2 年時に学校教師になろうと決める。この頃から何か心に空虚感を覚え、聖書を読むことにした。キリストに自分を明け渡そうとするが、そのことで友人を失うことを極度に恐れる。1940 年に故郷で教壇に。教えたのは幼稚園から中 2 までで、子ども達の成長を見ることが大好きだった。政府から若干の物資、例えば缶入りミルク、豆、ポークの塩付けやスモモの配給があった。子どもの給食ランチ用にと。ポークの塩付けは木の箱に入った大きな塊の状態では運ばれてきた。豆と一緒に料理したが、ある時ネズミがその中に入っていた。ネズミ入りの肉の後始末が問題であった。もし外に捨てれば犬や猫がそれを食べて病気になる。一番いい方法は火の中に放り込むことと直感。すぐにストーブの火が真っ赤になり部屋中に臭いが充満した。まもなくその臭いと火花が煙突から出て、近所の人があつてきて、私が学校に火をつけているのだと思われた。よく学校を首にならずに済んだものだった。教員生活の最後の 3 年間は出身のトッドビルの学校で、幼稚園児から 4 年生までを教えた。2、3 年して教職をやめてさらに学び、宣教師の仕事に就きたい、これが神様からの召命と感じはじめた。具体的な事柄を考える人間なので‘どうやって、いつ、どこで’に対する答えを知りたかった。これは丁度白紙に自分の名前を書き、その具体的なことは神が記入と受け取っていた。教員生活の 1942 年人生の転機が訪れた。“私の人生は 1942 年にリバイバル集会に出てイエス・キリストを自分の人生に受け入れたことで劇的に変わった”と。「あなたの方間で良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださると、私は確信しています」（ペリピンへの 1:6）。今までは確かに自分はいつも教会に出席していたが、この時、私はキリストを受け入れることと献身することが自分の中ではっきりした。そして気持ちの面でこの事実はワクワクするアドベンチャーであるとも実感、とフローレンスはその確信を明言。

(9)

この時期、多くの牧師から多くの影響を受ける。自覚したクリスチャン (born-againer) に、そして海外にもと決心。神とのコミュニケーション、祈りの必要性を実感。しかし海外宣教については、どう祈っていいか、言葉も出てこない。モヤモヤした感じであった。その時の聖書の言葉が心に浮かんだ、「主よ、私の唇を開いてください。私の口は、あなたの誉れを告げるでしょう」(詩篇 51:15)。聖書と自分がこんな形で結び付き、少し明るい気分になったと思った。次のステップの信仰についてはある集会で自分の目的が示され、宣教師を目指すことで短大から大学への思いが強くなった。大学3年生に編入を計画。幸いなことに、私の人生の選択についてはアイオワ州からオレゴン州に移られるフレンチ牧師夫妻からの具体的な励ましがあった。西海岸に向かう車と一緒に乗せてもらった。学校が始まるまでオレゴン州ポートランドの郊外グresham (Gresham) に居候をさせてもらった。しばらくの間、バイトで私は小さなアイスクリーム・スタンドで働いた。

(10) 二人の出会い

ある日バイト先で、ある新聞記事が目にとまった。それは Doolittle のジェイク・ディシェーザーの記事だった。次のように書いてあった。「彼は日本軍の捕虜になり収容所の中でクリスチャンになり、今度は宣教師として日本に戻りたい」そしてその記事によるとディシェーザーは神学校で勉強の予定だがどこの神学校かはまだ決めていなかった、と。しばらくしてディシェーザーは妹のヘレン (Helen) が通っていたこともあって最終的にシアトル・パシフィック・カレッジに決まった。不思議な巡り合わせでフローレンスも同じ大学を目指すことになった。入学の直前にある本で、釈放されたディシェーザーが母親の作ったフライドチキンを食べている写真を見つけた。今、生きて帰れて今度は宣教のため日本への記事を神学校 (SPC) の大学案内で知った。学籍については、フローレンスは SPC の3年生に編入 (レノックス短大より学部入学)。SPC でフローレンスは、すぐ多くの友人に恵まれた。元気で明るい、明朗快活 (vivacious ; 人に対して)。 <TS: 事実、後日名古屋の守山区で飼うことになった犬の名前はもうひとつの単語 : frisky (子どもや犬などに対して、元気一杯の意) >。とにかくいつも前向きの性格の持ち主のフローレンスであった。ジェイクの方は新入生の1年生。有名になったジェイクは捕虜体験の説教で大忙し。1946年春、ディシェーザーとフローレンスは Youth for Christ (キリスト教青年会) の集会と一緒に出席。二人はそれから親しい間柄に。二人のロマンスの始まりであった。フローレンスは好きだとこっそり友達に打ち明けていた。ディシェーザーの母親

も結婚を勧めていたが、ディシェーザー自身は、フローレンスは人気絶頂であるし自分のことなど結婚相手には……。ところが学校行事でアメリカ・ワシントン州に隣接するカナダ・バンクーバーのビクトリア島に出かけた時（絶景のこの島のロマンの雰囲気呑まれたのか）フローレンスの友達が船のマイクを使って二人の仲を“Hello, we have a special announcement of the couple …”とやってしまった：驚きはしたもののまんざらでもなかった。しばらくして2人は本当に結婚。共通の目的で共に祈る。2人で人生を。1946年8月29日オレゴン州最大の都市ポートランドの郊外グレシャムのフリー・メソヂスト教会でゴールイン。社会は不景気でジェイクは結婚式の式服が買えなかったので2度目の父親から借りる。結婚式の一コマ。

(11)結婚

フローレンスは新婚生活と学生生活。経済的にも苦労が。肉や石鹸といった日用品も足りない。学校ではバレーボールのマネージャーに選ばれ、聖書研究会のリーダーにも選ばれる。忙しい毎日の連続。1947年病気になる、吐き気とめまいが続く。しばらくして妊娠。ジェイクの捕虜体験とフローレンスの献身と海外宣教（日本宣教）で個人や教会やキリスト教関係諸団体からの説教・講演依頼が殺到（swamp into）。こんな忙しきで父親としての家庭生活が不十分で新妻から愚痴が。妊娠しているのに、新郎はいつもあちらこちらへ。寂しい気持ち。出産の準備は何もできていない。学業も遅れに遅れる。また二人の若い女性秘書がジェイクに同行し、説教・講演活動で夫は家にいない。心配やら嫉妬心が湧き、面白くない新婚フローレンスだった。

(12)新婚家庭

1947年10月31日長男パウロが生まれ新しい喜びが。新しい張りもでき、夏休みの集中講義も取り猛勉強。ディシェーザーは相変わらず外の仕事で忙しい。こんな時医者から長男パウロは体重があまり増えていないと注意を受ける。ともかくフローレンスは子どもの養育、買い物、日本語の勉強、夫の論文のタイプ打ちと目が回る忙しさ。こんな間を縫って、彼らは、アメリカとカナダ中の支援教会からの要請で報告説教（deputation）のため、あちこちまわった。文字通り、スーツケースで生活をしているようであったが、新旧の多くの友人たちに挨拶してまわることの出来、恵まれた機会でもあった。オハイオ州では長期にわたる巡回の旅をした。ここがまるで第二の故郷だった<TS: 筆者はこの地名から捕虜収容所でのキーワードになったオハイオ（お早う）と言いたいところであるが……。後述部分参照>。事実、オハイオ州のアクロン（Akron、

1948年6月)では教会が多目的の建物を建て、それを「ディシェーザーの家」と名付けた。そこの牧師夫妻はジェイクに因んで、自分の息子にジェイクと名付け、またアクロンの市長はB25爆撃手の「ジェイク・ディシェーザーの日」の制定を公式に宣言した。

(13)

イースターも近いがふさわしい服もない。こんな時 Doolittle 出撃中イースターをサボったジェイクは罪滅ぼしだったのか、ともかく男のセンスで新妻フローレンスにイースター用の服を買ってきてくれた。気に入ったが少しスカートの方が長いと思った。しかしディシェーザーはその方が好きだった。そして二人は同時に卒業。地域の新聞や雑誌に「日本爆撃手その妻と共にシアトル・パシフィック大学で学位取る」。「爆弾ではなくバイブルを」(The Bible, Not Bombs)、「かつての爆撃機乗りが妻と一緒に日本宣教に」等々。当時まだアメリカは不景気で生活用品や買う余裕がなかった。このことを知った本当に多くの人達からの援助を受けた。そして1948年8月7日ジェイクがフリー・メソディスト教会の正式牧師として按手礼(ordination)を受けた。

(14) Doolittle 作戦

この作戦に続く具体的な展開は「攻撃」「捕虜」「憎悪」「葛藤」「告白」「献身」の流れになる。はじめにアメリカサイドからの作戦を中心に見てみたい。このリベンジミッション・ミッションの指揮官 Doolittle の考えたことは:できるだけ大きな爆撃機を飛ばす。しかし航続距離が問題。だったら空母で運ぶ。問題は空母の滑走路の長さ。飛び立てない。陸軍機の爆撃機 B25 を使ってみる。訓練でぎりぎり1フィート(約30センチ)だけの余裕で発進。しかし着艦は出来ない。ワンウェイである。<TS: こんな奇想天外の発想の持ち主が、規模は違いますが、日本にもいた。ここで藤田信雄の史実を一部挿入する>。潜水艦に飛行機をばらして積み、陸地に近いところで浮上し、急遽、組み立てアメリカ本土を単機で攻撃。爆弾を落として山火事を発生させる作戦。前日、雨が降ったので火は広がらなかったが、初めてのアメリカ本土空襲。終戦後レーガン大統領がその勇気を気に入り、自分の執務室の星条旗を贈り、攻撃地オレゴン州に招待した。畏かもしれないと恐る恐る藤田はアメリカへ。しかし大歓迎だった。帰国後、返礼にアメリカの青年を日本に招待。この藤田信雄中尉の実話を倉田耕一が『アメリカ本土を爆撃した男』と題して発行。日米とも奇抜な男はいるものだ。

(15)

記述を Doolittle に戻す、艦隊規模は空母 Hornet が DeShazer の飛行機 #16。他空母 Enterprise、2 Cruiser (巡洋艦)、2 給油艦、6 Destroyer (駆逐艦)。

隊員はどういう戦い方か知らされないまま1942年4月1日に出航。4月2日、洋上で日本本土攻撃を知らされる。そして4/17になってホーネットで具体的な攻撃を知らされる。その間「イースターの集会」が海上で持たれた。ディシージャーは興味ないので顔も出さない。艦隊は進み、空母の日本接近予定海域4,500海里(約840キロ)が作戦。しかし2/3の6500海里(1,200キロ)のところで見えられてしまう。その日は雨と突風。このような海域に日本の小さい船がいるとは思ってもみなかった。このカツオやマグロ釣り船(改造)の小さな“艦船”は目標が小さいし、海のうねりのため砲弾1,000発で(大きな1戦艦を撃沈する火力)やっつて撃沈。ともかく見えられてしまったので、この日本本土奇襲攻撃をやめ、引き返すか、日本攻撃を遠いこの位置から即発進か。選んだのは後者。雨風の中での混乱と混雑。空母の向きは横波を避け波の方向。よって滑走路はシーソーで上下に大揺れ。大揺れの母艦そのものに加え、混み合っとうまく出られない。しかもディシージャーの飛行機の風防ガラスにホール(破損)が見つかった。応急処置の布を詰め、とにかく飛んだ。飛び立てたが実情。編隊を組むのに待っていると燃料を使うので単独で飛行。空母はここに留まると日本軍のターゲットになってしまう。空母を含め艦隊は全速力でアメリカに引きかえす。当初、攻撃は夜が予定であったが、途中で見えられ日程が狂う。ターゲットは軍需施設が建前であったが、現実にはJAPに対する憎しみが沸点を超えていた攻撃隊は…。Hey you, Jap! Dolittleの#16機のあだ名は文字通り、“The Bat Out of Hell”(地獄の蝙蝠)。遅れてディシージャーが発進(日本上空からの通信は傍受されるので攻撃地に着くまでは味方同士の交信厳禁)。途中で日本軍に見つかったり、暴風雨で編隊は組めなくなったので攻撃は自分の判断、フレキシブルなやり方になった。速度が上がり、風防ガラス(フレキシブルグラス)の亀裂をコートで塞いだが、風のため飛んでいってしまった。日本が勝っていた時期なので漁船の漁師も手を振るし、本土でも味方と思い手を振る。昼間の攻撃なのでよく見える。簡単に市民も機銃掃射。名古屋市東区の三菱の軍需施設はもとより学校も空爆。「赦し」の公演されたナゴヤドームに隣接する名古屋東文化小劇場は東区)。貯蔵オイルタンクに焼夷弾。攻撃。途中、何度も味方機と思い手を振る人々も。最初はガスタンク。炎上。次は飛行機工場。炎上。Hey you, Jap. 高射砲が来たので離れ海の方へ。また漁師も手を振る。数回機関銃で撃つ。近くの漁船の男たちも味方の飛行機と思いいこでも手を振る。楽しみながら(trigger-happy)機関銃で撃った。だんだん風防窓の壊れがひどくなった。風防ガラスの損傷により他機より燃料を消耗。天気もだんだん悪くなってくる。かなり燃料を余分に消耗した。でもなかなか止められない。

(16) 日米では

名古屋初空襲は終戦間近の時ではなく、真珠湾後 100 日あまり後の 1942 年 4 月 18 日。あまり知られていない史実。アメリカでは広島は真珠湾のリベンジュ。この正当化理論が強いので、この史実は、認めたくないのが心情。日本は日本本土がすぐさま攻撃されるのは“恥”だったし、「名古屋で小被害、敵機来襲に国土防衛全し」と 1942 年 4 月 19 日「東京日日新聞」は報道。その後長い年月話題にも上っていなかった。しかし戦後 70、75 年たち日本でも 2017 年 8 月 15 日にドゥーリトルについて「NHK スペシャル」で『ふたりの贖罪』と題して映画化され、一般放映された。その二人は真珠湾リベンジの爆撃手と真珠湾攻撃隊長の淵田美津雄。

(17)

ディシューザー機は中国に入ったところで燃料が無くなる。燃料尽きて落下傘で脱出 (bail out : 空軍の現場用語)。ディシューザーの 16 番機墜落、炎上。作戦は中国大陸の日本軍未占領地の内陸が着陸予定地だった。そこでアメリカが支援する蒋介石軍に保護を要請。大きな陸軍機 B25 で予定外に 500 キロも余分に飛んで日本本土。そして憎悪の攻撃をやり過ぎ、中国へ向かう。途中、日本軍占領地の上空で燃料切れ。墜落か不時着か落下傘かが選択肢。真夜中、We gotta jump. 後日談であるが、ディシューザーの母は息子の出征後、近所の人達を誘って祈祷会をほぼ毎日持っていた。この日は一人で母は徹夜で祈っていた。アメリカ時間で午前6時頃。心が合わされ、祈りが合わされ、母の熱心な徹夜の祈りの時は、ディシューザーが落下傘で飛び降りた丁度その時間だった、と聞く。母のハルダは胸騒ぎがして早朝起きて祈っていた。奇妙な気持ちに襲われ、ちょうど下へ、下へ、それの中でさらに下へ落ちていく感じがした。苦しくなり、その重苦しい苦しさから神に祈り、思わず叫んだ。突然この重荷は取り去られ、もう一度眠りについた。今までにない経験であった。その時愛する息子が落下傘での瞬間とは思っていなかった。アメリカでの放送はただ日本に爆弾を落とした、とのラジオ放送があったのみ。

(18) 落下傘で (bail out)そして捕虜に

ディシューザーは落下傘で飛び降り助かった。祈りは聞かれ、それは主の守りと試練の場と恵みの場が神の遠大な計画だった、とディシューザーはしみじみと述懐する。落下傘での墓地への着地で胸を打って痛みがある。肋骨も折れたに違いない。降りたところはぬかるみ。とにかく落下傘の紐を切り、自由に。仲間への合図のためピストルを数発。応答なし。ディシューザーは雨の中で近くの寺を見つけ、次の日の朝まで寝た。目覚めて西の方

に向かって歩き出した。人に出会った。ここにいる人たちは中国人？日本人？よく分からなかった。

(19)

しばらくすると軍服を着た人たちが来た。身を守るため A-45 のピストルを自分は持っている。銃を持った兵士がやって来たので「中国人か日本人か」叫んだ。相手は片言の英語でピストルをこちらに持たせてくれと。しばらく行くと野営キャンプに。お前は日本軍に捕まったのだと半分日本人、半分ポルトガル人通訳(レメディオス:Caesar Luis dos Remedios)が言った。しばらくして他の場所へ連れていかれた。すでに#16 番機の戦友4人(バー、ハイト、ファーロー、スパッツ)が捕まっていた。仲間に会えてよかった。瞬間の感動も冷めやらぬその時、写真を撮られた。尋問が続く。ディシェーザーは「ジュネーブ条約」に従い名前と階級を告げたが、後は何も答えない。「お前、よかったなー、俺はこのあたりでは一番親切な人間。だから正直に話せ」と日本兵。最初の3つ質問:「Hornet はどう発音するのか。これで攻撃するのか。Doolittle はお前の指揮官か」。聞き方は、現代の裁判所での反対尋問の手法。解釈ではなく事実関係。3つとも“I won't talk.”(答えられない)。明日首切りにしてもらえば、お前からにとってそれは名誉なこと(the great honor of cutting your head off)。日本兵は「ワッ、ハッ、ハッ」。戦友の Barr は赤毛の大男、皆で見に来る。からかって「何を食ったらこうなるか」がからかい半分の尋問。また日本兵は「ワッ、ハッ、ハッ」。アメリカが勝ったら、お前の「首」ないぞ。日本軍は最後の一人まで戦って最後に天皇が死ぬ。

(20)

あちこちに移動:東京へそして長崎に1日。そして上海(名うての独房: Bridge House、広さは270センチx150センチ。食事の時を除いて電灯無し)。1943年4月に南京に連れていかれ、通訳を通して毎日尋問。しばらくたって日本軍の懐柔政策で看守と捕虜が相撲をとることに。日本人が勝つと“日本、万歳”“日本、万歳”、一緒に万歳をしないと“びんた”がくる。そしていつも決まり文句:我々には大和魂があって最後の一人になっても戦う。相撲のたびにアメリカが勝てば捕虜は首切りの荣誉が与えられる「ワッ、ハッ、ハッ」。アメリカ人捕虜全員の心の中は、どこにいてもありとあらゆる悪夢(nightmare)が頭の中をぐるぐるまわっている。いつか呼び出されて・・・そしてそこには殺害意思を持った銃殺隊が・・・。

(21)戦友たち

1942年10月15日、3人の死刑:ファーロー(#16機)、スパッツ(#16機)、ホルムメート(#6機)。日本側の判決はディシェーザー(#16機)、バー(#

16機)、ハイト(#16機)、メーダー(#6機)、ニールセン(#6機)も死刑が決定。しかし天皇の“特別な計らい”があって終身刑。ディシェーザーは過去の日本軍のやり方を聞いていたので自分も殺されると思っていた。生かされていて本当にホッとした。不思議な喜びさえ感じた。しかし生きて自由の身になることは不可能、といつも考えていた。もしアメリカが勝ったら殺されると思っていたから。独房に戻り、一つ二つの嬉しかったことを思い出す。この危険な任務に選ばれたこと、またアメリカの皆がこの報復の勇気を称えてくれる。あの卑怯な不意打ちに対して敵を地獄に落とそうとする勇気を。これらのことを独房の中で思い起こしていた。今やディシェーザーは自分自身は、もう既に地獄に住んでいると感じていた。冬は寒さに震えながら、思い起こせるものは全て思い出していた。子ども時代、友達、学校、家族。腕白だった分、面白い思い出が多かった。しかし、それも寒さのためだんだん考えることさえ出来なくなってきた。楽しいことは、看守の目を盗み通訳が他の捕虜の様子を時折漏らしてくれること。すぐ看守が飛んできて「やめろ」。さらにこの通訳は看守の食べ物からスプーンに一匙失敬してこっそり増量、たぶん見つかったらむち打ちの刑か、拷問が待っているに違いない。はらはらしながら成り行きに任せていた。

(22) 捕虜収容所

しばらくしたら今度は独房へ。ミルクが出され、それから手錠をかけられた。移動があった。東京で尋問。また中国へ戻される。再び独房へ。一日明けるとネズミが来た。平気でこぼれたものを食べていた。そしてネズミどもは、大胆不敵に指と足をかじりにやって来る。俺たちは食べ物でないとポケットに手を入れ身構える。わらべ歌(Rain, Rain, Go Away)の替え歌が一時の気晴らし：“Rats, Rats, Go Away.” 間もなく次の拷問が始まる。しばらくは元気だったディシェーザー。Fuck you, Jap! そして Shit! (糞!) がいつものディシェーザーの罵り。この言葉が生きている証拠と思っていたし、自信過剰の元気は俺の唯一のとりえ。留まることを知らない日課は尋問、そして殴られ、また尋問され、そして殴られるのが毎日の繰り返し。過酷な拷問も待っている。日本人に対する憎悪が日増しに増幅する。いつかは日本人をなぶり者にしてやる、この呪いが地獄の俺の祈りだ。俺の飛行機はあだ名も地獄の蝙蝠だ(The Bat in Hell)。出てくる言葉は呪いのみ。そのうちにジャップをもつとなぶり者にしてやる、と。

(23)

一方、日本側では、戦争の指揮官であった杉山大将はこのドゥーリトルの無差別攻撃に激怒。生き残った18人中8人に死刑を。「捕虜」か「犯罪者」か。

前例がない。時の首相東条は法を作った。処遇をめぐるもめていたという。その期間も尋問続いていた。半端ではない連続 70 日間の拷問もあった。鼻と口にタオルをかけられ水攻め。吊り下げられ、降ろされると足かせをはめられた。結局 3 人（#16からは、ファーローとスパッツ、#6からはホールメート）は処刑された。残りほとんど栄養失調。1943 年の秋にメーダーが赤痢に。だんだん痩せていき極度の衰弱。掃除で外に出た時ニールセンはメーダーに調子を聞く。数人の看守が来て“しゃべるな”ニールセンは無視。看守は烈火のごとくに。しかし無視してメーダーと話す。看守はニールセンにビンタを。咳払いをしてニールセンは看守の顔を殴る。ニールセンとメーダーは同じ # 6 機仲間。看守たちは“スー”と息を吸い、ニールセンを軍刀の鞘で殴ろうとしたが、上手にかわす。一人の看守が止めに入り、それぞれ独房に戻される。後、何も起こらなかった。他の看守たちは軍人ニールセンの勇気が気に入っていたのかもしれない。不思議なことにその勇気の故か、他の看守の前で起こった故なのか、また当の看守は、“ばつ”が悪かったのか、その日は何も起こらなかった。その年の冬に（12月）メーダーは赤痢で死んだ。メーダーは落下傘で怪我をした仲間を担いで、自分も足をひきずりながら助けてくれた俺たちのクリスチャンのナイス・ガイ。俺はクリスチャンではないが、メーダーは心から尊敬するジェントルマン。クリスチャンの行いを証しという。後日ディシェーザーはクリスチャンは誰か他のクリスチャンの生き方を見て心に残る衝撃を受けると経験談を語る。このことは後に聖書を通読した時にその出来事を発見。それはかつてクリスチャンを迫害していたサウロ（後にパウロと呼ばれる）はステパノが殺される現場を見ていた「証人たちは、自分たちの上着をサウロという青年の足元に置いた。こうして彼らがステパノに石を投げつけていると、ステパノは主を呼んで言った『主イエスよ、わたしの霊をお受けください』そしてひざまずいて大声で叫んだ。『主よこの罪を彼らに負わせないでください。』こう言って、彼は眠りについた」（使徒の働き 7:58 b - 60）。メーダーの最後はステパノのそれと重なり合った。この時は心の深い意味は分からなかったが、自分の目の前で起こったことは事実として心の記憶として強烈に残った。

(24)

一人の赤痢死により若干、待遇改善。看守も若干フレンドリーに、しかしすぐ冷酷に。するとディシェーザーはあったものを投げつけ Go get it, you Jap. (とってこい、ジャップ)。くたばって失せろ (Go and jump in the lake.) の繰り返し。独房生活が続くと正常に考えることが出来なくなる。それぞれの独房か

ら呻きと叫びが聞こえてくる。騒ぐことで看守からまた蹴られ、殴られる。毎日がこんな繰り返し。ある時看守の目を盗み、小窓のある天井に両足と両手を両側の壁に押し当てて何とかよじ登った。そしてここからは広々とした田舎の風景が一望できた。この唯一の気晴らしは、この時は気が付かなかったが、信仰を持ってからは新しい世界を垣間見せてくれた神の導きのしるしと感謝。苦難の中にも神の摂理があった。マラキ書 3:10 にあるように「天の窓」が思いがけない形で与えられたのだ。こんな神の配慮がその時は隠されてはいたが、神はどんな時にも働いておられる。後の人生を象徴するかのような聖書の言葉を噛みしめることに、と回顧。それは「事を隠すのは神の誉れ」(箴言 25:2)。

(25)

冬は極寒のためハイトは3か月病気に。高熱で普通でない精神状態が春まで続く。独房の掃除のちょっとした時間、外に出され仲間に会う。“Hello”と声をかけると看守が怒鳴り“しゃべるな”。こんな捕虜生活の中、ディシェンザーもついに病気に。赤痢。ひどいおできも。数えてみれば75箇所。真剣にいよいよ死を自覚し始める。良くなる兆しは感じられない。毎日が長い一日。「死」そのものは拷問の連続からの歓迎する“避けどころ”と思ったことも何度も。死が“逃れの町”だったと信仰を持ってからディシェンザーはしみじみ述懐。“べんじょ”という日本語を知った。それから“けんべいたい”という日本語も。“こらー”は聞きなれた日本語。突然看守が入って来て、「こらー」と怒鳴り声を聞くのが毎日の日課。そして毎日虱に悩まされる。もう一つの気晴らしは何匹の虱を爪で殺したかを勘定すること。移動した南京の状態は、虱はいなかったが、1944年の夏は酷暑。天井が低いので日中は限界を超えている。夜も暑く換気設備は当然無し。そして1944-45年の冬は冬で極寒。12月の雪は3月まで残っていた。体を温めるため2、3週間時々外で運動。スリッパをはいて2、3回独房のある建物を歩いて回る。歩きにくかったし、温かくならないので命令を無視して裸足で。看守は激怒。運動は中止で独房に戻る。雪で汚れた足を水で流すのは厳禁、「雪で洗ってこい」と。バーは無視してそのまま戻ろうとした。激怒した看守は胸倉をつかんだ。バーは渾身の力で看守のみぞおちを殴る。10人の看守がとんできて、バーを袋叩きに。バーも反撃したがダメだった。看守に抑えられ戻される。バーは手足を縛られ、首にも縄がかけられた。バーは徐々にその締め付けを増し加えられ、その縄の苦痛で叫び声をあげる。その拷問の叫びは他の捕虜にもよく聞こえた。

(26)

しかし、このことは一人の親切な看守が他の看守を説得し一時間の拷問ですんだ。他の看守は“お前は運のいい奴だ、いつもはこういった“訓練”は数時間が普通。“ある日、外で草むしりの時、メーダーのしみじみ言った言葉はイエス・キリストは救い主でこの戦争を最後は神が止める。ディシェーザーはその時何のことか分からなかった。これは後になって、赤痢で瀕死のメーダーを通して神が語ってくれた自分に対する最後の言葉と受け止めた。独房なので仲間の詳しい様子は分からないが、ある時、金槌の音が聞こえたので、またこっそり天井に這い登る、上の小窓から日本兵が大きな箱を作っているのが見えた。花と本（後で聖書と分かる）があった。しばらくしてメーダーの亡骸が。独房で病死したので、日本の上層部は半分日本人、半分ポルトガル人通訳に丁寧に葬れと指令を出したらしい。

(27)

信仰厚かったメーダーの死は犠牲の死だった。次の朝食にはパンやジャムそして卵とミルクが出た。その後、今まで一日2回の配給が3回できるようになった。1943-44年のことであった。ディシェーザーも少し体力が回復。独房のドアも少し換気ができるつくり改造。しかし、毎日ただ座っているだけ。ホームシック、希望無し、空腹。ある時トイレで吐いた時、“げーげー”の声（顔を突っ込むように）で隣の独房のトイレがパイプで繋がっていることを発見。見つからないように吐くふりをして、素早い会話が成立。この上もない至福の通じ合うコミュニケーションになった。後日談は、日本に来て TOTO 便器に気づきこの“トイレ・トーク”の幸せを噛みしめた、と。

(28) 身体の飢えが霊的な飢え(渇き)に

クリスチャンのメーダーの最後の姿を見て「フッ」と思ったことは、何か無性に他の世界の存在。戦友メーダーは自分にはない素晴らしい世界に生きていたことは否定できない事実。そういえば自分も小さい頃母に連れられて行った教会があった。そうだ、母親が熱心に読んでいた聖書に何かあるかもしれないと思い、聖書を読みたい思いが強くなり、毎日看守に訴え始める。熱でこいつ狂ったんかと思っただが、ひょっとして、聖書でも読んだら少しは大人しくなるかと思い、天皇の“恩赦”の一環として3週間の期限付きでメーダーの葬式で使った旧新約聖書(モファット訳)が与えられた。その3週間むさぼるように無我夢中で6回通読。期間限定ではあったが聖書は納得しながらよく読める。本当に次から次へとよく読める。聖書はこんなに読める書物とは思わなかった。

(29) 聖書の使信と人間ディシェーザー

獄中生活のある日、南京で読んで暗記した聖書の一節が心に浮かんだ：「もしからし種ほどの信仰があるなら、この山に『ここからあそこへ移れ』と言えば移ります。あなたがたにできないことは何もありません」(マタイの福音書 17:20b)。ディシェーザーはどんな小さなからし種の信心でも、正直に神に願えば自分を元気にしてくれるかもしれないと思った。自分の生命はあまりないと絶望した状態なのに、いやそれだからか、聖書の言葉が次々出てくる。読んだ聖書の言葉にあまりにも圧倒され、単純に信仰してみようと思った。そして自分一人で、遂に 1944 年 6 月 8 日に決心。牢屋 (jail) で日にちはよく分からなかったのが、ここは自分で決心した日時を決めた (神様お許しください)。「あなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせと信じるなら、あなたは救われるからです」(ローマ人への手紙 10:9)。この箇所は何度も読んだ箇所であったが、この日はこの言葉で自分の人生に何か大きな力を感じた。「決済」するのは神だから、これは神からの力だと感じた。そしてたましいの平安も与えられたと思った。さらにはキリストの故に許せないことも許すのだと確信すら与えられた。その時不思議と心が熱くなり、心は喜びに満たされた。私はついに救われたのだ。私の罪は許され、神の性質にあずかる者とされたと思った、「その栄光と栄誉を通して、尊く大いなる約束が私たちに与えられています」(ペテロの手紙 第二 1:4)。何か圧倒する神からの迫りによって、自分を神に明け渡したい気持ちにもなった。しかし本当は、自分取るに足らない者で、罪深いものとも感じていたが、また次の瞬間聖書のことばが浮かんでくる、「このキリストにあって、私たちはその血による贖い、背きの罪の赦しを受けています。これは神の豊かな恵みによることです」(エペソ人への手紙 1:7)。そう、神はこの罪人を「贖(買)い取って」くれたのだ。血での支払いが買い取り代金、代価。贖罪 (redemption) 信仰の構造の大切な一端を教えられたのだった。

(30)

自分はイエス・キリスト血によって神に贖われた存在との聖書の言葉に励まされた、根底から。自分はもはや自分のものではなく永遠に神のもの。後神学校でクリスチャンというのはキリストの者という意味だと知る「このアンティオケで初めて、弟子たちがクリスチャンと呼ばれるようになった」(使徒行伝 11:26 b、口語訳)。飢え、極寒の環境はもはや私を苦しめるものではなくなってきた。過ぎ去っていくものだから。神が自分を贖ってくれたので、死さえも私に恐怖とは思わなくなったのだ。天では痛みも苦しみも孤独もない。永遠に喜びで満たされた完全な状態

である。神の子であるイエスのようになれればなろう (Imitatione Christi) と神様と約束した。永遠にあずかる者 (partaker) としてこの日から私はすべてのことを知るようになるかもしれない。これは自暴自棄の気分延長ではなく、実行する神の約束であるので、どんな時にも働かれる神が必ず自分を変え、何かを成してくれる「主と同じ形に姿を変えられていきます (英文の下線は筆者) と受け身の進行形 (~we are being transformed into the same likeness as himself.)」(II Corinthians 3:18) との期待が確信に変わった。しかし、これで外の環境は変わったわけではない。同じ独房に、同じ看守がいて、仲間とは話せないし、相変わらずひどい食べ物の毎日。しかし今、内なる人は違う。「たとえ外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています」(コリント人への手紙 第二 4:16b)。自分では考えられないような確信が聖書のこの言葉で与えられた。これは神から一方的に与えられたものなので、自分の思いや努力とは関係ないこと。このように与えられた圧倒的な「恵み: grace」の前に、今度は、以前の自分が思い起こされてきた。この時自分の今までの人生の総決算を試みようと思った。

(31)告白

以前、自分は自制心がなかったし、意志薄弱。人に良くしなさいと言われてもそうしたことがなかったし、我が儘一杯に生きてきた。両親にも反抗的だったし、神にも不従順、自分の良心にも正直でなかった。これは聖書を通して罪の結果ということが分かった。こんな懺悔で自分を神に明け渡した時、神様から一方的な恵みを与えられ、自分の過去の罪を赦してもらったのだ。それは自分の努力や修行ではなく、与えられた恵みの世界。しかしジェイクが本当にこれらの力を充分に得るためには、いくつもの訓練を通らなければならなかった。と同時に、心の中にとてつもない力が与えられたと告白することが出来た、「その名を信じた人々には、神の子となる特権をお与になった」(ヨハネの福音書 1:12b)。ディシェーザーはこんな経緯を経て徐々に、しかし確実に内面が変わっていった。

(32)

収容所の中で、回心する前の自分の態度や感情も走馬灯のように思い起こされてきた。看守が早く部屋を出ると命令されると“とっとと失せろ”と怒鳴っていた。後の仕打ちはどうなるか分かっていたが。今にみている、JAP、ただでは済まさないぞ。独房の中に戻されビンタを食らった。足で看守のみぞおちを蹴とばしたこともあった。日本刀で思い切り殴られた。破れかぶれで雑巾バケツの水を看守に浴びせた。この反抗で今晚

断末魔の拷問か、首を斬られるかと思った。しかし不思議に生かされていた。何か不思議な力が働いている。これが聖霊の働きと実感。そしてこのことは否定しても否定しきれない。こんな風に生きていることが不思議に思えた。

(33)新しい認識に (“divine”epistemology)

今度は何かをしようと思った。一番難しい「敵を愛せよ」とのイエスの教えの実行。これは生易しいことではないし、きれいごとではない。心のどこかに自分は軍人であるので実行力があると自負もしていた。この言葉の背後のことを考えていた。聖書を読むと「敵を愛せよ」と命令がある。従うよう言われる。もしイエスを信じるといふならば、神に従っていくことになる。もしイエスに服従するなら全知全能の神は人に実行可能の力が与えられるはず。こんなことを思い巡らしていた。しばらくの期間 (timewise) この実践で悩んだ。正直になればなる程、次から次へくだらないことが出てくる。徐々に自分の内にある根源的な罪の存在を示された。しかし、その罪をイエス・キリストが身代わりに負ってくださった十字架の死によって、自分は神から完全に赦しと与えられた、との告白にだんだん変わっていった。この救いと約束が分かった時、自分は本当に自由になった。何物にもとらわれない信仰。敵や敵意の中で「愛を示す」<愛を粗末にしない>信仰に変わっていくことに気が付き始めた。

(34)

しかし、この確信を具体的に実行に移すのは至難の業、「自分の肉のうちに、善が住んでいないことを知っています。私には、良いことをしたいという願いがいつもあるのに、実行できないからです」(ローマ人の手紙 7:18)。このことをめざすことが出来るのは、自分ではなく、聖書がいつている聖霊の働きだと悟った。そして今自分はその聖霊に導かれて動き出すのだ。聖霊なる神が本当に働かれるのだ。捕虜になり、聖書を読み、暗記もした。死を目前にしてほんの少しの信仰しかないとき正直に告白した時、神様は力を与えてくれるのだ。聖書は一字一句本当に読みやすいし心にも聖霊によって意味が与えられよく解るように聖霊の導きがある。聖書の言葉と聖霊の働きは別物ではない。いつも一致している。この信仰でやってみるのだと決心し、このことは聖霊なる神が与えてくれるものだとしきり切った。長時間神に祈り、とうとう朝になってしまった。心臓は今にでも止まってしまうぐらい弱っていたが、人の心臓を動かしているその力の源は神様だと身をもって確信した。確かに自分の思いを動かしているのは自分の力であるが、実は、その力そのものは、他の大

きな力によってがっちり捉えられている確信に変わった「～ただ捕えようとして追い求めているのである。そうするのは、キリスト・イエスによって捕えられているからである」(ピリピ人への手紙 3:12b、口語訳)。聖霊がこのように語りかけてくれたのだと確信できた。だから“どんな状況でもお前は全く自由なのだよ、「兄弟たち。あなたがたは自由を与えられるために召されたのです」(ガラテア人の手紙 5:13a)。聖書を通してこの聖霊の働きに気付かされた。祈りとはこんな自分と力をくれる聖霊の神との語り合いと悟った。

(35) 更なる気付き

思い起こせば、三週間聖書全部を数回むさぼるように読んで暗記に努めた。今数々の言葉が自分の心に洪水のように迫って来た。その中で聖書の厳しさも直面した、「信仰から出ていないことは、みな罪です」(ローマ人の手紙 14:23b)。正直になってお前の手を清めよ、ふらふらする二心の罪人よ。優柔不断のものよ。もっと嘆き苦しめ。徹底的に、「あなたがたは、罪と戦って、まだ血を流すまで抵抗したことはありません」(ヘブル人の手紙 12:4)。厳格な神を前にしたら罪深い自分は、本心は「分かるけど無理です」と叫んでいた。しかしその時、まさにその瞬間、実は私もお前の呻きを一緒に受け止め、傍らにいたのだよ、との主の声が心にはっきりと聞こえてきた。聖書のことばと共に、永遠にいてくださる助け主がいるのだ。「I will ask the Father to give you another Helper to be with you forever, even the Spirit of truth」：父はもう一人の助け主をお与えくださり、その助け主がいつまでも、あなたがたとともにいるようにして下さいます。この方は真理の御霊です(ヨハネの福音書 14:16b-17a)。

(36)

このような信仰的な内面の気付きについては世界中の信仰者に共通する。著者はデ師夫妻が日本に向かう船中で学んだという日本のキリスト教迫害史について後日話し合う機会があった。<TS: その時遠藤周作の『沈黙』を話題にしてみた。それはキリシタンの棄教のため、拷問による迫害が続き苦しむキリシタン。神父は自分が神父であるためにキリシタンの拷問の激しさが倍加する。苦痛と激痛を前に、踏み絵に対する神父の苦渋の決断。踏んでもいい、と微かな神の声を聴く。私は踏まれるためにこの世に来たのだよ、と>。苦しみについては思うこと、感じることを率直に神に向かって、疑問であれ、愚痴であれ、悪態であれ、まったく愚直に父なる神に対して「アバ父」思っきり叫べばいい。正直でありさえすれば、神に対する叫びは許されている、「あなたがたが子で

あるので、神は『アバ父よ』と叫ぶ御子の御霊を、私たちの心に遣わされました」(ガラテアへの人の手紙 4:6)、「この御霊によって、私たちは『アバ父』と呼びます」(ローマ人への手紙 8:15b)。いや、むしろそうして神に向かい合って叫んだ方がいい。なぜならイエス・キリストはそれら全部を担って、それらを十字架に“確と”持っていつてくれるから。こんな風に聖書を通して、聖霊を通して、こんな風に神からのメッセージを聴いたと確信。

(37)

徹しきった時に神が働く。神の前に正直に、また謙虚であれ。心の苦難と神への従順の関係は確信に導かれた。しかし戦争という大きな社会的な正義感なるものが首をもたげる。先に攻撃を仕掛けてた日本。しかも奇襲。そのことで自分は敵の方が戦況優位の時、死ぬ覚悟で同胞のためと志願した。日本本土の爆撃は単なる社会的ヒロイズムだったのか。思索が思案になり、その思案が思索を呼ぶ。しかし今ここでの現実はどうしたらいいのか。今のこの状況ただ中で。何をしたらいいのか。結局、早かれ遅かれ死が待っているのが厳粛な事実。死神(昔学校で聞いた Grim Reaper: 恐怖の刈り取り人、Father Time: 大鎌と砂時計の翁等々)がちらつく。確信と不安の繰り返しにまだ延々と心の軋轢と葛藤が続く。

(38) その葛藤から

心の浮き沈みの中最終的には「敵を愛せよ」の背景となっている聖書の箇所がズシリと心の奥深いところで響いている。それはコリント人への手紙 第一 13:4-7:「愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、苛立たず、人がした悪を心に留めず、不正を喜ばずに、真理を喜びます。すべてを耐え、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを忍びます」。しかし、本当のところ自分は敵を愛せない。それどころか卑怯な日本人を皆殺しにしてやりたい気持ちが心の奥底に残っている。敵を、ああ神様、敵を滅ぼしてくださいと本音を正直に、本当に正直に叫び続けたあの旧約のダビデの気持ちがよく分かる。自分も全く「詩篇」のダビデに同感。そう俺も本当は、あのダビデかも。しかし、次の瞬間、「何回も、何回も迷って愚痴っているお前は、本当はそうでない自分に変わりたいと思っているのだろう、お前の内に隠れている本音や本心を私は見逃してはいないんだよ」と神の語りかけをはっきりと聴く。だから正直な気持ちで心ゆくまで私と向かい合ってごらん。すでに、お前はわたしと十二分やり合ったのから、向かい合うだけではなく、今度は向かい“会って”ごらん、と。心の奥底も神は完全に見ておられるの

だ。すべてを見透かす神に対して、心の底がえぐり取られる感覚が走り、自分でも分からないくらい“無意識”で祈っていた。神様から気付かされたこの本質を今度こそ獄屋の実質で変えられないようにと祈っていた。

(39)

こんな気持ちで跪いてドアのところで涙と共に祈っていた時、すぐ看守が来て大声で、壁に向き合った椅子に戻るよう怒鳴り、命令した。ドアを見ることさえ許されていない規則。命令無視で、後で何が起るかの心配より、ともかくやってみよう。祈り続けようと心に決める。ニールセンも信仰深いメーダーのため勇敢に反抗した。看守の目よりも良心の声に従った方がいい。神がそのようにしなさいと示してくれた祈りで、今、自分にも気付かなかった心の内奥を見透かされた自分に、その神、その愛の神に完全に圧倒されているのだから、神の前に正直に素直になり切ろう。看守が他の5,6人の看守と一緒に来た。今度は怒鳴ったりなぐったりしないで然然としていた。医者がやって来た。腕をまくって注射をして一人にされた。イエス・キリストが自分の傍にいてくれたことを実感した。夕飯の時間が来てびっくりしたのはミルクとゆで卵とおいしいパンと栄養のあるスープが運ばれてきたことだった。精神錯乱をきたしたと思われたのかもしれない。神のこの素晴らしい働きに涙が出るのと同時に何か笑ってしまう複雑の体験であった。すれ違う状況判断で“*He was pleasantly surprised.*”。

(40) 行きつ戻りつ (Collision)

今度は突然連れ出され「早く、はやく」出る。少しドアが開き一步前に。この時看守はドアを思い切り閉め足が挟まる。さらに軍靴の鉤釘で思いきり挟まった足を蹴飛ばす。この仕打ちに怒りと憎しみが煮えたぐってくる。足の骨が折れた様な痛みと苦痛。許せない感情がまた髣髴と心に沸いてくるが、今度はすぐ聖書を通して「敵を愛せよ」の具体的な言葉が交差し自分を圧倒する。冷静になろうと思ひ、心を入れ替え新しいあり方を始めようとした瞬間がこれか、との悪態の感情は、この一番解決できていない自分の弱さ、そして優柔不断。しかしこれは神から自分は試されていると転換の信仰なのだ。聖霊が働く時に試練や葛藤がでてくる。このことは心の奥底に愛せない弱さの解決のため「許せない、赦せないその敵を愛せよ」との命令が神から示されたのだ、「はっきりしろ」と聖書は逆転を宣言する、「私の力は弱さの内に完全に現れるからである」(コリント人への手紙 第二 12:9b)。

(41) 最後の決心

こんな信仰問答の行き来を通らされ、ジェイクは、今度は理性的に語り始める。私は以前大変な状況の中で美しい態度を保っている人を見てきた。すべての人がコリント 13 章のような忍耐強く、親切で、寛容な愛を持っているかどうかは知らない。しかし「互いに愛し合いなさい」を“戒め”として人間に与えられているので本当にそうすることは可能だと思えるようになってきた。最低義務としてでもいい。我々の側としてはその義務に努め、そのように励むのが大切。これは今日という義務論〈用語 deontology は筆者の TS〉。確かに神から自分に従ってきなさいとの義務のような命令がある。要は聖書が言っている「敵を愛せよ」は命令。命令は無視するか従うかどちら。神を信じることは命令に従うことが義務と確信し、信じて明日からこの義務を今度は、今度こそは、絶対に実践しようと決心した。神様、結局こんな私です、憐れんでください、神様、アバ父よ、働いてください！ドアの苦しみを神に従うという全く“新しいドア”を開く転機にしてください。この期待に満ちた“叫び”は、自分が憎しみと憎悪を感じているあの看守に何かを実行しようと意欲のエネルギーに変わっていった。

(42) “オハイオ=おはいお”ごぞいます (Just do it, after all was said and done.)

考えに考え、そして祈り祈り、挨拶から始めるよう導かれる。“Ohio おはいお”と看守に。驚いた看守はこの囚人は、また頭がおかしくなったと思っただけ。しかし一週間この「おはよう」を朝も昼も夜もし続けた。ある朝その看守は独房のところにきて日本語で何かを言った。打ち解けて。その頃ジェイクは少し日本語が分かるようになっていたので、日本語で家族は何人ですかと聞いた。驚いた看守は気を良くしたようであった。ある朝その看守は何か祈るような足どりで、何かを唱えていた。小さい時母を亡くし、母に祈るのが彼の信心と分かった。こんなことがあって以来フレンドリーになり、怒鳴ったり、手荒にしなくなった。ある時サツマイモを差し入れてくれた。敵にやさしく振る舞うことで、こんな形での良き報いだった。またある時はイチジクとお菓子もくれた。ジェイクは神様のこういったやり方は最善のやり方だと確信する。That's Jesus' way. やってみて分かったことは、敵の状態から友情を作り出すことは不可能ではないこと。本当は容易いこと、何故なら神が働いているから。イエスの理想は実現できない理想ではないと感ずることが出来た。神が戒めとして約束したのであるから、それは思わぬ方法で必ず実現する (God's way is the best way)。人間は何か他の方法でいろいろやってみて、かえって混乱状態を作り出しているのが現実かも。「すべてのこと

がともに働いて益になることを私たちは知っています（ローマ人への手紙 8:28）“～those who have been called in terms of his purpose, have his aid and interest in everything”」この「おはよう」の挨拶が文字通り新しい次元に至る始まり。後に“これは正しいことです”と日本語で筆者は聞いた。たぶん英語は簡単に、“the right thing to do”。最後は：「～試練とともに脱出の道も備えてくださいます」“He will provide the way out of it, so that you can bear up under it”（コリント人への手紙 第一 10:13b）。

(43) 最後の回顧談(Reflexivity)

回心する前の自分の態度や感情を思い起すことがよくあった。日本刀で思い切り殴られたこともよくあった。雑巾バケツの水を看守に浴びせた一件もあった。反抗した後で、断末魔の拷問か首を斬られるかと真剣に思った。でも生きていた。何か不思議な力が働いている、このことは否定できない。「ただおことばを下さい」（マタイの福音書 8:8）と、みことばに飢え渴いていたこの時にはっきりとイザヤ書のみ言葉が迫ってきた「まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った。それなのに、私たちは思った。神に罰せられ、打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は私たちのその背きの罪のために刺され、私たちの咎のために砕かれたのだ。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに、私たちは癒された。私たちはみな、羊のようにさまよい、それぞれ自分勝手な道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた」（イザヤ書 53:4-6）。

(44)

このイザヤ書にある痛みを担ったキリストは今度こそ本気で信頼する最終版。聖書を通して洗礼を知る。洗礼を受けたいが牧師はいない。考えたことはお互い明日は死ぬかもしれない戦友に洗礼をしてもらうしかないと考えた。結局自分が蹴飛ばしていた雑巾バケツのその残り水で（雨水も入っていたのかも）：父と子と御霊によって（In the name of Father, the Son, and the Holy Spirit, AMEN）戦友から受けた。今まで決心したものの挫折した新しい決心に更新、しかしまたまたダウン続きのグラグラ信仰。洗礼というはっきりとした形でけじめをつけたかった。洗礼というのはこんな古き自分に完璧に溺死することと確信し、洗礼を戦友からしてもらった。

(45)

聖書と聖霊の agreement と確信が一段と深まる。もし、もし生きて帰れたら、今度は敵ではなく友として、あの名古屋に戻りたいと願う。しかし、今は自分で選択できる立場・状態ではないので、主なる神に任せきろう。かえって自分の明日は分からないので、あれこれ「自分」が顔を出せない捕虜（POW）の「幸せ」

に感謝して。昔聞いたことのあることわざが新しい意味でジェイクに迫る。Tomorrow is another day. これは、明日は明日の風が吹くといった捨て鉢の意味ではない。今日までとは全く違う明日という新しい意味に生きること。運命の日が来た。アメリカが勝った。“はらいせに”首をと威嚇されたことも思いだされた。が、それでもいい、それが神様から自分に与える新しい意味ならば捨て身とも思えるこの段階で最後の最後に解かったことは、今までの「行きつ戻りつ」の信仰は「自分の自力」でやっていたこと。修行のような努力の信仰。心の王座には「自分」が座っていた。重要なことは徹底的に、完全に自分を神に「明けわたし」主なる神にゆだね切っていくこと、つまり今度は心の王座にとってかわってそこに座るのは主なる神と信仰の本質が与えられたこと。最後の土壇場の死の恐怖を含め、全部自分を明け渡し、主よ、あなたの御心を信じきっていきます、と深い祈りに変わった。

(46)終戦

1944年のクリスマスの頃から、爆撃の音が聞こえるようになった。看守たちは、日本はいよいよNYやサンフランシスコを占領したと言いつ出した。やけくそでアメリカの飛行機がこの辺の池に爆弾を落とし、魚が少し死んだだけ、と。彼らは日本が負けるなんてことは思ってもいないように見えた。しばらくして終戦。しかし次のシナリオは、殺される、との思いが……。もし日本が負けたりしたら、日本兵は我々をなぶり殺すであろう。こんな不安の中でも、もし生きていたらと、そんな可能性も混じった複雑な思いがよぎる。一つはっきり心に語り掛けられたのは「お前は私が遣わすところに行くのだ」。それは日本に敵としてではなく友として。拭い去ることの出来なかったのは神からのこの召命。ああ私は口下手だし、聖書の勉強もしていないし、宣教師としても……。ととてもとても。こんな躊躇が。しかし「死を目前にした絶望から救いをお前は体験した」、こんな声が心に聞こえる。人には出来ないが神は出来る、この力が完全に現われることをお前は体験した。だから敵を赦し、敵を愛する宣教師として遣わす、かつての敵国に。

(47)

銃殺を覚悟していたが、1945年8月20日釈放された。インド経由で帰国。1945年9月5日ワシントンDCに。真夜中にオレゴン州に帰った。地方新聞にも記事が載った。SPUで1945年秋から学びを。講演依頼や説教依頼が殺到。この二つで忙しい毎日。ある集会での洗礼についての質問に対し、雑巾バケツの水での洗礼は通常の制度での洗礼式ではないが、ディシェンザーにとっては明日の死が目前に迫っている時、出来る

ことの精一杯の洗礼だった、と。危機場面での“洗礼式”と正直で真摯な信仰告白に聴衆はすい寄せられた。

(48)子連れ宣教師夫妻

1948年12月20日アメリカ・ジェネラル・メイグス号 (U.S.S. General Meigs) で日本に。メイグス号は豪華船ではなく普通の船、1,500人で万杯、個室はない。このごったがえしの2週間二人は日本語の猛勉強。新婚の妻と新生児を伴っての船の長旅は心配。しかし、それ以上に夫妻にとって不安なのはかつての敵が3年後の日本に行って受け入れられるのか、憎しみ、憎悪、敵意が待っているだけではないか。歓迎はされなくてもいいが、ほとんどの日本人から自分たちは嫌がられ、避けられてしまうのではないか。このことで戦いの毎日になるのではないか。こんな差し迫った心配が徐々に、しかし確実に迫ってきた。夫妻は船中で日本のキリスト教の歴史の講義を受ける機会もあった。1549年のザビエルから徳川の世の迫害<一部を後述>、キリスト教は非国民の宗教で禁教等々、二人の不安は山のように募る。夫の聖書の言葉が幼子を連れた新妻への励まし、「よく聞きなさい。主はあなた方にこう仰せられます。あなたがたはこのおびただしい大軍のゆえに恐れてはならない。気落ちしてはならない。これはあなた方の戦いではなく、神の戦いである」(歴史誌 第二20:15、第三版)。横浜について新聞記者の開口一番、質問は“なぜ日本に来たのか”だった。この横浜で、12月29日あわただしく住んだところには暖房設備無しの家屋。寒さの中でパウロ (Paul) が病気に。医者を探し結局進駐軍の病院に。1週間入院。フローレンスは、一週間母子だけで異国の地で病院に行くのは反対だった。ともかくペニシリンでパウロは一週間で回復。ここで博士小田金雄牧師に会う。彼はシアトル・パシフィック大学の同窓生。通訳と生活のことで援助を受けることになった。これが敵国日本への宣教師としてのはじまりであった。

(49)別れを告げ日本に帰る(Bye-bye Mama to Japan)

思い出すのはアメリカが勝ち、日本は無条件降伏。そして3年4か月後の1945年8月20日銃殺されることなく無事釈放。時を移さず、故郷のオレゴン州の隣のワシントン州シアトルにある SPC の神学部で勉強する。フローレンスに出合い、結婚。彼女のきっかけは日本突撃隊の生存者への好奇心が始まりという。ディシェーザーは来日前、40日間の断食をし、日本伝道のために祈る。“I was a Prisoner of War”「私は日本の捕虜でした」と書いたトラクトを100万枚 Bible Meditation League というキリスト教団体が献品。初め一年はほとんど毎日路傍伝道や伝道集会を全国で行い、ラジオでも取り上げられた。集会には空襲で婚約者を殺され、出刃包丁を持った若い女性がいた。集会に

紛れ込み機会を窺っていた。あまりにも反感と敵意をその表情に感じ、集会の後、話しかけようとしたが、逃げるように立ち去ってしまった。しかし次の集会のまた顔を出す。この時はイエス・キリストが憎悪と敵意を変えることの出来る方と赦しのメッセージだった。何度も集会に顔を見せ、この女性は最後熱心なクリスチャンになった。ディシェーザーがいるだけで、彼の中にいるイエスを見、そのイエスに従っていこうと自分の中の変化に気づいたという。そしてこの女性は、キリストの力によって変えられたディシェーザーの体験は、殺害未遂の私にも起こったと告白するに至ったのだった。

(50)

日本でのディシェーザーは宣教のため Yoshiki（息子がこの戦争で死亡）さんが2階の息子の部屋を貸してくれた。しばらくして Yoshiki さんの家族も救われた。ある映画館の持ち主がかつての看守を集めて大きな集会を開催。南京の収容所のかつての看守数人が目に入った。加藤氏（看守の長）は目が合うや顔中に流れた涙をぬぐう。恋人をアメリカに殺された他の女性もディシェーザーの赦しの福音を聞いてだんだん心が解け、遂にはこの人もクリスチャンに。他にもディシェーザーの働きを通して多くの人の人生が変わっていった。ある大阪キリスト教大会では、4,000人、他3,000人は会場に入りきれない時もあった。そんな時期のある時、高松の宮に招待された。捕まり死刑が決定したい時、終身刑の扱いをしてくれた皇族に感謝の気持ちを伝える。高松の宮はなぜ今、日本でこのような伝道をしているかの話にじっと耳を傾け、実際に会えて実に光栄と言ってくれた。

(51) Felt Reality

ディシェーザーが会おう人々はその碎かれた姿に圧倒された：When he gently placed a hand on their shoulders and they saw the look of love in his amazing blue eyes, they were melted to tears.（肩に手をかけた時、その青い目に愛情あふれる姿に圧倒され、涙が）。筆者も大きな手でがっちり握手した時、何か大きな愛を感じた。感覚で解ってしまうのだ。フリー・メソヂストの大阪基督教短大での集会（1953年3月）である学生は：“Even though I could not understand him, I feel love.”言葉以上に語っている“言葉が”伝わってくる。しかし、ある集会では、実際に襲われナイフで刺された。ポケットの新約聖書の「ローマ人への手紙」の箇所（真ん中ぐらい）迄凶器が。しかしそれで体は無傷だった。

(52) 爆撃地名古屋へ

ディシェーザーはしばらく大阪での働きの後、かつての攻撃地、現在の名古屋市の守山区で伝道を始めることが可能になった。最初名古屋駅に着き、ど

こでもいいから連れて行って欲しいとタクシーの運転士にいて、着いたところが私(加瀬)の家の近くの守山区だった。「創世記」に高齢のアブラハムが愛してやまないひとり子イサクをモリヤという山の上に連れて行って、生贄としてささげなさい、との緊張した話がある。詳しい話は省き、最後、アブラハムが刀を取って自分の子を屠ろうとした時、角を藪にひっかけている雄牛が生贄としてささげられたことがその顛末だった。「主の山の上には備えあり」がモリヤという名の山。ディシェーザーにとって、守山はまさに「主が備えた」「モリヤの山」、モリヤマと聖書の記事を知る地域住民のダジャレを言たくなるくらいモリヤマには深い意味がある。〈TS: デ師はダジャレ (pun word) はほとんど言わない人〉主が示されたこの守山に住み、かつて民間人への攻撃と謝罪と和解、贖罪、赦しが続く。

(53)

新しい人生として攻撃地名古屋に宣教師としての働きを始めた。お隣に岩田一家が住んでいた。ディシェーザー一家が引っ越してきた最初の夜、誰かが岩田家のドアをノックする。隣のあのアメリカ人だ。躊躇はあったが、意を決してドアを開けた。たどたどしい日本語で「今、私ソースがありません。少しく下さい」。守山で最初にデ師から洗礼を受けたのは岩田夫妻であった。次に銀行員の笹川修佑氏、しばらくしてこの者、加瀬豊司と続いた。名古屋は自分の謝罪と赦しと和解の地。1959年には伊勢湾台風で地域の人たちと助け合い一緒に汗を流した。1963年名古屋守山教会献堂式(名古屋市守山区緑地公園西園付近)。そして東隆牧師が受け継いだ。東牧師はかつて進駐軍に父親が殺され復讐を計画していた人物。この人もディシェーザーの本物の姿に触れ、ディシェーザーの後釜牧師になったのだった。2018年、ディシェーザーと淵田の『ふたりの贖罪』と題してNHKスペシャルにこの東牧師の回心劇も含まれていた。

(54) その後のジェイク

「この期間に私たちは3回日本に戻り、関わったほとんどの教会を再訪問することが出来、そのいくつかはかつて創設の時や牧会をしていた教会だった。日本のクリスチャンは歓迎してくださり、また極上の扱いをしていただいた」。1966年にジェイクとフローレンスはほとんどの家族と150人のゲストで結婚50周年記念を祝った。時折、地域の教会からの説教のお誘いがあった。ある時は説教原稿を忘れて取りに帰った。そしたらやかんの火を消し忘れ空焚き状態。神はこんな愚か者を今でも用いてくださる、と感謝。それから2002年には再びジェイクの90歳の誕生を祝うためにオレゴン州に集まった。その90歳の時ジェイクはオレゴン州の沿岸地方で最後の説教をした。ジェイクは3年間オレゴン州セ

ーレムの介護施設で過ごし、同窓会の頃からパーキンソンを罹病。そして認知症も。当時通っている教会の牧師ベイリー（Doug Bailey）師と対談した。「戦争中捕虜になったことを覚えていますか？」首をかしげて妻を見ながら、「私が捕虜になったことがある？」「日本への宣教師のことは覚えていますか？」“もちろん”。そして5年後の2008年3月15日に亡くなった。

(55) フローレンスは

ジェイクが亡くなった後、フローレンスはセーレムに引き続き住んだが、90歳の誕生日前、2011年の8月に心臓発作が起り介護のため二人の娘たちがいるワシントン州のショアライン（Shoreline）に移った。彼女はショアラインの自由メソヂスト教会に温かく迎えられ、介護施設に入所し、そこで2017年6月5日に息を引き取った。フローレンスは一人の兄弟姉妹と5人の子どもたちと10人の孫、そして曾孫や多くの甥や姪等多くの家族を残して亡くなった。

(56) 最後に<TS: Editor's Expository Remarks>

聖書の大元になっているユダヤ人のユダヤ的発想は、積極的な逆転思考を数多く生み出している。例えば、人を赦すことを拒んでまでも、なぜ人は胃潰瘍や心臓発作や精神の問題迄抱き込もうとしているのかに代表されるユダヤ教からの逆説的なチャレンジがある。いろいろな局面で人は心の根っこにある感情に素直に反応する。意識的に無意識にこんな日常の根っこを引きずったまま生きている。日常の暗黙の前提（tacit assumption）の是非や功罪を積極的に考え、再創造して生き抜いていく（positive thinking and positive doing）のがユダヤの伝統（Judeo-Christian Legacy）。激しくたましいをゆさぶる問いかけ・語りかけ・迫り（challenge）がある。それを英語では鮮明に“thought-provoking”と表現する。自分の主体、思想、感性を根底からひっくり返す経験のこと。しかもそれは人生の途中に起こる。ユダヤ系社会学者であるオットー・ノイラートは「私たちは航海中に船を修理しながら航海する船乗り」と述べている。ディシェーザーは収容所の現実の中で自分の内面を点検し、信仰に目覚める。その時居た場所、その日常から出発。その真っ只中で真実に率直に次々襲ってくる、絡みつく罪に向き合い、真摯に神の赦しをその現実の現場で実体験した。そしてその負の状態は不可欠な“傷”として理解し、創造的に新しい世界を掴み、握りしめて戦争の極限状態を生き抜いた。真剣に聖書を読みこなす機会が与えられ、イエス・キリストを求め、キリストと向かい、そして出会った。その神と人との対峙は長く続くヤコブと神との真剣な格闘（創世記 32:24-27）のようでもあった。神への信頼と

疑問と迷いの関係が何度もあった。自分に巣くう罪との戦いで悶々とした時期も何度もあった。しかし難攻不落の「エリコの城壁」を落とすためには何度も“遠回り”が必要であったのだ、「信仰によって、人々が七日間エリコの周囲を回ると、その城壁は崩れ落ちました」(ヘブル人の手紙 11:30、詳細はヨシュア記 6:11-20)。その分、回り道の繰り返しがディシェーザーの決断・献身に纏わる「優柔不断」であったかもしれない。しかしそれは忍耐深い神の愛に碎かれ、まったく新しい人格に変容するための必要な“余裕”といえるのかもしれない。しかも、“孤独”ではあったがそれは人を介さないで自分と神との一対一の人格的な“求道生活”であったのだ。

(57)

そのきっかけは戦友メーダーの死であったのだ。神は全能であるので他の人を動かし、ご自身を示すことを知っているとよくいわれる。人間の側にはこういった場 (entrance) が必要であり、そこからあれこれ心の“格闘” (exposition) を経て、聖書の本質 (essence) に至り、外の世界に出て行く (expression)。更にこれら一連の歩みの概念をカタカナ語で図式化すれば神はアウトプットし、聖書はインプットし、人はインテイクするともいえよう。思いがけない不思議なことがよく起こった、とディシェーザー宣教師夫妻はよく言う。クリスチャンはそれらを神のみ手の業と呼ぶ。ジェイクは人知では計り知れない神の大きな愛に守られ、聖霊に導かれていたと告白する、神の摂理は人間にとってはいつも奇跡的なことに映る。聖書は淡々と語る中で、当たり前のように奇跡が……。ここは人間が思索できない。不可能のことが可能に逆転する。起こるはずのない、不可能と思っていたことが本当に起こった時、それは言葉、思いを超越した神がその瞬間、その人に“触れて”何かを伝えようとしているのだ(たわいない日常の生活にも起こる)といった認識は人と神との人格的な受け取り方。触れるということは距離がなくなること。これは人間の思いを超える神の知恵に結びつくこと、そしてそこにはのちの接点がある。ここに気付くこと自体がもう一つの奇跡。人間の次元での奇跡は神の次元では普通の事柄、“事跡”と言われることがある、「人の子とは何ものなので、これを顧みられるのですか」(詩篇 144:3b、フランシスコ会原文校訂訳)。ひとの罪による神からの断絶を神からの働きかけを redemption(贖罪) というが、この意味で神と人との関係での贖いによる和解放を atonement(贖い: “at” “one” “ment”の合成語) という。償いは人の業(わざ)であるが贖いは神の業(わざ)。愛なる神の救いの計画を矢印で示せば: 十字架の死によって支払われる人間の罪に対する身代金 (ransom)

→それにより成立する贖い (redemption) →罪を嫌う義なる神との断絶の修復と和解 (atonement)。

(58)

人と神の距離をなくし顧みられる愛の神の現実をディシェーザーは聖書と聖霊の中に実体験したと何度も、何度も繰り返し証言する。呻き、愚痴、訴えを通して神との会話 (conversation) が最後は回心 (conversion) になったのだった。そしてディシェーザーにとって、捕虜収容所はかけがえのない“霊的空間”となり、ここでの試練は神との正直な“やりとり”の機会だった。そしてその分、神からしっかりと試された。戦争がもたらした軋轢を通して、ぶれない恵みの体験が当時の宣教師候補に与えられたのだ。ディシェーザーはこの歴史の中で豊かに圧倒する存在者・絶対者の存在に気付き、人格的に出会い、自分自身も本物のその素晴らしさに生かされ、その中に生き、自分も神から赦され、贖われた (redemption / atonement) と感謝。ディシェーザーは赦しの、このイエス・キリストの福音を本気で日本中の人達に伝えた。それ以上に、とてつもなく神に赦された自分は、赦しの真実を生涯、伝えること自体がとてつもない神から与えられた自分の喜びと感謝して。“Let's go.”ではなく、“Let us be going.” (さあ出かけよう) とわたしも一緒にいると神から背中を押されて。こんなモファット英訳は十字架上の贖いの完成に向かうその姿がひしひしと伝わってくる。自分にはこんな大儀はないが、“小儀”で日本に戻れた。爆弾ではなくバイブルを持って。自分で志願した Doolittle 作戦で名古屋が爆撃地となり、中国で捕虜 (POW) になり、4年間の抑留 (exile) を通して新しいのちが与えられ (exodus)、かつての名古屋が派遣地として与えられたのだった。捕虜収容所の独房は孤独との出会い、そしてこの環境により Jacob DeShazer は予備知識なしの“一人読み”が一番適切な、「孤読」に相応しいモファット英訳聖書との出会いであったのだ。

文系領域の研究の註(特に footnote 等に)に関連事項、社会・文化的背景の詳細記述や関連文献批評(literature review)を含めることがよくある。直接ディシェンダーに関わることは本論に、それ以外の背景の事項は切り離して、その論述を以下の endnote に多くを含めた。日米間の比較言語文化を重視しこれらを厚い記述の essay として詳論した。また書誌から出発した(bibliographic)論述も含めた。特に註の最後(46)は、翻訳聖書を言語学的側面から論考し総括的な結論としてみた。

本来 annotation は留意する note がその語幹なので、「増註」として特筆に値する長めの議論を多く含めた。そのため註毎の長短があるが、本文テキスト全体を補完する総合的な構成の一部として考えている。また集団や組織やといった人間社会に関わる内容は、既成概念、固定観念、ステレオタイプ化された現実の価値観に対して敢えて正面から“文化・分化・分解”(breakdown)し不安定化(destabilization)させる辛口のクリティーク(critique)も試みた。この critical thinking により本来の形に reset された新しい認識や気付き(new awareness)がもたらす upgrade を、自戒の念を含め、痛みを感じつつもはっきりとその社会的方向を目指した。

- (1) 浜島敏(2003)『聖書翻訳の歴史:英訳聖書を中心に』創元社の見返り頁の著者署名(compliments)に添えられた文言:「言葉:呪いと祝福」より。
- (2) 牧師 James A. R. Moffatt は博士号をスコットランドにある世界屈指のセント・アンドリューズ大学で取得。そしてオックスフォードをはじめニューヨークのユニオン神学校教授も歴任。専門領域はギリシャ語と聖書釈義学(exegesis)。旧新約全巻 1926 年、改訳1935年に英訳聖書を発行。
- (3) 森本あんり(2015)『反知性主義:アメリカが生んだ「熱病」の正体』新潮社。牧師。ICU 名誉教授。東京女子大学学長。
- (4) 加瀬豊司(1992)「日米比較文化論に於ける方法論と方向性:動域パラダイムとしての異文化間コミュニケーション」『四国学院大学論集』、第 79 号(3月18日)。言語文化コミュニケーションにおける各種概念の概説と評価。
- (5) 加瀬豊司(2015)「原案・監修に関わって」『ていんさぐの花』上演実行委員会、名古屋市文化振興事業団主催演劇冊子、3。
- (6) 加瀬豊司(2007) *Nisei Samurai in Washington, D.C.: Culture and Agency in Three Japanese American Lives* (邦題 文化変容と人間行動—ワシントンの日系二世ライフ・ヒストリーを通して) 四国学院大学研究双書 No. 5 学術出版会。二期生の新渡戸稲造は札幌農学校でウィリアム・クラークの一期生の佐藤昌介達から生涯にわたる影響を受ける。ここでは新渡戸の渾身の著作『武士道』について論究した。p. 35 の脚注参照。意識的に旧知の「武士道」の文言・様式を伝達の方法に使用して、本質的な日本の精神構造を著述。同様の方法と本質の関係枠組みを論述の構成に使用した。

- (7) 取り消し線。註(10)の考え方で取り消し線 (strikethrough/strikeout) を施すが、これは紙面上の全面消去にはならないので元の語句が見える。古くは羊皮紙に書いた言葉を消した場合、完全には消えないので元の字句が分かる状態。英語で palimpsest という。表面から見えるので二(多)重構造とも認識される。文化分析において文化という包括的な表現を使うが、その本質はその言語表現の意味に全面的には取り込まれない。要は完全な適語がないことから、伝達の方法として取り消し線という記号言語を使う。本質が簡潔に一語でズバリ (brevity) 表現できない悩み。
- (8) Geertz, Clifford (1993) *The Interpretation of Cultures*, NY: Basic Books。文化は多層性・多重性を特性とするので「厚い記述」を記述手法として提唱し広範囲に定着している方法 (notion)。
- (9) James P. Spradley (1980) *Participant Observation*, Florida: Holt, Rinehart and Winston. James P. Spradley (1979) *The Ethnographic Interview*, Florida: Holt, Rinehart and Winston. エスノグラフィーのフィールドワークでの具体的な手法、技法のノウハウ。
- (10) 註(6)の日本語序論参照。ある本質的内容が伝達において、最も適切な言語が不在の場合、それに代わる、もしくはそれに近い言葉を使う。しかしその使った言葉そのものはあくまで伝達上の手段であってそのものではないし、その使った言葉の意味に拘束されない関係。伝達のための方法。註(7)にあるように、言葉の表現の方法としての使用なので、その使った言葉に取り消し線を施す。
- (11) 加瀬豊司(2019)「原案・原資料に関わって」『赦し』上演実行委員会主催(芸術文化振興基金助成事業演劇冊子、3)。ディシェンダーの体験を長期生活インタビューにより多角的に述べた。甲南女子大学 井上俊教授と放送大学 船津衛教授の著作名『自己と他者の社会学』(2005)に示唆を受け、生涯にわたる取材を「自分と相手の相乗関係の社会学」と位置付けた。
- (12) 著者性の問題については日本オーラル・ヒストリー学会第 10 回大会で(第 3 分科会 椋山女学園大学、2012 年 9 月 9 日)。研究者の特権と視点の暗黙の前提を筆者は批判的省察 (reflexivity) の対象として論じた。
- (13) Michael H. Agar (1996) *The Professional Stranger*, San Diego: Academic Press.
- (14) アウレリウス・アウグスティヌス(1976)『告白』(服部栄次郎訳、原著 *Les Confessiones* は 397-400 年発行) 岩波書店、4-5。
- (15) 田中秀之 (2021) 「説教：罪の赦し」『日本同盟基督教団 愛知泉キリスト教会 10/24/2021 週報』。他、関連するテーマについて助言を受けた。
- (16) Watson, C. Hoyt (1950) *DeShazer: The Doolittle Raider Who Turned Missionary*, Indiana: The Light and Life Press, 118.
- (17) 空母に戦闘機ではなく、重い陸軍爆撃機(B 25)を積んだ Doolittle 軍人による日本本土初空襲作戦。日本軍による真珠湾攻撃から 4 か月後のリベンジ。日本の軍人にも、同じようにとてつもない発想をする男がいた。この藤田信雄については元産経新聞記者、倉田耕一(2018)『アメリカ本土を爆撃した男』株式会社毎日ワズ が書いた。飛行機を分解して潜水艦に積み込み、太平洋西海岸で組み立て単機でオレゴン州に爆弾を落とした。戦争下での日米軍人共通の奇想天外の発想。

- (18)この概念用語「心の連想」は米国メリーランド大学教育学部教授、国際センター所長の Barbara Finkelstein 博士が米国教育学者ロバート・ベラー (Robert Neely Bellah) の「心の習慣」 (Habits of Heart) を振った「心の連想」 (habits of heart, mind, and association) を日米比較教育論文で使った。詳細は拙書 *Nisei Samurai* の前注(6)参照。研究者の「連想力」は広く他者の思想(思考と想像)、意見、感性や理性に響き合う橋渡し能力として必要不可欠。自由に広い範囲に展開できる (wide range of knowledge) ので全体像の把握や洞察力が涵養される。特に覆い隠されている社会的欲望 (subtext, hidden curriculum) 下で抑圧、暗黙の前提 (tacit assumption) により思考停止、自分の固定観念からそれ以外の世界を認知拒否、一笑に付して真実からの回避行為に対して起こりがち。このステレオタイプに対して気付きを与える (social prison break) 警鐘 (caveat) がある。古今東西にあるこの負の心的状況と人間行動をラテン語からの借用文が英語表現として定着している。「自分が理解できないものを啜う」 “damnant quod non intelligunt”。この警句 (aphorism) については牧師招待愛餐会での加瀬豊司メッセージで「自己の認識外の認識」について奨励をした (日本国際ギデオン協会 名古屋東支部 2019 年 2 月)。
- (19) 英単語は sentence と表示し、三つの主要な意味がある。「文」、「宣告」に続いて、通例大文字ではじめて「Sentence」の語意は「聖書からの短い引用」。英語辞書の語意項目 (lexicography) に定着しているので Sentence と銘打つてもっと活用があつてしかるべき表現。しかし、実際には引用として普通に扱われ、多用されている聖書語句からの引用文。註(16)のワトソン博士の著作には大量の Sentence を含めている。本稿にも同じ趣旨で多く使用。
- (20) デイシェーザーの実娘 (Carol Aiko DeShazer Dixson) とピッツバーグ大学教授 Donald M. Goldstein 博士と共著。Goldstein, Donald M. and Carol Aiko DeShazer Dixson (1973) *Return of the Raider: A Doolittle Raider's Story of War & Forgiveness*, Florida: Creation House.
- (21) 2018 年終戦記念日に約 2 時間の NHK スペシャル『二人の贖罪(しょくざい)ー日米の憎しみをこえて』と題して放映された。
- (22) 加瀬豊司 (2006) 四国学院大学『チャペルへのまねき』No. 314。“淵田とデイシェーザー：真珠湾攻撃と名古屋空襲”。
- (23) 笹川修佑：筆者より一年前 (1959 年) からデ師と深い親交のあった元銀行員。デイシェーザー宣教師がはじめた白沢伝道所での初期の信徒で、デ師と内外で重ねた多くの文通資料の提供を受けた。デイシェーザー夫人からの書簡が多いが、その中でクリスマス・レターからは戦争の体験史や日本での宣教活動の直截的感情 (direct feel) が伝わってくる。2016 年の毎日新聞「証言でつづる戦争」のシリーズ・コラムには Doolittle 関連の飛行機の日撃証言や初期の日本宣教への多くの言及を含む新聞の複写資料や 1942 年 4 月 19 日付『東京日日新聞』記事：“名古屋で小被害”の見出しのもと“敵機来襲に国土防衛全し”等々と当時の状況がうかがわれる。
- (24) デイシェーザーと筆者の交流のライフ・ヒストリーは註(11)を参照。その中で 50 年にわたる日米間の行き来から多くを聞き、話合い (取材) このデイシェーザー一家の生活史記述の積年の原材料になった。
- (25) この歴史記述と方法と編集は註(11)の p. 3 を参照。

- (26)フルブライト委員会(Fulbright, Japan)の「フルブライト 60 周記念誌」加瀬豊司(2013)特別寄稿、6-8。フルブライトの基本精神である批判的自己省察(reflexivity)からアメリカ政府の外交政策に対して建設的に内部批判を行った外交委員長の足跡を辿った“Senior Walk”と題した著述。自己に再帰する社会的人間行動を人間の深層心理の描写と重ね合わせた。
- (27)頻繁に口にする「聖書と聖霊は一致する」はディシプラーの信念と信仰の根源(pivot)。それは生きて働く聖霊とそれを裏付ける聖書。
- (28)時間をまたいで把握する通時的な歴史と現時点で意味付けをする共時的な歴史観の対比があるが、長い歴史の中で聖霊の働きは通時的(diachronic)に一連の過去の出来事とすれば今、ここで(now & here)と共時的(synchronic)に現在の信仰者の中に働く聖霊はなくなってしまう(no・where)。聖書はイエスキリストを証しする書き物(Scripture)であって歴史の単なる記録文書ではない。「文字は人を殺し霊はこれを生かす」(コリント人への手紙 第二 3:6c)と聖書は聖書を使って言語に閉じ込めることの出来ない真理を言葉を使い二重拘束(double bind)の修辞法で“説明”している。通時的・共時的な関係が失われると、あれかこれかの単純な選択になり、聖書があれば聖霊はいらない、逆に聖霊さえあれば聖書は不要の極論になる。聖書は永遠の神のことばであり、聖霊は(三位一体の)人格的な神でその相互の有機的な関係(reciprocal integrity)を終始告白し続けたのがジェイコブ・ディシプラーの体験。一言で言えば「聖霊は神、神のことばは聖書」。口述する 2017 年新改訳聖書の編集主任の内田和彦牧師と聖霊派の万代栄嗣牧師の率直な牧師間対談が 20 世紀最後になって三度なされ、2000 年 6 月に書籍化された『21 世紀への対話:福音派とペンテコステ・カリスマ派の明日』、いのちのことば社)がある。はじめそれぞれの教派の特徴を背負っていたが大きな関連共通項の共有を再確認しあった(in good faith)。対話という言葉の過去における欠落は認識世界の思い過ごしを生んでいたようである。聖霊は三位一体の神の一つの位格であり、この生きて働く聖霊、それを裏付ける聖書の使信の整合性をディシプラーは体験からしみじみと語っている。
- (29)アン・ベンドルフ (1959) *Songs of Victory* (勝利の歌 I) 日本アライアンス教団・いのちのことば社、15。
- (30)Watson, C. Hoyt (1950) *DeShazer: The Doolittle Raider Who Turned Missionary, Indiana: The Light and Life Press* の著作において、ワトソン博士は最も多く暗唱される聖書の引用の一つ(コリント人への手紙 第一 13 章)を引き合いに出し、ディシプラーとモファット訳についての言及している(As a matter of fact he quotes it [the thirteenth of I Corinthians] perhaps more than any other portion of the Bible using, as a rule, James Moffatt's translation: ~Love never disappears.) 101。
- (31)収斂論による節減と縮小の原理(オッカムの剃刀)(加瀬豊司(1992)“日米比較文化論に於ける方法論と方向性:動域パラダイムとしての異文化間コミュニケーション『四国学院大学論集』第 79 号、p. 69 をベースに展開を広げた。中心である主要場面に焦点を当てるため、他の周辺のものを「髭」に譬え、不要・無用なものとしてそり落とす。必然性のないものを無暗に定立させない原則によって、より重要な中心思想や概念が明白になる(のを期待する)。中国にどのような

形でモファット英訳聖書が入り、日本軍がそれらをどのように見つけ、捕虜(POW)のディシエーザーに渡したのか、その経路自体の探求は次掲の註、ELMの活用方法に焦点を移す。

(32)ELM(Elaboration Likelihood Model(精緻化見込みモデル)はミズリー大学の心理学者、リチャード・ペティ(Richard E. Petty)とシカゴ大学の社会神経科学者、ジョン・カシオッポ(John T. Cacioppo)によるコミュニケーション学(communicology)の説得コミュニケーションの一つの理論モデル。相手への説得に至る二重過程理論ではあるが、本論文では、この説得性の増強のための二分法部分を利用する。ELMは正確な全体性に限りなく近づくため、アクセスの本質的な道筋(central route)と周辺のそれ(peripheral route)を区分し熟慮する。その上で“ありうる諸要素”を精緻し、整理し、より完全な予想や期待を目指す。この確率論的評価により、日本軍が押収したと思われる英語聖書の入手経路については、戦時中起こりうること(plausibility)として論じる。本稿では以下のありうること(in all likelihood)の解明にELMを準用し、当時の社会的状況を熟慮し、キリスト教伝道に関わる中国と欧米の歴史的關係を以下のように“精緻化”してみた。

中国について書いたピューリッツァー賞とノーベル文学賞受賞のアメリカ人作家による『大地：The Good Earth』に代表されるの良き大陸、中国に使命を感じ伝道(China Mission)したハドソン・テラーの生涯に関連させる。中国に多くの宣教師が送り込まれ、良きスタートをきったが、次第に政情の不安定から多くの宣教師家族も虐殺された(栗栖博美書(1982)『ハドソン・テラー』教会新報社)。事件と事変や運動と反乱、そして戦争と中国の歴史は列強の介入と内部の抗争が続き、その影響を受けキリスト教は試練の歴史に変わったが、そんな中、当局の取り締まりの間を縫って行き来は続いていたので多くのキリスト教の関係文書類は数多く残っていたであろう。日本軍が占領していた中国で捕虜収容所看守が入手した捕虜葬式のための聖書も押収品の中から入手したと思われる。Doolittleの捕虜に死を看守たちは予期し、そのための葬式用道具として聖書を保管していたのだろう。

後日、中国関係で、ディシエーザー夫人がふと呟いた“*It's a long boat to China.*”は今もって真意不明であるが、ここもELMを借用して想像力によるthick descriptionの要請される今後の領域と考えている。総合的な迫真性(verisimilitude)は何か理にかなった蓋然性(something beyond reasonable plausibility)から出発し、象徴的な世界をくぐって定着するようだ。歴史文学にするか、あるいはここで歴史を中断させるかの選択は残るが、突き詰めるところまで突き詰め、疑問は疑問として探求し、ここが探求の限界。これ以上の判断はここに留める。

(33)聖書翻訳者について個人訳(私訳)か委員会訳(混合訳)の一長一短の議論があるが、モファット博士は、その訓練過程においては研究者としての研鑽は当然の努力(endeavor)はいうまでもなく、博士を目指す研究者同士は切磋琢磨の厳しくて長い時間を経験している。複数での討論・議論で鍛え抜かれて、単なる独りよがり淘汰される。つまり、聖書翻訳という大事業に対して事前に十分な準備と必要なものがここに具備されていることである。以下、教派教団や組織から援助なし(no denominational or institutional support)の個人訳を可能にしている背景的訓練そのものからくる高い適切性について述べてみる。このレベルの高さは上下の基準などではなく、「揺るがない個」による一貫性や安定性を生み出す整合性の資質である。この牧師モファット博

士による個人訳を可能にした人的背景について論述する。この歴史に残る翻訳に個人による聖書の翻訳の社会性を含んだ過大評価や過小評価は避け、そのもの自体に(per se)備わっている具体的な現実には焦点を当て詳しく述べる。適合基準として背景の適格性(scholastic competence)と職業的適正さ(professional proficiency)である。ここから出てくるのが本来の社会的資性であり該当者のアイデンティティーといえよう。この二つにより最適な資性(optimum qualification)が生まれる。以下の論考には筆者の経験と考察が含まれる。一言でいうと、牧師という「特質」と博士という「資質」の両方が英訳聖書の翻訳に最高に相応しい。有益性が最高(dually functional topnotch)。しかし牧師(pastorate)と博士(doctorate)の深い現実的側面(in-depth dimension)はあまり日本社会に知られていない現実がある。そのため日常の談話にはめったに登場しない。それぞれのプロ領域にマッチして機能するこの二つを国際的基準・標準の重要な要素と考えてみたい。頭と心の深いところまできちんと詰めることが出来るこんな探求は、信仰の言葉でいえば全能の神はすべての神であるから、深い資性も豊かに用いられると確信している。ここが特質と資質の両面からの大きな社会貢献の場所。このようにどっしりした背景があれば、ぶれない一人の個人訳は統一のある翻訳になる。英語の「individuality」(個人)は切り離せ(divi)ない語幹を持つかけがえのない存在。聖書は最終的な「個」の力量を余すことなく述べている「判断力と知識のある一人の人により安定は続く」(箴言 28:2b)。新共同訳聖書も「分別と知識のある人ひとりによって安定は続く」が同じ個所にある。特質については言語に関わる配慮、つまり神のことばとしての聖書の使信を伝えるだけではなく、よく伝わるように言語上の工夫に腐心しているのがその姿勢。このため、一般社会に開放されている教育制度とその最高位の博士(号)については息の長い(“anti-precocity”)堅忍不拔な意志力と高度の専門に至る訓練が課せられている。次にこの次元に至る修練(scholastic trainability)の諸段階の具体的な詳細について日本の知的風土・雰囲気にも触れつつ、あるべき姿を述べてみる。

先ず日本と英語圏の学問を支える教育意識の違いから。以下に筆者の日米での経験と考察を含む。一般社会を超越している最終の場としての現実を概説してみる。日本の教育機会そのものは広範囲に“社会現象”として定着しているが、卓越性(excellency)の話題はタブー視されがち。負の遺産として“反知性主義”に加えて日本の国際貢献を阻んでいるのは“やっかみ”とそこからくる“足に引っ張り合い”。心では願ったり、自分の次世代には期待し称賛までするが、率直な話題にしない、されない社会心理がある。専門馬鹿とまではいかないにしても、難しいといいつつ小馬鹿にしたりして、ともかく別格扱いをして距離を置き関わらない日本型知的風土があるが、先進国の国際社会ではその専門性(expertise and knowhow)を社会資本として使っている。個人の感情に閉じ込めるのではなく社会の公共物として(socially usable)有効活用がそのやり方である。この水準の「質保証」を保つため、特に 21 世紀からの日本を含め先進国では、学位授与機関としての高等教育機関は独立した全国版の認証評価機構から、審査を受け続けている。ぶれないよう、現代社会はここまで組織的に充実させ、この高い質水準を維持続けている。聖書自体が最高の叡智といのちの言葉の集積であるならば、ここに深く関わる個人翻訳も言葉のマネジメントに深く関わる以上、その言語背景として最高度の水準が要請されるのが社会の当然。

“物知り博士”といった知識量の多寡ではなく、博士自身の基本姿勢は、有体にいえば、先行研究や過去のパラダイムを無批判に受容するのではなく、むしろそれらを不安定に(destabilize)させることから出発する。このことで流されること無く内容自体(per se)に深く没入し、その世界は世相、風潮、組織とは無関係。純粹さから出発する批判的考察(critical thinking)の基本精神とスタンスの厳格性は聖書の翻訳に欠かせない資質でもある。最終課程での訓練は国により、演習やセミナー(coursework)、教授指導(professoriate, tutorage)といった「質保証」の強調点の幅はそれぞれあるが、資質が徹底的に練られるための批判精神、評価基準の厳格さは不変。

(34) 今度は言語に関する本来の博士号の構成要素と生成プロセスを可視化するために自己の背景と経験を対象化し、その手段のため批判的に自己言及(spell out)することで内部のありのままの実像を順を追って記してみる。まず教育の並大抵ではない訓練の最終の場として、その社会的側面を含め、博士課程の具体的な特色から。高等教育の修士課程や学士課程の両課程は教育上の発展途上の一段階とし、同様に中等教育・初等教育も底力を付ける途中の段階としてこれらの記述は後日に稿を譲る。学問的段階においては、学士課程によくあるように過去の研究成果の延長、また修士課程によく見受けられる一部修正モデルの構築レベルではなく、この最終課程では今までの大前提を根底から大胆に問い直す(critique and re-examination)、いわば“脱構築”の作業から発想する。ここから先入感に囚われない創造性が生まれ、そこにいきつく洞察力と知見が要請されているのが博士課程。この独自性が出来ないと脱落(dropout)と過酷な現実(academic culture)がある。教育制度については日本のそれと多くを共有するアメリカの具体例を挙げる。この最終課程に入学し、単位を取って修了し(coursework: 授業1科目に30枚ほどの授業論文x10~12科目; 計300~360枚)、次にコンプ(comprehensive examination)とよばれる主要科目と関連科目の3領域から成る総合試験(計100枚程度)、更にプロペクタス(博士論文の計画書; 30枚程度)及びその審査口頭諮問、ここまで合格すればやっと博士候補生(candidate)に。更に単位化された論文セミナーの授業を取りながら博士論文(300枚以上)を作成、提出。そしてそれが審査される。ここまで書いた総論文枚数は総計約1,000枚程度、書き直し(rewrite)やボツにした原稿(publish or perish)を含めれば更に何千枚。授業ではtalk, talk, talk to death、論文はwrite, write, write to death。合格し博士号を取得出来るのは約半分もしくは3分の1の人数。学的要因以外の社会的理由もあろうが。初年度に平均成績(GPS: Grade Point Average)に実績が伴えば、授業助手(TA)や研究助手(RA)として関連領域で働くことも可能。勉学・研究に追われ通常アルバイトは無理なので学期休学(stopover)し学費を稼ぎそして学業に戻るパターンも多い。大学生になったらバイトしようといった風潮はない。成績評価の厳格性・厳密性は教授も学生・院生も当たり前の価値観。そんな中、極めて優秀者には全学スカラーシップの奨学金があるし、力があれば授業科目を多くこなし修了も早い、不相応にとりすぎてGPSで評価平均がB以下になると課程から追い出される(kickout)。成績評価も極めて厳密。みんな大人の研究者だから好きなように、はここにはない。博士課程に“授業”そのものが成立している。ここに真摯に関わり、終始過酷な重圧の中での学究生活は一心不乱という回復不能の“病気”とも言えよう。しかしこれを意識し自覚するのが世界共通の研究文化(research culture)。

上記の課程 (coursework) についての戦いに明け暮れる側面はフルブライト講演記録集を参照 (加瀬豊司 (2011) “アメリカの高等教育” フルブライト名古屋アソシエーション、3-15) に。

欧米の重厚な訓練を受けたモファット牧師の学問的背景は単に八面六臂の社会的な広がり
で手腕を発揮したのではなく、神のことばである聖書翻訳に心を砕き、全神経を集中し
(concentration)、その中心は (centralization) 神のことばに対する情熱。その原動力は、信仰的
にいえばそれは章の順序を変えてまで最重要視したヨハネの福音書 14 章の共にいる聖霊
(Paraclete) が根源と受け止めている。神学者のモファット博士は、聖書翻訳に認識言語の読み
手 (recipient) に焦点を当て、従来の聖書の構成 (organization and/or structure) している順序
の一部を変更し、文体 (stylistics) に配慮を加えた言語学者さながらの牧師。こういった文章構
成を単独でやり遂げた学者。高い水準で適確な能力と熟慮した実践力があつたからの作業
(endeavor)。モファットは、この意味で職能と学殖で安定した聖書単独翻訳に対して極めて自立
可能な逸材 (eligible and entitled qualifier) といえよう。

(35) 修道僧が寒さ暑さと戦いながらガウンを着て祈りと学びを極めていたその名残を共用する場がある。今も修道院ではガウン、教育機関の学位授与式でもガウン。大学院と修道院は共有する究極の場、一般的にここの内実もあまり語られないが、ともかく体をはって、かつ真剣になれる世界、否、なる世界である。しかし相応しい満足感と充実感を伴った祝福もあるので歯を食いしばった禁欲主義とは訳が違う。日本でもセミナリオ (神学校) とコレジオ (大学) が多くを共用していた時代があつた。欧米の高等教育の風土として学問の共有と知的向上の社会的雰囲気は個人人間の妬みや組織間のヒエラルキーから自由になっていて純粋で、すがすがしい限りである。目に見える実像をアメリカのキャンパスにその凛々しさを見た。学生たちの引き締まった顔面表情 (facial expression) を生み出す知的構造を箇条書き (itemize) して分析 (breakdown) してみる。ライティングで頭の中が一杯の彼らに飛来する考える項目の一部を漢語で列挙すれば：観点 (要素・概念)、構築 (論旨・評価)、記述 (名辞・展開)。歩いていても頭の中に飛来するのは展開の組み立て (how to structure and organize!)。しかしそれは次への達成の準備であり、真剣な未来志向。この顔の雰囲気はキャンパスの“風貌”。ただ一つ、一つだけのんびりと息抜き (at leisure) するのは金曜日だけ：“TGIF” (Thank God, It’s Friday)。学業の評価と人格の評価は別物であるし、学びの厳格性 (academic rigorism) で身も心も引きしまると同時に、相手の達成にも心が広い。共有できる価値観として相手のいいプレイ (good shot) にはためらいなく拍手を送るスポーツ競技の精神と同じで気持ちがいい。いいわけは暇人のやること。ジメジメ感なし。

(36) ともかく聖書翻訳は人間間の属人性の側面 (ad hominem) は問題外とし、本註で詳述してきたが博士課程では可能性と限界 (limits and possibilities) の正直な弁えは教授される学問的必須でもある。最高位の水準で突き詰めた純粋性があるからこそ、正直さに裏打ちされたと良心・良識が資質として当然視される。ここから聖書翻訳に思想 (ideology) や性癖 (idiosyncrasy) の読み込みから自由になる。社会的にも、博士 (doctor) と牧師 (pastor) はその位置付けに「doctorate」、
「pastorate」という特別な語彙が英語圏では使われている。博士課程での熾烈な切磋琢磨の知的討論や博士論文 (ここは thesis と呼称される学士・修士課程論文とは区別し、独立させた

dissertation) の議論は闘いの場。モファット博士の英訳聖書もこの熾烈な訓練と論戦 (disciplinarity and polemics) の背景があつての力作。しかも“doctorate”と“pastorate”をかねる水準 (equal footing) は私訳か委員会訳の議論や経験を超える。この点から見れば、翻訳史の社会的過程の中で「てらい、こだわり、思惑」入りの訳はそれぞれの社会的・時代的制約付きの所作といえよう。時代の波や社会風潮を乗り越える本来の訳がいい。ぶれない博士の個人訳 (doctorate works) は学者本人の努力 (single-handed initiative)。研究や論文において、自分がやり遂げようと言いつつ切ったことを最後までやり切っているか、その整合性 (consistency) はこの目的を達成しているかが一番厳密に吟味すべき項目 (how well the researchers have done what they said they set out to do)。ライティングの内容面については第一次資料や二次資料 (primary & secondary source) はもとより、参考文献や先行研究の批評 (literature review and/or critique) により位置付け (academic positioning)、質の面では深い洞察力と創造性・独自性が問われる。情報収集や提供は誰でも努力すればできるから“low level”と。展開面では大切な段落の組み立てと段落同士の発展的関連性、特に段落は一つの思想体系なので極めて重要。日本人が弱い段落構成 (paragraph development) の筆者による素朴な質問から博士課程最高 800 番台レベルの 200 分授業が“書き方”について授業担当者と院生達によりディスカッションになった (For me)。彼ら曰くプラトン、アリストテレスからの writing の方法には自由がない、が、誰が使っても論理展開は出来る、後は内容と。院の友情に感謝しつつ、これを使って challenge すると明言。彼らからの反応は“Sure!”アメリカの大学院の知的雰囲気はこんなところが面白い。モファットもこんな論旨に展開の中で育ち、この博士私訳は自分の学殖と良識を基に独力で成し遂げた英訳聖書。

現代の国際社会の常態として牧師には尊敬を、博士には敬意が払われ、尊称としての呼称も Rev. ~、Dr. ~ が普通。尊称は自分でつけるものではない、米国においては、博士号所得者に「~教授」(Prof. ~) と呼称するのは博士号未取得者となるので失礼な社交言語でもある。筆者の実例もあった。英語が出来る学生が米国の大学での交流で、Professor Kase と呼称した時に、Doctor Kase と呼びなさいと直された。教授職はある時期の社会的所属 (affiliation) であり、博士は時の流れとは関係ない純粋性の故に上位がその理由。内容以外の人に対する感情はない。

更に学位記の博士号には更なる最高位の「academic degree obtainable」があり、Ph.D. と自署する (著者名などに「~、Ph.D.」と自署明記するのが普通)。Ph.D. は尊称ではないので他人からは付けない。言語上、Ph.D. は Doctor of Philosophy (哲学博士) であるが、最高位を表す言葉がないので“方法論的拘束”上の表現として一種の頭字 (acronym) の「Ph.D.」使っている。高度の職業的学位「professional degree」としての博士号とこのもう一つの博士号 (advanced academic and research degree) である Ph.D. との区別は米国東部の公立アイビー・リーグ (Public Ivy League) 一つである大学院の 100 頁からなる卒業式冊子にこの区別と必要性が明記されている。「The second type is the research doctorate representing prolonged periods of advanced study. A dissertation that usually accompanies the study is intended to contribute substantially to the body of knowledge on the subject. The most important of these, the Doctor of Philosophy, no

longer has an implication of philosophy for its holder, but represents advance research in any of the major fields of knowledge.] (Commencement, The University of Maryland May 2005, p. 12)。

モファット聖書翻訳は 1935 年、コンコーダンス付き改訂がその最終版。読みやすさとことんこだわった (straightforward) ことが読者という認識者主体 (readers friendly) の文体が特色。しかし、章建てを読みやすい流れに入れ替え、差し替えるという“風格”の故、伝統的陣営からは批判もあったが、読む人に人気のある翻訳であった。モファットの他の聖書への貢献はアメリカの RSV (Revised Standard Version) 聖書翻訳にも指導的役割を果たした。モファット聖書は 1964 年ノーベル平和賞受賞を受賞したマルティン・ルター・キング博士も愛用する翻訳でもある。

言語や写本に重きを置いた和訳聖書の全体や部分訳の蓄積が多くあるが、註 (33) で力説してきたように水面下の業績 (background) ではなく、もっとキリスト教の日常世界でも表面化・一般化・話題化 (foreground) していったら、と思っている。最近の和訳翻訳にフランシスコ会の翻訳がある。こんな視点でいえば、広く言語の一番大元の直接原典から半世紀以上かけて発行した (日本語訳のみでの英訳なし) フランシスコ会聖書研究所発行の原文校訂聖書は特筆に値する。そこには写本はもとより、ギリシャ語の 70 人訳 (Septuagint)、ラテン語訳 (Vulgata)、タルグムとよばれるアラム語訳、マソラ本等併記してそれ相当の理由を付けて (due reasoning) 最も適切な日本語訳を選択している。そしてこなれた日本語表現も豊か。2018 年 9 月 18 日の名古屋聖書セミナーで新日本聖書刊行会・新約主任、プロテスタント教会牧師内田和彦博士 (スコットランドのアドバイザーの Ph.D.) は『新改訳 2017』はどうか変わったのか」と題しての講演で「新改訳 第三版」、「新改訳 2017」、「新共同訳」(協会共同訳は 2018 年 11 月発行のため比較無し)、「フランシスコ会訳」を比較対照している。豊富な原典から行きつくところまで 50 年間の月日を費やし校訂したフランシスコ会訳は直接原典から直接日本語に訳した和訳聖書 (英訳聖書は無い)。この原文校訂の口語訳が法王の“お墨付き” (Imprimatur) で 2011 年に出版された。

日本国内では国際ギデオン協会が「New Bible」と銘うって活用した泉昭博士の和訳がある。こだわりのない Crossway 社の ESV (English Standard Version) とその簡潔な文体 (brevity) がよく似ている。この ESV は *Fire Bible: English Standard Version* と銘打って 9 人中 7 人博士号取得者による注解付き聖書を 2014 年に発行。2006 年、牧師であり泉田昭博士の日本語訳、また近年、ESV からそれぞれ著作権 (copy rights) を国際ギデオン協会は受けた。種々の翻訳聖書そのものに愛着と親しみを感じる事が成熟した言語観と感じている。

(37) [This is a sure saying.] は 真実で信頼に値する重厚な意味を持つ表現ではあるが、簡潔な日常語 (familiar everyday language) を使っている (テスへの手紙 3:8)。次に、「~rank among wise men」は軍人組織での階級を表わしたり、順位をつける領域で多用される言動。さらに「a sure footing」は前出の“sure”と同様、この会話体は米国でも相手に対して更なる同意として発話されるポジティブな発話内の感情が入っている。故意に“正当な (authentic)”抑揚の強いイギリス英語の発音することで“確認した確証”効果と相手に対する好意の気持ち (pleasing tone) で表す音声言語 (バラ言語) として“市民権”を得ている (illocution act)。あるいはポストモダン流の言語の脱中心化 (decentralization) した言葉のあそび (戯れ) かもしれない。前註の sure (saying) も sure

(footing)の sure も前註の「オッカムの髭剃り」の節減法を活用した簡潔な(succinct)効果を狙っている。読売新聞(2021年12月20日)の英語の工房林にNY特派員が「どういたしまして」「わかりました」「もちろん」と日常の謝辞として“sure thing!”を刺激的な表現として解説している。

- (38) 聖書に翻訳者の正直な気持ちの内面吐露は不必要(effacement)かもしれないが、翻訳に特化した技術、技巧、技能や読者に関わる言語論・認識論は回避しない方が正直で良いと思われる。牧師のモファット博士はその翻訳に不可避的につきまとう「可能性と限界」、つまり感動を呼び起こす仕事、そして同時に謙虚さ(noblesse oblige)、すなわちこだわりやわだかまりの先入観からの疎隔(strangement)が要請される仕事と正直に認め、この二つを厳粛に受け止めている。神のことに伴うことだから。事実、モファットはその翻訳聖書の序文に信仰者を魅了する翻訳作業にとってこれほど謙虚さが要求される分野は他にない、と虚心坦懐に学者的良心を明言している。「Translation may be a fascinating task, yet no discipline is more humbling.」。

モファットの意識と心理の中で、最高位を極めた知見の水準から、否それだからこそ気付く謙虚さの根底には神の絶対的叡智に賛辞を呈するのみと信仰者の姿もある。この謙虚さは社会的に何かを成し遂げた実績に対して、社会的に“装う”社交的謙虚さではなく、中身を突き詰めた暁にさらに見えてくるより高い内容の存在について、まっとうな心意気からの謙虚さの発露である。そして 聖句の表現、配置に最大限の配慮努力(initiative)を重ねたこの神学者牧師は今度は聖書読者の反応に対して、翻訳者は消去法を使ってもう一つの謙虚さを正直に認めている。「If your readers are dissatisfied at any point, they may be sure that the translator is still more dissatisfied with himself」(読者が不満足の際は翻訳者自身なお一層満足感無し)とモファットはその聖書のはしがきで正直に書いている。言葉を翻訳することは意義ある感動と極度の緊張が同居する。それだからこそ、神から与えられた最高位の訓練を使ってその時点での最高の扱いが肝要。と同時に自己満足に陥る中途の自己終結ではなく、もう一つの新しいステップが存在すると認識できる謙虚さを期待したい。要は、良きものをさらに良くしていくオープンな向上(upgrade)の精神と実践が肝要である。

- (39) 三浦裕次 日本での医学博士号取得後、ワシントン D.C. 郊外(greater Washington)のメリーランド州 ジョンズ・ホプキンス大学(JHU: Johns Hopkins University) 客員研究員(2000-2002、2003-2005)、アメリカ国際衛生研究所(NIH: National Institute of Health) 連邦政府職員(2005-2007) を経て現愛知医科大学看護学部教授。聖書と医学の関連に多大の関心をいただいている学者。

- (40) Clifford Geerts は人間を本能だけでは生きられない存在と定義づけ、意味付けを存在の根拠(raison d'être)としている(Man is an animal suspended in webs of significance he himself spun.)。 *Interpretation of Cultures*, NY: Basic Books, 5)。

- (41) 前註(40)よりさらに人間存在の意味形成と同時にその破壊の必然性について次の 2 人の言語・文学・文化・社会の学際領域の学者は次のような洞察をしている。州立メリーランド大学の Gordon Kelly は同院の授業で人間行動や創造力は、「書物」は社会の反映といった「受動的行為」に対する既成概念の問題性を指摘したのだ P. 1974 年 *Prospect* の自署論文“The Social

Construction of Reality : Implications for Future Directions in American Studies”を引用し、文学は社会の意味をつくったり、保持したり、またその意味を破壊する未来に対して「能動的」な機能や方向を持つ「Human activity and creativity—a useful foil to the passivity inherent in a reflective model of literature: books as the “mirror” of society. Rather literature, in broad sense, could be approached as a meaning-making, meaning-sustaining, or meaning-subverting activity.」と意味世界と論じた。また Murray Murphy は 1979 年にその論文“The Place of Beliefs in Modern Culture” *New Directions in American Intellectual History*, Baltimore, MA : Johns Hopkins University Press で人間の本能と意味付けの関係を人間の本能不全の結果、認識枠がないと生存不可とまで言い切っている (Man is so underendowed with instinct so lacking in generally determined guides to action that he would be unable to survive without the elaborate symbolically mediated cognitive systems that constitute the world view, 5)。

(42)ただ“嘘”の幅も現実にはあるが虚偽に対する厳しい社会的な制約と非難もある。そこには相手にも共有できる他愛もない (obviously untrue) ウソ (white lie) の存在もある、一方、心に傷を残したり、人道に悖るウラギリ (falsification) は峻別の対象。早稲田大学文学部卒業後米国ボストンのバークリー音楽院 (Berklee College of Music) を卒業したシンガーソングライターの川江美那子が「嘘」と言語化して機微な心理を歌っている。2004 年 CD 『川江美那子 願い歌』(株式会社ドリームミュージック) の歌詞「願い唄」の一節に“今日悲しみを隠した、小さな嘘ついた、果てしない暗闇なら見せたくはなくて”と歌う。当然、ここは思いやりから発する嘘のロマンで歌にも詩にもなる美学の世界。人間は「呪いにも祝福にもなるこんな言葉」を使って現実の世界加工するホモロクエンス。四国学院大学で英語史と聖書翻訳を専門としてきた浜島敏は言葉の陰と陽の機能をリアルに語る。感動する多くの言葉がある半面、負の遺産も多い。言いつくろいは人の常。世代を問わず、理由の大小を問わず、合理化・正当化をしがち。果ては信用を裏切る (fraudulence) 行為まで。ひびの入る言語行為においては受け取り側 (recipient) に“厭らしさや厚顔無恥”として記憶に残ったり (mental imposition)、末永く心に傷が残る。身の安全 (security) の確保は別として、正直さが要求される英語圏の教育界 (academic honesty) ではカンニング (cheating) や盗作 (plagiarism) は厳しい罰則付きのアンフェアな行為。法域ですればそれは偽証罪 (perjury)。聖書の十誡 (Ten Commandment) はそれを「あなたの隣人について、偽りの証言をしてはならない」(出エジプト記 20:16)、モファット訳は淡々と“You shall not give false evidence against a fellow-countryman. ”(下線は筆者)。

英語の世界に社交的ウソはあるが、「嘘つき」“You’re a liar.”は言語倫理侵犯の極度の嫌悪感の現れで絶交の宣言。アメリカ州立メリーランド大の入学時に筆者はパブリック・アイビーリーグとして「honor pledge」のオネスティー・カードをもらった。正直さを超えてそれが自負心のある誇り「honor」を宣誓 (pledge) と印字されている。論文や試験で他人の努力の“手柄”を盗む行為は許されない。御託を並べて合理化したり、正当化 (self-justification) する居直り行動 (high-handed act) は偽善行為 (hypocrisy) と同義。むしろ自分の間違いや弱さ (vulnerability) は正直に認め、そしてそのこと自体が勇氣ある行動と評価されるにもなる。良心 (bon sens) と正直さ

(honesty)は謙虚さの表れで、人は本来こんな個人の倫理観で意識(pledge)を高めることが大切。しかし実際の社会や組織ではそれを構成する人間の幅と雑音(noise)で複雑。更に複雑になるのは自己顕示欲(self-aggrandizement)に権力欲と支配欲が絡まる状態。組織力(morale)が下がってしまう。マネジメント不在で言葉でリアリティーがつかれず、コミュニケーションやディスカッションがなくなると、行動・行為の正当な評価ではなく、人間の存在の否定に走り、排斥行為が常套手段。世界の良識に通用し、向上・発展の次元に本当に正直に心を砕ける器(caliber)の大きい“リテラシー”あるリーダーシップが望まれてならない。平易に一言。“正直さアナキー”(honesty anarchism)は、さすがに21世紀の今はまずいでしょ。そういう世の中の流れは成熟した社会では悪いことではないでしょ”。対人間と集団内外で正直に認め合う勇気が許し・赦しが双方向にむく姿勢こそ成熟したあり方であり一人ひとりが生かされる人類共通の大切な価値観でもある。これら大元の倫理観は聖書に源を発する。聖書の中の“白く塗った墓”表現やパリサイ人への叱責について見られるように義なる神が一番嫌うのは偽善。聖書は、人を社会意識・社会心理といった目に見えない社会の風潮が知らないうちに巧妙に操られそして思い込まされてしまう存在(killer)のことを「空中の権をもつ君」(エペソ人の手紙 2:2、口語訳)と表現している。モファット英訳は“under the sway of the prince of the air”。社会生活において、約束を反故にしたり、信頼を裏切り、更にはそれらに対して、言い訳や、ごまかし、合理化、正当化等々で開き直りする意識行動は、まさに空中の権を持つ君がほくそ笑む思ふ壺といえよう。神の前に正直に全部曝け出したディシエンダーは“Honesty is the best policy.”正直さの大切さ(fundamental value)を自分に言い聞かせ、確認し、紆余曲折のゆれも含めて再確認した生涯であったと再度付記しておきたい。

- (43) 聖書の翻訳の歴史は四国学院大学浜島敏名誉教授著の同大研究叢書 No. 3『聖書翻訳の歴史:英訳聖書を中心に』2003年、創元社 pp. 188-200で次の見解を述べている。「ただ歴史的な聖書翻訳には議論もあった。グーテンベルグの画期的な印刷技術により、高価ではあったが聖書の普及の走りにはじまり、特筆に値するのは、ジュネーブ聖書(1560年)である。章(chapter)は以前の世紀区分であったが、ここで聖書語句に細分化された節(verse)が付けられ、照合が迅速になった。翻訳そのものはプロテスタント関係者による訳であり、カルビン主義の影響が濃厚な響き(ピューリタンは歓迎)があったため、非難(“name-calling”)も受けた。弁明のためカトリック界からは大司教聖書(1568年)の出版があった。更にキング・ジェームズ(KJ)の欽定訳聖書(1611年)へ続き20世紀初頭まで文学や言語に多大の影響を与えた。KJは一世を風靡した英語の古典的聖書であった。このころからアメリカで標準訳(RV、RSV)関係も登場し、改訂版や派生版の翻訳もなされたが概ねスタンダードの翻訳であった」(以上の要約は筆者)。英語圏では歴史的に多くの聖書が翻訳されているが、その相違という特色、共通という特色や類似という特色がある。このことについて浜島敏は同著で次のように結論づけている。「私は教派の存在を否定してはいない。聖書を読み、真理を探究する中で生まれてきた教派にはそれなりの意味があり、それを覆い隠そうとする偽善よりも良いと言える。(中略)が一方、何が何でもくつつきさえすれば良いかのように、大切な部分を犠牲にして統一だけを進めている運動もある。(中略)

結局それはそれとして聖書に示された主イエス・キリストの十字架の愛に尽きるのではないか。」とマルティン・ルター・キングの夢を共に語りたいと結んでいる(pp. 340-341)。

- 筆者も方向を共有し、これらを可能にする翻訳学者の良心と良識を期待するとともに、教派や翻訳の個性を超え、基本的なところで人は救いに至る事実と現実はこれまた感謝すべき事実と現実でもあると強調したい。絶対者の前では「神の知恵により、この世は自分の知恵によって神を知ることがありませんでした。それゆえ神は、宣教のことばの愚かさ(下線は筆者)を通して、信じる者を救うことにされたのです」(コリント人への手紙 第一 1:21)。人生の一コマ一コマでいいものを素直に評価する開放的な姿勢(open-mindedness)は大切であるが、文学・神学や言語・歴史等では人は救われない。神の叡智の絶大次元、絶対次元の前の「愚かさ」についてモファット英訳聖書は日常語の“まったくもって:sheer”を付けた(epithet)言い回しで「sheer folly」と対比を心憎いほど明示している。ここで問題になることは原典とモファット英訳との関係である。原典を「text」と位置付け、該当箇所¹の文脈上(context)に特別な意味や含意があったり、感情的色彩を帯びている場合はそれらを編み出す(contexture)工夫がいる。人の知識と神の叡智の決定的な対比(anthesis)においては、人間の相対的な知は神の絶対智から見れば「sheer」といった形容辞(epithet)が相応しい。しかも前註の[sure]と同様、口語表現ですぐ隣にその人がいるようなモファット流の言い表し方はうれしいもの。同一線上にもう一つあった。英語の「utter」がそれ。
- (44) 文体と文脈を離れて、英語聖書自体の他領域との関係については、多大の影響があることは論を待たない。補足の書誌情報の一例になるが、四人の教授(東京大 寺澤芳雄、立教大 舟戸英夫、東京医科歯科大 早乙女忠、明治学院大 都留信夫)による『英語の聖書』は文学作品等への影響などを含めて聖書と諸学問の関連性に焦点を当てた学際(interdisciplinary)的著作である。
- (45) モファットの章立ての変更は再考すれば変更というよりは調整と考えた方が良いのかもしれない。註(43)にある聖書の節についての浜島敏の解説に加えて、「章」について筆者による論述の要点を述べる。聖書の記事の流れに従って適切なところで区切りがあれば読み易い。が、それは聖書そのものの本来の仕分けではない。番号を入れた章は現在定着しているとはいえ、人間による歴史的、社会的なものである。聖書の各章付けは1227年 Stephen Langton によるもので年月を経て1382年にウィクリフ英語聖書に採用されたことが聖書翻訳史の中に落ち着いている。敢えてモファット博士による章・節に関して評価を加えるとすれば、かつての人為的な章立を尊重し、章名はそのまま残し、読みやすく章順序(inter-paragraphic development)を変えたまでといえよう。人間の言語認識の観点からモファットは聖書の文言に読む愉しさと理解する喜びという名の「質保証」を与えた牧師だったのだ。
- (46) 人にとって種々の翻訳に出会い、熟読したり、あるいは複数の翻訳を相互照合することで聖書の真意が浮かび上がる過程は素晴らしいこと。最終的に、ヘブル語・ギリシャ語・アラム語の原典に対して有学(Not illiteracy)はもっと素晴らしい。何語であれ言語とはいいいお付き合いで(good company)ありたい。言葉の限界は世界の限界だから。

このお付き合いに言葉の諸相(phase)の一つとして譬え(parable)に焦点を当ててみる。言葉の理解を分かり易く深めるため、機知の旧情報から目指す意味に転移(transference)させる修辞法がある。日常会話によく出てくる「人生は旅のようである」は類似の観点から人生から旅に譬えたこの手法で人は納得する。聖書の中に多くイエスキリストの語録として譬えは登場するのでその文言は記載しないが、「ように、ような」で例示される事柄は分かり易い(マタイの福音書 13章の種まき等)。修辞法的に纏めれば、これは直喩・明喩(simile)である。思索がいるのが隠喩・暗喩(metaphor)。旅談議でいえば「人生は旅である」が典型例。言葉の厳密な意味(true sense of the word)においては人生イコール旅ではないが、直接「旅」の属性を「人生」に写した表現形式。人生の本質は旅の中にもある本質的要素が共有され、了解される。これは本論文の最重要語句の一つである「方法論的拘束」である。より高度、より抽象度の高いもの(entity)を表現する場合にコミュニケーションの道具として人口に膾炙している「旅」を使ったままである。

具体的に譬える事物・文物がある言語学の難問(aporia)は聖書は神の存在をどのように言葉で定義するか、存在論の問題である。言葉は意味を表すと同時に、対象に制約を加える機能がある。神を言葉で定義した途端に、その意味領域に(semantic domain)に絶対者である神に制限を加え、縮小され、制約という輪郭の中に閉じ込めてしまうので言語的にも、論理的にも行き詰ってしまう(oxymoron)。本来定義不能であるが、伝達のためには材料という相対的な何かを使って、その何かは決して神ではないが……。でもいわざるを得ない。こんな中でチャレンジするのが人間の言語学。ただ聖書の中で高評価の言葉を使った効用も神の絶大次元から見れば色あせて見える。「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです」(コリント人への手紙 第一 1:25)。

言語ジレンマの只中で「ことばは神であった(ヨハネの福音書 1:1)」と聖書は宣言する。登場するのが周知のもの、近似のものを惜しげもなく断定するのが暗喩であり、隠喩のメタファー(metaphoric management)。しかし、苦渋の伝達方法は最高道具である言語そのものを直接かつ直截的に使った「言葉の言葉」(metalinguage)でもある。メタ言語を使って断言したもう一つの表現が旧約聖書にある。口語訳聖書は「わたしは有って有る者」(出エジプト 3:14)。これは KJ 聖書の「I AM THAT I AM」とよく似ている。モファット訳は「I will be what I will be」、Amplified Bible は「I AM WHO I AM and WHAT I AM, and I WILL BE WHAT I WILL BE」と。文学の世界では作家の苦しみは付きものであるが、最高位としての神の存在は限界のある人間の言葉を使っている言語化(音声化も)はこんな離れ業でしか表せない。しかし「有って有るもの」表現フレーズは印象に残る言い方。

こんな状況の下で、最後の最後の本質的な決定論は神が人間の歴史に介入したこと「御子は神の栄光の輝き、また神の本質(モファット訳は God's own character)の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます」(へブル人への手紙 1:3a)。神の定義や神の属性の言語的説明や努力を超えて、聖書は人となったイエス・キリストが神と宣言する。旧約聖書もこの一点を指し示す長い歴史の書。そして神についてのすべての認識はこのイエス・キリスト経由にと、イエス・キリストを軸に置くのが聖書の真実。以下は社会や歴史との応用例である。

神の存在や属性といった第一義的な内容の展開ではなく、この世に具体的また即物的に時間的(歴史)にまた場所的(地理)に“あってあるもの”に対しても「ヘブライズム」はこのようにポジティブに活用する進取の精神がある。それらは当時の政治形態、社会的階層、人間心理、人間行動等々であるが、これらの材料を道具として使い、より高次のものを表す知恵がある。具体的に存在するもの、周りの使えるもの(usable)を使って(spatial-temporal entity)本質を粘り強く目指す。ギリシャ思想や哲学のヘレニズムとは違いヘブライズムのユダヤ人のめげない強さは衆目の一致するところ。「フツバ」と発せられるイエディッシュ語のキーワードがある。これは、例えば両親を殺してしまった少年が、裁判所の陪審員に向かって“皆さん僕は親のいない可哀想な孤児です”といった言動。過ぎ去ったことは過ぎ去ったことなので、拘泥しない、過去を振り切り新しい未来の展開に切り替え生きていく上での大切な価値観とあるユダヤ系アメリカ人から説明を受けた。この知日派のユダヤ系の教授であり博士は、この行為は日本では厚かましきとして一番嫌われることでしょう、と日本人メンタリティーを良く知っている。未来への転換という社会的価値観を使って肯定的に未来に向かうこのパラダイムでユダヤ人は生き延びてきた、と生存の歴史を付け加える。親がアウシュビッツで殺された悲劇を持つこの大学人、そして博士(Ph.D.)。

こんな激しさはないが、現在世界に伝播している「クリスマス」もあるものを使って、キリストの歳時記の一つに貢献した事柄。クリスマスの日時の確定は、イエス・キリストの降誕そのものに比べれば第二義的(peripheral)といった註(32)の周辺情報。当時ローマやその周りにあった農業祭や他の習俗としての催事を使ってキリストの生誕としたまで(use→to achieve)。繰り返せば、すでに周りにあるものを使ってあること(通常高次の事柄や本質的な事柄)を達成する方法。聖書には日時は一切触れていないし第一次的な関心事ではない。註(31)のオッカムの髭剃り方式の焦点中心主義とも言えよう。歴史上の事柄を使ったことは、「方法論的拘束」である。ただ身近な何かを使うと、その延長が本体と思われがちであるし、神について不可知論や無神論的風潮の強いところ(locale)では、この方が俗受けする“合理化”の発想になり、社会に広がってしまう現実がある。クリスマスに纏わる日本のもう一つの社会風潮がある。エピファニー(ギリシャ語から英語の appearance と合致させ epiphany)であり、顕現節、公現節ともいう。これは東方の博士達が、真に礼拝するお方としてのイエスを求めて旅を続け、先ず王様のところに行く。そこで「見つけたら知らせしてくれ。私も行って拝むから」といって送り出され星に導かれ(guiding star)12日目に幼子イエスに会い礼拝を捧げた出会いの出来事。イエスを拝した後、王による殺害計画を見抜いた博士らは別のルートで自分たちの国に帰る(マタイの福音書 2:1-2)。端的にいえば、博士達はリサーチを重ね、最高の価値を目指し、フィールドワークの旅をし、身近な行政とも関わるが、洞察力を働かせ問題を見抜き、権力に迎合して自己栄達(self-aggrandizement)に走らず、真理・真実を一筋に求める学者本来のアイデンティティーの明確な記録。真剣に探求し、本質を見出すことをエピファニー(博士論文に最終的に本質を把握した意で「エピファニー」をキーワードに使う人もいる。途中の段階やローレベルで使うとミスマッチで失笑をかう)という。聖書全編を通して、世の知者、哲学者、権力者達は陥りがち、あるいはすでに陥っている負の側面の故に警告・叱責を受けているが、聖書の記録の中で何の咎めを受けていないのは「博士」のみ。こ

の博士の来訪の聖書記事により、本来、クリスマスの祝いの時期(Yule Tide)は1月6日までの12日間。諸外国では、通常、1月6日の後にくる日曜日(顕現主日)までがクリスマス・シーズンでクリスマス・ツリーやリースなどが飾られている(12日目の夜という期間について、*Twelfth Night*という題名でシェイクスピアは作品を書いた、クリスマスとは関係ない内容であるが)。日本では12月25日でクリスマスが見事に終了し、即年末・年始の商業活動に特化したシーズンが到来。

「方法と本質」から出発し、「文体と思想」という形でモファット英訳聖書を中心に論考してきたが、社会の日常との関連性も含め、モファット自身の博識と博学を形成してきた高次元の洞察性と明晰性の訓練課程(something doctorate)において、「手段と本体」の識別による関係、「価値観の優先順位」、「思考の展開」、「社会思想や理論操作」、特に深層面を支配している「暗黙の前提」(tacit assumption)の諸課題といった“学的重荷”(burden)の過酷な処理能力が常時要求される過程をやり抜いた牧師、博士、神学者。この厳格性の故、余計なものが付いてこない。これ故、本来の姿が風景としても浮かび上がってくる。これら相応しい背景を使って独力で英訳したのがモファット博士訳聖書。そしてこの私訳を独力で読んだのが後の宣教師 Jacob DeShazer。神が使ったのはこんな二人の歴史であった。

<特に明記しない限り日本語訳聖書は「新改訳聖書 2017」、英語聖書はモファット訳聖書(Moffatt Bible)を使用。付随(incidental)し関連(peripheral)した話は TS(Tangential Story inserted)と略記。話法体としての談話構成は台本化を意識して緩い段落単位(paragraph chunk)にし、通し番号を付した。原作としての「語り」と脚本としての「台詞」はそれぞれの特質を生かした強調点がある。ディシェーザーの獄中での独白については愚痴、叫び、疑い、願望等が多くあり、これら愚直かつ直截的な生々しい告白をたましいの祈りとして記した。そのままの言葉の率直性の故に、「語り」から「脚本」に移行した部分や、台詞において言語表現と言語表情の共有・共用場面がある。>

(1) 真珠湾の報復

1941年12月7日(日本:12月8日)真珠湾攻撃。その後も日本軍は破竹の勢いで進撃し、日本は勝利で沸き立っていた。一方アメリカサイドでは、日本社会の奇襲作戦の考えでは到底、理解出来ないこの卑怯なだまし討ちは、日本に対してはらわたが煮えくり返る感情と報復心をつくりだした。後、ディシェーザーが学ぶことになる神学校の学長 C. Hoyt Watson 著の古典的著作 (*DeShazer*, The Light and Life Press, 1950) 及びその改訂版 Anniversary Edition(1972)においてワトソンはこの喫緊の状態を次のように述べている: demand for the military authorities to do something quickly and emphatically to jar the Japanese leaders (下線の語義:ガタガタの振動・衝撃→神経に触る、神経を逆なでする。一泡ふかす)。復讐心に満ち怒れる血気盛んな若者が多数、報復戦に志願してきた。ドゥーリトル、Doolittle 中佐を隊長とする 100 名弱の隊員からなるパール・ハーバーのリベンジ・ミッションになる。日本がまだ制空権を握っていた4月のドゥーリトル中佐による Doolittle 攻撃計画はほぼミッション・インポシブルのシークレット・ミッション。ここにジェイコブ・ディシェーザー (Jacob DeShazer) という名の男が志願していた。後の名古屋初空襲の爆撃手。このリベンジ計画そのものは、長い間日米両政府とも隠していた。パール・ハーバーのリベンジの対象は広島・長崎の原爆にしておきたい、ドゥーリトル日本本土初空襲が真珠湾のリベンジになると、広島・長崎の正当性がなくなるのがアメリカの政治家の読みであり一般的アメリカ人への印象操作。一方、真珠湾のたった5週目に日本本土が空襲されたとは思いたくないのが当時の日本軍部の面子であり、日本国民の戦勝感情とも一致する(plausibility)のが当時に社会意識であった。日本は日本でこういった印象操作。

(2) ジェイコブ(ヤコブ/ジェイク)・ディシェーザー

ジェイコブ(ヤコブ)・ディシェーザー (Jacob DeShazer, 1912—2008)、通称ジェイク (Jake) は オレゴン州セーラム(Salem)で11月15日に生まれた。2歳の時父を亡くし母ハルダ(Hulda)はアンドラス(Hiram Andrus)と再婚。そしてディシェーザーはアメリカのオレゴン州の片田舎に育った悪ガキ少年。幼少の頃は母親の影響で日曜学校(教会学校)に行っていた。とはいうものの、いたずらはする、盗癖もある厄介者だった。タバコはやるし、学校生活はいい加減、万引きが常習生活。運送業者が玄関先に置いていった配達物を盗んではよく捕まった。このため、いつも両親は神の赦しを祈る。弁償の繰り返し。ただ親の謝る姿だけは直面するのが辛かった。イエス・キリストについては単なる歴史上の人物で神とっていない。ただ罪滅ぼしのため、親に少しでも喜ばれようと、オレゴン州マドラス(Madras)のフリー・メソヂスト教会の日曜学校に行っていた。半分は連れて行かれて行った、これが実情。教会学校の先生からは

教会の礼拝に来る時はきちんとした服でと注意を受ければ、わざと派手、ド派手の新しいベルトに大きなバックル付きの繋ぎの服。見せびらかすためだけに教会に来ていたのが少年ディシェーザー。もちろん聖書の話はうわの空であった。

(3)

学校時代はオレゴン州マドラス。そこは風に吹きさらしの大平原 (Great Plains)。この小集落 (人口 300 人) で働くことの必要性は感じていた。しかし学校はよくさぼる。しばらくして同じ州の都会、セーラムに引っ越し。ここの学校ではフットボールと野球に熱中。非常に元気だったが乱暴な性格だった。高校卒業時の 1920 年代は大恐慌の時代。大学は行きたかったが働く。羊飼をし、山や砂漠の自然、動物たちが一杯の仕事を楽しむ。日常が平地であったので高い所、特に山には憧れていた。近くの山で大声を出しているうちに、だんだんヨーデル風になってくる。自分なりに工夫し、山でヨーデルをし、歌の高い部分と低い部分の歌の高低差を自然の中で満喫。ある日。高い空に飛行機を見た。ジェイク少年は高さに憧れたせいか「飛行機は自分のもの、自分のもの」と叫び続けた。高卒後、肉体労働に就く。山林で伐採、動物の世話。1939 年の 5 月まで一で生懸命働いて 1,000 ドル貯めた。その全財産をつぎ込んで七面鳥を投資の為飼った。しばらくすると売値は下落し、文無しに。飛行機好きの夢の再現もあり、1940 年、給料がいいので軍隊に入る。当然飛行機乗りになりたかったが、年齢制限で資格なし。それでパイロットは諦め爆撃手に。そして厳しい訓練の軍隊生活がはじまった。2 年したら真珠湾。バイト先で、ジャガイモの皮をむいていた時だった。12 月 7 日朝、ディシェーザーはこの真珠湾奇襲攻撃をラジオで聞く。怒り、怒り、怒りが全身の細胞に突き刺さり、日本に対する憎しみ沸点に。烈火のごとく。激怒したディシェーザーは。「畜生、ジャップめ！今に見ている」激しい憎しみが若い彼の内に日に日に大きくなっていった。先に手を出す奴が悪い。やられたら絶対にやり返すが俺たち西部の人間。俺は不良だが、正義感はある。多くのアメリカのごくごく普通の若者同様、青年ディシェーザーの心は自立心旺盛で西部の荒ら荒らしい個人主義 (rugged individualism) の持ち主。それは “Not in my backyard” : 自分の家族、恋人が住んでいるところをやられたら、最後の一人になってもやる決意。理屈はいい。相手をとことんやっつける。やられたら絶対に仕返しをする。それがフェアプレイ。

(4)

当時ルーズベルト大統領は日本による真珠湾奇襲攻撃の前に真珠湾攻撃を予想し、アメリカの主要空母は秘密裡に真珠湾外に停泊させ無傷・無傷。第一次世界大戦後のアメリカ社会の厭戦気分を敵愾心を焚きつけようとずっと思っていた大統領にとってこの先制攻撃は大歓迎。事実、真珠湾攻撃直後の演説原稿も事前に用意していたという。そのように考えたのがルーズベルトの隠された作戦 (maneuver)。国民をやる気にさせ、すぐさま政府は真珠湾に対す危機演説と具体的な反撃を模索。大統領は、日本軍は南方に戦力を注いでいるので日本周辺の制海権が弱くなっているはずと分析。その隙間を縫って日本本土をすぐさま空襲する計画を練りはじめることに。ここに第一次世界大戦時のエースの軍人、Doolittle (James “Jimmy” Doolittle) が登場。

(5)

このアメリカ秘密ミッションのリクルートのため、ドゥーリトルは志願してきたディシェーザーに目をつけ、はじめから近寄って来て話しかける。ディシェーザーもドゥーリトルこそ

このリベンジ攻撃に立ち向かう勇敢な指導者と惚れ込み、どんなな計画であれついて行くと
言い切る。訓練を熱心に受けた。行く先はヨーロッパか日本か分からない。そしてこのディ
シェーザーが後日名古屋を攻撃することになる。日本軍に捕まりそして捕虜に。後述の中心となる捕虜
収容所で聖書を懇願し、戦友の葬式で使ったものが、天皇陛下から下賜されたとして 3 週間の期限
付きで渡される。その聖書を6回通読イエス・キリストに劇的な出会いを体験する。生きて帰れば
この名古屋に今度は友として来たいと獄中、献身の思いが膨らむ。死刑が免れ、餓死や病死の寸前
で奇跡的に命が助かり、終戦後ワシントン州シアトルの神学校に入学。そしてそこでフローレンスに
出会い結婚。生後間もない長男 Paul を連れてかつての敵地、名古屋に。宣教師として。

(6) フローレンス

シアトル・パシフィック大学 (SPC: Seattle Pacific College、後 University に) でのフローレンスの人生も、
ディシェーザーと神学校で出会い、自分の信仰生活の新しい方向へと発展する。フローレンス
(Florence Faye Matheny) は 1921 年 8 月 9 日アイオワ州生まれ。父親はアーチャー・マセニー
(Archie Matheny)。農夫で音楽好き。PTA で歌う。楽器：バイオリン、フルート、ハーモニ
カ、横笛、トランペット。母親は物静かで敬虔なクリスチャン。娘フローレンスはいつも母
が膝づいて祈っている姿が心に焼き付く。フローレンスは物心ついた 1928 年、7 歳の時アイ
オワ州のトッドビルに引っ越した。そこでトウモロコシ、干し草、オート麦や豚鶏や乳牛を
育てた。しばらくの間、牛乳を搾り、配達し、近所の人たちに作りたてのクリームを届けた。
家には大きな庭があり、パンを作った。‘小さな頭’ という名の一部屋しかない学校に通って
いた。父は馬や馬車で学校に、また後日やっと買えた我々の最初の車、T 型のフォードで学
校に送ってくれた。母は私たちの着るものを縫っていてくれた。私たちにとって、学校用の
服二着と日曜の礼拝用の一着が正式の服だった。家は古く、水道や電気はなかった。水はポ
ンプで井戸水を汲み、牛や馬のためにいつもタンクを一杯にしておかなくてはならなかった。
牛や馬は信じれないほどの大量の水を飲む！トイレ用にモンゴメリー・カタログ販売
(Montgomery Ward) のトイレット・ペーパーを買った。トイレは家の外。貧しかったが、自
分達は貧しいとは思っていなかった。

(7)

9 歳の時、ある朝「火事だ、火事だ」皆逃げろの叫び声で目が覚めた。黒い煙が家の傍の材
木置き場から出ているのを見た。この日は 3 月のものすごい風のある日で、火はすぐに松の
木に燃え移り、そして我が家にも火の手が回った。消防もなかったので火を消し止めること
が出来なかった。ただ涙を流しながら自分の家が炎に包まれるのを見ているだけだった。良
かったことは、親切な隣人がほとんどの家財を安全な場所に運びだしてくれたことであつた。
ただ地下の新鮮な肉だけが失われた。後日、同じ場所に家を再建した。毎夏トウモロコシか
ら 2,000 の缶詰を作った。そのトウモロコシは畑から父が運んできた。皆でトウモロコシの
皮をむき、母はそれらを湯通しした。姉のマーガレットはトウモロコシの鞘を 12 本剥いて 1
ペニー (ほぼ 1 円) をもらった。父はトウモロコシを缶詰に詰め、塩を加えて缶の蓋をした。
父はシーダー・ラップド (Cedar Rapids) のお得意さんに売りさばっていた。お金が入り、経
済大恐慌の時代はそれで助かったと、困難だった時代をフローレンスは振り返る。

(8)

高校時代のフローレンスはバスケット選手。教会学校に出席。13 歳の時モンロー・タウンス
シップ中等学校に入学。そして 1938 年レノックス短大に。学生生活満喫。その分信仰は薄らぐ。

1939年短大2年時に学校教師になろうと決める。この頃から何か心に空虚感を覚え、聖書を読むことにした。キリストに自分を明け渡そうとするが、そのことで友人を失うことを極度に恐れる。1940年に故郷で教壇に。教えたのは幼稚園から中2までで、子ども達の成長を見ることが大好きだった。政府から若干の物資、例えば缶入りミルク、豆、ポークの塩付けやスモモの配給があった。、子どもの給食ランチ用にと。ポークの塩付けは木の箱に入った大きな塊の状態で運ばれてきた。豆と一緒に料理したが、ある時ネズミがその中に入っていた。ネズミ入りの肉の後始末が問題であった。もし外に捨てれば犬や猫がそれを食べて病気になる。一番いい方法は火の中に放り込むことと直感。すぐにストーブの火が真っ赤になり部屋中に臭いが充満した。まもなくその臭いと火花が煙突から出て、近所の人がとんできて、私が学校に火をつけているのだと思われた。よく学校を首にならずに済んだものだった。教員生活の最後の3年間は出身のトッドビルの学校で、幼稚園児から4年生までを教えた。2、3年して教職をやめてさらに学び、宣教師の仕事に就きたい、これが神様からの召命と感じはじめた。具体的な事柄を考える人間なので‘どうやって、いつ、どこで’に対する答えを知りたかった。これは丁度白紙に自分の名前を書き、その具体的なことは神が記入と受け取っていた。教員生活の1942年人生の転機が訪れた。“私の人生は1942年にリバイバル集会に出てイエス・キリストを自分の人生に受け入れたことで劇的に変わった”と。「あなたの方で良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださると、私は確信しています」(ペリピ人への1:6)。今までは確かに自分はいつも教会に出席していたが、この時、私はキリストを受け入れることと献身することが自分の中ではっきりした。そして気持ちの面でこの事実はワクワクするアドベンチャーであるとも実感、とフローレンスはその確信を明言。

(9)

この時期、多くの牧師から多くの影響を受ける。自覚したクリスチャン (born-againer) に、そして海外にもと決心。神とのコミュニケーション、祈りの必要性を実感。しかし海外宣教については、どう祈っていいか、言葉も出てこない。モヤモヤした感じであった。その時の聖書の言葉が心に浮かんだ、「主よ、私の唇を開いてください。私の口は、あなたの誉れを告げるでしょう」(詩篇 51:15)。聖書と自分がこんな形で結び付き、少し明るい気分になったと思った。次のステップの信仰についてはある集会で自分の目的が示され、宣教師を目指すことで短大から大学への思いが強くなった。大学3年生に編入を計画。幸いなことに、私の人生の選択についてはアイオワ州からオレゴン州に移られるフレンチ牧師夫妻からの具体的な励ましがあった。西海岸に向かう車と一緒に乗せてもらった。学校が始まるまでオレゴン州ポートランドの郊外グresham (Gresham) に居候をさせてもらった。しばらくの間、バイトで私は小さなアイスクリーム・スタンドで働いた。

(10)二人の出会い

ある日バイト先で、ある新聞記事が目にとまった。それはDoolittleのジェイク・ディシェーザーの記事だった。次のように書いてあった。「彼は日本軍の捕虜になり収容所の中でクリスチャンになり、今度は宣教師として日本に戻りたい」そしてその記事によるとディシェーザーは神学校で勉強の予定だがこの神学校かはまだ決めていなかった、と。しばらくしてディシェーザーは妹のヘレン (Helen) が通っていたこともあって最終的にシアトル・パシフィック・カレッジに決まった。不思議な巡り合わせでフローレンスも同じ大学を目指すことに

なった。入学の直前にある本で、釈放されたディシェーザーが母親の作ったフライドチキン
を食べている写真を見つけた。今、生きて帰れて今度は宣教のため日本への記事を神学校
(SPC)の大学案内で知った。学籍については、フローレンスはSPCの3年生に編入(レノ
ックス短大より学部入学)。SPCでフローレンスは、すぐ多くの友人に恵まれた。元気で明る
い、明朗快活(vivacious;人に対して)。<TS:事実、後日名古屋の守山区で飼うことにな
った犬の名前はもうひとつの単語:frisky(子どもや犬などに対して、元気一杯の意)>。と
にかくいつも前向きの性格の持ち主のフローレンスであった。ジェイクの方は新入生の1年
生。有名になったジェイクは捕虜体験の説教で大忙し。1946年春、ディシェーザーとフロ
レンスはYouth for Christ(キリスト教青年会)の集会と一緒に出席。二人はそれから親しい
間柄に。二人のロマンスの始まりであった。フローレンスは好きだとこっそり友達に打ち明
けていた。ディシェーザーの母親も結婚を勧めていたが、ディシェーザー自身は、フロ
レンスは人気絶頂であるし自分のことなど結婚相手には……。ところが学校行事でアメリカ・
ワシントン州に隣接するカナダ・バンクーバーのビクトリア島に出かけた時(絶景のこの島
のロマンの雰囲気呑まれたのか)フローレンスの友達が船のマイクを使って二人の仲を
“Hello, we have a special announcement of the couple …”とやってしまった:驚きはしたもの
のまんざらでもなかった。しばらくして2人は本当に結婚。共通の目的で共に祈る。2人
で人生を。1946年8月29日オレゴン州最大の都市ポートランドの郊外グreshamのフリー・
メソヂスト教会でゴールイン。社会は不景気でジェイクは結婚式の式服が買えなかったの
で2度目の父親から借りる。結婚式の一コマ。

(11)結婚

フローレンスは新婚生活と学生生活。経済的にも苦労が。肉や石鹸といった日常品も足らな
い。学校ではバレーボールのマネージャーに選ばれ、聖書研究会のリーダーにも選ばれる。
忙しい毎日の連続。1947年病気になり、吐き気とめまいが続く。しばらくして妊娠。ジェ
イクの捕虜体験とフローレンスの献身と海外宣教(日本宣教)で個人や教会やキリスト教関係
諸団体からの説教・講演依頼が殺到(swamp into)。こんな忙しきで父親としての家庭生活が
不十分で新妻から愚痴が。妊娠しているのに、新郎はいつもあちらこちらへ。寂しい気持ち。
出産の準備は何もできていない。学業も遅れに遅れる。また二人の若い女性秘書がジェ
イクに同行し、説教・講演活動で夫は家にはいない。心配やら嫉妬心が湧き、面白くない新婚フ
ローレンスだった。

(12)新婚家庭

1947年10月31日長男パウロが生まれ新しい喜びが。新しい張りもでき、夏休みの集中講義
も取り猛勉強。ディシェーザーは相変わらず外の仕事で忙しい。こんな時医者から長男パウ
ロは体重があまり増えていないと注意を受ける。ともかくフローレンスは子どもの養育、買
い物、日本語の勉強、夫の論文のタイプ打ちと目が回る忙しき。こんな間を縫って、彼らは、
アメリカとカナダ中の支援教会からの要請で報告説教(deputation)のため、あちこちまわ
った。文字通り、スーツケースで生活をしているようであったが、新旧の多くの友人たちに
挨拶してまわることの出来、恵まれた機会でもあった。オハイオ州では長期にわたる巡回の
旅をした。ここがまるで第二の故郷だった<TS:筆者はこの地名から捕虜収容所でのキー
ワードになったオハイオ(お早う)と言いたところであるが……。後述部分参照>。事実、
オハイオ州のアクロン(Akron, 1948年6月)では教会が多目的の建物を建て、それを「ディ

シェーザーの家」と名付けた。そこの牧師夫妻はジェイクに因んで、自分の息子にジェイクと名付け、またアクロンの市長は B25 爆撃手の「ジェイク・ディシェーザーの日」の制定を公式に宣言した。

(13)

イースターも近いがふさわしい服もない。こんな時 Doolittle 出撃中イースターをサボったジェイクは罪滅ぼしだったのか、ともかく男のセンスで新妻フローレンスにイースター用の服を買ってきてくれた。気に入ったが少しスカートの丈が長いと思った。しかしディシェーザーはその方が好きだった。そして二人は同時に卒業。地域の新聞や雑誌に「日本爆撃手その妻と共にシアトル・パシフィック大学で学位取る」「爆弾ではなくバイブルを」(The Bible, Not Bombs)、「かつての爆撃機乗りが妻と一緒に日本宣教に」等々。当時まだアメリカは不景気で生活用品や買う余裕がなかった。このことを知った本当に多くの人達からの援助を受けた。そして 1948 年 8 月 7 日ジェイクがフリー・メソヂスト教会の正式牧師として按手礼 (ordination) を受けた。

(14) Doolittle 作戦

この作戦に続く具体的な展開は「攻撃」「捕虜」「憎悪」「葛藤」「告白」「献身」の流れになる。はじめにアメリカサイドからの作戦を中心に見てみたい。このリベンジミッション・ミッションの指揮官 Doolittle の考えたことは:できるだけ大きな爆撃機を飛ばす。しかし航続距離が問題。だったら空母で運ぶ。問題は空母の滑走路の長さ。飛び立てない。陸軍機の爆撃機 B25 を使ってみる。訓練でぎりぎり 1 フィート(約 30 センチ)だけの余裕で発進。しかし着艦は出来ない。ワンウェイである。<TS: こんな奇想天外の発想の持ち主が、規模は違うが、日本にもいた。ここで藤田信雄の史実を一部挿入する>。潜水艦に飛行機をばらして積み、陸地に近いところで浮上し、急遽、組み立てアメリカ本土を単機で攻撃。爆弾を落として山火事を発生させる作戦。前日、雨が降ったので火は広がらなかったが、初めてのアメリカ本土空襲。終戦後レーガン大統領がその勇気を気に入り、自分の執務室の星条旗を贈り、攻撃地オレゴン州に招待した。畏かもしれないと恐る恐る藤田はアメリカへ。しかし大歓迎だった。帰国後、返礼にアメリカの青年を日本に招待。この藤田信雄中尉の実話を倉田耕一が『アメリカ本土を爆撃した男』と題して発行。日米とも奇抜な男はいるものだ。

(15)

記述を Doolittle に戻す、艦隊規模は空母 Hornet が DeShazer の飛行機 #16。他空母 Enterprise、2 Cruiser (巡洋艦)、2 給油艦、6 Destroyer (駆逐艦)。隊員はどういう戦い方か知らされないまま 1942 年 4 月 1 日に出航。4 月 2 日、洋上で日本本土攻撃を知らされる。そして 4/17 になってホーネットが具体的な攻撃を知らされる。その間「イースターの集会」が海上で持たれた。ディシェーザーは興味ないので顔も出さない。艦隊は進み、空母の日本接近予定海域 4,500 海里(約 840 キロ)が作戦。しかし 2/3 の 6500 海里(1,200 キロ)のところで見えられてしまう。その日は雨と突風。このような海域に日本の小さい船がいるとは思ってもみなかった。このカツオやマグロ釣り船(改造)の小さな“艦船”は目標が小さいし、海のうねりのため砲弾 1,000 発で(大きな 1 戦艦を撃沈する火力)やっつて撃沈。ともかく見えられてしまったので、この日本本土奇襲攻撃をやめ、引き返すか、日本攻撃を遠いこの位置から即発進か。選んだのは後者。雨風の中での混乱と混雑。空母の向きは横波を避け波の方向。よって滑走路はシーソーで上下に大揺れ。大揺れの母艦そのものに加え、混み合っとうまく出られない。しかもディシェーザーの飛行機の風防ガラスにホール(破損)が見つかった。応急処置の布を詰め、とにかく飛んだ。飛び立てたが実情。編隊を組むのに待っていると燃料を使うので単独

で飛行。空母はここに留まると日本軍のターゲットになってしまう。空母を含め艦隊は全速力でアメリカに引きかえす。当初、攻撃は夜が予定であったが、途中で発見され日程が狂う。ターゲットは軍需施設が建前であったが、現実には JAP に対する憎しみが沸点を超えていた攻撃隊は・・・。Hey you, Jap! Dolittle の #16 機のあだ名は文字通り、“The Bat Out of Hell”（地獄の蝙蝠）。遅れてディシージャーが発進（日本上空からの通信は傍受されるので攻撃地に着くまでは味方同士の交信厳禁）。途中で日本軍に見つかったり、暴風雨で編隊は組めなくなったので攻撃は自分の判断、フレキシブルなやり方になった。速度が上がり、風防ガラス（フレキシブルグラス）の亀裂をコートで塞いだが、風のため飛んでいってしまった。日本が勝っていた時期なので漁船の漁師も手を振るし、本土でも味方と思い手を振る。昼間の攻撃なのでよく見える。簡単に市民も機銃掃射。名古屋市東区の三菱の軍需施設はもとより学校も空爆。（「赦し」の公演されたナゴヤドームに隣接する名古屋東文化小劇場は東区）。貯蔵オイルタンクに焼夷弾。攻撃。途中、何度も味方機と思い手を振る人々も。最初はガスタンク。炎上。次は飛行機工場。炎上。Hey you, Jap。高射砲が来たので離れ海の方へ。また漁師も手を振る。数回機銃で撃つ。近くの漁船の男たちも味方の飛行機と思いここでも手を振る。楽しみながら (trigger-happy) 機銃で撃った。だんだん風防窓の壊れがひどくなった。風防ガラスの損傷により他機より燃料を消耗。天気もだんだん悪くなってくる。かなり燃料を余分に消耗した。でもなかなか止められない。

(16) 日米では

名古屋初空襲は終戦間近の時ではなく、真珠湾後 100 日あまり後の 1942 年 4 月 18 日。あまり知られていない史実。アメリカでは広島は真珠湾のリベンジ。この正当化理論が強いので、この史実は、認めたくないのが心情。日本は日本本土がすぐさま攻撃されるのは“恥”だったし、「名古屋で小被害、敵機来襲に国土防衛全し」と 1942 年 4 月 19 日「東京日日新聞」は報道。その後長い年月話題にも上っていなかった。しかし戦後 70、75 年たち日本でも 2017 年 8 月 15 日にドゥーリトルについて「NHK スペシャル」で『ふたりの贖罪』と題して映画化され、一般放映された。その二人は真珠湾リベンジの爆撃手と真珠湾攻撃隊長の淵田美津雄。

(17)

ディシージャー機は中国に入ったところで燃料が無くなる。燃料尽きて落下傘で脱出 (bail out : 空軍の現場用語)。ディシージャーの 16 番機墜落、炎上。作戦は中国大陸の日本軍未占領地の内陸が着陸予定地だった。そこでアメリカが支援する蒋介石軍に保護を要請。大きな陸軍機 B25 で予定外に 500 キロも余分に飛んで日本本土。そして憎悪の攻撃をやり過ぎ、中国へ向かう。途中、日本軍占領地の上空で燃料切れ。墜落か不時着か落下傘かが選択肢。真夜中、We gotta jump. 後日談であるが、ディシージャーの母は息子の出征後、近所の人達を誘って祈祷会をほぼ毎日持っていた。この日は一人で母は徹夜で祈っていた。アメリカ時間で午前6時頃。心が合わされ、祈りが合わされ、母の熱心な徹夜の祈りの時は、ディシージャーが落下傘で飛び降りた丁度その時間だった、と聞く。母のハルダは胸騒ぎがして早朝起きて祈っていた。奇妙な気持ちに襲われ、ちょうど下へ、下へ、その中でさらに下へ落ちていく感じがした。苦しくなり、その重苦しい苦しさから神に祈り、思わず叫んだ。突然この重荷は取り去られ、もう一度眠りについた。今までにない経験であった。その時愛する息子が落下傘での瞬間とは思っていなかった。アメリカでの放送はただ日本に爆弾を落とす、とのラジオ放送があったのみ。

(18) 落下傘で (bail out) そして捕虜に

ディシージャーは落下傘で飛び降り助かった。祈りは聞かれ、それは主の守りと試練の場と恵みの

場が神の遠大な計画だった、とディシェーザーはしみじみと述懐する。落下傘での墓地への着地で胸を打って痛みがある。肋骨も折れたに違いない。降りたところはぬかるみ。とにかく落下傘の紐を切り、自由に。仲間への合図のためピストルを数発。応答なし。ディシェーザーは雨の中で近くの寺を見つけ、次の日の朝まで寝た。目覚めて西の方に向かって歩き出した。人に会った。ここにいる人たちは中国人？日本人？よく分からなかった。

(19)

しばらくすると軍服を着た人たちが来た。身を守るため A-45 のピストルを自分は持っている。銃を持った兵士がやって来たので「中国人か日本人か」叫んだ。相手は片言の英語でピストルをこちらに持たせてくれと。しばらく行くと野営キャンプに。お前は日本軍に捕まったのだと半分日本人、半分ポルトガル人通訳（レメディオス：Caesar Luis dos Remedios）が言った。しばらくして他の場所へ連れていかれた。すでに #16 番機の戦友 4 人（バー、ハイト、ファーロー、スパッツ）が捕まっていた。仲間に会えてよかった。瞬間の感動も冷めやらぬその時、写真を撮られた。尋問が続く。ディシェーザーは「ジュネーブ条約」に従い名前と階級を告げたが、後は何も答えない。「お前、よかったなー、俺はこのあたりでは一番親切な人間。だから正直に話せ」と日本兵。最初の 3 つ質問：「Hornet はどう発音するのか。これで攻撃するのか。Doolittle はお前の指揮官か」。聞き方は、現代の裁判所での反対尋問の手法。解釈ではなく事実関係。3 つとも「I won't talk.」（答えられない）。明日首切りにしてもらえば、お前らにとってそれは名誉なこと（the great honor of cutting your head off）。日本兵は「ワッ、ハッ、ハッ」。戦友の Barr は赤毛の大男、皆で見に来る。からかって「何を食ったらこうなるか」がからかい半分の尋問。また日本兵は「ワッ、ハッ、ハッ」。アメリカが勝ったら、お前の「首」ないぞ。日本軍は最後の一人まで戦って最後に天皇が死ぬ。

(20)

あちこちに移動：東京へそして長崎に 1 日。そして上海（名うての独房：Bridge House、広さは 270 センチ x150 センチ。食事の時を除いて電灯無し）。1943 年 4 月に南京に連れていかれ、通訳を通して毎日尋問。しばらくたって日本軍の懐柔政策で看守と捕虜が相撲をとることに。日本人が勝つと“日本、万歳”“日本、万歳”、一緒に万歳をしないと“びんた”がくる。そしていつも決まり文句：我々には大和魂があつて最後の一人になっても戦う。相撲のたびにアメリカが勝てば捕虜は首切りの荣誉が与えられる「ワッ、ハッ、ハッ」。アメリカ人捕虜全員の心の中は、どこにいてもありとあらゆる悪夢（nightmare）が頭の中をぐるぐるまわっている。いつか呼び出されて・・・そしてそこには殺害意思を持った銃殺隊が・・・。

(21) 戦友たち

1942 年 10 月 15 日、3 人の死刑：ファーロー（#16 機）、スパッツ（#16 機）、ホールメート（#6 機）。日本側の判決はディシェーザー（#16 機）、バー（#16 機）、ハイト（#16 機）、メーダー（#6 機）、ニールセン（#6 機）も死刑が決定。しかし天皇の“特別な計らい”があつて終身刑。ディシェーザーは過去の日本軍のやり方を聞いていたので自分も殺されると思っていた。生かされていて本当にホッとした。不思議な喜びさえ感じた。しかし生きて自由の身になることは不可能、といつも考えていた。もしアメリカが勝ったら殺されると思っていたから。独房に戻り、一つ二つの嬉しかったことを思い出す。この危険な任務に選ばれたこと、またアメリカの皆がこの報復の勇気を称えてくれる。あの卑怯な不意打ちに対して敵を地獄に落とそうとする勇気を。これらのことを独房の中で思い起こしていた。今やディシェーザーは自分自身は、も

う既に地獄に住んでいると感じていた。冬は寒さに震えながら、思い起こせるものは全て思い出していた。子ども時代、友達、学校、家族。腕白だった分、面白い思い出が多かった。しかし、それも寒さのためだんだん考えることさえ出来なくなってきた。楽しいことは、看守の目を盗み通訳が他の捕虜の様子を時折漏らしてくれること。すぐ看守が飛んできて「やめる」。さらにこの通訳は看守の食べ物からスプーンに一匙失敬してこっそり増量、たぶん見つかったらむち打ちの刑か、拷問が待っているに違いない。はらはらしながら成り行きに任せていた。

(22) 捕虜収容所

しばらくしたら今度は独房へ。ミルクが出され、それから手錠をかけられた。移動があった。東京で尋問。また中国へ戻される。再び独房へ。一日明けるとネズミが来た。平気でこぼれたものを食べていた。そしてネズミどもは、大胆不敵に指と足をかじりにやって来る。俺たちは食べ物でないとポケットに手を入れ身構える。わらべ歌 (Rain, Rain, Go Away) の替え歌が一時の気晴らし: "Rats, Rats, Go Away." 間もなく次の拷問が始まる。しばらくは元気だったディシェーザー。Fuck you, Jap! そして Shit! (糞!) がいつものディシェーザーの罵り。この言葉が生きている証拠とっていたし、自信過剰の元気は俺の唯一のとりえ。留まることを知らない日課は尋問、そして殴られ、また尋問され、そして殴られるのが毎日の繰り返し。過酷な拷問も待っている。日本人に対する憎悪が日増しに増幅する。いつかは日本人をなぶり者にしてやる、この呪いが地獄の俺の祈りだ。俺の飛行機はあだ名も地獄の蝙蝠だ (The Bat in Hell)。出てくる言葉は呪いのみ。そのうちにジャップをもつとなぶり者にしてやる、と。

(23)

一方、日本側では、戦争の指揮官であった杉山大将はこのドーリトルの無差別攻撃に激怒。生き残った 18 人中 8 人に死刑を。「捕虜」か「犯罪者」か。前例がない。時の首相東条は法を作った。処遇をめぐってもめていたという。その期間も尋問続いていた。半端ではない連続 70 日間の拷問もあった。鼻と口にタオルをかけられ水攻め。吊り下げられ、降ろされると足かせをはめられた。結局 3 人 (#16 からは、ファーローとスパッツ、#6 からはホールメート) は処刑された。残りほとんど栄養失調。1943 年の秋にメーダーが赤痢に。だんだん痩せていき極度の衰弱。掃除で外に出た時ニールセンはメーダーに調子を聞く。数人の看守が来て “しゃべるな” ニールセンは無視。看守は烈火のごとくに。しかし無視してメーダーと話す。看守はニールセンにビンタを。咳払いをしてニールセンは看守の顔を殴る。ニールセンとメーダーは同じ #6 機仲間。看守たちは “スー” と息を吸い、ニールセンを軍刀の鞘で殴ろうとしたが、上手にかわす。一人の看守が止めに入り、それぞれ独房に戻される。後、何も起こらなかった。他の看守たちは軍人ニールセンの勇気が気に入っていたのかもしれない。不思議なことにその勇気の故か、他の看守の前で起こった故なのか、また当の看守は、“ばつ” が悪かったのか、その日は何も起こらなかった。その年の冬に (12 月) メーダーは赤痢で死んだ。メーダーは落下傘で怪我をした仲間を担いで、自分も足をひきずりながら助けてくれた俺たちのクリスチャンのナイス・ガイ。俺はクリスチャンではないが、メーダーは心から尊敬するジェントルマン。クリスチャンの行いを証しという。後日ディシェーザーはクリスチャンは誰か他のクリスチャンの生き方を見て心に残る衝撃を受けると経験談を語る。このことは後に聖書を通読した時にその出来事を発見。それはかつてクリスチャンを迫害していたサウロ (後にパウロと呼ばれる) はステパノが殺される現場を見ていた「証人たちは、自分たちの上着をサウロという青年の足元に

置いた。こうして彼らがステパノに石を投げつけていると、ステパノは主を呼んで言った『主イエスよ、わたしの霊をお受けください』そしてひざまずいて大声で叫んだ。『主よこの罪を彼らに負わせないでください。』こう言って、彼は眠りについた」(使徒の働き 7:58b-60)。メーダーの最後はステパノのそれと重なり合った。この時は心の深い意味は分からなかったが、自分の目の前で起こったことは事実として心の記憶として強烈に残った。

(24)

一人の赤痢死により若干、待遇改善。看守も若干フレンドリーに、しかしすぐ冷酷に。するとディシェンナーはあったものを投げつけ Go get it, you Jap. (とってこい、ジャップ)。くたばって失せろ (Go and jump in the lake.) の繰り返し。独房生活が続くと正常に考えることが出来なくなる。それぞれの独房から呻きと叫びが聞こえてくる。騒ぐことで看守からまた蹴られ、殴られる。毎日がこんな繰り返し。ある時看守の目を盗み、小窓のある天井に両足と両手を両側の壁に押し当てて何とかよじ登った。そしてここからは広々とした田舎の風景が一望できた。この唯一の気晴らしは、この時は気が付かなかったが、信仰を持ってからは新しい世界を垣間見せてくれた神の導きのしるしと感謝。苦難の中にも神の摂理があった。マラキ書 3:10 にあるように「天の窓」が思いがけない形で与えられたのだ。こんな神の配慮がその時は隠されてはいたが、神はどんな時にも働いておられる。後の人生を象徴するかのような聖書の言葉を噛みしめることに、と回顧。それは「事を隠すのは神の誉れ」(箴言 25:2)。

(25)

冬は極寒のためハイトは 3 か月病気に。高熱で普通でない精神状態が春まで続く。独房の掃除のちょっとの時間、外に出され仲間に会う。“Hello” と声をかけると看守が怒鳴り“しゃべるな”。こんな捕虜生活の中、ディシェンナーもついに病気に。赤痢。ひどいおできも。数えてみれば 75 箇所。真剣にいよいよ死を自覚し始める。良くなる兆しは感じられない。毎日が長い一日。「死」そのものは拷問の連続からの歓迎する“避けどころ” と思ったことも何度も。死が“逃れの町” だったと信仰を持ってからディシェンナーはしみじみ述懐。“べんじょ” という日本語を知った。それから“けんぺいたい” という日本語も。“こらー” は聞きなれた日本語。突然看守が入って来て、「こらー」と怒鳴り声を聞くのが毎日の日課。そして毎日虱に悩まされる。もう一つの気晴らしは何匹の虱を爪で殺したかを勘定すること。移動した南京の状態は、虱はいなかったが、1944 年の夏は酷暑。天井が低いので日中は限界を超えている。夜も暑く換気設備は当然無し。そして 1944-45 年の冬は冬で極寒。12 月の雪は 3 月まで残っていた。体を温めるため 2, 3 週間時々外で運動。スリッパをはいて 2, 3 回独房のある建物を歩いて回る。歩きにくかったし、温かくならないので命令を無視して裸足で。看守は激怒。運動は中止で独房に戻る。雪で汚れた足を水で流すのは厳禁、「雪で洗ってこい」と。バーは無視してそのまま戻ろうとした。激怒した看守は胸倉をつかんだ。バーは渾身の力で看守のみぞおちを殴る。10 人の看守がとんできて、バーを袋叩きに。バーも反撃したがダメだった。看守に抑えられ戻される。バーは手足を縛られ、首にも縄がかけられた。バーは徐々にその締め付けを増し加えられ、その縄の苦痛で叫び声をあげる。その拷問の叫びは他の捕虜にもよく聞こえた。

(26)

しかし、このことは一人の親切な看守が他の看守を説得し一時間の拷問ですんだ。他の看守は“お前は運のいい奴だ、いつもはこういった“訓練” は数時間が普通。“ある日、外で草む

しりの時、メーダーのしみじみ言った言葉はイエス・キリストは救い主でこの戦争を最後は神が止める。ディシェーザーはその時何のことか分からなかった。これは後になって、赤痢で瀕死のメーダーを通して神が語ってくれた自分に対する最後の言葉と受け止めた。独房なので仲間の詳しい様子は分からないが、ある時、金槌の音が聞こえたので、またこっそり天井に這い登る、上の小窓から日本兵が大きな箱を作っているのが見えた。花と本（後で聖書と分かる）があった。しばらくしてメーダーの亡骸が。独房で病死したので、日本の上層部は半分日本人、半分ポルトガル人通訳に丁寧に葬れと指令を出したらしい。

(27)

信仰厚かったメーダーの死は犠牲の死だった。次の朝食にはパンやジャムそして卵とミルクが出た。その後、今まで一日2回の配給が3回できるようになった。1943-44年のことであった。ディシェーザーも少し体力が回復。独房のドアも少し換気ができるつくりで改造。しかし、毎日ただ座っているだけ。ホームシック、希望無し、空腹。ある時トイレで吐いた時、“げーげー”の声（顔を突っ込むように）で隣の独房のトイレがパイプで繋がっていることを発見。見つからないように吐くふりをして、素早い会話が成立。この上もない至福の通じ合うコミュニケーションになった。後日談は、日本に来てTOTO便器に気づきこの“トイレ・トーク”の幸せを噛みしめた、と。

(28) 身体の飢えが霊的な飢え(渇き)に

クリスチャンのメーダーの最後の姿を見て「フッ」と思ったことは、何か無性に他の世界の存在。戦友メーダーは自分にはない素晴らしい世界に生きていたことは否定できない事実。そういえば自分も小さい頃母に連れられて行った教会があった。そうだ、母親が熱心に読んでいた聖書に何かあるかもしれないと思い、聖書を読みたい思いが強くなり、毎日看守に訴え始める。熱でこいつ狂ったんかと思ったが、ひょっとして、聖書でも読んだら少しは大人しくなるかと思い、天皇の“恩赦”の一環として3週間の期限付きでメーダーの葬式で使った旧新約聖書(モファット訳)が与えられた。その3週間むさぼるように無我夢中で6回通読。期間限定ではあったが聖書は納得しながらよく読める。本当に次から次へとよく読める。聖書はこんなに読める書物とは思わなかった。

(29) 聖書の使信と人間ディシェーザー

獄中生活のある日、南京で読んで暗記した聖書の一節が心に浮かんだ：「もしかし種ほどの信仰があるなら、この山に『ここからあそこへ移れ』と言えば移ります。あなたがたにできないことは何もありません」(マタイの福音書17:20b)。ディシェーザーはどんな小さなからし種の信心でも、正直に神に願えば自分を元気にしてくれるかもしれないと思った。自分の生命はあまりないと絶望した状態なのに、いやそれだからか、聖書の言葉が次々出てくる。読んだ聖書の言葉にあまりにも圧倒され、単純に信仰してみようと思った。そして自分一人で、遂に1944年6月8日に決心。牢屋(jail)で日にちはよく分からなかったのが、ここは自分で決心した日時を決めた(神様お許しください)。「あなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせと信じるなら、あなたは救われるからです」(ローマ人への手紙10:9)。この箇所は何度も読んだ箇所であったが、この日はこの言葉で自分の人生に何か大きな力を感じた。「決済」するのは神だから、これは神からの力だと感じた。そしてたましいの平安も与えられたと思った。さらにはキリストの故に許せないことも許すのだと確信すら与えられた。その時不思議と心が熱くなり、心は喜びに満たされた。私はついに救われたのだ。私の罪は許され、神の性質にあずかる者とされたと思った、「その

栄光と榮譽を通して、尊く大いなる約束が私たちに与えられています」(ペテロの手紙 第二 1:4)。何か圧倒する神からの迫りによって、自分を神に明け渡したい気持ちにもなった。しかし本当は、自分は取るに足らない者で、罪深いものとも感じていたが、また次の瞬間聖書のことばが浮かんでくる、「このキリストにあつて、私たちはその血による贖い、背きの罪の赦しを受けています。これは神の豊かな恵みによることです」(エペソ人への手紙 1:7)。そう、神はこの罪人を「贖(買)い取って」くれたのだ。血での支払いが買い取り代金、代価。贖罪 (redemption) 信仰の構造の大切な一端を教えられたのだった。

(30)

自分はイエス・キリスト血によって神に贖われた存在との聖書の言葉に励まされた、根底から。自分はもはや自分のものではなく永遠に神のもの。後神学校でクリスチャンというのはキリストの者という意味だと知る「このアンティオケで初めて、弟子たちがクリスチャンと呼ばれるようになった」(使徒行伝 11:26b、口語訳)。飢え、極寒の環境はもはや私を苦しめるものではなくなってきた。過ぎ去っていくものだから。神が自分を贖ってくれたので、死さえも私に恐怖とは思わなくなったのだ。天では痛みも苦しみも孤独もない。永遠に喜びで満たされた完全な状態である。神の子であるイエスのようになれればなろう (Imitatione Christi) と神様と約束した。永遠にあずかる者 (partaker) としてこの日から私はすべてのことを知るようになるかもしれない。これは自暴自棄の気分延長ではなく、実行する神の約束であるので、どんな時にも働かれる神が必ず自分を変え、何かを成してくれる「主と同じ形に姿を変えられていきます(英文の下線は筆者)と受け身の進行形 (~we are being transformed into the same likeness as himself.)」(II Corinthians 3:18) との期待が確信に変わった。しかし、これで外の環境は変わったわけではない。同じ独房に、同じ看守がいて、仲間とは話せないし、相変わらずひどい食べ物の毎日。しかし今、内なる人は違う。「たとえ外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています」(コリント人への手紙 第二 4:16b)。自分では考えられないような確信が聖書のこの言葉で与えられた。これは神から一方的に与えられたもので、自分の思いや努力とは関係ないこと。このように与えられた圧倒的な「恵み: grace」の前に、今度は、以前の自分が思い起こされてきた。この時自分の今までの人生の総決算を試みようと思った。

(31)告白

以前、自分は自制心がなかったし、意志薄弱。人に良くしなさいと言われてもそうしたことがなかったし、我が儘一杯に生きてきた。両親にも反抗的だったし、神にも不従順、自分の良心にも正直でなかった。これは聖書を通して罪の結果ということが分かった。こんな懺悔で自分を神に明け渡した時、神様から一方的な恵みを与えられ、自分の過去の罪を赦してもらったのだ。それは自分の努力や修行ではなく、与えられた恵みの世界。しかしジェイクが本当にこれらの力を充分に得るためには、いくつかの訓練を通らなければならなかった。と同時に、心の中にとてつもない力が与えられたと告白することが出来た、「その名を信じた人々には、神の子となる特権をお与になった」(ヨハネの福音書 1:12b)。ディシェーザーはこんな経緯を経て徐々に、しかし確実に内面が変わっていった。

(32)

収容所の中で、回心する前の自分の態度や感情も走馬灯のように思い起こされてきた。看守が早く部屋を出ると命令されると“とっとと失せろ”と怒鳴っていた。後の仕打ちはどうな

るか分かっていたが。今にみている、JAP、ただでは済まさないぞ。独房の中に戻されビンタを食らった。足で看守のみぞおちを蹴とばしたこともあった。日本刀で思い切り殴られた。破れかぶれで雑巾バケツの水を看守に浴びせた。この反抗で今晚断末魔の拷問か、首を斬られるかと思った。しかし不思議に生かされていた。何か不思議な力が働いている。これが聖霊の働きと実感。そしてこのことは否定しても否定しきれない。こんな風に生きていることが不思議に思えた。

(33) 新しい認識に (“divine” epistemology)

今度は何かをしようと思った。一番難しい「敵を愛せよ」とのイエスの教えの実行。これは生易しいことではないし、きれいごとではない。心のどこかに自分は軍人であるので実行力があると自負もしていた。この言葉の背後のことを考えていた。聖書を読むと「敵を愛せよ」と命令がある。従うよう言われる。もしイエスを信じるといふならば、神に従っていくことになる。もしイエスに服従するなら全知全能の神は人に実行可能の力が与えられるはず。こんなことを思い巡らしていた。しばらくの期間 (timewise) この実践で悩んだ。正直になればなる程、次から次へくだらないことが出てくる。徐々に自分の内にある根源的な罪の存在を示された。しかし、その罪をイエス・キリストが身代わりに負ってくださった十字架の死によって、自分は神から完全に赦しが与えられた、との告白にだんだん変わっていった。この救いと約束が分かった時、自分は本当に自由になった。何物にもとられない信仰。敵や敵意の中で「愛を示す」<愛を粗末にしない>信仰に変わっていくことに気が付き始めた。

(34)

しかし、この確信を具体的に実行に移すのは至難の業、「自分の肉のうちに、善が住んでいないことを知っています。私には、良いことをしたいという願いがいつもあるのに、実行できないからです」(ローマ人の手紙 7:18)。このことをめざすことが出来るのは、自分ではなく、聖書がいつている聖霊の働きだと悟った。そして今自分はその聖霊に導かれて動き出すのだ。聖霊なる神が本当に働かれるのだ。捕虜になり、聖書を読み、暗記もした。死を目前にしてほんの少しの信仰しかないとき正直に告白した時、神様は力を与えてくれるのだ。聖書は一字一句本当に読みやすいし心にも聖霊によって意味が与えられよく解るように聖霊の導きがある。聖書の言葉と聖霊の働きは別物ではない。いつも一致している。この信仰でやってみるのだと決心し、このことは聖霊なる神が与えてくれるものだと思い切った。長時間神に祈り、とうとう朝になってしまった。心臓は今にでも止まってしまうぐらい弱っていたが、人の心臓を動かしているその力の源は神様だと身をもって確信した。確かに自分の思いを動かしているのは自分の力であるが、実は、その力そのものは、他の大きな力によってがっちり捉えられている確信に変わった「～ただ捕えようとして追い求めているのである。そうするのは、キリスト・イエスによって捕えられているからである」(ピリピ人への手紙 3:12b、口語訳)。聖霊がこのように語りかけてくれたのだと確信できた。だから“どんな状況でもお前は全く自由なのだよ、「兄弟たち。あなたがたは自由を与えられるために召されたのです」(ガラテア人の手紙 5:13a)。聖書を通してこの聖霊の働きに気付かされた。祈りとはこんな自分と力をくれる聖霊の神との語り合いと悟った。

(35) 更なる気付き

思い起こせば、三週間聖書全部を数回むさぼるように読んで暗記に努めた。今数々の言葉が自分の心に洪水のように迫って来た。その中で聖書の厳しさも直面した、「信仰から出ていな

いことは、みな罪です」(ローマ人の手紙 14:23b)。正直になってお前の手を清めよ、ふらふらする二心の罪人よ。優柔不断のものよ。もっと嘆き苦しめ。徹底的に、「あなたがたは、罪と戦って、まだ血を流すまで抵抗したことはありません」(ヘブル人の手紙 12:4)。厳格な神を前にしたら罪深い自分は、本心は「分かるけど無理です」と叫んでいた。しかしその時、まさにその瞬間、実は私もお前の呻きと一緒に受け止め、傍らに居るのだよ、との主の声が心にはっきりと聞こえてきた。聖書のことばと共に、永遠にいてくださる助け主がいるのだ。

「I will ask the Father to give you another Helper to be with you forever, even the Spirit of truth」：父はもう一人の助け主をお与えくださり、その助け主がいつまでも、あなたがたとともにいるようにしていただきます。この方は真理の御霊です(ヨハネの福音書 14:16b-17a)。

(36)

このような信仰的な内面の気付きについては世界中の信仰者に共通する。著者はデ師夫妻が日本に向かう船中で学んだという日本のキリスト教迫害史について後日話し合う機会があった。<TS: その時遠藤周作の『沈黙』を話題にしてみた。それはキリシタンの棄教のため、拷問による迫害が続く苦しむキリシタン。神父は自分が神父であるためにキリシタンの拷問の激しさが倍加する。苦痛と激痛を前に、踏み絵に対する神父の苦渋の決断。踏んでもいい、と微かな神の声を聴く。私は踏まれるためにこの世に来たのだよ、と>。苦しみについては思うこと、感じることを率直に神に向かって、疑問であれ、愚痴であれ、悪態であれ、まったく愚直に父なる神に対して「アバ父」思いつき叫べばいい。正直でありさえすれば、神に対する叫びは許されている、「あなたがたが子であるので、神は『アバ父よ』と叫ぶ御子の御霊を、私たちの心に遣わされました」(ガラテアへの人の手紙 4:6)、「この御霊によって、私たちは『アバ父』と呼びます」(ローマ人への手紙 8:15b)。いや、むしろそうして神に向かい合って叫んだ方がいい。なぜならイエス・キリストはそれら全部を担って、それらを十字架に“確と”持っていつてくれるから。こんな風に聖書を通して、聖霊を通して、こんな風に神からのメッセージを聴いたと確信。

(37)

徹しきった時に神が働く。神の前に正直に、また謙虚であれ。心の苦難と神への従順の関係は確信に導かれた。しかし戦争という大きな社会的な正義感なるものが首をもたげる。先に攻撃を仕掛けてた日本。しかも奇襲。そのことで自分は敵の方が戦況優位の時、死ぬ覚悟で同胞のためと志願した。日本本土の爆撃は単なる社会的ヒロイズムだったのか。思索が思案になり、その思案が思索を呼ぶ。しかし今ここでの現実はどうしたらいいのか。今のこの状況ただ中で。何をしたらいいのか。結局、早かれ遅かれ死が待っているのが厳粛な事実。死神(昔学校で聞いた Grim Reaper: 恐怖の刈り取り人、Father Time: 大鎌と砂時計の翁等々)がちらつく。確信と不安の繰り返しにまだ延々と心の軋轢と葛藤が続く。

(38) その葛藤から

心の浮き沈みの中最終的には「敵を愛せよ」の背景となっている聖書の箇所がズシリと心の奥深いところで響いている。それはコリント人への手紙 第一 13:4-7:「愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、苛立たず、人がした悪を心に留めず、不正を喜ばずに、真理を喜びます。すべてを耐え、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを忍びます」。しかし、本当のところ自分は敵を愛せない。それどころか卑怯な日本人を皆殺しにしてやりたい気持

ちが心の奥底に残っている。敵を、ああ神様、敵を滅ぼしてくださいと本音を正直に、本当に正直に叫び続けたあの旧約のダビデの気持ちがよく分かる。自分も全く「詩篇」のダビデに同感。そう俺も本当は、あのダビデかも。しかし、次の瞬間、“何回も、何回も迷って愚痴っているお前は、本当はそうでない自分に変わりたいと思っているのだろう、お前の内に隠れている本音や本心を私は見逃してはいないんだよ”と神の語りかけをはっきりと聴く。だから正直な気持ちで心ゆくまで私と向かい合ってごらん。すでに、お前はわたしと十二分やり合ったのから、向かい合うだけではなく、今度は向かい“会って”ごらん、と。心の奥底も神は完全に見ておられるのだ。すべてを見透かす神に対して、心の底がえぐり取られる感覚が走り、自分でも分からないくらい“無意識”で祈っていた。神様から気付かされたこの本質を今度こそ獄屋の実質で変えられないようにと祈っていた。

(39)

こんな気持ちで跪いてドアのところで涙と共に祈っていた時、すぐ看守が来て大声で、壁に向き合った椅子に戻るよう怒鳴り、命令した。ドアを見ることさえ許されていない規則。命令無視で、後で何が起こるかの心配より、ともかくやってみよう。祈り続けようと心に決める。ニールセンも信仰深いメーダーのため勇敢に反抗した。看守の目よりも良心の声に従った方がいい。神がそのようにしなさいと示してくれた祈りで、今、自分にも気付かなかった心の内奥を見透かされた自分に、その神、その愛の神に完全に圧倒されているのだから、神の前に正直に素直になり切ろう。看守が他の5,6人の看守と一緒に来た。今度は怒鳴ったりなぐったりしないで呆然としていた。医者がやって来た。腕をまくって注射をして一人にされた。イエス・キリストが自分の傍にいてくれたことを実感した。夕飯の時間が来てびっくりしたのはミルクとゆで卵とおいしいパンと栄養のあるスープが運ばれてきたことだった。精神錯乱をきたしたと思われたのかもしれない。神のこの素晴らしい働きに涙が出るのと同時に何か笑ってしまう複雑の体験であった。すれ違う状況判断で“*He was pleasantly surprised.*”。

(40)行きつ戻りつ (Collision)

今度は突然連れ出され「早く、はやく」出る。少しドアが開き一歩前に。この時看守はドアを思い切り閉め足が挟まる。さらに軍靴の鉤釘で思いきり挟まった足を蹴飛ばす。この仕打ちに怒りと憎しみが煮えたぐってくる。足の骨が折れた様な痛みと苦痛。許せない感情がまた髣髴と心に沸いてくるが、今度はすぐ聖書を通して「敵を愛せよ」の具体的な言葉が交差し自分を圧倒する。冷静になろうと思ひ、心を入れ替え新しいあり方を始めようとした瞬間がこれか、との悪態の感情は、この一番解決できていない自分の弱さ、そして優柔不断。しかしこれは神から自分は試されていると転換の信仰なのだ。聖霊が働く時に試練や葛藤がでてくる。このことは心の奥底に愛せない弱さの解決のため「許せない、赦せないその敵を愛せよ」との命令が神から示されたのだ、「はっきりしろ」と聖書は逆転を宣言する、「私の力は弱さの内に完全に現れるからである」(コリント人への手紙 第二 12:9b)。

(41)最後の決心

こんな信仰問答の行き来を通らされ、ジェイクは、今度は理性的に語り始める。私は以前大変な状況の中で美しい態度を保っている人を見てきた。すべての人がコリント 13 章のような忍耐強く、親切で、寛容な愛を持っているかどうかは知らない。しかし「互いに愛し合いなさい」を“戒め”として人間に与えられているので本当にそうすることは可能だと思うよう

にもなってきた。最低義務としてでもいい。我々の側としてはその義務に努め、そのように励むのが大切。これは今日でいう義務論<用語 deontology は筆者の TS>。確かに神から自分に従ってきなさいとの義務のような命令がある。要は聖書が言っている「敵を愛せよ」は命令。命令は無視するか従うかどちら。神を信じることは命令に従うことが義務と確信し、信じて明日からこの義務を今度は、今度こそは、絶対に実践しようと決心した。神様、結局こんな私です、憐れんでください、神様、アバ父よ、働いてください！ドアの苦しみを神に従うという全く「新しいドア」を開く転機にしてください。この期待に満ちた“叫び”は、自分が憎しみと憎悪を感じているあの看守に何かを実行しようと意欲のエネルギーに変わっていった。

(42) “オハイオ=おはいお” ございます (Just do it, after all was said and done.)

考えに考え、そして祈り祈り、挨拶から始めるよう導かれる。“Ohio おはいお”と看守に。驚いた看守はこの囚人は、また頭がおかしくなったと思ったらしい。しかし一週間この「おはよう」を朝も昼も夜もし続けた。ある朝その看守は独房のところきて日本語で何かを言った。打ち解けて。その頃ジェイクは少し日本語が分かるようになっていたので、日本語で家族は何人ですかと聞いた。驚いた看守は気を良くしたようであった。ある朝その看守は何か祈るような足どりで、何かを唱えていた。小さい時母を亡くし、母に祈るのが彼の信心と分かった。こんなことがあって以来フレンドリーになり、怒鳴ったり、手荒にしなくなった。ある時サツマイモを差し入れてくれた。敵にやさしく振る舞うことで、こんな形での良き報いだった。またある時はイチジクとお菓子もくれた。ジェイクは神様のこういったやり方は最善のやり方だと確信する。That’s Jesus’ way. やってみて分かったことは、敵の状態から友情を作り出すことは不可能ではないこと。本当は容易いこと、何故なら神が働いているから。イエスの理想は実現できない理想ではないと感ずることが出来た。神が戒めとして約束したのであるから、それは思わぬ方法で必ず実現する (God’s way is the best way)。人間は何か他の方法でいろいろやってみて、かえって混乱状態を作り出しているのが現実かも。「すべてのことがともに働いて益になることを私たちは知っています(ローマ人への手紙 8:28) “~those who have been called in terms of his purpose, have his aid and interest in everything”」この「おはよう」の挨拶が文字通り新しい次元に至る始まり。後に“これは正しいことです”と日本語で筆者は聞いた。たぶん英語は簡単に、“the right thing to do”。最後は：「~試練とともに脱出の道も備えてくださいます」“He will provide the way out of it, so that you can bear up under it” (コリント人への手紙 第一 10:13b)。

(43) 最後の回顧談(Reflexivity)

回心する前の自分の態度や感情を思い起すことがよくあった。日本刀で思い切り殴られたこともよくあった。雑巾バケツの水を看守に浴びせた一件もあった。反抗した後で、断末魔の拷問か首を斬られるかと真剣に思った。でも生きていた。何か不思議な力が働いている、このことは否定できない。「ただおことばを下さい」(マタイの福音書 8:8) と、みことばに飢え渴いていたこの時にはっきりとイザヤ書のみ言葉が迫ってきた「まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った。それなのに、私たちは思った。神に罰せられ、打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は私たちのその背きの罪のために刺され、私たちの咎のために砕かれたのだ。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに、私たちは癒された。私たちはみな、羊のようにさまよい、それぞれ自分勝手な道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負

わせた」(イザヤ書 53:4-6)。

(44)

このイザヤ書にある痛みを担ったキリストは今度こそ本気で信頼する最終版。聖書を通して洗礼を知る。洗礼を受けたいが牧師はいない。考えたことはお互い明日は死ぬかもしれない戦友に洗礼をしてもうしかないと考えた。結局自分が蹴飛ばしていた雑巾バケツのその残り水で(雨水も入っていたのかもしれない):父と子と御霊によって(In the name of Father, the Son, and the Holy Spirit, AMEN)戦友から受けた。今まで決心したものの挫折した新しい決心に更新、しかしまたまたダウン続きのグラグラ信仰。洗礼というはっきりとした形でけじめをつけたかった。洗礼というのはこんな古き自分に完璧に溺死することと確信し、洗礼を戦友からしてもらった。

(45)

聖書と聖霊の agreement と確信が一段と深まる。もし、もし生きて帰れたら、今度は敵ではなく友として、あの名古屋に戻りたいと願う。しかし、今は自分で選択できる立場・状態ではないので、主なる神に任せきろう。かえって自分の明日は分からないので、あれこれ「自分」が顔を出せない捕虜(POW)の「幸せ」に感謝して。昔聞いたことのあることわざが新しい意味でジェイクに迫る。Tomorrow is another day. これは、明日は明日の風が吹くといった捨て鉢の意味ではない。今日までとは全く違う明日という新しい意味に生きること。運命の日が来た。アメリカが勝った。“はらいせに”首をと威嚇されたことも思いだされた。が、それでもいい、それが神様から自分に与える新しい意味ならば捨て身とも思えるこの段階で最後の最後で解かったことは、今までの「行きつ戻りつ」の信仰は「自分の自力」でやっていたこと。修行のような努力の信仰。心の王座には「自分」が座っていた。重要なことは徹底的に、完全に自分を神に「明けわたし」主なる神にゆだね切っていくこと、つまり今度は心の王座にとってかわってそこに座るのは主なる神と信仰の本質が与えられたこと。最後の土壇場の死の恐怖を含め、全部自分を明け渡し、主よ、あなたの御心を信じきっていきます、と深い祈りに変わった。

(46) 終戦

1944年のクリスマスの頃から、爆撃の音が聞こえるようになった。看守たちは、日本はいよいよ NY やサンフランシスコを占領したと言い出した。やけくそでアメリカの飛行機がこの辺の池に爆弾を落とし、魚が少し死んだだけ、と。彼らは日本が負けるなんてことは思ってもいないように見えた。しばらくして終戦。しかし次のシナリオは、殺される、との思いが……。もし日本が負けたりしたら、日本兵は我々をなぶり殺すであろう。こんな不安の中でも、もし生きていたらと、そんな可能性も混じった複雑な思いがよぎる。一つははっきり心に語り掛けられたのは「お前は私が遣わすところに行くのだ」。それは日本に敵としてではなく友として。拭い去ることの出来なかったのは神からのこの召命。ああ私は口下手だし、聖書の勉強もしていないし、宣教師としても……。とでもとでも。こんな躊躇が。しかし「死を目前にした絶望から救いをお前は体験した」、こんな声が心に聞こえる。人には出来ないが神は出来る、この力が完全に現われることをお前は体験した。だから敵を赦し、敵を愛する宣教師として遣わす、かつての敵国に。

(47)

銃殺を覚悟していたが、1945年8月20日釈放された。インド経由で帰国。1945年9月5日ワシントンDCに。真夜中にオレゴン州に帰った。地方新聞にも記事が載った。SPUで1945年秋から学びを。講演依頼や説教依頼が殺到。この二つで忙しい毎日。ある集会での洗礼についての質問に対し、雑巾バケツの水での洗礼は通常の制度での洗礼式ではないが、ディシ

ユーザーにとっては明日の死が目前に迫っている時、出来ることの精一杯の洗礼だった、と。危機場面での“洗礼式”と正直で真摯な信仰告白に聴衆はすい寄せられた。

(48) 子連れ宣教師夫妻

1948年12月20日アメリカ・ジェネラル・メイグス号(U.S.S. General Meigs)で日本に。メイグス号は豪華船ではなく普通の船、1,500人で万杯、個室はない。このごったがえしの2週間二人は日本語の猛勉強。新婚の妻と新生児を伴っての船の長旅は心配。しかし、それ以上に夫妻にとって不安なのはかつての敵が3年後の日本に行って受け入れられるのか、憎しみ、憎悪、敵意が待っているだけではないか。歓迎はされなくてもいいが、ほとんどの日本人から自分たちは嫌がられ、避けられてしまうのではないか。このことで戦いの毎日になるのではないか。こんな差し迫った心配が徐々に、しかし確実に迫ってきた。夫妻は船中で日本の基督教の歴史の講義を受ける機会もあった。1549年のザビエルから徳川の世の迫害<一部を後述>、基督教は非国民の宗教で禁教等々、二人の不安は山のように募る。夫の聖書の言葉が幼子を連れた新妻への励まし、「よく聞きなさい。主はあなた方にこう仰せられます。あなたがたはこのおびたしい大軍のゆえに恐れてはならない。気落ちしてはならない。これはあなた方の戦いではなく、神の戦いである」(歴代誌 第二 20:15、第三版)。横浜について新聞記者の開口一番、質問は“なぜ日本に来たのか”だった。この横浜で、12月29日あわただしく住んだところには暖房設備無しの家屋。寒さの中でパウロ(Paul)が病気に。医者を探し結局進駐軍の病院に。1週間入院。フローレンスは、一週間母子だけで異国の地で病院に行くのは反対だった。ともかくペニシリンでパウロは一週間で回復。ここで博士小田金雄牧師に会う。彼はシアトル・パシフィック大学の同窓生。通訳と生活のことで援助を受けることになった。これが敵国日本への宣教師としてのはじまりであった。

(49) 別れを告げ日本に帰る(Bye-bye Mama to Japan)

思い出すのはアメリカが勝ち、日本は無条件降伏。そして3年4か月後の1945年8月20日銃殺されることなく無事釈放。時を移さず、故郷のオレゴン州の隣のワシントン州シアトルにあるSPCの神学部で勉強する。フローレンスに出会い、結婚。彼女のきっかけは日本突撃隊の生存者への好奇心が始まりという。ディシェーザーは来日前、40日間の断食をし、日本伝道のために祈る。“I was a Prisoner of War”「私は日本の捕虜でした」と書いたトラクトを100万枚 Bible Meditation Leagueという基督教団体が献品。初め一年はほとんど毎日路傍伝道や伝道集会を全国で行い、ラジオでも取り上げられた。集会には空襲で婚約者を殺され、出刃包丁を持った若い女性がいた。集会に紛れ込み機会を窺っていた。あまりにも反感と敵意をその表情に感じ、集会の後、話しかけようとしたが、逃げるように立ち去ってしまった。しかし次の集会のまた顔を出す。この時はイエス・キリストが憎悪と敵意を変えることの出来る方と赦しのメッセージだった。何度も集会に顔を見せ、この女性は最後熱心なクリスチャンになった。ディシェーザーがいるだけで、彼の中にいるイエスを見、そのイエスに従っていこうと自分の中の変化に気づいたという。そしてこの女性は、キリストの力によって変えられたディシェーザーの体験は、殺害未遂の私にも起こったと告白するに至ったのだった。

(50)

日本でのディシェーザーは宣教のためYoshiki(息子がこの戦争で死亡)さんが2階の息子の部屋を貸してくれた。しばらくしてYoshikiさんの家族も救われた。ある映画館の持ち主がかつての看守を集めて大きな集会を開催。南京の収容所のかつての看守数人が目に入った。加藤氏(看守の長)は目が合うや顔中に流れた涙をぬぐう。恋人をアメリカに殺された他の女性

もディシェンナーの赦しの福音を聞いてだんだん心が解け、遂にはこの人もクリスチャンに。他にもディシェンナーの働きを通して多くの人の人生が変わっていった。ある大阪キリスト教大会では4,000人、他3,000人は会場に入りきれない時もあった。そんな時期のある時、高松の宮に招待された。捕まり死刑が決定した時、終身刑の扱いをしてくれた皇族に感謝の気持ちを伝える。高松の宮はなぜ今、日本でこのような伝道をしているかの話にじっと耳を傾け、実際に会えて実に光栄と言ってくれた。

(51) Felt Reality

ディシェンナーが会う人々はその砕かれた姿に圧倒された：When he gently placed a hand on their shoulders and they saw the look of love in his amazing blue eyes, they were melted to tears. (肩に手をかけた時、その青い目に愛情あふれる姿に圧倒され、涙が)。筆者も大きな手でがっちり握手した時、何か大きな愛を感じた。感覚で解ってしまうのだ。フリー・メソヂストの大阪基督教短大での集会（1953年3月）である学生は：“Even though I could not understand him, I feel love.” 言葉以上に語っている“言葉が”伝わってくる。しかし、ある集会では、実際に襲われナイフで刺された。ポケットの新約聖書の「ローマ人への手紙」の箇所（真ん中ぐらい）迄凶器が。しかしそれで体は無傷だった。

(52) 爆撃地名古屋へ

ディシェンナーはしばらく大阪での働きの後、かつての攻撃地、現在の名古屋市の守山区で伝道を始めることが可能になった。最初名古屋駅に着き、どこでもいいから連れて行って欲しいとタクシーの運転士にいて、着いたところが私（加瀬）の家の近くの守山区だった。「創世記」に高齡のアブラハムが愛してやまないひとり子イサクをモリヤという山の上に連れて行って、生贄としてささげなさい、との緊張した話がある。詳しい話は省き、最後、アブラハムが刀を取って自分の子を屠ろうとした時、角を藪にひっかけている雄牛が生贄としてささげられたことがその顛末だった。「主の山の上には備えあり」がモリヤという名の山。ディシェンナーにとって、守山はまさに「主が備えた」「モリヤの山」、モリヤマと聖書の記事を知る地域住民のダジャレを言たくなるくらいモリヤマには深い意味がある。< TS: デ師はダジャレ (pun word) はほとんど言わない人 > 主が示されたこの守山に住み、かつて民間人への攻撃と謝罪と和解、贖罪、赦しが続く。

(53)

新しい人生として攻撃地名古屋に宣教師としての働きを始めた。お隣に岩田一家が住んでいた。ディシェンナー一家が引っ越してきた最初の夜、誰かが岩田家のドアをノックする。隣のあのアメリカ人だ。躊躇はあったが、意を決してドアを開けた。たどたどしい日本語で「今、私ソースがありません。少しください」。守山で最初にデ師から洗礼を受けたのは岩田夫妻であった。次に銀行員の笹川修佑氏、しばらくしてこの者、加瀬豊司と続いた。名古屋は自分の謝罪と赦しと和解の地。1959年には伊勢湾台風で地域の人たちと助け合い一緒に汗を流した。1963年名古屋守山教会献堂式（名古屋市守山区緑地公園西園付近）。そして東隆牧師が受け継いだ。東牧師はかつて進駐軍に父親が殺され復讐を計画していた人物。この人もディシェンナーの本物の姿に触れ、ディシェンナーの後釜牧師になったのだった。2018年、ディシェンナーと淵田の『ふたりの贖罪』と題してNHKスペシャルにこの東牧師の回心劇も含まれていた。

(54) その後のジェイク

「この期間に私たちは3回日本に戻り、関わったほとんどの教会を再訪問することが出来、そのいくつかはかつて創設の時や牧会をしていた教会だった。日本のクリスチャンは歓迎し

てくださり、また極上の扱いをしていただいた」。1966年にジェイクとフローレンスはほとんどの家族と150人のゲストで結婚50周年記念を祝った。時折、地域の教会からの説教のお誘いがあった。ある時は説教原稿を忘れて取りに帰った。そしたらやかんの火を消し忘れ空焚き状態。神はこんな愚か者を今でも用いてくださる、と感謝。それから2002年には再びジェイクの90歳の誕生を祝うためにオレゴン州に集まった。その90歳の時ジェイクはオレゴン州の沿岸地方で最後の説教をした。ジェイクは3年間オレゴン州セーレムの介護施設で過ごし、同窓会の頃からパーキンソンを罹病。そして認知症も。当時通っている教会の牧師ベイリー(Doug Bailey)師と対談した。「戦争中捕虜になったことを覚えていますか？」首をかきあげて妻を見ながら、「私が捕虜になったことがある？」「日本への宣教師のことは覚えていますか？」「もちろん」。そして5年後の2008年3月15日に亡くなった。

(55)フローレンスは

ジェイクが亡くなった後、フローレンスはセーレムに引き続き住んだが、90歳の誕生日前、2011年の8月に心臓発作が起こり介護のため二人の娘たちがいるワシントン州のショアライン(Shoreline)に移った。彼女はショアラインの自由メソジスト教会に温かく迎えられ、介護施設に入所し、そこで2017年6月5日に息を引き取った。フローレンスは一人の兄弟姉妹と5人の子どもたちと10人の孫、そして曾孫や多くの甥や姪等多くの家族を残して亡くなった。

(56)最後に<TS: Editor's Expository Remarks>

聖書の大元になっているユダヤ人のユダヤ的発想は、積極的な逆転思考を数多く生み出している。例えば、人を赦すことを拒んでまでも、なぜ人は胃潰瘍や心臓発作や精神の問題を抱き込もうとしているのかに代表されるユダヤ教からの逆説的なチャレンジがある。いろいろな局面で人は心の根っこにある感情に素直に反応する。意識的に無意識にこんな日常の根っこを引きずったまま生きている。日常の暗黙の前提(tacit assumption)の是非や功罪を積極的に考え、再創造して生き抜いていく(positive thinking and positive doing)のがユダヤの伝統(Judeo-Christian Legacy)。激しくたましいをゆさぶる問いかけ・語りかけ・迫り(challenge)がある。それを英語では鮮明に“thought-provoking”と表現する。自分の主体、思想、感性を根底からひっくり返す経験のこと。しかもそれは人生の途中に起こる。ユダヤ系社会学者であるオットー・ノイラートは「私たちは航海中に船を修理しながら航海する船乗り」と述べている。ディシェーザーは収容所の現実の中で自分の内面を点検し、信仰に目覚める。その時居た場所、その日常から出発。その真っ只中で真実に率直に次々襲ってくる、絡みつく罪に向き合い、真摯に神の赦しをその現実の現場で実体験した。そしてその負の状態は不可欠な“傷”として理解し、創造的に新しい世界を掴み、握りしめて戦争の極限状態を生き抜いた。真剣に聖書を読みこなす機会が与えられ、イエス・キリストを求め、キリストと向かい、そして出会った。その神と人との対峙は長く続くヤコブと神との真剣な格闘(創世記32:24-27)のようでもあった。神への信頼と疑問と迷いの関係が何度もあった。自分に巣くう罪との戦いで悶々とした時期も何度もあった。しかし難攻不落の「エリコの城壁」を落とすためには何度も“遠回り”が必要であったのだ、「信仰によって、人々が七日間エリコの周囲を回ると、その城壁は崩れ落ちました」(ヘブル人の手紙11:30、詳細はヨシュア記6:11-20)。その分、回り道の繰り返しはディシェーザーの決断・献身に纏わる「優柔不断」であったかもしれない。しかしそれは忍耐深い神の愛に砕かれ、まったく新しい人格に変容するための

必要な“余裕”といえるのかもしれない。しかも、“孤独”ではあったがそれは人を介さないで自分と神との一対一の人格的な“求道生活”であったのだった。

(57)

そのきっかけは戦友メーダーの死であったのだ。神は全能であるので他の人を動かし、ご自身を示すことを知っているとよくいわれる。人間の側にはこういった場 (entrance) が必要であり、そこからあれこれ心の“格闘” (exposition) を経て、聖書の本質 (essence) に至り、外の世界に出て行く (expression)。更にこれら一連の歩みの概念をカタカナ語で図式化すれば神はアウトプットし、聖書はインプットし、人はインテイクするともいえよう。思いがけない不思議なことがよく起こった、とディシェーザー宣教師夫妻はよく言う。クリスチャンはそれらを神のみ手の業と呼ぶ。ジェイクは人知では計り知れない神の大きな愛に守られ、聖霊に導かれていたと告白する、神の摂理は人間にとってはいつも奇跡的なことに映る。聖書は淡々と語る中で、当たり前のように奇跡が……。ここは人間が思索できない。不可能のことが可能に逆転する。起こるはずのない、不可能と思っていたことが本当に起こった時、それは言葉、思いを超越した神がその瞬間、その人に“触れて”何かを伝えようとしているのだ (たわいない日常の生活にも起こる) といった認識は人と神との人格的な受け取り方。触れるということは距離がなくなること。これは人間の思いを超える神の知恵に結びつくこと、そしてそこにはいのちの接点がある。ここに気付くこと自体がもう一つの奇跡。人間の次元での奇跡は神の次元では普通の事柄、“事跡”と言われることがある、「人の子とは何ものなので、これを顧みられるのですか」 (詩篇 144:3b、フランシスコ会原文校訂訳)。ひとの罪による神からの断絶を神からの働きかけを redemption (贖罪) というが、この意味で神と人との関係での贖いによる和解を atonement (贖い: “at” “one” “ment” の合成語) という。償いは人の業 (わざ) であるが贖いは神の業 (わざ)。愛なる神の救いの計画を矢印で示せば: 十字架の死によって支払われる人間の罪に対する身代金 (ransom) → それにより成立する贖い (redemption) → 罪を嫌う義なる神との断絶の修復と和解 (atonement)。

(58)

人と神の距離をなくし顧みられる愛の神の現実をディシェーザーは聖書と聖霊の中に実体験したと何度も、何度も繰り返し証言する。呻き、愚痴、訴えを通して神との会話 (conversation) が最後は回心 (conversion) になったのだった。そしてディシェーザーにとって、捕虜収容所はかけがえのない“霊的空間”となり、ここでの試練は神との正直な“やりとり”の機会だった。そしてその分、神からしっかりと試された。戦争がもたらした軋轢を通して、ぶれない恵みの体験が当時の宣教師候補に与えられたのだ。ディシェーザーはこの歴史の中で豊かに圧倒する存在者・絶対者の存在に気付き、人格的に出会い、自分自身も本物のその素晴らしさに生かされ、その中に生き、自分も神から赦され、贖われた (redemption / atonement) と感謝。ディシェーザーは赦しの、このイエス・キリストの福音を本気で日本中の人達に伝えた。それ以上に、とてつもなく神に赦された自分は、赦しの真実を生涯、伝えること自体がとてつもない神から与えられた自分の喜びと感謝して。“Let’s go.”ではなく、“Let us be going.” (さあ出かけよう) とわたしも一緒にいると神から背中を押されて。こんなモファット英訳は十字架上の贖いの完成に向かうその姿がひしひしと伝わってくる。自分にはこんな大儀はないが、“小儀”で日本に戻れた。爆弾ではなくパイブルを持って。自分で志願した Doolittle 作戦で名古屋が爆撃地となり、中国で捕虜 (POW) になり、4年間の抑留 (exile) を通して新しいいのちが与えられ (exodus)、かつての名古屋が派遣地として与えられたのだった。捕虜収容所の独房は孤独との出会

い、そしてこの環境により Jacob DeShazer は予備知識なしの“一人読み”が一番適切な、「孤読」に相応しいモファット英訳聖書との出会いであったのだ。

文系領域の研究の註(特に footnote 等に)に関連事項、社会・文化的背景の詳細記述や関連文献批評(literature review)を含めることがよくある。直接ディシェーザーに関わることは本論に、それ以外の背景的事項は切り離して、その論述を以下の endnote に多くを含めた。日米間の比較言語文化を重視しこれらを厚い記述の essay として詳論した。また書誌から出発した(bibliographic)論述も含めた。特に註の最後(46)は、翻訳聖書を言語学的側面から論考し総括的な結論としてみた。

本来 annotation は留意する note がその語幹なので、「増註」として特筆に値する長めの議論を多く含めた。そのため註毎の長短があるが、本文テキスト全体を補完する総合的な構成の一部として考えている。また集団や組織やといった人間社会に関わる内容は、既成概念、固定観念、ステレオタイプ化された現実の価値観に対して敢えて正面から“文化・分化・分解”(breakdown)し不安定化(destabilization)させる辛口のクリティーク(critique)も試みた。この critical thinking により本来の形に reset された新しい認識や気付き(new awareness)がもたらす upgrade を、自戒の念を含め、痛みを感じつつもはっきりとその社会的方向を目指した。

- (1) 浜島敏(2003)『聖書翻訳の歴史:英訳聖書を中心に』創元社の見返り頁の著者署名(compliments)に添えられた文言:「言葉:呪いと祝福」より。
- (2) 牧師 James A. R. Moffatt は博士号をスコットランドにある世界屈指のセント・アンドリューズ大学で取得。そしてオックスフォードをはじめニューヨークのユニオン神学校教授も歴任。専門領域はギリシャ語と聖書釈義学(exegesis)。旧新約全巻 1926 年、改訳1935年に英訳聖書を発行。
- (3) 森本あんり(2015)『反知性主義:アメリカが生んだ「熱病」の正体』新潮社。牧師。ICU 名誉教授。東京女子大学学長。
- (4) 加瀬豊司(1992)「日米比較文化論に於ける方法論と方向性:動域パラダイムとしての異文化間コミュニケーション」『四国学院大学論集』、第 79 号(3月18日)。言語文化コミュニケーションにおける各種概念の概説と評価。
- (5) 加瀬豊司(2015)「原案・監修に関わって」『ていんさぐの花』上演実行委員会、名古屋市文化振興事業団主催演劇冊子」、3。
- (6) 加瀬豊司(2007) *Nisei Samurai in Washington, D.C.: Culture and Agency in Three Japanese American Lives* (邦題 文化変容と人間行動—ワシントンの日系二世ライフ・ヒストリーを通して) 四国学院大学研究双書 No. 5 学術出版会。二期生の新渡戸稲造は札幌農学校でウィリアム・クラークの一期生の佐藤昌介達から生涯にわたる影響を受ける。ここでは新渡戸の渾身の著作『武士道』について論究した。p. 35 の脚注参照。意識的に旧知の「武士道」の文言・様式を伝達の方法に使用して、本質的な日本の精神構造を著述。同様の方法と本質の関係枠組みを論述の構成に使用した。
- (7) 取り消し線。註(10)の考え方で取り消し線(strikethrough/strikeout)を施すが、これは紙面上の全面消去にはならないので元の語句が見える。古くは羊皮紙に書いた言葉を消した場合、完

- 全には消えないので元の字句が分かる状態。英語で palimpsest という。表面から見えるので二(多)重構造とも認識される。文化分析において文化という包括的な表現を使うが、その本質はその言語表現の意味に全面的には取り込まれない。要は完全な適語がないことから、伝達の方法として取り消し線という記号言語を使う。本質が簡潔に一語でズバリ(brevity)表現できない悩み。
- (8) Geertz, Clifford (1993) *The Interpretation of Cultures*, NY: Basic Books。文化は多層性・多重性を特性とするので「厚い記述」を記述手法として提唱し広範囲に定着している方法(notion)。
- (9) James P. Spradley (1980) *Participant Observation*, Florida: Holt, Rinehart and Winston. James P. Spradley (1979) *The Ethnographic Interview*, Florida: Holt, Rinehart and Winston. エスノグラファーのフィールドワークでの具体的な手法、技法のノウハウ。
- (10) 註(6)の日本語序論参照。ある本質的内容が伝達において、最も適切な言語が不在の場合、それに代わる、もしくはそれに近い言葉を使う。しかしその使った言葉そのものはあくまで伝達上の手段であってそのものではないし、その使った言葉の意味に拘束されない関係。伝達のための方法。註(7)にあるように、言葉の表現の方法としての使用なので、その使った言葉に取り消し線を施す。
- (11) 加瀬豊司(2019)「原案・原資料に関わって」『赦し』上演実行委員会主催(芸術文化振興基金助成事業演劇冊子、3)。ディシェンダーの体験を長期生活インタビューにより多角的に述べた。甲南女子大学 井上俊教授と放送大学 船津衛教授の著作名『自己と他者の社会学』(2005)に示唆を受け、生涯にわたる取材を「自分と相手の相乗関係の社会学」と位置付けた。
- (12) 著者性の問題については日本オーラル・ヒストリー学会第10回大会で(第3分科会 椋山女学園大学、2012年9月9日)。研究者の特権と視点の暗黙の前提を筆者は批判的省察(reflexivity)の対象として論じた。
- (13) Michael H. Agar (1996) *The Professional Stranger*, San Diego: Academic Press.
- (14) アウレリウス・アウグスティヌス(1976)『告白』(服部栄次郎訳、原著 *Les Confessiones* は 397-400年発行) 岩波書店、4-5。
- (15) 田中秀之(2021)「説教：罪の赦し」『日本同盟基督教団 愛知泉キリスト教会 10/24/2021 週報』。他、関連するテーマについて助言を受けた。
- (16) Watson, C. Hoyt (1950) *DeShazer: The Doolittle Raider Who Turned Missionary*, Indiana: The Light and Life Press, 118.
- (17) 空母に戦闘機ではなく、重い陸軍爆撃機(B 25)を積んだ Doolittle 軍人による日本本土初空襲作戦。日本軍による真珠湾攻撃から4か月後のリベンジ。日本の軍人にも、同じようにとてつもない発想をする男がいた。この藤田信雄については元産経新聞記者、倉田耕一(2018)『アメリカ本土を爆撃した男』株式会社毎日ワNZ が書いた。飛行機を分解して潜水艦に積み込み、太平洋西海岸で組み立て単機でオレゴン州に爆弾を落とした。戦争下での日米軍人共通の奇想天外の発想。
- (18) この概念用語「心の連想」は米国メリーランド大学教育学部教授、国際センター所長の Barbara Finkelstein 博士が米国教育学者ロバート・ベラー(Robert Neely Bellah)の「心の習慣」

(Habits of Heart)を振った「心の連想」(habits of heart, mind, and association) を日米比較教育論文で使った。詳細は拙書 *Nisei Samurai* の前注(6)参照。研究者の「連想力」は広く他者の思想(思考と想像)、意見、感性や理性に響き合う橋渡し能力として必要不可欠。自由に広い範囲に展開できる(wide range of knowledge)ので全体像の把握や洞察力が涵養される。特に覆い隠されている社会的欲望(subtext, hidden curriculum)下で抑圧、暗黙の前提(tacit assumption)により思考停止、自分の固定観念からそれ以外の世界を認知拒否、一笑に付して真実からの回避行為に対して起こりがち。このステレオタイプに対して気付きを与える(social prison break)警鐘(caveat)がある。古今東西にあるこの負の心的状況と人間行動をラテン語からの借用文が英語表現として定着している。「自分が理解できないものを啜う」“damnant quod non intelligunt”。この警句(aphorism)については牧師招待愛餐会での加瀬豊司メッセージで「自己の認識外の認識」について奨励をした(日本国際ギデオン協会 名古屋東支部 2019年2月)。

- (19) 英単語は sentence と表示し、三つの主要な意味がある。「文」、「宣告」に続いて、通例大文字ではじめて「Sentence」の語意は「聖書からの短い引用」。英語辞書の語意項目(lexicography)に定着しているので Sentence と銘打つてもっと活用があつてしかるべき表現。しかし、実際には引用として普通に扱われ、多用されている聖書語句からの引用文。註(16)のワトソン博士の著作には大量の Sentence を含めている。本稿にも同じ趣旨で多く使用。
- (20) ディシェーザーの実娘(Carol Aiko DeShazer Dixon)とピッツバーグ大学教授 Donald M. Goldstein 博士と共著。Goldstein, Donald M. and Carol Aiko DeShazer Dixon (1973) *Return of the Raider: A Doolittle Raider's Story of War & Forgiveness*, Florida: Creation House.
- (21) 2018年終戦記念日に約2時間のNHKスペシャル『二人の贖罪(しょくざい)ー日米の憎しみをこえて』と題して放映された。
- (22) 加瀬豊司(2006)四国学院大学『チャペルへのまねき』No. 314。“淵田とディシェーザー: 真珠湾攻撃と名古屋空襲”。
- (23) 笹川修佑: 筆者より一年前(1959年)からデ師と深い親交のあった元銀行員。ディシェーザー宣教師がはじめた白沢伝道所での初期の信徒で、デ師と内外で重ねた多くの文通資料の提供を受けた。ディシェーザー夫人からの書簡が多いが、その中でクリスマス・レターからは戦争の体験史や日本での宣教活動の直截的感情(direct feel)が伝わってくる。2016年の毎日新聞「証言でつづる戦争」のシリーズ・コラムにはDoolittle 関連の飛行機の日撃証言や初期の日本宣教への多くの言及を含む新聞の複写資料や1942年4月19日付『東京日日新聞』記事: “名古屋で小被害”の見出しのもと“敵機来襲に国土防衛全し”等々と当時の状況がうかがわれる。
- (24) ディシェーザーと筆者の交流のライフ・ヒストリーは註(11)を参照。その中で50年にわたる日米間の行き来から多くを聞き、話合い(取材)このディシェーザー一家の生活史記述の積年の原材料になった。
- (25) この歴史記述と方法と編集は註(11)の p. 3 を参照。
- (26) フルブライト委員会(Fulbright, Japan)の「フルブライト 60 周年記念誌」加瀬豊司(2013)特別寄稿、6-8。フルブライトの基本精神である批判的の自己省察(reflexivity)からアメリカ政府の外交政

策に対して建設的に内部批判を行った外交委員長の足跡を辿った“Senior Walk”と題した著述。自己に再帰する社会的人間行動を人間の深層心理の描写と重ね合わせた。

(27) 頻繁に口にする「聖書と聖霊は一致する」はディシェーザーの信念と信仰の根源 (pivot)。それは生きて働く聖霊とそれを裏付ける聖書。

(28) 時間をまたいで把握する通時的な歴史と現時点で意味付けをする共時的な歴史観の対比があるが、長い歴史の中で聖霊の働きは通時的 (diachronic) に一連の過去の出来事とすれば今、ここで (now & here) と共時的 (synchronic) に現在の信仰者の中に働く聖霊はなくなってしまう (no・where)。聖書はイエスキリストを証しする書き物 (Scripture) であって歴史の単なる記録文書ではない。「文字は人を殺し霊はこれを生かす」(コリント人への手紙 第二 3:6c) と聖書は聖書を使って言語に閉じ込めることの出来ない真理を言葉を使い二重拘束 (double bind) の修辞法で“説明”している。通時的・共時的な関係が失われると、あれかこれかの単純な選択になり、聖書があれば聖霊はいらない、逆に聖霊さえあれば聖書は不要の極論になる。聖書は永遠の神のことばであり、聖霊は(三位一体の) 人格的な神でその相互の有機的な関係 (reciprocal integrity) を終始告白し続けたのがジェイコブ・ディシェーザーの体験。一言で言えば「聖霊は神、神のことばは聖書」。口述する 2017 年新改訳聖書の編集主任の内田和彦牧師と聖霊派の万代栄嗣牧師の率直な牧師間対談が 20 世紀最後になって三度なされ、2000 年 6 月に書籍化された(『21 世紀への対話: 福音派とペンテコステ・カリスマ派の明日』、いのちのことば社)がある。はじめそれぞれの教派の特徴を背負っていたが大きな関連共通項の共有を再確認しあった (in good faith)。対話という言葉の過去における欠落は認識世界の思い過ごしを生んでいたようである。聖霊は三位一体の神の一つの位格であり、この生きて働く聖霊、それを裏付ける聖書の使信の整合性をディシェーザーは体験からしみじみと語っている。

(29) アン・バンドルフ (1959) *Songs of Victory* (勝利の歌 I) 日本アライアンス教団・いのちのことば社、15。

(30) Watson, C. Hoyt (1950) *DeShazer: The Doolittle Raider Who Turned Missionary*, Indiana: The Light and Life Press の著作において、ワトソン博士は最も多く暗唱される聖書の引用の一つ(コリント人への手紙 第一 13 章)を引き合いに出し、ディシェーザーとモファット訳についての言及している(As a matter of fact he quotes it [the thirteenth of I Corinthians] perhaps more than any other portion of the Bible using, as a rule, James Moffatt's translation: ~Love never disappears.) 101。

(31) 収斂論による節減と縮小の原理(オッカムの剃刀)(加瀬豊司(1992) “日米比較文化論に於ける方法論と方向性: 動域パラダイムとしての異文化間コミュニケーション『四国学院大学論集』第 79 号、p. 69 をベースに展開を広げた。中心である主要場面に焦点を当てるため、他の周辺的なものを「髭」に譬え、不要・無用なものとしてそり落とす。必然性のないものを無暗に定立させない原則によって、より重要な中心思想や概念が明白になる(のを期待する)。中国にどのような形でモファット英訳聖書が入り、日本軍がそれらをどのように見つけ、捕虜 (POW) のディシェーザーに渡したのか、その経路自体の探求は次掲の註、ELM の活用方法に焦点を移す。

(32)ELM(Elaboration Likelihood Model(精緻化見込みモデル)はミズリー大学の心理学者、リチャード・ペティ(Richard E. Petty)とシカゴ大学の社会神経科学者、ジョン・カシオッポ(John T. Cacioppo)によるコミュニケーション学(communicology)の説得コミュニケーションの一つの理論モデル。相手への説得に至る二重過程理論ではあるが、本論文では、この説得性の増強のための二分法部分を利用する。ELM は正確な全体性に限りなく近づくため、アクセスの本質的な道筋(central route)と周辺のそれ(peripheral route)を区分し熟慮する。その上で“ありうる諸要素”を精緻し、整理し、より完全な予想や期待を目指す。この確率論的評価により、日本軍が押収したと思われる英語聖書の入手経路については、戦時中起こりうること(plausibility)として論じる。本稿では以下のありうること(in all likelihood)の解明に ELM を準用し、当時の社会的状況を熟慮し、キリスト教伝道に関わる中国と欧米の歴史的関係を以下のように“精緻化”してみた。

中国について書いたピューリッツァー賞とノーベル文学賞受賞のアメリカ人作家による『大地: The Good Earth』に代表されるの良き大陸、中国に使命を感じ伝道(China Mission)したハドソン・テラーの生涯に関連させる。中国に多くの宣教師が送り込まれ、良きスタートをきったが、次第に政情の不安定から多くの宣教師家族も虐殺された(栗栖博美書(1982)『ハドソン・テラー』教会新報社)。事件と事変や運動と反乱、そして戦争と中国の歴史は列強の介入と内部の抗争が続き、その影響を受けキリスト教は試練の歴史に変わったが、そんな中、当局の取り締まりの間を縫って行き来は続いていたので多くのキリスト教の関係文書類は数多く残っていたであろう。日本軍が占領していた中国で捕虜収容所看守が入手した捕虜葬式のための聖書も押収品の中から入手したと思われる。Doolittle の捕虜に死を看守たちは予期し、そのための葬式用道具として聖書を保管していたのだろう。

後日、中国関係で、ディシェンザー夫人がふと呟いた“*It's a long boat to China.*”は今もって真意不明であるが、ここも ELM を借用して想像力による thick description の要請される今後の領域と考えている。総合的な迫真性(verisimilitude)は何か理にかなった蓋然性(something beyond reasonable plausibility)から出発し、象徴的な世界をくぐって定着するようだ。歴史文学にするか、あるいはここで歴史を中断させるかの選択は残るが、突き詰めるところまで突き詰め、疑問は疑問として探求し、ここが探求の限界。これ以上の判断はここに留める。

(33)聖書翻訳者について個人訳(私訳)か委員会訳(混合訳)の一長一短の議論があるが、モファット博士は、その訓練過程においては研究者としての研鑽は当然の努力(endeavor)はいうまでもなく、博士を目指す研究者同士は切磋琢磨の厳しくて長い時間を経験している。複数での討論・議論で鍛え抜かれて、単なる独りよがり淘汰される。つまり、聖書翻訳という大事業に対して事前に十分な準備と必要なものがここに具備されていることである。以下、教派教団や組織から援助なし(no denominational or institutional support)の個人訳を可能にしている背景的訓練そのものからくる高い適切性について述べてみる。このレベルの高さは上下の基準などではなく、「揺るがない個」による一貫性や安定性を生み出す整合性の資質である。この牧師モファット博士による個人訳を可能にした人的背景について論述する。この歴史に残る翻訳に個人による聖書の翻訳の社会性を含んだ過大評価や過小評価は避け、そのもの自体に(per se)備わってい

る具体的な現実に焦点を当て詳しく述べる。適合基準として背景の適格性 (scholastic competence) と職業的適正さ (professional proficiency) である。ここから出てくるのが本来の社会的資性であり該当者のアイデンティティーといえよう。この二つにより最適な資性 (optimum qualification) が生まれる。以下の論考には筆者の経験と考察が含まれる。一言でいうと、牧師という「特質」と博士という「資質」の両方が英訳聖書の翻訳に最高に相応しい。有益性が最高 (dually functional topnotch)。しかし牧師 (pastorate) と博士 (doctorate) の深い現実的側面 (in-depth dimension) はあまり日本社会に知られていない現実がある。そのため日常の談話にはめったに登場しない。それぞれのプロ領域にマッチして機能するこの二つを国際的基準・標準の重要な要素と考えてみたい。頭と心の深いところまできちんと詰めることが出来るこんな探求は、信仰の言葉でいえば全能の神はすべての神であるから、深い資性も豊かに用いられると確信している。ここが特質と資質の両面からの大きな社会貢献の場所。このようにどっしりした背景があれば、ぶれない一人の個人訳は統一のある翻訳になる。英語の「individuality」(個人) は切り離せ (divi) ない語幹を持つかけがえのない存在。聖書は最終的な「個」の力量を余すことなく述べている「判断力と知識のある一人の人により安定は続く」(箴言 28:2b)。新共同訳聖書も「分別と知識のある人ひとりによって安定は続く」が同じ個所にある。特質については言語に関わる配慮、つまり神のことばとしての聖書の使信を伝えるだけではなく、よく伝わるように言語上の工夫に腐心しているのがその姿勢。このため、一般社会に開放されている教育制度とその最高位の博士(号)については息の長い (“anti-precocity”) 堅忍不拔な意志力と高度の専門に至る訓練が課せられている。次にこの次元に至る修練 (scholastic trainability) の諸段階の具体的な詳細について日本の知的風土・雰囲気にも触れつつ、あるべき姿を述べてみる。

先ず日本と英語圏の学問を支える教育意識の違いから。以下に筆者の日米での経験と考察を含む。一般社会を超越している最終の場としての現実を概説してみる。日本の教育機会そのものは広範囲に“社会現象”として定着しているが、卓越性 (excellency) の話題はタブー視されがち。負の遺産として“反知性主義”に加えて日本の国際貢献を阻んでいるのは“やっかみ”とそこからくる“足に引っ張り合い”。心では願ったり、自分の次世代には期待し称賛までするが、率直な話題にしない、されない社会心理がある。専門馬鹿とまではいかないにしても、難しいといいつつ小馬鹿にしたりして、とにかく別格扱いをして距離を置き関わらない日本型知的風土があるが、先進国の国際社会ではその専門性 (expertise and knowhow) を社会資本として使っている。個人の感情に閉じ込めるのではなく社会の公共物として (socially usable) 有効活用がそのやり方である。この水準の「質保証」を保つため、特に 21 世紀からの日本を含め先進国では、学位授与機関としての高等教育機関は独立した全国版の認証評価機構から、審査を受け続けている。ぶれないよう、現代社会はここまで組織的に充実させ、この高い質水準を維持続けている。聖書自体が最高の叡智といのちの言葉の集積であるならば、ここに深く関わる個人翻訳も言葉のマネジメントに深く関わる以上、その言語背景として最高度の水準が要請されるのが社会の当然。

“物知り博士”といった知識量の多寡ではなく、博士自身の基本姿勢は、有体にいえば、先行研究や過去のパラダイムを無批判に受容するのではなく、むしろそれらを不安定に (destabilize)

させることから出発する。このことで流されること無く内容自体(per se)に深く没入し、その世界は世相、風潮、組織とは無関係。純粹さから出発する批判的考察(critical thinking)の基本精神とスタンスの厳格性は聖書の翻訳に欠かせない資質でもある。最終課程での訓練は国により、演習やセミナー(coursework)、教授指導(professoriate, tutoring)といった「質保証」の強調点の幅はそれぞれあるが、資質が徹底的に練られるための批判精神、評価基準の厳格さは不変。

(34) 今度は言語に関する本来の博士号の構成要素と生成プロセスを可視化するために自己の背景と経験を対象化し、その手段のため批判的に自己言及(spell out)することで内部のありのままの実像を順を追って記してみる。まず教育の並大抵ではない訓練の最終の場として、その社会的側面を含め、博士課程の具体的な特色から。高等教育の修士課程や学士課程の両課程は教育上の発展途上の一段階とし、同様に中等教育・初等教育も底力を付ける途中の段階としてこれらの記述は後日に稿を譲る。学問的段階においては、学士課程によくあるように過去の研究成果の延長、また修士課程によく見受けられる一部修正モデルの構築レベルではなく、この最終課程では今までの大前提を根底から大胆に問い直す(critique and re-examination)、いわば“脱構築”の作業から発想する。ここから先入感に囚われない創造性が生まれ、そこにいきつく洞察力と知見が要請されているのが博士課程。この独自性が出来ないと脱落(dropout)と過酷な現実(academic culture)がある。教育制度については日本のそれと多くを共有するアメリカの具体例を挙げる。この最終課程に入学し、単位を取って修了し(coursework: 授業1科目に30枚ほどの授業論文 x10~12科目; 計300~360枚)、次にコンプ(comprehensive examination)とよばれる主要科目と関連科目の3領域から成る総合試験(計100枚程度)、更にプロペクタス(博士論文の計画書; 30枚程度)及びその審査口頭諮問、ここまで合格すればやっと博士候補生(candidate)に。更に単位化された論文セミナーの授業を取りながら博士論文(300枚以上)を作成、提出。そしてそれが審査される。ここまでに書いた総論文枚数は総計約1,000枚程度、書き直し(rewrite)やボツにした原稿(publish or perish)を含めれば更に何千枚。授業ではtalk, talk, talk to death、論文はwrite, write, write to death。合格し博士号を取得出来るのは約半分もしくは3分の1の人数。学的要因以外の社会的理由もあろうが。初年度に平均成績(GPS: Grade Point Average)に実績が伴えば、授業助手(TA)や研究助手(RA)として関連領域で働くことも可能。勉学・研究に追われ通常アルバイトは無理なので学期休学(stopover)し学費を稼ぎそして学業に戻るパターンも多い。大学生になったらバイトしようといった風潮はない。成績評価の厳格性・厳密性は教授も学生・院生も当たり前の価値観。そんな中、極めて優秀者には全学スカラーシップの奨学金があるし、力があれば授業科目を多くこなし修了も早い、不相応にとりすぎてGPSで評価平均がB以下になると課程から追い出される(kickout)。成績評価も極めて厳密。みんな大人の研究者だから好きなように、はここにはない。博士課程に“授業”そのものが成立している。ここに真摯に関わり、終始過酷な重圧の中での学究生活は一心不乱という回復不能の“病気”とも言えよう。しかしこれを意識し自覚するのが世界共通の研究文化(research culture)。上記の課程(coursework)についての戦いに明け暮れる側面はフルブライト講演記録集を参照(加瀬豊司(2011)“アメリカの高等教育”フルブライト名古屋アソシエーション、3-15)に。

欧米の重厚な訓練を受けたモファット牧師の学問的背景は単に八面六臂の社会的な広がり
で手腕を発揮したのではなく、神のことばである聖書翻訳に心を砕き、全神経を集中し
(concentration)、その中心は(centralization)神のことばに対する情熱。その原動力は、信仰的
にいえばそれは章の順序を変えてまで最重要視したヨハネの福音書 14 章の共にいる聖霊
(Paraclete)が根源と受け止めている。神学者のモファット博士は、聖書翻訳に認識言語の読み
手(recipient)に焦点を当て、従来の聖書の構成(organization and/or structure)している順序
の一部を変更し、文体(stylistics)に配慮を加えた言語学者さながらの牧師。こういった文章構
成を単独でやり遂げた学者。高い水準で適確な能力と熟慮した実践力があつたからの作業
(endeavor)。モファットは、この意味で職能と学殖で安定した聖書単独翻訳に対して極めて自立
可能な逸材(eligible and entitled qualifier)といえよう。

(35) 修道僧が寒さ暑さと戦いながらガウンを着て祈りと学びを極めていたその名残を共用する場
がある。今も修道院ではガウン、教育機関の学位授与式でもガウン。大学院と修道院は共有する
究極の場、一般的にここの内実もあまり語られないが、ともかく体をはって、かつ真剣になれる世
界、否、なる世界である。しかし相応しい満足感と充実感を伴った祝福もあるので歯を食いしば
った禁欲主義とは訳が違う。日本でもセナリオ(神学校)とコレジオ(大学)が多くを共用してい
た時代があつた。欧米の高等教育の風土として学問の共有と知的向上の社会的雰囲気は個人
間の妬みや組織間のヒエラルキーから自由になっていて純粹で、すがすがしい限りである。目
に見える実像をアメリカのキャンパスにその凛々しさを見た。学生たちの引き締まった顔面表情
(facial expression)を生み出す知的構造を箇条書き(itemize)して分析(breakdown)してみる。ラ
イティングで頭の中が一杯の彼らに飛来する考える項目の一部を漢語で列挙すれば: 観点(要
素・概念)、構築(論旨・評価)、記述(名辞・展開)。歩いていても頭の中に飛来するのは展開の
組み立て(how to structure and organize!)。しかしそれは次への達成の準備であり、真剣な未
来志向。この顔の雰囲気がキャンパスの“風貌”。ただ一つ、一つだけのんびりと息抜き(at
leisure)するのは金曜日だけ: “TGIF”(Thank God, It’s Friday)。学業の評価と人格の評価は別
物であるし、学びの厳格性(academic rigorism)で身も心も引きしまると同時に、相手の達成にも
心が広い。共有できる価値観として相手のいいプレイ(good shot)にはためらいなく拍手を送るス
ポーツ競技の精神と同じで気持ちがいい。いいわけは暇人のやること。ジメジメ感なし。

(36) ともかく聖書翻訳は人間間の属人性の側面(ad hominem)は問題外とし、本註で詳述してきた
が博士課程では可能性と限界(limits and possibilities)の正直な弁えは教授される学問的必須
でもある。最高位の水準で突き詰めた純粹性があるからこそ、正直さに裏打ちされた良心・良
識が資質として当然視される。ここから聖書翻訳に思想(ideology)や性癖(idiosyncrasy)の読み
込みから自由になる。社会的にも、博士(doctor)と牧師(pastor)はその位置付けに「doctorate」、
「pastorate」という特別な語彙が英語圏では使われている。博士課程での熾烈な切磋琢磨の知
的討論や博士論文(ここでは thesis と呼称される学士・修士課程論文とは区別し、独立させた
dissertation)の議論は闘いの場。モファット博士の英訳聖書もこの熾烈な訓練と論戦
(disciplinarity and polemics)の背景があつての力作。しかも“doctorate”と“pastorate”をかねる水

準(equal footing)は私訳か委員会訳の議論や経験を超える。この点から見れば、翻訳史の社会的過程の中での「てらい、こだわり、思惑」入りの訳はそれぞれの社会的・時代的制約付きの所作といえよう。時代の波や社会風潮を乗り越える本来の訳がいい。ぶれない博士の個人訳(doctorate works)は学者本人の努力(single-handed initiative)。研究や論文において、自分がやり遂げようと言いつつ切ったことを最後までやり切っているか、その整合性(consistency)はこの目的を達成しているかが一番厳密に吟味すべき項目(how well the researchers have done what they said they set out to do)。ライティングの内容面については第一次資料や二次資料(primary & secondary source)はもとより、参考文献や先行研究の批評(literature review and/or critique)により位置付け(academic positioning)、質の面では深い洞察力と創造性・独自性が問われる。情報収集や提供は誰でも努力すればできるから“low level”と。展開面では大切な段落の組み立てと段落同士の発展的関連性、特に段落は一つの思想体系なので極めて重要。日本人が弱い段落構成(paragraph development)の筆者による素朴な質問から博士課程最高 800 番台レベルの 200 分授業が“書き方”について授業担当者と院生達によりディスカッションになった(For me)。彼ら曰くプラトン、アリストテレスからの writing の方法には自由がない、が、誰が使っても論理展開は出来る、後は内容と。院の友情に感謝しつつ、これを使って challenge すると明言。彼らからの反応は“Sure!”アメリカの大学院の知的雰囲気はこんなところが面白い。モファットもこんな論旨に展開の中で育ち、この博士私訳は自分の学殖と良識を基に独力で成し遂げた英訳聖書。

現代の国際社会の常態として牧師には尊敬を、博士には敬意が払われ、尊称としての呼称も Rev.~, Dr.~が普通。尊称は自分でつけるものではない、米国においては、博士号所得者に「~教授」(Prof. ~)と呼称するのは博士号未取得者となるので失礼な社交言語でもある。筆者の実例もあった。英語が出来る学生が米国の大学での交流で、Professor Kase と呼称した時に、Doctor Kase と呼びなさいと直された。教授職はある時期の社会的所属(affiliation)であり、博士は時の流れとは関係ない純粋性の故に上位がその理由。内容以外の人に対する感情はない。

更に学位記の博士号には更なる最高位の「academic degree obtainable」があり、Ph.D.と自署する(著者名などに「~, Ph.D.」と自署明記するのが普通)。Ph.D.は尊称ではないので他人からは付けない。言語上、Ph.D.は Doctor of Philosophy(哲学博士)であるが、最高位を表す言葉がないので“方法論的拘束”上の表現として一種の頭字(acronym)の「Ph.D.」使っている。高度の職業的学位「professional degree」としての博士号とこのもう一つの博士号(advanced academic and research degree)である Ph.D.との区別は米国東部の公立アイビー・リーグ(Public Ivy League)一つである大学院の 100 頁からなる卒業式冊子にこの区別と必要性が明記されている。「The second type is the research doctorate representing prolonged periods of advanced study. A dissertation that usually accompanies the study is intended to contribute substantially to the body of knowledge on the subject. The most important of these, the Doctor of Philosophy, no longer has an implication of philosophy for its holder, but represents advance research in any of the major fields of knowledge.」(Commencement, The University of Maryland May 2005, p. 12)。

モファット聖書翻訳は 1935 年、コンコードダンス付き改訂がその最終版。読みやすさにとことんこだわった (straightforward) ことが読者という認識者主体 (readers friendly) の文体が特色。しかし、章建てを読みやすい流れに入れ替え、差し替えるという“風格”の故、伝統的陣営からは批判もあったが、読む人に人気のある翻訳であった。モファットの他の聖書への貢献はアメリカの RSV (Revised Standard Version) 聖書翻訳にも指導的役割を果たした。モファット聖書は 1964 年ノーベル平和賞受賞を受賞したマルティン・ルター・キング博士も愛用する翻訳でもある。

言語や写本に重きを置いた和訳聖書の全体や部分訳の蓄積が多くあるが、註 (33) で力説してきたように水面下の業績 (background) ではなく、もっとキリスト教の日常世界でも表面化・一般化・話題化 (foreground) していったら、と思っている。最近の和訳翻訳にフランシスコ会の翻訳がある。こんな視点でいえば、広く言語の一番大元の直接原典から半世紀以上かけて発行した (日本語訳のみでの英訳なし) フランシスコ会聖書研究所発行の原文校訂聖書は特筆に値する。そこには写本はもとより、ギリシャ語の 70 人訳 (Septuagint)、ラテン語訳 (Vulgata)、タルグムとよばれるアラム語訳、マソラ本等併記してそれ相当の理由を付けて (due reasoning) 最も適切な日本語訳を選択している。そしてこなれた日本語表現も豊か。2018 年 9 月 18 日の名古屋聖書セミナーで新日本聖書刊行会・新約主任、プロテスタント教会牧師内田和彦博士 (スコットランドのアバディーン大の Ph.D.) は『新改訳 2017』はどうか変わったのか」と題しての講演で「新改訳 第三版」、「新改訳 2017」、「新共同訳」(協会共同訳は 2018 年 11 月発行のため比較無し)、「フランシスコ会訳」を比較対照している。豊富な原典から行きつくところまで 50 年間の月日を費やし校訂したフランシスコ会訳は直接原典から直接日本語に訳した和訳聖書 (英訳聖書は無い)。この原文校訂の口語訳が法王の“お墨付き” (Imprimatur) で 2011 年に出版された。

日本国内では国際ギデオン協会が「New Bible」と銘うって活用した泉昭博士の和訳がある。こだわりのない Crossway 社の ESV (English Standard Version) とその簡潔な文体 (brevity) がよく似ている。この ESV は *Fire Bible: English Standard Version* と銘打って 9 人中 7 人博士号取得者による注解付き聖書を 2014 年に発行。2006 年、牧師であり泉田昭博士の日本語訳、また近年、ESV からそれぞれ著作権 (copy rights) を国際ギデオン協会は受けた。種々の翻訳聖書そのものに愛着と親しみを感じる事が成熟した言語観と感じている。

(37) [This is a sure saying.] は 真実で信頼に値する重厚な意味を持つ表現ではあるが、簡潔な日常語 (familiar everyday language) を使っている (テスへの手紙 3:8)。次に、「~rank among wise men」は軍人組織での階級を表わしたり、順位をつける領域で多用される言動。さらに「a sure footing」は前出の“sure”と同様、この会話体は米国でも相手に対して更なる同意として発話されるポジティブな発話内の感情が入っている。故意に“正当な (authentic)”抑揚の強いイギリス英語の発音することで“確認した確証”効果と相手に対する好意の気持ち (pleasing tone) で表す音声言語 (パラ言語) として“市民権”を得ている (illocution act)。あるいはポストモダン流の言語の脱中心化 (decentralization) した言葉のあそび (戯れ) かもしれない。前註の sure (saying) も sure (footing) の sure も前註の「オッカムの髭剃り」の節減法を活用した簡潔な (succinct) 効果を狙っ

ている。読売新聞(2021年12月20日)の英語の工房林にNY特派員が「どういたしまして」「わかりました」「もちろん」と日常の謝辞として“sure thing!”を刺激的な表現として解説している。

(38) 聖書に翻訳者の正直な気持ちの内面吐露は不必要 (effacement) かもしれないが、翻訳に特化した技術、技巧、技能や読者に関わる言語論・認識論は回避しない方が正直で良いと思われる。牧師のモファット博士はその翻訳に不可避的につきまとう「可能性と限界」、つまり感動を呼び起こす仕事、そして同時に謙虚さ (noblesse oblige)、すなわちこだわりやわだかまりの先入観からの疎隔 (estrangement) が要請される仕事と正直に認め、この二つを厳粛に受け止めている。神のことに関わることだから。事実、モファットはその翻訳聖書の序文に信仰者を魅了する翻訳作業にとってこれほど謙虚さが要求される分野は他にない、と虚心坦懐に学者的良心を明言している。「Translation may be a fascinating task, yet no discipline is more humbling.」。

モファットの意識と心理の中で、最高位を極めた知見の水準から、否それだからこそ気付く謙虚さの根底には神の絶対的叡智に賛辞を呈するのみと信仰者の姿もある。この謙虚さは社会的に何かを成し遂げた実績に対して、社会的に“装う”社交的謙虚さではなく、中身を突き詰めた暁にさらに見えてくるより高い内容の存在について、まっとうな心意気からの謙虚さの発露である。そして 聖句の表現、配置に最大限の配慮努力 (initiative) を重ねたこの神学者牧師は今度は聖書読者の反応に対して、翻訳者は消去法を使ってもう一つの謙虚さを正直に認めている。「If your readers are dissatisfied at any point, they may be sure that the translator is still more dissatisfied with himself」(読者が不満足の際は翻訳者自身なお一層満足感無し)とモファットはその聖書のはしがきで正直に書いている。言葉を翻訳することは意義ある感動と極度の緊張が同居する。それだからこそ、神から与えられた最高位の訓練を使ってその時点での最高の扱いが肝要。と同時に自己満足に陥る中途の自己終結ではなく、もう一つの新しいステップが存在すると認識できる謙虚さを期待したい。要は、良きものをさらに良くしていくオープンな向上 (upgrade) の精神と実践が肝要である。

(39) 三浦裕次 日本での医学博士号取得後、ワシントン D.C. 郊外 (greater Washington) のメリーランド州 ジョンズ・ホプキンス大学 (JHU: Johns Hopkins University) 客員研究員 (2000-2002、2003-2005)、アメリカ国際衛生研究所 (NIH: National Institute of Health) 連邦政府職員 (2005-2007) を経て現愛知医科大学看護学部教授。聖書と医学の関連に多大の関心をいただいている学者。

(40) Clifford Geerts は人間を本能だけでは生きられない存在と定義づけ、意味付けを存在の根拠 (reasons d'etre) としている (Man is an animal suspended in webs of significance he himself spun.)。 *Interpretation of Cultures*, NY: Basic Books, 5)。

(41) 前註(40)よりさらに人間存在の意味形成と同時にその破壊の必然性について次の2人の言語・文学・文化・社会の学際領域の学者は次のような洞察をしている。州立メリーランド大学の Gordon Kelly は同院の授業で人間行動や創造力は、「書物」は社会の反映といった「受動的行為」に対する既成概念の問題性を指摘したのだ P. 1974年 *Prospect* の自署論文“The Social Construction of Reality : Implications for Future Directions in American Studies”を引用し、文学

は社会の意味をつくったり、保持したり、またその意味を破壊する未来に対して「能動的」な機能や方向を持つ「Human activity and creativity—a useful foil to the passivity inherent in a reflective model of literature: books as the “mirror” of society. Rather literature, in broad sense, could be approached as a meaning-making, meaning-sustaining, or meaning-subverting activity.」と意味世界と論じた。また Murray Murphy は 1979 年にその論文“The Place of Beliefs in Modern Culture” *New Directions in American Intellectual History*, Baltimore, MA: Johns Hopkins University Press で人間の本能と意味付けの関係を人間の本能不全の結果、認識枠がないと生存不可とまで言い切っている (Man is so underendowed with instinct so lacking in generally determined guides to action that he would be unable to survive without the elaborate symbolically mediated cognitive systems that constitute the world view, 5)。

(42)ただ“嘘”の幅も現実にはあるが虚偽に対する厳しい社会的な制約と非難もある。そこには相手にも共有できる他愛もない (obviously untrue) ウソ (white lie) の存在もある、一方、心に傷を残したり、人道に悖るウラギリ (falsification) は峻別の対象。早稲田大学文学部卒業後米国ボストンのバークリー音楽院 (Berklee College of Music) を卒業したシンガーソングライターの川江美那子が「嘘」と言語化して機微な心理を歌っている。2004 年 CD 『川江美那子 願い歌』(株式会社ドリームミュージック) の歌詞「願い唄」の一節に“今日悲しみを隠した、小さな嘘ついた、果てしない暗闇なら見せたくはなくて”と歌う。当然、ここは思いやりから発する嘘のロマンで歌にも詩にもなる美学の世界。人間は「呪いにも祝福にもなるこんな言葉」を使って現実の世界加工するホモロクエンス。四国学院大学で英語史と聖書翻訳を専門としてきた浜島敏は言葉の陰と陽の機能をリアルに語る。感動する多くの言葉がある半面、負の遺産も多い。言いつくろいは人の常。世代を問わず、理由の大小を問わず、合理化・正当化をしがち。果ては信用を裏切る (fraudulence) 行為まで。ひびの入る言語行為においては受け取り側 (recipient) に“厭らしさや厚顔無恥”として記憶に残ったり (mental imposition)、未永く心に傷が残る。身の安全 (security) の確保は別として、正直さが要求される英語圏の教育界 (academic honesty) ではカンニング (cheating) や盗作 (plagiarism) は厳しい罰則付きのアンフェアな行為。法域ですればそれは偽証罪 (perjury)。聖書の十誡 (Ten Commandment) はそれを「あなたの隣人について、偽りの証言をしてはならない」(出エジプト記 20:16)、モファット訳は淡々と“You shall not give false evidence against a fellow-countryman.” (下線は筆者)。

英語の世界に社交的ウソはあるが、「嘘つき」“You’re a liar.”は言語倫理侵犯の極度の嫌悪感の現れで絶交の宣言。アメリカ州立メリーランド大の入学時に筆者はパブリック・アイビーリーグとして「honor pledge」のオネスティー・カードをもらった。正直さを超えてそれが自負心のある誇り「honor」を宣誓 (pledge) と印字されている。論文や試験で他人の努力の“手柄”を盗む行為は許されない。御託を並べて合理化したり、正当化 (self-justification) する居直り行動 (high-handed act) は偽善行為 (hypocrisy) と同義。むしろ自分の間違いや弱さ (vulnerability) は正直に認め、そしてそのこと自体が勇氣ある行動と評価されるにもなる。良心 (bon sens) と正直さ (honesty) は謙虚さの表れで、人は本来こんな個人の倫理観で意識 (pledge) を高めることが大

切。しかし実際の社会や組織ではそれを構成する人間の幅と雑音(noise)で複雑。更に複雑になるのは自己顕示欲(self-aggrandizement)に権力欲と支配欲が絡まる状態。組織力(morale)が下がってしまう。マネジメント不在で言葉でリアリティーがつかれず、コミュニケーションやディスカッションがなくなると、行動・行為の正当な評価ではなく、人間の存在の否定に走り、排斥行為が常套手段。世界の良識に通用し、向上・発展の次元に本当に正直に心を砕ける器(caliber)の大きい“リテラシー”あるリーダーシップが望まれてならない。平易に一言。“正直さアナキー”(honesty anarchism)は、さすが 21 世紀の今はまずいでしょう。そういう世の中の流れは成熟した社会では悪いことではないでしょう”。対人間と集団内外で正直に認め合う勇気が許し・赦しが双方向にむく姿勢こそ成熟したあり方であり一人ひとりが生かされる人類共通の大切な価値観でもある。これら大元の倫理観は聖書に源を発する。聖書の中の“白く塗った墓”表現やパリサイ人への叱責について見られるように義なる神が一番嫌うのは偽善。聖書は、人を社会意識・社会心理といった目に見えない社会の風潮が知らないうちに巧妙に操られそして思い込まされてしまう存在(killer)のことを「空中の権をもつ君」(エペソ人の手紙 2:2、口語訳)と表現している。モファット英訳は“under the sway of the prince of the air”。社会生活において、約束を反故にしたり、信頼を裏切り、更にはそれらに対して、言い訳や、ごまかし、合理化、正当化等々で開き直りする意識行動は、まさに空中の権を持つ君がほくそ笑む思ふ壺といえよう。神の前に正直に全部曝け出したディシエンダーは“Honesty is the best policy.”正直さの大切さ(fundamental value)を自分に言い聞かせ、確認し、紆余曲折のゆれも含めて再確認した生涯であったと再度付記しておきたい。

- (43) 聖書の翻訳の歴史は四国学院大学浜島敏名誉教授著の同大研究叢書 No. 3『聖書翻訳の歴史:英訳聖書を中心に』2003 年、創元社 pp. 188-200 で次の見解を述べている。「ただ歴史的な聖書翻訳には議論もあった。グーテンベルグの画期的な印刷技術により、高価ではあったが聖書の普及の走りにはじまり、特筆に値するのは、ジュネーブ聖書(1560 年)である。章(chapter)は以前の世紀区分であったが、ここで聖書語句に細分化された節(verse)が付けられ、照合が迅速になった。翻訳そのものはプロテスタント関係者による訳であり、カルビン主義の影響が濃厚な響き(ピューリタンは歓迎)があったため、非難(“name-calling”)も受けた。弁明のためカトリック界からは大司教聖書(1568 年)の出版があった。更にキング・ジェームズ(KJ)の欽定訳聖書(1611 年)へ続き 20 世紀初頭まで文学や言語に多大の影響を与えた。KJ は一世を風靡した英語の古典的聖書であった。このころからアメリカで標準訳(RV、RSV)関係も登場し、改訂版や派生版の翻訳もなされたが概ねスタンダードの翻訳であった」(以上の要約は筆者)」。英語圏では歴史的に多くの聖書が翻訳されているが、その相違という特色、共通という特色や類似という特色がある。このことについて浜島敏は同著で次のように結論づけている。「私は教派の存在を否定してはいない。聖書を読み、真理を探究する中で生まれてきた教派にはそれなりの意味があり、それを覆い隠そうとする偽善よりも良いと言える。(中略)が一方、何が何でもくつつきさえすれば良いかのように、大切な部分を犠牲にして統一だけを進めている運動もある。(中略)

結局それはそれとして聖書に示された主イエス・キリストの十字架の愛に尽きるのではないか。」とマルティン・ルター・キングの夢を共に語りたいと結んでいる(pp. 340-341)。

筆者も方向を共有し、これらを可能にする翻訳学者の良心と良識を期待するとともに、教派や翻訳の個性を超え、基本的なところで人は救いに至る事実と現実はこれまた感謝すべき事実と現実でもあると強調したい。絶対者の前では「神の知恵により、この世は自分の知恵によって神を知ることがありませんでした。それゆえ神は、宣教のことばの愚かさ(下線は筆者)を通して、信じる者を救うことにされたのです」(コリント人への手紙 第一 1:21)。人生の一コマ一コマでいいものを素直に評価する開放的な姿勢(open-mindedness)は大切であるが、文学・神学や言語・歴史等では人は救われない。神の叡智の絶対次元、絶対次元の前の「愚かさ」についてモファット英訳聖書は日常語の“まったくもって:sheer”を付けた(epithet)言い回しで「sheer folly」と対比を心憎いほど明示している。ここで問題になることは原典とモファット英訳との関係である。原典を「text」と位置付け、該当箇所¹の文脈上(context)に特別な意味や含意があったり、感情的色彩を帯びている場合はそれらを編み出す(contexture)工夫がいる。人の知識と神の叡智の決定的な対比(anthesis)においては、人間の相対的な知は神の絶対智から見れば「sheer」といった形容辞(epithet)が相応しい。しかも前註の[sure]と同様、口語表現ですぐ隣にその人がいるようなモファット流の言い表し方はうれしいもの。同一線上にもう一つあった。英語の「utter」がそれ。

(44) 文体と文脈を離れて、英語聖書自体の他領域との関係については、多大の影響があることは論を待たない。補足の書誌情報の一例になるが、四人の教授(東京大 寺澤芳雄、立教大 舟戸英夫、東京医科歯科大 早乙女忠、明治学院大 都留信夫)による『英語の聖書』は文学作品等への影響などを含めて聖書と諸学問の関連性に焦点を当てた学際(interdisciplinary)的著作である。

(45) モファットの章立ての変更は再考すれば変更というよりは調整と考えた方が良いのかもしれない。註(43)にある聖書の節についての浜島敏の解説に加えて、「章」について筆者による論述の要点を述べる。聖書の記事の流れに従って適切なところで区切りがあれば読み易い。が、それは聖書そのものの本来の仕分けではない。番号を入れた章は現在定着しているとはいえ、人間による歴史的、社会的なものである。聖書の各章付けは1227年 Stephen Langton によるもので年月を経て1382年にウィクリフ英語聖書に採用されたことが聖書翻訳史の中に落ち着いている。敢えてモファット博士による章・節に関して評価を加えるとすれば、かつての人為的な章立を尊重し、章名はそのまま残し、読みやすく章順序(inter-paragraphic development)を変えたまでといえよう。人間の言語認識の観点からモファットは聖書の文言に読む愉しさと理解する喜びという名の「質保証」を与えた牧師だったのだ。

(46) 人にとって種々の翻訳に出会い、熟読したり、あるいは複数の翻訳を相互照合することで聖書の真意が浮かび上がる過程は素晴らしいこと。最終的に、ヘブル語・ギリシャ語・アラム語の原典に対して有学(Not illiteracy)はもっと素晴らしい。何語であれ言語とはいいいお付き合いで(good company)ありたい。言葉の限界は世界の限界だから。

このお付き合いに言葉の諸相(phase)の一つとして譬え(parable)に焦点を当ててみる。言葉の理解を分かり易く深めるため、機知の旧情報から目指す意味に転移(transference)させる修辞法がある。日常会話によく出てくる「人生は旅のようである」は類似の観点から人生から旅に譬えたこの手法で人は納得する。聖書の中に多くイエスキリストの語録として譬えは登場するのでその文言は記載しないが、「ように、ような」で例示される事柄は分かり易い(マタイの福音書 13章の種まき等)。修辞法的に纏めれば、これは直喩・明喩(simile)である。思索がいるのが隠喩・暗喩(metaphor)。旅談議でいえば「人生は旅である」が典型例。言葉の厳密な意味(true sense of the word)においては人生イコール旅ではないが、直接「旅」の属性を「人生」に写した表現形式。人生の本質は旅の中にもある本質的要素が共有され、了解される。これは本論文の最重要語句の一つである「方法論的拘束」である。より高度、より抽象度の高いもの(entity)を表現する場合にコミュニケーションの道具として人口に膾炙している「旅」を使ったまでである。

具体的に譬える事物・文物がある言語学の難問(aporia)は聖書は神の存在をどのように言葉で定義するか、存在論の問題である。言葉は意味を表すと同時に、対象に制約を加える機能がある。神を言葉で定義した途端に、その意味領域に(semantic domain)に絶対者である神に制限を加え、縮小され、制約という輪郭の中に閉じ込めてしまうので言語的にも、論理的にも行き詰ってしまう(oxymoron)。本来定義不能であるが、伝達のためには材料という相対的な何かを使って、その何かは決して神ではないが……。でもいわざるを得ない。こんな中でチャレンジするのが人間の言語学。ただ聖書の中で高評価の言葉を使った効用も神の絶大次元から見れば色あせて見える。「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです」(コリント人への手紙 第一 1:25)。

言語ジレンマの只中で「ことばは神であった(ヨハネの福音書 1:1)」と聖書は宣言する。登場するのが周知のもの、近似のものを惜しげもなく断定するのが暗喩であり、隠喩のメタファー(metaphoric management)。しかし、苦渋の伝達方法は最高道具である言語そのものを直接かつ直截的に使った「言葉の言葉」(metalinguage)でもある。メタ言語を使って断言したもう一つの表現が旧約聖書にある。口語訳聖書は「わたしは有って有る者」(出エジプト 3:14)。これは KJ 聖書の「I AM THAT I AM」とよく似ている。モファット訳は「I will be what I will be」、Amplified Bible は「I AM WHO I AM and WHAT I AM, and I WILL BE WHAT I WILL BE」と。文学の世界では作家の苦しみは付きものであるが、最高位としての神の存在は限界のある人間の言葉を使っている言語化(音声化も)はこんな離れ業でしか表せない。しかし「有って有るもの」表現フレーズは印象に残る言い方。

こんな状況の下で、最後の最後の本質的な決定論は神が人間の歴史に介入したこと「御子は神の栄光の輝き、また神の本質(モファット訳は God's own character)の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます」(へブル人への手紙 1:3a)。神の定義や神の属性の言語的説明や努力を超えて、聖書は人となったイエス・キリストが神と宣言する。旧約聖書もこの一点を指し示す長い歴史の書。そして神についてのすべての認識はこのイエス・キリスト経由にと、イエス・キリストを軸に置くのが聖書の真実。以下は社会や歴史との応用例である。

神の存在や属性といった第一義的な内容の展開ではなく、この世に具体的また即物的に時間的(歴史)にまた場所的(地理)に“あってあるもの”に対しても「ヘブライズム」はこのようにポジティブに活用する進取の精神がある。それらは当時の政治形態、社会的階層、人間心理、人間行動等々であるが、これらの材料を道具として使い、より高次のものを表す知恵がある。具体的に存在するもの、周りの使えるもの(usable)を使って(spatial-temporal entity)本質を粘り強く目指す。ギリシャ思想や哲学のヘレニズムとは違いヘブライズムのユダヤ人のめげない強さは衆目の一致するところ。「フツバ」と発せられるイエディッシュ語のキーワードがある。これは、例えば両親を殺してしまった少年が、裁判所の陪審員に向かって“皆さん僕は親のいない可哀想な孤児です”といった言動。過ぎ去ったことは過ぎ去ったことなので、拘泥しない、過去を振り切り新しい未来の展開に切り替え生きていく上での大切な価値観とあるユダヤ系アメリカ人から説明を受けた。この知日派のユダヤ系の教授であり博士は、この行為は日本では厚かましきとして一番嫌われることでしょう、と日本人メンタリティーを良く知っている。未来への転換という社会的価値観を使って肯定的に未来に向かうこのパラダイムでユダヤ人は生き延びてきた、と生存の歴史を付け加える。親がアウシュビッツで殺された悲劇を持つこの大学人、そして博士(Ph.D.)。

こんな激しさはないが、現在世界に伝播している「クリスマス」もあるものを使って、キリストの歳時記の一つに貢献した事柄。クリスマスの日時の確定は、イエス・キリストの降誕そのものに比べれば第二義的(peripheral)といった註(32)の周辺情報。当時ローマやその周りにあった農業祭や他の習俗としての催事を使ってキリストの生誕としたまで(use→to achieve)。繰り返せば、すでに周りにあるものを使ってあること(通常高次の事柄や本質的な事柄)を達成する方法。聖書には日時は一切触れていないし第一次的な関心事ではない。註(31)のオッカムの髭剃り方式の焦点中心主義とも言えよう。歴史上の事柄を使ったことは、「方法論的拘束」である。ただ身近な何かを使うと、その延長が本体と思われがちであるし、神について不可知論や無神論的風潮の強いところ(locale)では、この方が俗受けする“合理化”の発想になり、社会に広がってしまう現実がある。クリスマスに纏わる日本のもう一つの社会風潮がある。エピファニー(ギリシャ語から英語の appearance と合致させ epiphany)であり、顕現節、公現節ともいう。これは東方の博士達が、真に礼拝するお方としてのイエスを求めて旅を続け、先ず王様のところに行く。そこで「見つけたら知らせしてくれ。私も行って拝むから」といって送り出され星に導かれ(guiding star)12日目に幼子イエスに会い礼拝を捧げた出会いの出来事。イエスを拝した後、王による殺害計画を見抜いた博士らは別のルートで自分たちの国に帰る(マタイの福音書 2:1-2)。端的にいえば、博士達はリサーチを重ね、最高の価値を目指し、フィールドワークの旅をし、身近な行政とも関わるが、洞察力を働かせ問題を見抜き、権力に迎合して自己栄達(self-aggrandizement)に走らず、真理・真実を一筋に求める学者本来のアイデンティティーの明確な記録。真剣に探求し、本質を見出すことをエピファニー(博士論文に最終的に本質を把握した意で「エピファニー」をキーワードに使う人もいる。途中の段階やローレベルで使うとミスマッチで失笑をかう)という。聖書全編を通して、世の知者、哲学者、権力者達は陥りがち、あるいはすでに陥っている負の側面の故に警告・叱責を受けているが、聖書の記録の中で何の咎めを受けていないのは「博士」のみ。こ

の博士の来訪の聖書記事により、本来、クリスマスの祝いの時期(Yule Tide)は1月6日までの12日間。諸外国では、通常、1月6日の後にくる日曜日(顕現主日)までがクリスマス・シーズンでクリスマス・ツリーやリースなどが飾られている(12日目の夜という期間について、*Twelfth Night*という題名でシェイクスピアは作品を書いた、クリスマスとは関係ない内容であるが)。日本では12月25日でクリスマスが見事に終了し、即年末・年始の商業活動に特化したシーズンが到来。

「方法と本質」から出発し、「文体と思想」という形でモファット英訳聖書を中心に論考してきたが、社会の日常との関連性も含め、モファット自身の博識と博学を形成してきた高次元の洞察性と明晰性の訓練課程(something doctorate)において、「手段と本体」の識別による関係、「価値観の優先順位」、「思考の展開」、「社会思想や理論操作」、特に深層面を支配している「暗黙の前提」(tacit assumption)の諸課題といった“学的重荷”(burden)の過酷な処理能力が常時要求される過程をやり抜いた牧師、博士、神学者。この厳格性の故、余計なものが付いてこない。これ故、本来の姿が風景としても浮かび上がってくる。これら相応しい背景を使って独力で英訳したのがモファット博士訳聖書。そしてこの私訳を独力で読んだのが後の宣教師 Jacob DeShazer。神が使ったのはこんな二人の歴史であった。

和文参考文献

- アウグスティヌス、アウレリウス (1976)『告白』(服部栄次郎訳、原著(*Les Confessiones*)は 397-400 年 発行) 岩波書店。
- 青木保 (1988)『文化の否定性』中央公論社。
- 井上俊、上野千鶴子他(編集)(1997)『権力と支配の社会学』岩波講座第 16 巻 岩波書店。
- 井上俊、船津衛 (2005)『自己と他者の社会学』有斐閣。
- 内田和彦 (2018)『『新改訳 2017』はどうか変わったのか』名古屋聖書セミナーレジメ
- 内田和彦、万代栄嗣(2000)『21世紀への対話:福音派とペンテコステ・カルスマ派の明日』いのちのことば社。福音派内田牧師と聖霊派万代牧師の率直な牧師間対談が 20 世紀最後になって 3 度なされ、2000 年 6 月に書籍化。
- 生出寿 (1996)『真珠湾攻撃隊総隊長 淵田美津雄の戦争と平和』徳間文庫。
- 太田好信 (1998)『トランスポジションの思想—文化人類学の再想像—』世界思想社。
- 甲斐克彦 (2008)『真珠湾のサムライ 淵田美津雄—伝道者となったパールハーバー攻撃隊長の生涯』光人社 NF 文庫。
- 加瀬豊司(1992)「日米比較文化論に於ける方法論と方向性:動域パラダイムとしての異文化間コミュニケーション」『四国学院大学論集』第 79 号 (3 月 18 日)。
- 加瀬豊司 (2007) *Nisei Samurai in Washington, D.C.: Culture and Agency in Three Japanese American Lives* (邦題 文化変容と人間行動—ワシントンの日系二世ライフヒストリーを通して) 四国学院大学研究双書 No. 5 学術出版会。
- 加瀬豊司 (2006)“淵田とディシプラー”『チャペルの招き』No. 314。
- 加瀬豊司 (2011) “アメリカの大学院教育”『フルブライト名古屋アソシエーション講演記録 No. 21』3-15。
- 加瀬豊司 (2012)『オーラル・ヒストリーの著者性(authorship)をめぐって(Authorship in Oral History): Researcher's Perspective Constitutes an Unwitting Gaze』日本オーラル・ヒストリー学会 第 10 回大会(椋山女学園大学) 自由報告 第 3 回分科会。
- 加瀬豊司 (2015)「原案・監修に関わって」『ていんさぐの花』上演実行委員会、名古屋市文化振興事業団主催演劇冊子)。
- 加瀬豊司 (2018)「Essay フルブライト顛末記—悲喜こもごもの自分史の再想像—」『*The Fulbrighter in Nagoya* No. 27』。

- 加瀬豊司(2019)「原案・原資料に関わって」『赦し』上演実行委員会主催(芸術文化振興基金助成事業演劇冊子)。
- 加瀬豊司(2021)「“damnant quod non intelligunt”: 理解できないものを啜う」日本国際ギデオン協会名古屋東支部 牧師招待 40 周年記念愛餐会奨励記録。
- 栗栖博美書(1982)『ハドソン・テラー』教会新報社。
- 川江美那子(2008)『願い歌』株式会社ドリームミュージック。「嘘」の多層な側面(phase)を言語化して機微な心理を作詩。CD『川江美那子』のCD音盤化。
- 倉田耕一(2018)『アメリカ本土を爆撃した男』株式会社毎日ワズ。
- 高坂健治、厚東洋輔(1998)『講座社会学—理論と方法—』東京大学出版会。
- 桜井厚(2000)『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方—』せりか書房。
- 桜井厚、小林多寿子(2005)『ライフストーリー・インタビュー—質的研究入門—』せりか書房。
- 田中秀之(2021)「説教: 罪の赦し」『日本同盟基督教団 愛知泉キリスト教会 10/24/2021 週報』。
- 寺澤芳雄(1965)他『英語の聖書』富山房。四教授(東京大寺澤芳雄、立教大舟戸英夫、東京医科歯科大早乙女忠、明治学院大都留信夫による。順に「英語聖書の文体と修辞」、「英語聖書の歴史」、「聖書から見た近代詩」、「聖書とイギリス小説」を論じた聖書その他領域への展開。
- 中田整一(2010)『真珠湾攻撃総隊長の回想—淵田美津雄自叙伝』講談社。
- 浜島敏(2003)『聖書翻訳の歴史: 英訳聖書を中心に』四国学院大学双書 創元社。
- ベンドルフ、アン・(1959) *Songs of Victory* (勝利の歌 I) 日本アライアンス教団・いのちのこことば社。
- 三浦裕次(2020) 磔刑下の人体の内臓についての愛知医科大学教授、三浦医師へのインタビュー記録。
- 森本あんり(2015)『反知性主義: アメリカが生んだ「熱病」の正体』新潮社。
- 箕浦康子(編)(1999)『フィールドワークの技法と実際—マイクロ・エスノグラフィー入門』ミネルヴァ書房。
- ロバート エマーソン、レイチェル フレッツ、リンダ ショウ(1998)『方法としてのフィールドノート—現地取材から物語作成まで』(佐藤郁哉・好井裕明・山田富秋訳、原著は1995年発行)新曜社。

英文参考文献

- Adler Patricia A. and Peter Adler (1987) *Membership Roles in Field Research*, Newbury Park, CA: Sage Publishers.
- Agger, Ben (1998) *Critical Social Theories*, Boulder, UT: Westview Press.
- Agar, Michael H. (1996) *The Professional Stranger*, San Diego: Academic Press.

- Atkinson, Paul, and Amanda Coffey et al. (2001) *Handbook of Ethnography*, Thousand Oaks, CA: Sage Publishers.
- Benge, Janet & Geoff (2009) *Jacob DeShazer: Forgive Your Enemies*, Seattle: Ywam Publishing.
- Berger, Peter L. and Thomas Luckmann (1966) *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*, NY: Anchor Books.
- Bonnell Victoria E. and Lynn Hunt et al. (1999) *Beyond the Cultural Turn: New Directions in the Study of Society and Culture*, Berkeley: University of California Press.
- Crane, Diana (1994) *The Sociology of Culture: Emerging Theoretical Perspectives*, Cambridge: Blackwell.
- Creswell, John W. (1994) *Research Design: Qualitative and Quantitative Approaches*, Thousand Oaks, CA: Sage Publishers.
- Delmont, Sara and Paul Atkins et al. *Supervising the PH.D.: A Guide to Success*, Philadelphia: The Society for Research into Higher Education and Open University Press.
- Denzin, Norman K. and Yvonna S. Lincoln (1994) *Handbook of Qualitative Research*, Thousand Oaks, CA: Sage Publishers.
- Finkelstein, Barbara (1996) *Educating Strangers: A Comparison of Cultural Education Policies and Practices in Japan and the U.S.*, Osaka, Japan (Osaka University of Socialization and Multicultural Education Policies and Practices).
- Foucault, Michel (1972) *The Archaeology of Knowledge and Discourse on Language* (trans. A.M. Sheridan Smith, originally published in 1969), NY: Tavistock Publications.
- Frisch, Michael (1990) *A Shared Authority: Essays on the Craft and Meaning of Oral and Public History*, Albany: State University of New York Press.
- Geertz, Clifford (1993) *The Interpretation of Cultures*, NY: Basic Books.
- Goldstein, Donald M. and Carol Aiko DeShazer Dixon (1973) *Return of the Raider: A Doolittle Raider's Story of War & Forgiveness*, Florida: Creation House.
- Gudykunst, William B. (1986) *Intergroup Communication*, Baltimore, MA: Edward Arnold Publishers.
- Kelly, Gordon (1974) "The Social Construction of Reality: Implications for Future Directions in American Studies," *Prospect*, Vol. 8.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*, Chicago: The University of Chicago.
- Maanen, John Van (1988) *Tales of the Field: On Writing Ethnography*, Chicago: The University of Chicago.

- Mishler, Elliot G. (1986) *Research Interviewing: Context and Narrative*, Cambridge: Harvard University Press.
- Mote, Jr., C.D. (2005) *University of Maryland Commencement*, p. 12.
- Murphey, Murray (1979) "The Place of Beliefs in Modern Culture," *New Direction in American Intellectual History*, Baltimore, MA: John Hopkins University Press.
- Scollon, Ron and Suzanne Wong Scollon (1995) *Intercultural Communication: A Discourse Approach*, Malden, Mass.: Blackwell Publishers.
- Spradley, James P. (1980) *Participant Observation*, Florida: Holt, Rinehart and Winston.
- Spradley, James P. (1979) *The Ethnographic Interview*, Florida: Holt, Rinehart and Winston.
- Watson, C. Hoyt (1950) *DeShazer: The Doolittle Raider Who Turned Missionary*, Indiana: The Light and Life Press.
- West, Richard and Lynn H. Turner (2000) *Introducing Communication Theory: Analysis and Application*, Mountain View, CA: Mayfield Publishing Company.
- Yin, Robert K. (1994) *Case Study Research: Design and Methods*, Thousand Oaks, CA: Sage Publishers.

そのⅢ (脚本としての Script)

贖罪

— 我が罪は赦されるのか—

贖罪とはキリスト教用語。神の子キリストが十字架にかかって身代わりの死を遂げることによって、人類の罪を償い、救いをもたらす。その教義の中心は本来「人の罪」の結果自分たちが滅ぶべき存在であるにも関わらずその罪をキリストが代わってあがなうのが聖書の「使信」。この贖罪によって本来「義なる神」から人の赦しが与えられる。その結果、人は罪から解放され、新しいいのちに生きる存在になること。

脚本 山岸千代栄

出演

ディシェンザー

パパ

ママ

捕虜米兵 メーダー

捕虜米兵 ロバート (ボブ)

日本軍人数名

淵田美津雄 (海軍中佐 真珠湾攻撃総指揮官)

妻

娘 美彌子 (幼少期)

淵田の娘 美彌子 (成人)

東山 (少年時代)

東山 父を進駐軍のジープによる交通事故で亡くす。

青田 元看守

青田の息子

盛田昇二

妻 愛子

娘 良子

盛田の母

加藤

笹田

小池

堂本

小池の父

隣人 井上

井上の妻

東京裁判裁判長 ウェップ

判事

元日本軍人 アメリカで捕虜となっていた。

1 ドゥーリトル 1942年4月1日。
2
3 米軍上官 作戦名は リベンジ。
4 志願兵の諸君 我々はいち早く報復攻撃を行う。
5 作戦の指示に従い卑怯なジャップに思い知らせてやろう。
6 指揮官 それにしてももっと大きな爆撃機は飛ばせないものか。
7 だったら陸軍機B25を使ってみるか。
8 空母の滑走路の長さが足りない。
9 訓練生 指揮官！1フィートの余裕しかありません。
10 ナレーター 繰り返し、繰り返し短距離での発進訓練は続いたのです。
11 発進訓練のみとにかくぎりぎりのラインで訓練は続く。
12 無謀ともいうべき訓練によってついに短距離の発進が可能になった。
13 指揮官 よくやった。これで発信できるぞ！
14 着艦はできない。
15 訓練生 発進したら帰れないということですか。
16 指揮官 その通り。
17 ナレーター いよいよ作戦は決行された。
18 空母には十六機の飛行機が積み込まれ、二隻の巡洋艦、二隻の給油艦
19 そして六隻の駆逐艦だ。
20
21 4月5日イースターの日。
22
23 隊員① デイシェーザーは？
24 隊員② イースターの集会に出ない気かな。
25 彼はドゥーリトルのお気に入りじゃないか。
26 ジェイクはきっと勇敢に戦うだろうと褒めてたよ。
27 隊員③ 具体的な作戦を聞かなくていいのか？
28 隊員① この先どこへ行くのか、詳細を聞くチャンスはないのに。
29 ジェイク ・ ・ ・ ・
30 隊員① デイシェーザー、我々のミッションはシークレット。
31 特別なミッションを遂行するのが使命だ！
32 これは卑怯な攻撃を行った者たちへの勇気のある行動！
33 そうは、思わないか。
34 隊員② 神様はわたしたちを見ていてくださる。信じて行動しよう！
35 ジェイク そうだ。思い知らせてやる。
36 指揮官 これはリベンジミッション。攻撃目標は日本！
37 爆弾には日本から送られた勲章にリボンをつけて送り返してやろう。
38 隊員たち Oh! Sure.
39 ナレーター やられたら、やり返す。アメリカは正義に燃えて作戦を決行した。

40 爆弾に日本から送られた勲章を付けて送り返すとは、日本軍には考えら
41 れない余裕の行動だ。

42 指揮官 ひどい嵐だな。4500海里まであとどれくらいだ。

43 隊員④ ただいま6500海里 あと・・・。

44 大変です。日本の小さな船に発見されました。

45 指揮官 この嵐の中、こんなところに。標的は小さな漁船だ、撃沈させろ。
46 発見されたからには、やがて日本軍が来る。

47 引き返すか・・・いやとにかく決行だ。

48 隊員② 風防ガラスが割れている。これじゃあ燃料の消耗が激しくなるぞ。

49 隊員③ なんか詰めておけばいいさ 行くぞ！

50 ジェイク いまに見ている、ジャップめ！ 必ず復讐してやる！
51 日本人を皆殺しにしてやるんだ！

52 隊員① 発進！

53

54 嵐の中 轟音とともに 飛び立つ。

55

56 隊員① 現在名古屋上空、爆弾投下。

57 ジェイク 我がアメリカに行った卑劣な行いを思い知らせてやる。

58 ナレーター この日 熱田区 東区の軍需工場を中心に爆弾が投下された。
59 名古屋初めての空襲。民間人を標的とした空襲の始まりである。

60 ジェイク 綿密な地図の確認、我々にはこの地域の地理は頭に入っていた。
61 三百発の焼夷弾投下 石油タンク爆破！ ゼロ戦の工場と目された
62 工場群 爆破！上空を旋回して小さな湾に出た。

63

64 バリバリバリバリ。

65

66 独白 撃たれれば打ち返したくなる。わがアメリカに対する卑劣な攻撃の報
67 いを日本に思い知らせてやる。攻撃目標の爆撃を果たした高揚で攻撃
68 を止められなくなった。相手は誰でもよかったのだ。

69

70 青空の下 子どもたちが遊ぶ。

71

72 子ども1 わーい！飛行機！すごーい（空を見上げる）

73 子ども2 おーい。飛行機！飛行機！

74 子ども3 兵隊さん、ありがとう。（手を振りながら走る）

75 愛子 違う、違う、これは・・・。

76

77 閃光とパリパリパリという機銃掃射の音、愛子の悲鳴と地響き暗黒の世界に。

78

79 隊員① ジェイクが、石油タンクに爆弾を落とした。

80 ジェイク 工場群に焼夷弾をばらまくぞ！低空のまま、湾に出たら漁船の群れか。

81 のんきな奴らだな。船の甲板からは、手を振っているじゃないか。

82 隊員② 日本軍の飛行機と間違えているのさ。

83 ジェイク おい！ 猟師、日本軍じゃないぞ、機銃掃射 発射！

84 隊員① 驚いて逃げ惑っているぞ。

85 ジェイク 彼らを殺してやりたい！

86 隊員① 燃料の消耗が激しい。ほかの攻撃機よりも速度が遅い。

87 隊員② 風防ガラスの割れがひどいからじゃないのか。

88 隊員① 嵐になりそうだ。中国内陸部まで飛べそうにないかも・・・。

89 ジェイク 悔しい！まだ撃ち殺せるのに。

90

91 **嵐はさらに激しさを増した。**

92

93 隊員① 撃ちすぎだ。やりすぎだよ。燃料が切れるぞ。

94 隊員② このままでは墜落する！ 内陸には程遠いが不時着する。

95 隊員③ 落下傘で飛び降りる準備をしろ。

96 ジェイク 真っ暗で何も見えない。

97 隊員① 落下！早くしろ！

98 隊員② どこかの木に引っかかって死ぬか。炎上して墜落するかだ。

99 独白 死ぬ？ 自分が？

100 今まで握っていた機関銃。

101 狙った先の命を私はまるでゲームのように握っていたのだ。

102 ところがどうだ。今度は自分の死を覚悟しろということか。

103 戦争はこういうものなのか。

104

105 母ハルダの声 ジェイクが落ちていく夢を見ました。

106 どうかジェイクをお助けください。

107

108 ジェイク 強く胸を打った。石か？墓だ。ろっ骨を折ったかと思ったが、ここに

109 いるという合図の発砲をする。静かだ。

110 この建物の中で休んで明日の朝、西に向かおう。

111

112 **夜明けになって。**

113

114 ジェイク 西に向かえば助かるはずだ。

115 信じて歩くしかない。

116

117 **何人かの人と出会うが、こそこそ隠れてしまう。**

118
119 ジェイク ひとだ。東洋人は厄介だな。中国人なのか、日本人なのか？
120 まったくわからないが、誰かを呼んでくるようだ。
121 よかった。味方だな。ここは日本軍の占領地ではないようだ。
122 日本兵 Welcome. Welcome. No need. Give us your guns.
123 ジェイク 下手な英語だ。しかし丁寧な言い方をする愛想のいい中国人だな。
124 ん？
125
126 たちまち銃を抱えた兵士たちに包囲され、手を挙げているジェイクを跪かせた。
127 日本軍の基地の一室。後ろ手に縛られたジェイクの姿、取り囲む日本兵と通訳。
128
129 兵士 Your name?
130 独白 ジュネーブ条約に基づき、名前と階級を話したが、他のことは一切しゃべらないと決めていた。
131
132 日本兵 おい！ きさま！馬鹿にしているのか！
133 我々は鬼畜米英には負けない。日本は必ず勝つ。
134 我々は最後の一兵まで命を懸けて天皇陛下のために戦うのだ。
135 独白 日本兵はよく「我々」という。個人の意見は尊重されない。
136 「私は」と個人的な意見は述べてはいけないらしい。
137 天皇は人ではないのか・・・日本国民とは、そういうものなのか。
138 東京から長崎、そして上海へ。取り調べと移送を繰り返されて裁判で死刑が確定したと思ったら、神とあがめる天皇の恩赦を与えてやるから終身刑だという。そもそも戦争に死刑とはなんだ。奴らは無知で捕虜の扱い方も知らないのか。このまま無知で野蛮な日本人に命をゆだねねばならないのか。憎しみと憎悪が再び湧き上がる。
139
140
141
142
143
144 声 「人を裁けるのは法と神だけだ！」（銃声）
145
146 独白 銃声とともにこの言葉が聞こえたような気がした。
147 捕虜となった仲間の処刑が行われたのだ。仲間が殺されたというのに、自分は殺されずに済んだのだと喜んでいるのだ。ほんの少し前、機関銃で無差別に殺戮をしようとしていたのは私。卑怯な日本軍の攻撃にたいしてリベンジに燃えていた私には「捕虜」だの「処刑」などという立場になる覚悟などなかった。
148
149
150
151
152
153 目隠しをされて歩かされるアメリカ人兵士たち。
154
155 ニュースの音声 これが、非戦闘員たるいたいけな国民学校の生徒を襲撃したアメリカ兵
156 であります。民間人に爆撃を加えた憎むべき鬼畜米兵であります。

157 ナレーター のちにこのニュース映像は地方紙によって発表され、母の目にとまること
158 になるのですが、独房にいるジェイクは知る由もありませんでした。
159 独白 中国で不時着した場所が日本軍の占領地だったのだ。
160 80名の乗組員の内、8名がとらえられ、そのうち3名は国民学校の生徒
161 を爆撃したという罪で射殺され、5名が終身刑となって独房に入れら
162 れたのだ。そんなのうそだ、でっちあげじゃないか。
163 日本兵 貴様ら、終身刑とは幸せもんだな。あの裁判長は緩すぎる。
164 死刑で当然の貴様ら鬼畜に対して、恐れ多くも！天皇陛下の温情に感謝
165 するように！
166 独白 彼らは「天皇」という言葉を口にすると、「恐れ多くも」と叫び「恐れ
167 多くも」と聞くと日本兵たちは「最上級の気を付け」をする。
168 不思議な民族。誰のために闘っているのだ。たった一人の個人のためな
169 のか。我々のような正義を持ち合わせていないらしい。
170 日本人は何もわかっていないのだ。
171 私は「爆撃手」。民間人を撃ったのだぞ。まったく愚かな民族だ。
172
173 **ギー バタンというドアの閉まる音。**
174
175 独白 問答無用で殺されるより、生きていられることにホッとした。
176 しかし、生きてることがこんなに苦しい捕虜生活は類を見ない。
177 毎日理由もなく釘の刺さった「こん棒」で叩かれ、狭い部屋に詰め込ま
178 れて、1日2リットルの水を8人で分け合うのだ。
179 ナレーター どのような状況にあってもジェイクは反抗的で看守の命令に屈しなかつ
180 た。南京の気候は厳しく、冬は極寒と渴きに苦しめられ、夏35度を越
181 え、灼熱の地獄だった。しばらくして、処刑を免れた5人は独房に入れ
182 られた。暗くじめじめした部屋にはネズミだけが自由を謳歌していた。
183 ジェイク (ネズミに) ここには食べられるものはないよ。
184 これか・・・75か所のおできの痕。旨そうに腫れあがってるもんな。
185 ボクを食べる気？ ハハハ。
186 ロバート おい、ジェイク聞こえるか。
187 ジェイク ……(何か聞こえるが)
188 ロバート トイレだよ。汚物層の中だ、頭を入れてみる。
189
190 **おそるおそる覗きこむジェイク。**
191
192 ジェイク ボブか。驚いたなあ～。トイレが繋がっているとはな。
193 これなら看守に聞かれないな。おまえは大丈夫か。
194 ロバート ああ、地面に座らせて膝の間に鉄棒を挟まれ、上から日本兵が飛び乗る
195 んだ。足が砕けるかと思ったよ。

196 ジェイク 人として日本人は最低の部類に属する。
197 ロバート これほど荒んだ環境に遭遇したのは人生で初めてだ。
198 ジェイク これから看守の目を盗んで独房の汚物層に頭を突っ込んで、話をするの
199 が、唯一の人間らしい時間となりそうだ。どこまで耐えられるだろう。
200 ロバート 何時間も知らないことを何度も詰問されて、そして拷問が続くまさに地
201 獄だ。日本人は狂っている。いきなり射殺された仲間を思えば命があっ
202 ただけでもよかったと思うが、いずれ鬨り殺されるだろうな。
203 ジェイク 地獄か・・・我々は地獄の蝙蝠に乗ってきたんだからな。召されて神さ
204 まの下に帰った仲間がうらやましいとさえ思う。アメリカは勝つよ。
205 でも、捕虜の我々はそのあとどうなると思う？
206 ロバート 奴らは我々を殺すだろうな。そもそも捕虜の扱いを知らないのだから。
207 今日だってスープにミミズとわずかな米が浮いているだけだよ。
208 こんなものを食べさせるなんて。まったく野蛮だ。
209 ジェイク それでも食べないと持たないよ。
210 ああ、ママのライススープを食べておけばよかったな。
211 ロバート シッ！誰か来た。

212

213 別の独房を見回る二人の看守。

214

215 看守 何をしている。おい。寝ているのか。
216 看守① 捕虜の一人が赤痢になり死亡しました。
217 上官 死なせるのはまずい。生かさず殺さずが、鉄則だ。なんとかしろ！
218 看守① なんとかとおっしゃられましても・・・
219 上官 上官の命令に背くか！
220 看守① 申し訳ありません。いかがいたしましょう。
221 上官 あとから、文句を言われぬように、アメリカ式の葬儀をするように。
222 看守② はい！・・・とはいってもアメリカ式の葬式なんか、知らんぞ。
223
224 ジェイク メーダー。下痢が続いていたのに、何もしてくれなかったのか。
225 ここは薬も医師も不足しているのか。
226 看守 おい！これがあつたら葬式は出せるか。お経が要るんだろ。
227 ジェイク これは・・・聖書。どこでこれを
228 看守 できるのか。よくわからんが、そっちの宗教じゃ葬式の必需品だろう。
229 ジェイク 聖書・・・メーダー・・・。

230

231 すでに地獄に住んでいる。

232

233 独白 あのメーダーが死んだ。あれほど信仰の深い彼が赤痢になって死んだの
234 だ。祖国に帰れないまま、この暗い独房で苦しみながら死んだのだ。

235 死を恐れず、ケガをした戦友を抱きかかえて逃げた英雄メーダー……。

236 「神様の喜んでくださることをするだけさ」とほほ笑んだ彼。

237 これが、神の救いなのか。メーダー。君は今、幸せなのか。

238 いま、私が手にしているのは聖書だ。メーダーの信じる聖書の世界。

239 ナレーター アメリカから遠く離れた中国の地で看守が手に入れたのは、聖書を知らない人々にも受け入れやすい言葉で書かれていたのかもしれない。

240 久しぶりに英文の文字に再会した喜び。人間らしい営み。

241 ディシェーザーは聖書を読み始めたのでした。

242

243 ロバート おい……おい。

244 (ジェイクはトイレの汚物層に頭を突っ込む。)

245 ロバート 驚いたな。夢かと思ったよ。

246 ジェイク ああ。パン・ジャム・卵・ミルク……。

247 食事は1日2回から3回になった。捕虜を死なせないためだな。

248 ロバート トイレトークもできて快適だ。おお、看守が来た！

249

250 独白 幼いころ母は聖書を熱心に読んでいたことを思い出した。今は聖書を読むだけで、自暴自棄だったこの地獄とは別の世界にいるような気持ちになる。ここには「神の約束」が書いてあるから、読んでいる間だけは、辛い現実から逃れられる。読み進めるだけで、いつのまにか物語に引き込まれるのだ。読めば救われるかもしれない。いままで読んだことのなかった聖書。わかりやすい話で聖書ってこんなにもすらすら読めるものだったのか。

251

252

253

254

255

256

257

258 上官 おい おまえ それを返せ！葬式は終わったんだから返せ。

259 ジェイク 「聖書」は亡くなったメーダーの形見として持っていたい。

260 上官 だめだ。だめだ。

261 ジェイク あと一か月でいい。このまま貸してくれないか。

262 上官 なんだ、こいつ本を抱きしめとるぞ。

263 看守① どうします？おとなしくなるかもしれませんよ。

264 上官 甘やかすな。葬式が終わったら返却させろ。しかし、聖書があいつらにとってそんなに価値があるのか？

265

266 看守① こいつがおとなしくなるなら、我々も楽ができます。

267

268 ナレーター ジェイクはたびたび暴れた。そして大声で叫び続けてきた。それは理不尽な拷問に対する「暴言」「愚痴」「悪態」など、残った力の限りの抵抗で、看守の逆鱗に触れて殺されてもいいと暴れ続け、手の付けられない捕虜だった。

269

270

271

272 看守 ならば。恐れ多くも天皇陛下の恩赦として3週間だけ貸してやる。

273 独白 奴らはなにかにつけて天皇陛下という言葉をも口にする。彼らにとって天

274 皇とはなんなんだ。いまは余計なことは考える時間をもったいない。

275

276 回想。 シルエットのように幼い頃が浮かび上がる。

277

278 独白 父と母に手を引かれ教会に行った時のことが鮮明によみがえった。

279 当時、教会で聖書なんて読んだことはもちろん、なぜ大切にしている

280 かも知らなかった。礼拝が終わると、集会室に集まって大人たちは楽

281 しそうに会話を始める。私たち子どもには小さなクッキーが配られ、

282 たくさんの笑顔の中で楽しく遊んだ。貧しいけれど幸せな時間がそこ

283 にあったのだ。

284

285 孤独な現実の世界に戻る。

286

287 独白 聖書なんて、一生読むことのない興味のない書物だろうと思っていた。

288 こんな明日の命もわからないのに。いや、かき消されそうな命だから、

289 聖書の言葉が心の奥底に光を灯し引き込まれるのだ。私はただひたす

290 たら聖書を読み続けた。こんな小さな砂粒のような信仰心でも、神に願

291 えば一筋のひかりになるという。私はいま聖書にすがりついているの

292 だ。メーダーが死んで聖書を読む機会を与えてくれたのだ。読み進む

293 うちに昨日までの私ではないような気がする。聖書をきちんと読んで

294 よく理解し努力をすれば何かが変わるのだろうか。

295

296 あの日「人を裁くのは法と神だけだ！」と叫んで銃殺された仲間は無

297 念だっただろうな。だが待てよ。自分は爆撃手として銃口を向けたも

298 のであるにも関わらず、偶然、処刑を免れ生きている罪深い者。こん

299 な罪深い私が赦されるといのか。赦されるはずがない。

300 ナレーター けなげではあるが、これは自らの苦みを逃れるための信仰だった。

301 ただ、聖書を手にして、彼の中でうごめく思いがあった。

302 何かに突き動かされるように、心が変わっていくのかもしれない。

303 看守① なんだ、今日は静かだな。

304 看守② なんかこのごろ変なんですよ。独り言を言ったかと思ったら笑うん

305 です。かと思ったら、夢中になって聖書を読んでいます。

306 看守① ついにおかしくなったのか。先生に相談したほうがいいな。

307

308 努力・実行は至難の業。

309

310 独白 善い人ならば、救われるだろう。だが、自分は無理だ。救われるはずは

311 ない。思えば両親には反抗的で自制心のない意志薄弱な人間だった。看

312 守には怒鳴り散らしてビンタをくらったとはいえ、雑巾バケツの水をぶ

313 ちまけて、大暴れして看守に暴力を振るうなど、まったく手の付けられ
314 ない捕虜だったのだ。ついには看守が日本刀で殴りかかることになり、
315 これでいよいよ殺されて楽になれると思った。でも、殺されなかった。
316 今も生きているのだ。

317 看守 出る！早く出る！

318 独白 出されればまた果てしない拷問だ。看守は上官に叱られるたび腹いせに
319 我々捕虜を叩く。弱っている捕虜を面白がって殴る。私はいつものよう
320 に精一杯の抵抗を繰り返していた。

321 聖書を繰り返し読むうちに「汝の敵を愛せ」という言葉が私の前に立ち
322 はだかった。馬鹿な。違う！違う！愛する敵はこの卑怯な日本ではない。
323 面白がって殴るこの憎い看守のことじゃない。たとえ私が心を変えたと
324 ころで、こんな野蛮な日本人には神の言葉など理解できるはずがないじ
325 ゃないか！

326 看守に殴られながら気付くと、私は大声で叫んでいた。

327 ジェイク 「こんな敵を愛せよなんて、できるか！愛するなんて！無理！」
328 Impossible is to love such an enemy. No way!
329 (この言葉を聞いて通訳の表情が一変する。)

330 看守① 奴はなんて言ってるんだ。我々の悪口を言っているのか？
331 通訳 いえ 違います。違います。
332 看守② なら 訳してみろ。
333 通訳 えーっと・・・これは、田舎のことわざですね。意味はありませんよ。
334 看守① ことわざ？ やっぱりこいつ、おかしくなっちゃったな。
335

336 独白 翌日の朝のことだった。通訳は小声で私につぶやいた。
337 通訳 他の捕虜のこと 聞きたい？
338 ジェイク

339 独白 時々、通訳は看守に聞こえないように他の捕虜の様子を聞かせてくれ
340 た。さらに看守らの食べ物からこっそり、私に多く盛り付けてくれる。
341 わずかスプーン一杯でも見つかれば大罪、通訳でも殺されかねない日
342 本の軍人たちなのに何故？誰も信じられない私は通訳の言葉や行動
343 すら、素直に受け入れられなかった。

344 とにかく私は許された3週間で聖書を何度も繰り返し読み、心に残し
345 たい言葉を暗記した。こんなに苦しい状況にあっても、神様は助けて
346 くれないのだろうか。ともに歩んでいるという実感などない。
347 でも看守がくれたひと匙のスープ。これが聖霊の働きか？
348 どんな暴言を吐いて暴れても、爆撃手であった私が生かされているの
349 は、何故だ。こんな私を神様はどこかで見ておられるというのか。

350 看守 早く、出る！

351 独白 いつも、突然呼び出される。ドアが開き、一步前に足を出した時だっ

352 た。看守が思いっきりドアを閉め、足はドアに挟まれた。さらに軍靴
353 の鍔釘で挟まれた足を思いっきり蹴飛ばすのだ。
354 激しい痛み。足の骨が折れているかもしれない。激しい痛みに怒りが
355 こみ上げる。まてまて怒るな「敵を愛せよ」だ。わたしは敵を・・・
356 いやいや違う。こんな奴を許せない。許せるはずはない。愛せるもの
357 か。ばかばかしい。
358 そう思う一方で、私の内なる声がつぶやく。暴れて叫んで殴られて血
359 を流しても私の痛みなど十字架には及ばない。私は自分に課した
360 「許せない敵を愛する」という義務を果たしていない。だから・・・
361 看守 日光浴だ、表に出ろよ。
362 独白 それは運動の時間のことだった。
363 看守の日本兵のポケットから一枚の白黒写真が落ちた。愛らしい東洋
364 人の子どもの笑顔がそこにあった。
365 ジェイク (拾い上げて微笑んで) Family?
366 看守 かわいいだろ。かわいいんだ。かわいい。
367 ジェイク か・わ・い・い。
368 看守 あはは。かわいいのは世界共通か。(嬉しそうに)
369 ありがとう。もう4歳になってるはずなんだ。
370 独白 笑った顔は、写真の子どものように似ていた。
371 ジェイク (似ているというジェスチャー)
372 看守 似てるか(照れながら笑う) 似てるかなあ。そうか(こっそり笑う)
373 おまえ Family いるのか?
374 ジェイク Father, Mother・・・。
375 看守 おうおう そうかあ。そうか。
376 独白 同じ男の表情が上官からの命令の前では鬼のように豹変する。
377 翌日彼はいきなり勢いよくドアを閉め、私は足の指の骨を折るほど挟
378 まれたのだった。
379 ジェイク ううっ・・・。
380 独白 許せない。こんな奴らは許せない! そうじゃない。そうじゃない。
381 痛みよりも、怒りよりも、優柔不断な自分と血を流して徹底的に戦わ
382 なければいけない。でも無理です。無理です。私は誰に向かって嘆い
383 ているのだ。「お前の嘆きを一緒に受け止め傍らにいるのだよ。」そう
384 だ。私は神に向かって素直に正直に呼びかけると、答えが聞こえる。
385 いまの私は心の底から祈っている。ようやく本質に辿りつけそうな
386 のだから邪魔しないでくれ。この痛みよ、邪魔しないでくれ。
387 ジェイク (大声で) Uuuu! I cannot stand it.
388 Don' t disturb my pledge and prayer. Never!
389 看守 うるさい! 大声を出すな!
390 独白 気付くと私は祈っている。この祈りや想いが消えないように今の自分

391 の心を邪魔されたくない。

392 それから私はドアには細心の注意を払い、彼らの心情を逆なでしない

393 ように従った。それはただ、考えたいことや私の信仰を邪魔されたく

394 なかったためだけだった。邪魔されないために、どうしてもよいことには、

395 無駄な抵抗をせず、言われるがまま素直にそして従順にしたがう

396 ことにした。そして、自分の良心の声だけに従うことにした。

397 しだいに良いことは神が喜んでくださると感じるようになった。

398 看守① 最近、あいつはおとなしいな。

399 看守② なにをやっても、反応がないということは面白くないな。

400 看守① 報告したほうがいいかもしれんな。死なれたら困る。

401 独白 神は人々の罪を背負って十字架にかかり、多くの血を流されたことを

402 私は信じているのか。本当に信じているのか。

403 私は神の本質に気付いていなかった。

404 「父よ、彼らを赦したまえ、その成すところを知らざればなり」とい

405 う言葉が突然頭の中に浮かんできた。彼らとはこの日本人のこと？

406

407 **独房に看守とともに医師が入ってくる。**

408

409 医師 腕をまくって！ 注射をしておくから、それから栄養のある食事を食

410 べさせなさい。少しは元気になるだろう。長期間の栄養失調で精神に

411 異常をきたすことはあるから。

412 独白 夕食が運ばれてきた。驚くほど美味しいパンとミルクとゆで卵と栄養

413 のあるスープだった。神が看守を使ってこの糧を与えて下さったのだ。

414 私は神様がそばにいてくださることを実感した。

415 「神様、今日の糧をお与え下さり、ありがとうございます」ただ、涙

416 が溢れた。私のような不完全な人間に、このような美味しい糧をお与

417 えくださったのだ。

418 ナレーター こうして、聖霊の働きと思う出来事のひとつひとつを、聖書の言葉と

419 ともに感じて味わい始めたのだった。

420 独白 壁に向かって座れ。この命令が一番辛かった。壁から目を離せば殴ら

421 れる。こんなことをする看守は許せなかった。朝になれば、

422 看守 起きろ、出る。早く出る！（バタン！）

423 独白 突然起こされ、呼び出され、私の足をあの固い軍靴で思いっきり蹴飛

424 ばすたのだ。彼らはこの看守という暮らしが耐えられないから、弱い

425 立場の捕虜に憂さ晴らしをしているのだ。痛い！痛い！痛い！

426 「はっきりしろ！これでもお前は敵を愛せるか！」と訊かれた気がし

427 た。メーダーが命を懸けて私を聖書の世界へと導いてくれた。

428 こうして神の言葉を感じるができるのは、わずかな期間に返却す

429 るため聖書を暗記したからという理由だけでは考えられない「呼びか

430 け」と「応答」がいつも用意されていた。素直に正直に呼びかける私
431 に神は形を変えて答えてくださっているのではないか。

432 「私の力は弱さのうちに完全に現れる」(Ⅱコリント 12:9) の言葉通
433 り、大きな神の存在に包みこまれる私は小さく弱く存在することさえ
434 忘れてしまうほどだ。

435

436 ジェイク うう！痛い！痛い！

437 私は今までの弱い私ではない。憎くて許せない敵を愛するのだ。

438

439 独白 私は静かにつぶやいた。

440 神様は「憎く許せない敵を愛せよ」と私にいうのだ。「敵を愛せよ」と
441 命じられたが、私はこの命令を無視せず、神を信じて憎い敵を愛する
442 ことこそ私の義務だ。私に課せられた課題なのだと思います。

443 ただ、このような不安定で憐れな私が忍耐強く、寛容になれるように
444 どうか私を憐れんで力をお与えください。私一人の力では打ち砕くこ
445 とはできません。ただ、今の私にできることは誓いを立てることだけ。
446 1944年6月8日私が心を決めた日であることを覚えておこう。これま
447 での私とは決別したのだから、今までとは違う新たな希望のドアを開
448 けることができるはずだ。

449 ここから、私の「行きつ戻りつ」の話をしよう。

450 自分のいままでの身勝手や我儘は、聖書で言う「罪」からきていると
451 感じ始めてきた。ひょっととしたら聖書は自分を変え、何かを成して
452 くれるかもしれない。こんな膨らんだ期待も聖書に「敵を愛せよ」と
453 という言葉に出会った時は驚いた。一番嫌なことだ。聖書の言葉ではあ
454 るが実践するのは至難の業でこんなことはできっこない。しかし次に
455 浮かんだ聖書の言葉は自分のこととして驚いた。「自分の肉のうちに
456 善が済んでいないことを知っています。私には良いことをしたいとい
457 う願いがいつもあるのに、実行できないからです」(ローマ 7:18)。

458 それは自分以外の存在、聖書が繰り返し言っている聖霊の働きがある
459 ことと気付き始める。何度も何度も聖書を読み返すが、実践の厳しさ
460 に直面してまだまだで半信半疑。ともかく聖書を読み続けたが、さら
461 なる厳しさに直面した「信仰から出ていないことは、みな罪です」(ロ
462 ーマ 12:4)。こんな言葉を思い巡らしていたが、今度は自分の気持
463 ちを見破られた言葉で叱られた気がした。が、少しホッとした「あな
464 たがたは罪と戦って血を流すまで抵抗したことはありません」(ヘブ
465 ル 12:4)。そう、これは事実。大きく揺れ動く気持ちを整理したら、
466 このモヤモヤした体験を全知全能の神は自分を背負って十字架のも
467 とに持って行ってくださる、のだと確信することができた。自分の気
468 持をありのままにぶっつけ、正直に告白することこそ重要だ。

469 こんな風に徹し切った時にこそ神が働くと実感もできた。“何回も何
470 回も迷って愚痴っているお前は、本当はそうではない自分に変わりたい
471 と思っているのだろう。おまえの内に隠れている本音や本心を見逃
472 してはいないよ”という神の語りかけを心で（inner revelation of
473 God）聞いた。いままでは何だかんだと言いながら神様と向かい会っ
474 ていたことは事実。でも今度は神様に本当に“逢えた”のだ。“やっと
475 身近のところで出会えた神様に感謝“と無意識に祈っていた。この自
476 然の祈りの本質が周囲の環境に変えられないようにと祈った。“祈り
477 の祈り”だ。だからもう看守の目より、心のこの声に従うことにした
478 のだ。確かに看守が優しくしてくれたことに感謝することもあったが、
479 いままでの忌々しいあの苦難の“ドア”は逆転して神に従うことで全
480 く違う新しい扉が開くことになったのだ。「義と愛」の神からの厳しさ
481 は「はっきりしろ」と自分の優柔不断をとがめてきたが、それは神の
482 力は弱さの内に現れる愛も意味していたのだった「わたしの力は弱さ
483 の内に完全に現れるからである」（Ⅱコリント 12: 9）。

484
485 看守① おい！ 飯だ。
486 ジェイク オ、ハヨウゴザイマース。Good morning, Sir.
487 独白 オハイオに似た言葉「おはよう」はすぐに覚えることができた。
488 「べんじょ」「コラー」も聞き覚えるのに時間がかからなかった。
489 微笑んで挨拶をして、運んでくれた食事と看守に感謝した。
490 看守② オハヨウゴザイマスだ？
491 なんだか気持ち悪いやつだなあ。
492
493 独白 何度も自分を変えようと何度も試みたが、それは簡単ではなかった。
494 わずかな時間、運動を許され独房のドアを出ようとしたその瞬間、
495 看守が足を出し私は勢いよく転び、胸を強打する。
496 すると看守の嘲笑する笑い声が廊下に響くのだ。
497 ジェイク How can I love Jap? （こんな日本人を愛せる？）
498
499 独白 何度挫折を繰り返したら・・・。
500 相手を変えることができるというんだ。心が通じない相手に・・・。
501 もう義務を果たす力も気力もすべて失った。残されたものは砕かれて
502 いない自分の魂だけだと切に思う。
503
504 **鞭打つ音と悲鳴が響き渡り、他の捕虜の叫び声が響くそして静かになる。**
505
506 独白 いっそ激しい反抗を繰り返し、殴り殺されればこの地獄は死で終わる。
507 死こそ安らぎです。もう、疲れました。限界です。

508 いいえ、こうして生かしていただいているのにそれは傲慢でした。
509 辛いと嘆く私。だが私は十字架にかけられてはいない。わき腹を突き
510 さされてはいない。この罪を背負い、私の身代わりになってくださった
511 神様のことを忘れてはいけない。
512
513 看守 さあ、運動の時間だ。相撲を取るぞ。
514 独白 時折、気が向くと看守は相撲の相手をさせるのだ。栄養失調の我々が
515 勝てるはずもなく、負ければ「万歳 万歳 日本万歳」と言わされて、
516 言わなければ「ビンタ」が飛んでくるのだ。戦況は悪化しているのだ
517 ろう。このごろ看守たちはずっと苛立っている。
518 看守 もしもここが危なくなったら、お前を殺してここを出るからな。
519 独白 理不尽に殺されるかもしれないという恐怖の日々。爆撃手なのだから、
520 問答無用に首切りにあっても文句は言えない。
521 だが、今日も生きている。いや生かされているということか。
522 命があることに感謝すべきか。とにかく神様に生かされているのだ。
523
524 明るい日差しが差し込む。
525
526 独白 独房に差し込む陽の光に顔を上げると、登れそうな壁がまるで道のよ
527 うに開けていた。
528 ある日看守の目を盗み、小窓のある天井までよじ登った。というより、
529 導かれるようによじ登ったのだった。
530 天井の小さな窓そこにはのどかな田園風景が、広がっていた。どこま
531 でも青い空。幼いころ思ったことを思い出した。
532 飛行機でこの大空を飛びたい。僕は飛行機、飛行機は僕のもの。
533 牢獄の壁しか見ていなかった私に、「天の窓」のように神様は私に何か
534 を伝えようと、見せてくださったのですか。
535
536 「懺悔と告白」の信仰の船をさらなる深みに漕ぎ出す話が続く。
537
538 独白 最後は今までの自分にも気づかないうちに課してきた“義務“からの
539 脱却だった。それなりに心のどこかで軍人魂の自負心で、自分自身で
540 神とやりとりをしてきたつもりだった。しかし、それらは時には疑い、
541 挫折し、めげてしまうこともあった。そんな不遜な自分の罪を包み込
542 んでなお余りある神様の絶大次元、絶対次元の前に自分はなんと取る
543 に足りない存在と全面降伏した。私の打ち砕かれたたましいの中から
544 生まれた呻きのような言葉は「私を憐れんでください」という切なる
545 祈りしかなかった。そしてこの時、神のひとり子イエス・キリストの
546 苦難をイザヤ書の中に観た。グサリと示された聖書はここ。長いがは

547 っさり暗記していたこの場所。生きて働く聖霊に導かれ、ここを裏付
548 ける聖書箇所。まさに(sure)ここまで導かれてこの確信(assurance)
549 が与えられたのだ。「まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛み
550 を担った。それなのに、私たちは思った。神に罰せられ、打たれ、苦
551 しめられたのだと。しかし、彼は私たちの背きのために刺され、私た
552 ちの咎のために砕かれたのだ。彼への懲らしめが私たちに平安をもた
553 らし、その打ち傷のゆえに、私たちは癒された。私たちはみな、羊の
554 ようにさまよい、それぞれ自分勝手な道に向かって行った。しかし、
555 主は私たちすべての者の咎を彼に負わせた」(イザヤ 3:4-6)。十字架。
556 我が罪を背負い身代わりとなってくださった。身代わりの死で私が買
557 い戻されたこと、それで私は贖れたのだ。贖罪。古い自分を完全に溺
558 死させることが洗礼と聖書を通して教えられた。

559

560 **バケツの水をじっと見つめているジェイク。**

561

562 ジェイク このバケツの水を使ったら洗礼になるのだろうか…。
563 路傍の石の私の身を沈めるなら、清らかな水でなくてもいい。
564 いままでの自分を終わらせるのなら、バケツの水こそふさわしい。
565 このバケツの残り水でクリスチャンの戦友の手によって洗礼を受け
566 た。

567

568 **回想と決断と感謝を「人格的な神」に。**

569

570 6月8日に決心した後もあれこれそれなりにやってきたつもりだった
571 が、心の王座には自分が座っていた。しかし、本当の信仰とはこの心
572 の王座の明け渡しである。殺されるかもしれない死の恐怖も含めて、
573 神に自分を明け渡し切ろう。心の家主が変わったのだから。この独房
574 という自分だけの祈りの部屋を与えられたことがこの道につながっ
575 た。この最高の部屋が私のテリトリーだったのだ。アーメン。

576

577 ナレーター ある日のことだった。
578 看守 おい。これ食べなよ。ふかしたての芋だ。
579 熱いからあわてて食べるなよ。
580 独白 え？くれるのか。お前たちの分が減るだろう。
581 看守は笑顔で蒸かし立ての芋を差し入れてくれているのだ。
582 ジェイク アリガトーゴザイマス。
583 ゴホ！ ゴホッ！
584 看守 だから、あわてて食べるなって言ったろう。
585 独白 看守が笑っている。親密な仲間のような笑顔で、私を見ている。

586 自分が変わることで、相手を変えられたということか。
587 私の思いは確信に変わった。
588 人格的な神様の存在を知ってから死さえも怖くなくなったことは事
589 実だが、日本の敗戦と同時に問答無用殺されることの無念と恐怖は最
590 後まで残っていた。「～窮することはありません。途方に暮れますが、
591 行き詰ることはありません。迫害されますが、見捨てられることはあ
592 りません。倒されるますが、滅びません」(Ⅱコリント 4:8-9)とい
593 うことが解るまで、私は生きていたとは言えなかった。「一時の軽い苦
594 難は、それとは比べものにならないほど重い永遠の栄光を、私たちに
595 もたらすのです」(Ⅱコリント 4:17)

596

597 独房から出てくるジェイクはよろけながら出てくる。

598

599 独白

600 戦争が終わった。日本人に殺されるという失望と絶望の中で、生かさ
601 されてきた。私はアメリカを飛び立った日、戦争で死ぬということをご
602 んやりと想像していた。捕虜になるということは 想定外のことだっ
603 た。ただ、正義のためリベンジできればそれでよかった。

604 だが、空襲を受けた日本のリベンジが取り調べという名の拷問と極限
605 の空腹・・・そして死と隣り合わせの毎日。

606 憎しみのスパイラルはとどまるところを知らない。

607 戦争はなにも生み出さないのだ。

608 このスパイラルを断ち切るため、かけがえのない命が失われたこ
609 とを忘れてはいけない。私は恐れることなく敵だった日本に行こう。
610 そして互いに理解しあえるように努力をすること。

611 一番困難な場所に自分を置いて、この聖霊の働きが聖書と一致した。
612 数々の奇跡の体験を伝えるのが私の務め、罪の贖いなのだ。

613 思えば私は独房で自分を見つめる時間を与えられ、祈りと対話の部屋
614 を与えられた。洗礼という死を越えて新たないのちに生まれ変わった
615 のだ。振り返ってみれば、全ての出来事は私の力によるものではない。
616 極限状態で学んだすべてのことは神のなせる業としか、言いようがな
617 い。

617

618 すべては、あの日から始まった。

619

620 ナレーター

621 1941年12月7日日曜日 ここ、ディシェーザーの家では穏やかない
622 つも通りの日常がそこにあったのでした。日本軍による奇襲攻撃が真
623 珠湾で行われ、彼の人生はこのラジオ放送とともに翻弄されること
624 になったのでした。

624

625 ラジオからはフットボールの試合の様子が流れる。

626

627 ママ 　　いつまで寝てるの。早く食べちゃいなさい。

628 　　　　　軍隊から久しぶりに頂いた休暇なのに寝てばかりね。

629 ジェイク 　　（食卓を見て）ママ、またスープにライスが入ってる。こんなもの、
630 ジャップが食べるもんじゃないか。いらないよ。食べたくない。

631 ママ 　　あら、美味しいのよ。食べたら片付けておいてね。

632 パパ 　　食べたらどうだ。うまいぞ。

633 ジェイク 　　いらないよ。あーあ　早くパイロットになりたいな。

634 ラジオ 　　25ヤードラインへ激しくヒットして27ヤードラインへ

635 　　　　　ここでニュースを中断してワシントンから臨時ニュースをお伝えしま
636 す。ホワイトハウスは日本が真珠湾を攻撃したと発表しました。

637 　　　　　これはジョークではありません。現実の戦争です。

638 ジェイク 　　ジャップめ。中立の立場の我が国を奇襲攻撃するなんて！

639 パパ 　　信じられん。我がアメリカは中立の立場だ。

640 ジェイク 　　僕が必ず皆殺しにしてやる。

641 ママ 　　待ちなさい。ジェイク！

642

643 ジェイクは外に飛び出していく。

644

645 ナレーター 　　やがて　真珠湾攻撃に対する報復攻撃のための召集が始まりました。
646 ジェイコブ・ディシェーザーはいち早く召集に応じて入隊したのでし
647 た。一方、攻撃した日本軍には真珠湾のサムライと呼ばれた淵田美津
648 雄がいたのです。

649

650 淵田の家　　戦勝のラジオ放送が流れる。

651 淵田の留守宅　淵田の妻と娘　美弥子がラジオの前に正座している。

652 ラジオからニュースが流れる。

653

654 　　　　　臨時ニュースを申し上げます。臨時ニュースを申し上げます。

655 　　　　　大本営陸海軍部、12月8日午前6時発表。

656 　　　　　帝国陸海軍は　今八日未明、西太平洋上に於いてアメリカ、イギリス軍と戦闘
657 状態に入れり。

658 　　　　　帝国陸海軍は　今八日未明、西太平洋上に於いてアメリカ、イギリス軍と戦闘
659 状態に入れり。

660

661 少女美弥子 　　バンザーイ　バンザーイ　お父さまバンザーイ。

662 母 　　　　　　なんですか、女の子が　はしたない。

663 少女美弥子 　　だって　お父さまが敵を撃破なさったのでしょ。

664 お父様は英雄ですもの。
665 母 そうですね。お父さまのご苦勞が報われました。
666
667 美弥子独白 父の偉業は日本を駆け巡り、私たちも誇らしく思いました。
668 父は悪者をやっつけた正義の味方でした。
669
670 スポットの中、離れた位置に淵田が立つ。
671
672 淵田 「トラ・トラ・トラ 我、奇襲に成功せり。」
673 真珠湾攻撃総指揮官 海軍中佐として350機の攻撃隊を率いて、
674 アメリカの戦艦を四隻撃沈。戦争ではたくさんの人を殺した方が勲
675 章にありつけるのだ。私の青春はこの1日のためであったのです。
676 18日後、天皇陛下の御前で戦果図にてご説明を申し上げた。
677 中佐という階級で謁見を許されたのは異例中の異例であり、陛下の
678 ご機嫌は麗しく「男子の本懐 これにすぐるものなし。」
679 なんと光榮なことであろうか。
680
681 別のスポットに立つ兵士。
682
683 兵士の声 山本五十六閣下が名譽の戦死を遂げられました。
684
685 淵田 このころから戦局はさらに悪化の一途をたどり、列強に比べて物資
686 調達の差をまざまざと見せつけられた。
687 もう、打つ手なし。真珠湾攻撃の海軍中佐の私は祀り上げられたま
688 ま。私に真珠湾攻撃を命じた山本五十六はこのことを危惧し、最後
689 まで開戦に対して反対だったということのをちに知らされ愕然と
690 した。
691 暗転
692
693 玉音放送が流れる。
694 堪え難きを堪え、 忍び難きを忍び。
695
696 昇二 世の中のすべてがひっくり返ってしまったのです。
697 教え子たちは何を信じていいのか、誰を信じたらいいのか解からな
698 くなったに違いない。世間も教員も口々に大本營発表という言葉
699 を侮蔑し、嘘の代名詞というように笑い話にしている。変わり身の早
700 さに吐き気さえ覚えた。私は教師として子土門たちにどう詫びれば
701 いいのだ。プロパガンダの波に乗り、率先して生徒に語ってきた私
702 は大嘘つきだ。私の罪は重い。

703

704 **職員室、校長の机の前に昇二が立っている。**

705

706 校長 (辞表を手に) 本当に辞めるのかね

707 昇二 はい お世話になりました。

708 教頭 理由はなんだね。

709 昇二 私は戦時中、多くの生徒を空襲で死なせました。

710 そのような者が再び教壇に立つということは申し訳ないと存じます。

711 校長 きみのような優秀な先生に辞められるのは困るんだよ。

712 何しろ教員が不足しておるんだから、頑なにならんと考え直しちゃくれんか。

714 昇二 申し訳ありません。

715 校長 君の責任の取り方はほかにあるんじゃないのか。子どもさんも小さいんだろう。次の仕事はあるのかね

717 昇二 いいえ 決まっております。

718 校長 ならば、もう一度考え直してはどうかね。

719 昇二 考えは変わりません。お世話になりました。

720

721 **校長は辞表を教頭に渡す。昇二は去っていく。**

722

723 校長 頑固もんだ。あんな調子で、食っていけるのかねえ。

724 教頭 相変わらず、あいつは融通がきかん奴ですな。

725

726 **周囲にいた教員が嘲笑する。中には頷く者も。**

727

728 男の子 二学期になると学校は全部が「男女組」になっていた。

729 教室に入るとボクの心のなかには、よくわからない敗北感に満ちていた。男女は平等であるはずがない。女は弱いのがから男が守るものだろう。僕たちに殴り合って気合を入れろと言った先生は教頭になっていた。教師は信じられないという気持ちがますます強くボクの心を支配した。

734

735 **ディシェーザーの決意。**

736

737 独白 終戦。当然アメリカの勝利だが、自棄になった日本兵に殺されはしないかと、私は恐れていた。戦争は何も生まない。無残に処刑された仲間のことや帰国を夢見て死んだメーダーのことを考えているとじつとしてはいられなかった。ふるさとに生きて帰れた喜びの中にも、私の頭の中にどうしても消せない想いがあった。私に拷問を与えた日

742 本人と、蒸かし立ての芋を差し入れてくれた日本人。どちらも同じ日
743 本人なのだ。「日本人とは何か」「これからの日本はどう生まれ変われ
744 ばよいのか」こんな言葉が頭をよぎった。

745

746 **食卓にはパパとママとディシェーザーの食膳の祈り。**

747

748 ジェイク ボクはこれから神学校に行こうと思うんだ。
749 パパ 日曜学校もサボってばかりだったお前がか。
750 ママ 無事に帰ってきたあなたが、幸せであればいいの。
751 パパ ジェイク 好きなことをすればいい。おまえは十分に傷ついた
752 ママ 学校に行くことは賛成よ。
753 あなたがどこにも出られなくなるんじゃないかって心配してたの。
754 ジェイク そしてね。日本に行こうと思うんだ。
755 パパ 日本？あの日本か。
756 ママ なぜ！あなたを傷つけた国よ。野蛮な国に行くなんてダメ。
757 今は日本中がアメリカを恨んでいるわ。
758 あなたが元兵隊だったと解ったら殺されるかもしれない。日本だけは
759 ダメ。
760 ジェイク 捕虜の仲間が病気で死んだとき、「これ、役に立ちますか」って聖書を
761 差し入れてくれたんだ。わずかな時間だったけれど、聖書は神様から
762 の愛の言葉のようで、一生懸命読んだんだ。
763 そして僕はある答えにたどり着いたんだよ。相手を知らなければ、憎
764 しみを生む。戦争は互いを理解しないで憎しみを重ねた結果じゃない
765 かって。
766 パパ 何か 考えがあるんだね。
767 ジェイク そうなんだ。ボクにはどうしてもやりたいことがある。
768 行かなければならない場所がある。
769 それはボクがドゥーリトルで爆撃した名古屋というところなんだ。
770 ママ なぜそんな危険な場所に行こうとするの。日本は野蛮な国よ。
771 爆撃した者だと知ったら、あなたを狙ってくる者がきつといるわ。
772 行かないで。
773 ジェイク ごめんね、ママ。日本人が捕虜の僕に聖書を差し入れてくれた。
774 その聖書で僕は目の覚めるようなひとつの言葉に出会った。
775 これって ママがいつも話してくれている
776 「偶然じゃなくて必然」じゃないの。
777 パパ ジェイクの思うようにさせてやろう。ジェイクも苦しんでいる。
778 ジェイク ごめんなさい。(部屋を出ていく)
779 パパ ママ、神様がお守りくださるよ。
780 **パパはママを抱きしめる。**

781
782
783
784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819

淵田の隠遁生活と東京裁判。

ナレーター

人は戦争を裁けるのか。
東京市ヶ谷、戦時中陸軍省が置かれていた場所で、戦争の指導者たちを裁く極東国際軍事裁判　いわゆる東京裁判が行われました。
1946年　平和に対する罪、通例の戦争犯罪、人道に対する罪について、28名がA級戦犯として裁かれました。
裁判は、最高司令官　マッカーサーが任命したオーストラリアのウイリアム・ウエップ裁判長を始め、世界11カ国の判事たちが集められました。パリ不戦条約では個人に対する罪は問われないとされており、淵田は軍人の職を解かれたもの個人的な罪は問われませんでした。職を解かれた淵田には、「戦争の引き金を引いた戦争好きの男」「淵田が戦争を始めなければ、日本がこんな焼け野が原にはならなかった」などと世間から厳しい目が向けられるようになりました。

淵田の茶の間　ラジオの声が流れる。

ラジオ

この戦争を引き起こした人たちの裁判がおこなわれております。皆、各被告たちはそれぞれ　何を考えているのでしょうか。

淵田

何を考えているのでしょうかと！戦勝を褒めたたえていたラジオ放送こそ、どの面下げて批判するのか。終戦と同時に私はすべてを失った。公職を追放され、軍人恩給は止められて、一切の収入は止められた。真珠湾の英雄だった私は開戦のきっかけを作った極悪人になったのだ。

美弥子

父は荒れていました。戦争が終わると同時に、ご近所の目が一変し、「戦争好きのお前らのおかげで、焼け野が原になった」「お前ら職業軍人が戦争を始めなければ、息子は戦死しなかった」などという誹謗中傷の声を浴びせられました。父は母の故郷奈良に帰り、周囲との交流を絶ち、母の実家の土地を借りて、我が家は自給自足の暮らしを始めました。

淵田

勝てば官軍、負ければ賊軍。終戦になった途端、手のひらを返したように「おまえら職業軍人がこの国を破滅させた」というんだからな。

美弥子

お父さま、明日は東京ですか。

淵田

ああ、そうだ「吾等は日本人を民族として奴隷化せんとし、又は国民とし滅亡せしめんとする意図を有するものに非らざるも、吾等の俘虜を虐待せる者を含む一切の戦争犯罪人に対しては、厳重な処罰を加え

820 されるべし」ポツダム宣言だよ。

821

822 美弥子 お父さま 今日証人として出廷なさるだけなんですよ。

823 淵田 この戦犯裁判は、野蛮人の首祭りみたいなもんだ。

824 美弥子 首祭り？

825 淵田 そうだ。種族間での争いのあと、勝った方が負けた方の首を抱えて帰

826 り、屋根に並べて首祭りをやって恨みを晴らした。それと同じことだ。

827 美弥子 お父さま……。

828 淵田 奴らは日本軍が行った残虐行為に罪があるというんだ。

829 見てみろよ、空襲で日本中焼け野が原じゃないか。

830 空襲は老若男女、子どもから赤ん坊まで非戦闘員に対する殺人だ。原

831 爆はどうだ。あれを残虐行為とは言わんのか。原子爆弾を落とし民間

832 人を殺戮したアメリカの国家元首には罪はないのか。日本は昔から

833 「喧嘩両成敗」といったもんだ。日本だけが

834 裁かれるのは不公平だ。そうは思わんか。

835 妻 あなた、もうお酒はお止めになって……

836 淵田 ああ、大丈夫だ。明日上京したら、証人として奴らの間違いを思い知

837 らせてやる。

838

839 **日本に向けての船のなかで。**

840

841 ナレーター 日本という国に向かうにあたって、船上で日本を学んだ。

842 キリスト教の弾圧、宣教師の虐殺だけではなく、踏み絵によってあぶ

843 りだされたキリスト教徒の処刑。隠れキリシタンのことなど、日本が

844 歩んできた歴史について学んだ。

845 ジェイク 驚いたね。日本という国のこと、まだまだ知らないことだらけだよ。

846 フローレンス キリスト教弾圧の歴史は恐ろしかった。それでも、神様を信じて生き

847 ようとした人々がたくさんいた日本という国だったなんて。

848 私は嬉しいわ。海外宣教が夢だったの。我が家は貧しいとは思ってな

849 かったけれど、毎日タンクいっぱい井戸水を汲むのが私の仕事だっ

850 った。来る日も来る日もトウモロコシの鞘を剥いて缶詰を作って売って

851 たの。母が縫ってくれた洋服は学校用と礼拝用だけ。でも、憧れの教

852 壇に立って子どもたちを教える仕事ができ、幸せだった。政府から

853 の物資で給食を作るのも楽しかった。でもね、大変なことがあったの。

854 ジェイク どんなこと？

855 フローレンス ねずみがお肉の中に……。

856 ジェイク ねずみ？ぼくは食べられそうになったな。ハハハ

857 フローレンス え？ ねずみに？

858 ジェイク いや、それでどうしたの？

859 フローレンス 犬の餌にして犬が死んだら大変でしょ。だからストーブの火の中に放
860 り込んだの。

861 ジェイク 大丈夫？火事にならなかったの？

862 フローレンス でも大騒ぎになったのよ。

863 ジェイク ハハハ・・・

864 フローレンス 不思議ね。学校行事でバンクーバーのビクトリア島に行かなかったら
865 あなたに出会うことはなかったんですものね。

866 ジェイク そうだね。君は学校のマドンナだったから、僕と話をしてくれるなんて、ありえないと思ったよ。

867

868 フローレンス あなたは、ほかのクラスメイトとは違っていた。成績優秀とは言えな
869 かったけれど、とても誠実できれいな目をしていたから。

870 学びたいっていう熱意を感じたの。

871 ジェイク いま、恐ろしさで忘れそうになっていたけれど。

872 日本人はすごい民族なんじゃないかと思うよ。

873 フローレンス あなたが行きたいと願っていた日本ですから。

874 ただ、今の日本は私たちアメリカ人が、ちいさな子どもを連れて安全
875 に暮らせる国かしら。一緒に海を越えると望んで出てきたけれど。

876 ジェイク 行ってみなければ、わからないよ。

877 爆撃手だったって言ったら、驚くだろうね。でも、正直に話して赦し
878 を・・・。

879 フローレンス 「言わないで」とあなたにお願いすることは間違っていると思うけれど
880 本当は怖い。学生結婚でお金もないのに幼い子を抱えて不安がよ
881 ぎるの。でも信じています。いつかあなたの熱意が私の心を溶かした
882 ように、名古屋という街があなたを信じて認めてくれる日が必ず来
883 と。

884 ジェイク ありがとう。爆撃に来た名古屋との僕の歴史を塗り替えたかったんだ。

885 フローレンス だいじょうぶ 私はもう少しも心配していないの。

886 だって神様はきっと見守って私たちとともに歩んでくださるから。

887 ジェイク 出発前の新聞や雑誌は「神に出会った飛行士」とか「Bible NOT Bombs!
888 (爆弾に代えて聖書を手)」とか。ずいぶん騒がれたけれど、これか
889 ら先、何が待ち受けているのかわからない。

890 フローレンス 神様を信じて歩きましょう。これから私たちを待っている冒険の旅を
891 きっと応援してくださると信じています。

892 ジェイク ありがとう。フローレンス。

893

894 **市ヶ谷の極東軍事裁判所にて。**

895

896 ナレーター オーストラリアのウィリアム・ウェップ裁判長は、生まれも経歴も思
897 想も異なる判事たちをまとめながら、荒廃と混乱の中で正義を迫及す

898 るという難しい仕事に疲弊する日々であった。

899

900 ウェップ裁判長 名前と住所を。

901 淵田 淵田三津雄 奈良県。

902 (ざわつく議場)

903 判事 あの淵田か、君の真珠湾攻撃は、今は罪に問われんからな。

904

905 嘲笑が聞こえる。

906

907 (スポットの中)

908 淵田 私はC級戦犯証人として東京裁判に立たねばならなかった。無実の証明を突き付けて、無罪を勝ち取ってやった。興奮冷めやらぬ私は帰路の列車の中でこんなことを考えた。戦勝国のなかにも、戦犯として裁かれるべきものが居るはずだ。そこで私は捕虜となった日本軍人の聞き取り調査をしようと考えた。

909

910

911

912

913

914 元日本軍人 捕虜に対して、親切にしてくれた女性はフィリピンにいたアメリカ人

915 でした。何故敵国の軍人の私に心を尽くしてくれるのかと聞いたら、

916 「私の両親はフィリピンに宣教師として遣わされていましたが、日本

917 軍が来て両親を殺しました。両親は殺される前に三十分待つてほしい

918 と懇願し、祈っていました。両親は何を祈ったと思いますか？こんな

919 ことをしなければならぬ日本人のために神様が許してくださるよ

920 うにと祈ったに違いないと思うのです。両親の願いを受け継いで私は

921 『敵をも愛する』ということをおあなたに伝えたいと思っていますので

922 す」というんですよ。不思議な宗教ですなあ、キリストさんは。

923

924 ディシェーザーの街頭演説の声。

925

926 淵田 なんだ、このチラシは。

927 「私は日本軍の捕虜でありました。敵を愛することを知らない日本人に神の愛を伝えたいと、この国に来ました。」敵を愛する・・・古

928 本屋で聖書を探し、農業の傍ら一心に読みふけたのでした。自分を

929 殺そうとする者のために祈る祈りとは一体何なんだ。そしてある

930 一筋にたどり着いたのです。

931 「父よ、彼らを赦し給え。彼らはその為す所を知らざればなり」

932 (文語訳、ルカ 23:34)。彼らの中に私も含まれているのだ。

933 私の人生はもう終わりだとばかり、思っていたのに。赦されるとい

934 うのか。

935

936

937 最初に会いたかった人。

938

939 ジェイク コンニチハ 私です。会いたかったアオタさん。

940 青田の息子 父さん。アメリカ人のおじさんが「御礼が言いたい」って言うてるよ。

941 青田 そうかぁ 会いたくないな～。

942

943 息子独白 その日から、大きなおじさんは度々我が家にやってきた。

944 ぼくは優しいまなざしのおじさんが好きになった。おじさんは捕虜だ

945 ったというのだが、父は戦争中の話を一切しない。おじさんは父さん

946 に聖書をもらって感謝しているというのだ。聖書をきっかけに捕虜と

947 看守の関係は戦友となったのだろうか。戦地から帰ってきた父は「戦

948 犯」という言葉に怯えて暮らしていた。後に父からこんな話を聞いた。

949 「上官の命令は絶対。たとえ人道に背く行為であっても従わなければ

950 不服従で罰せられ、懲罰だった。戦地から命からがら帰ってきて、捕

951 虜の扱いが悪かったという理由で、多くの日本人が処刑された。仲間

952 を売って自分だけ助かろうという卑怯な奴も少なくなかったはずだ。

953 もしも、あのアメリカ人捕虜が訴えられるかもしれないと思っていた

954 のに、私の罪を許し、会いに来てくれるなど信じられなかった」と。

955 私はおじさんのところへ遊びに行くのが楽しみになった。

956

957 昇二の家。

958 小さな借家のなかで内職の段ボール箱が積み上げ有れている。昇二の妻 愛子は内職の手

959 を休めることなく働いている。娘の良子は人形で遊んでいる。

960

961 盛田の母 愛ちゃんに内職ばかりさせて、あんたどう思ってるの。

962 昇二 こんな世の中にするために、沢山の生徒たちが死んでいったのではない。

963 僕はもう、二度と教壇にたつてはいかんのだ。

964 愛子 お母さん、私は昇二さんの気が済むなら、それでいいんです。

965 私たちにも罪はあるんです。何も言わないで目をそらせ続けたんです

966 から。

967 盛田の母 そんな、硬いことばかり言って、

968 昇二は亡くなったお父さんそっくりだわ。

969 世間じゃ、みんな何ごともなかったように逞しく生きてるのよ。

970 昇二 遊んでるわけじゃない。

971 愛子 そうです。臨時雇いですけれど、仕事はしています。

972 お義母さん、幸せになる道といばらの道があるとしたら、いまの昇二

973 さんはいばらの道を歩く方が、気持ちりが治まるんだと思います。

974 良子 お父さん 私たち幸せだよね。

975 昇二 いや、幸せになってはいかんのだ。許されることのない罪なんだ。

976 盛田の母 昇二！
977 良子 ごめんなさい（思わず謝る良子に気付かず母が続ける）。
978 盛田の母 馬鹿なことをいうんじゃないよ。昇ちゃん、あんたの罪を可愛いこの
979 子に背負わせるんか。
980 昇二 そんなつもりはないよ・・・。
981 盛田の母 そもそも、戦争はあんただけの罪か。
982 生徒さんを死なせたことがあんたの罪だと思うんなら、自分一人です
983 っかり抱えて一生背負って生きなさい。そして今度は生徒さんを守る
984 教師になって、もう一度 教壇に立つことで償いなさい。逃げるんじ
985 やありません。
986 昇二 かあさん・・・。
987 愛子 でもお義母さん。
988 昇二さんは教壇に立つことがお辛いだと思います。
989 盛田の母 逃げてはいかん。二度と生徒を死なさぬように、戦争のない良い世の
990 中をつくる立派な生徒さんを育てなさい。
991
992 **ただならぬ雰囲気**に良子がおばあちゃんにすがる。
993
994 良子 おばあちゃん、ごめんね。ごめんね。
995 盛田の母 ああ、ごめん ごめん。 あんたにこんな思いをさせてなあ。
996 婆ちゃんが悪かったんだよ。怖い顔してねえ。
997 もう怒らないからね。
998 愛子 お母さん ありがとうございます。
999 盛田の母 さ、お菓子をおあがり。今日はささやかだけどお肉も買って来たよ。
1000 良子 わー お婆ちゃん ありがとう。
1001 愛子 すみません。ありがとうございます。
1002 昇二 ・・・・。
1003 盛田の母 いいね。あんたの戦争は終わったんだからね。
1004
1005 **教会の集会室**にて。
1006
1007 加藤 アメリカ政府の政策により、思想教育のために三千人の宣教師が日
1008 本に送り込まれたが、それとは別にディシェーザー先生は神学校を終
1009 えて、家族を連れて空襲を行った名古屋に来ることを決意されたとい
1010 うことか。
1011 笹田 そのようだな。先生の目的はなんだろう。
1012
1013 **教会の一室**、山本 笹田 加藤 堂本 小池 など若者たちが集まって勉強中。
1014

1015 笹田 戦後、誰もが我先にずるいことをしている。この節操のなさは何だろ
1016 う。日本は負けた途端、大和魂の潔い日本人が全滅したようなもんだ。
1017 山本 終戦になって、僕らがどう生きるべきか。こんな日本と嘆くばかりで
1018 なく、我々の世代で立て直そう。
1019 笹田 進駐軍に没収されて、金持ちはいなくなったか？
1020 加藤 財閥は解体された。取られるものがないもんは楽だな。
1021 笹田 両親は国家建設の為に、学生のうちに見合いをして結婚を急げという
1022 んだ。
1023 山本 見合い？見合いだ、結納だなんて、もうそんな慣習はなくなる時代じ
1024 ゃないのかな。そもそも結納は家を結びつける鎖みたいなもんじゃな
1025 いか。とは言っても、頭の固い親には解らんだろうな。
1026 加藤 私はここに来ることはもちろん。聖書の勉強していることは秘密なん
1027 だ。我が家が熱心な仏教徒というわけではないが、敵国アメリカ人との
1028 交流など両親が理解できるとは思えん。
1029 笹田 そう。なにしろキリスト教は鬼畜米英の宗教だからな。昨日まで憎め
1030 と言っていた国を理解しろだとか、迎え入れろだとか、頭の固い頑固
1031 おやじには通用しないさ。ハハハ。
1032
1033 **大声とともに小池の父親が怒鳴り込んでくる。**
1034
1035 小池の父 かつての敵国の宗教に洗脳しているのはここか！鬼畜の機嫌をとって
1036 へらへらしておるのか！勉強をしているなんぞ嘘に決まっとる。
1037 小池 父さん！
1038 加藤 敵国って、戦争はとっくに終わっているじゃないですか。
1039 小池 洗脳だなんて、失礼だよ。
1040
1041 **参考書の山 机上に広げられたノートに目をやる。**
1042
1043 小池の父 なんだ、本当に勉強しとるのか。
1044 小池 ここの牧師先生は僕たちの英語の先生だよ。
1045
1046 **ジェイクが入ってくる。**
1047
1048 山本 お父さん、僕らはこれからの日本の為に何ができるだろうかと迷って
1049 いました。そんな僕たちに「学生なのだからまず学べ」と先生は諭し
1050 てくれました。
1051 小池 圧倒的な国力の差を我々日本人は知らなさ過ぎたんです。知らされな
1052 さ過ぎた。英語もアメリカの文化も同様です。
1053 笹田 先生はいつも「無知は無理解を生み、無理解は憎悪を生む」と仰いま

1054 す。だから、僕たちは広く学ぶことを大切にしています。

1055 堂本 先生は軍人でした。でも日本の捕虜であった時間の方が長かったんですよ。たった一度の攻撃で中国に不時着した。ところがそこが日本の統治下だったんです。日本では職業軍人が許せないという人は大勢いるけれど、軍人だけに責任を押し付けて戦争の総括を終わっていいのかとも思うのです。私の母は愛国婦人会で中心的な役割を果たしていましたが、町内の陰口に堪えかねて名古屋まで引っ越してきました。

1061 母はただ、真面目に言われた通り指導していただけですよ。母は人嫌いになり、私も故郷の話はしたくありませんね。

1063 小池父 許されないことほど苦しいことはないからな。黙って見ているだけでも同じ。いじめなんてそんなもんです。やっている方は清々しているが、やられた方は救われない。それで引っ越したんですか。

1066 堂本 はい。住んでいられなくなりました。母なりに一生懸命だったのに誰も助けては、くれません。配給の係をしていた隣のおばちゃんも、えこひいきだったとか噂されて、そのうち一家はいなくなってしまうましたよ。

1070 小池父 女は執念深いからな。人間は誰かに認められないと生きられなくなる。

1071 山本 小池君はお父さんに一番認められたんじゃないかな。

1072 小池父 わたしに・・・ですか。

1073 小池 お話したら、お父さんは理解してくれましたか？

1074 小池の父 なんだと！ 親に意見するつもりか。

1075 笹田 お父さん、我々学生は、やり場のない怒りを何かにぶつけているんです。それが英語の勉強だったのかもしれませんが。

1077 加藤 参ったな。小池君のお父さんのようにうちの両親も怒るのかな。僕は親には内緒でここに来ていまして・・・。

1079 小池の父 当たり前だ。心配しない親はおらんぞ。きちんと話すべきだろう。

1080 堂本 お父さんのおっしゃる通りだな。

1081 時代が変わろうとも「親に孝」は変わってはいけない。

1082 井上夫人 さあさあ。お勉強はお休みして、お茶にしましょう。

1083 奥さんの指導でクッキーを焼きましたよ。お父さまもご一緒にどうぞ。

1084 小池の父 いや、私は・・・そんな。

1085 ジェイク どうぞ、一緒に。It's important to know each other.

1086 東山 「相手を知ることは大切です。」と仰っておられます。

1087 小池の父 そうですか。なんだかバツが悪いな。

1088 ジェイク ？

1089 加藤 バツが悪いって英語で何といえればいいのかな。

1090 堂本 そんなのあと あと。

1091 フローレンス さあ、お茶が冷めてしまいますよ。

1092 山本 やったー。ごちそうだね。

1093 加藤 君がここに来る動機はこのお菓子にあるんじゃないのか
1094 山本 ええ？ 僕だけかい？
1095 笹田 いやいや「Give me chocolate」は加藤君じゃないのか。
1096 加藤 おい！
1097 ジェイク Let's have tea. 今度の週末はキャンプに行こう。山に登ってテント
1098 を立ててね。そうだ、私の自慢のヨーデルを歌います。楽しみにし
1099 ていてください。
1100 娘 こんにちは、先生！ 聞いていただきたいことがあるんです。
1101 ジェイク OK！どうぞ。
1102 井上 私たちまでお茶に呼んでいただいてすみませんね。
1103 フローレンス どうぞどうぞ。
1104 井上 先生が初めて我が家を訪ねてこられて時のことは忘れられません。大
1105 きな体のアメリカ人がいきなり「ソース貸してくれませんか？」びっ
1106 くりしましたよ。先生が、この名古屋を爆撃したアメリカ兵だったと
1107 いうことは、この町以外の人たちも知っています。私たちは心配なん
1108 ですよ。何かあってからでは困ります。夜だけでも入り口にカギをか
1109 けたほうがいいですよ。
1110 井上夫人 先生は身体の大きな軍人さん。きっと強いはずですが、
1111 自分の命を投げ出そうと思っていらっしゃるような気がするのです。
1112 ジェイク アリガトーゴザイマス。ダイジョウブ。
1113 東山 井上さん、先生は。もし、ここで私の命が奪われることが私の使命な
1114 らば、お受けしましょう。永遠のいのちの道を説くことを神さまが望
1115 んでおられるのなら、この仕事を続けましょう。と仰っている。
1116 カギをかけるおつもりはないようですよ。
1117 笹田 この町の名前が守山と聞いて、先生は「モリヤの山」とおっしゃった。
1118 聖書のなかのモリヤの山を思い出されたようだった。一番大切な我が
1119 子の命さえも差し出す覚悟でこの地に赴任されたのかもしれないと、
1120 私はこの頃思うんです。
1121 東山 そうですね。そのご覚悟はお持ちでしょうね。
1122 井上 いや、それではいかん。いかんのですよ。
1123 ナレーター 牧師の仕事は忙しく、どの教会でも家族はしばしば後回しになっ
1124 ました。近隣の教会に努める牧師の娘が家出をしてやってきました。
1125 娘 (泣きながら)お父さんは愛する娘より、泥棒のほうが大切なんです。
1126 私の部屋は娼婦に占領されて勉強もできません。
1127 ジェイク ワカリマス。ソウデスネ。
1128 東山 ここにいることだけでも知らせた方がいいですね。
1129 牧師もご心配なさっておられることでしょう。
1130 娘 いいえ、心配どころか、私がいなくなったことさえ、気づかないでし
1131 ょう。

1132 ジェイク あなたの父さまは あなたのことも、いつも祈ってます。
1133 気がつきませんか。
1134
1135 **教会の外、戦争未亡人・昇二・良子の手を引いている愛子。**
1136
1137 愛子 あなた、もう帰りましょう。
1138 昇二 ここの牧師は空襲である日、名古屋を襲った奴なんだ。
1139 同じ目に遭わせてやる。
1140 愛子 やめて、そんなことしたら捕まります。良子が可哀想でしょ。
1141
1142 **近くで立っている未亡人。手には包丁が握られている。**
1143
1144 昇二 あんたは？
1145 戦争未亡人 なんでもありませんよ。
1146 昇二 包丁を持っているじゃないですか。
1147 未亡人 かたき討ちですよ。アメリカに夫を殺されました。
1148 だからあいつを殺して私も死にます。
1149 昇二 相手は鬼畜ですよ、あなたが立ち向かってもやられてしまう。
1150 私が行きます。(未亡人から刃物を取り上げる)
1151 愛子 駄目ですって、あなた。
1152
1153 **男が教会のドアを開けて中に飛び込んできて、ジェイクの元に駆け寄る。**
1154
1155 男 おい！ 鬼畜、おまえはアメリカ兵だったそうだな。
1156 息子はインパールというところでお前の仲間に殺された。
1157 息子を返せ。返せないならお前の命をよこせ。
1158 ジェイク How can I help you? (どうなさいました)。
1159 東山 (ジェイクに通訳をする。)確かに牧師は昔、アメリカの兵隊でしたが、
1160 インパールには行っておられません。
1161 男 お前の仲間が殺したことに違いない。(なおも迫る)
1162 東山 警察を呼びますよ。
1163
1164 **騒ぎを聞きつけて井上夫妻と牧師の娘が出てくる。**
1165 **続いて未亡人 昇二 愛子 良子が中に入ってくる。**
1166
1167 ジェイク (東山を制止して) Please kill...
1168 東山 駄目です先生。こんな者に殺させるわけにはいかない。
1169 ジェイク I' m praying. You might want to kill me.
1170 男 なんだ。何と言っている。

1171 東山 殺してください。ただし、お祈りをする間待ってくださいと。
1172 男 自分が天国に行けますようにって祈るのか。
1173 息子はあつという間に殺されたんだ。悠長に祈る時間なんかなかった
1174 んだぞ。
1175 東山 ご自身の為ではありません、
1176 あなたの為にお祈りをなさると仰っているのです。
1177 ジェイク ゴメンナサイ。大切な息子 亡くして 辛かったですね。
1178 殺人は罪です。罪を犯すあなたをお赦しくださるように。
1179 祈ります。少しだけ、待ってください。
1180 昇二 あんた、この男のために祈るのか。
1181 未亡人 嘘っぱちですよ。そんな奴いるはずがない。
1182
1183 東山独白 私は子どもの頃初めてこの教会に来たあの日のことを思い出しました。
1184
1185 **回想。**
1186
1187 ジェイク ようこそ 教会へ。よく来てくださいましたね。
1188 東少年 ボクの・・・ボクのお父ちゃんは死にました。戦争で負けて、我が家
1189 は何にもなくなったのに進駐軍のジープに轢かれて死にました。ボク
1190 の家はほんとに何にもなくなりました。みんなで泣いて暮らしていま
1191 す。一家の大黒柱のお父ちゃんを鬼畜米英に殺されて・・・
1192 「手ぶらで歩いている進駐軍がおったら殺してやる」そう思っていま
1193 す。
1194 ジェイク So sorry 申し訳ない。哀しみ わかります。(手を握る) 私はご家族や
1195 お父さんのことをお祈りすることしかできませんが、ほんとうに申し
1196 訳ないと思っています。
1197
1198 東山独白 がっしりした大きな手のひらでした。元軍人ですから、かなり強い力
1199 で私の手を握り、sorry と言ってくれました。私は膨らみ続ける憎し
1200 みを持て余していました。ただ一緒に悲しんで、共感してくれたこと
1201 で、張り詰めた僕の心に少しだけ隙間が空きました。理解して貰えた
1202 喜び。共感してもらえた癒し。ボクはいっぺんにこの先生が好きにな
1203 りました。
1204 **回想終わり。**
1205
1206 ジェイク あなたがたは？
1207 未亡人 私の夫は捕虜の食事を作る仕事をしていましたが、戦争犯罪者として
1208 裁かれ処刑されました。捕虜に木の根を食べさせた罪だというのです。
1209 牛蒡の煮物を食べさせただけです。軍の皆さんの食事と同じです。

1249 男 (折り鶴を両掌で包み込むように) 山折り 谷折りか・・・。

1250

1251 シルエットの中で淵田が立っている。

1252

1253 淵田 私は「私は日本の捕虜でありました」のパンフレットを受け取ってから数年後、洗礼を受けてアメリカ各地を回って講演を始めました。

1254

1255 「大量虐殺者。茶番だ。」新聞記事にはいつもそんな文字が踊りました。

1256 講演のタイトルは「私は真珠湾攻撃を行ったものです」興味本位の聴衆の前でゆっくりではありましたが、理解し合うことの大切さを英語で語りかけました。講演は人気がありました。真珠湾攻撃を行ったことを憚らず語るのですから、私は標的となることを願っていたのかもしれない。

1257

1258

1259

1260

1261 ナレーター 淵田とディシェンナーは教会の計らいで出会いました。

1262 ジェイク あなたのお話は聞いています。お会いできてうれしいです。

1263 あなたの英語は 面白いし分かりやすい。

1264 淵田 またお目にかかれて光栄です。あなたのおかげで私は救われました。

1265 アメリカ人が真剣に私の話を聴いていないかもしれない。わたしという人間が見たくて来ている。それでもいいのです。先日、私の講演会に日系人かと思われた少年がやってきました。

1266

1267

1268

1269 回想。

1270

1271 日系人の少年 ボクは日本人だから、「鬼」だってクラスメイトにいじめられてきた。

1272 ボクの中に日本人という鬼が住んでいるのかもしれないと思っていました。だから、淵田という元日本兵が教会にくるというから「鬼」を観に来ました。

1273

1274

1275 淵田 ようこそ、こんにちは坊や。

1276 少年 鬼じゃない。おじさん鬼じゃないね。日本兵だったの？

1277 淵田 日本の子どもたちは戦争が終わるまで鬼畜米英と言ってアメリカ人を「鬼」と言っていたんだよ。不思議だね。

1278

1279 少年 おじさんは、小さいし・・・。 人間だよ。他の日本人は鬼なの？

1280 淵田 ハハハハハ。日本人は鬼じゃない。もう鬼はやめたんだ。よく、訪ねてくれたね、本当にありがとう。

1281

1282

1283 回想終わり。

1284

1285 淵田 私は命の尽きるまで、講演を続ける予定です。

1286 真珠湾攻撃を行った私は常に命を狙われていると教会の皆さんが心配してくださるのですが、神さまがお望みなら、それでよいと思っています

1287

1288 ます。「殺されて楽になる」いや冗談ですよ。

1289 そうそうニュースがあります。アメリカ国内を廻っているうちに娘の

1290 美弥子がアメリカ海兵隊の隊員と結婚することになりました。妻はな

1291 かなか理解できないようですが、わたしはこれでようやく二つの国の

1292 懸け橋ができたと思うのです。世界中の人々が同じ人種になれば、戦

1293 争が無くなると思いませんか？

1294 ジェイク ……。

1295 ナレーター この二人の会話はいつまでも続きました。

1296 また会おう！と再会を誓い合って二人は別れたのでした。

1297 淵田の葬儀にて。

1298 加藤 先生、淵田さんが亡くなり、葬儀はキリスト教式ですが、その棺には

1299 旭日旗がかけられていますね。淵田さんは英霊として見送られるので

1300 すね。

1301

1302 人目を憚ることなくディシェンダーは棺にすがり大声で泣く。

1303

1304 ナレーター 敵として戦った国に、平和を願って語り続けて来た二人は、「戦争」と

1305 という同じ敵と戦う同志でした。

1306 老兵 牧師さん。泣いてやったださって、ありがとうございます。彼は

1307 洗礼を受けてアメリカで講演を続けることで救われたのでしょうかな。

1308 戦友として感謝しています。淵田は私にあなたに会いに行くように何

1309 度も言いました。鬼畜米英として戦っていたアメリカ軍人のあなたに

1310 会おうなどとは思えませんでした。あいつは死んで私にあなたと会う

1311 機会を与えてくれたんですね。(手を見せる)

1312 誰にも話したことはありませんがね、これは戦闘機に乗っているとき

1313 に、撃たれた傷です。気付いたら手袋の中が真っ赤でした。おそらく

1314 私ほどたくさんの人を殺した人間はいないと思います。だから、毎朝

1315 顔を洗う度、手を洗う度、罪の深さを思い知れという傷なんです。こ

1316 んな私は許されるはずありません。

1317 罰が当たったのか、殺された人たちの恨みを受けたのか不治の病にな

1318 りましてね。医者に言わせるとあとわずかな命だそうです。私は死刑

1319 を待つ囚人です。

1320 ジェイク 病は罰ではアリマセン。誰にも平等に死は訪れます。

1321 「メメントモリ」死を想って生きよというチャンスをあなたは頂いた

1322 のです。待ッテクダサイ。(東山に何か話しかける)

1323 東山 人は罪深いものです。だからといって救われないということはありません。「重い罪を背負った人ほど救われなければならないのです」と、

1324 仰っています。

1325

1326 老兵 ほほう！まるで親鸞聖人ですな。

1327 「善人尚もて往生をとぐ。いわんや悪人をや」ってね。あれほど苦し
1328 んでおられた淵田さんが羨ましいです。
1329 私のかみさんはクリスチャンでした。三年前に病気で亡くしましてね。
1330 いま思えば、ありがたいの一言も言ってやれなかったことが悔やま
1331 れます。私らの時代の男はみんなこうでした。言わなくてもわかっている
1332 だろうってね。それではいかん。いかんのですよ、それじゃあ。世
1333 の中、これは間違っていると思ったときにはきちんと発言しなければ
1334 いないのとおんなじです。
1335 ねえ、先生。
1336 もしも、・・・もしもですよ。私のような人殺し、戦争とは言え大量殺
1337 人者が洗礼を受けたいと言ったら・・・。あなた、笑うでしょ。
1338 いや赦されるもんじゃないですよ、私の罪は。私が一生背負っていく
1339 にせよ、残されたわずかな時間に私ができることはないんですかね。
1340 洗礼を受けたいと思ったのはね。自分の罪が消えますようになっていう
1341 んじゃないんです。死んだら家内と同じ場所に行けるっていうじゃない
1342 ですか。苦労ばかりさせてきた、あいつにひと言「ありがとう」を
1343 言ってやりたいんです。
1344 ジェイク 良いお考えです。
1345 老兵 先生・・・戦争は何故なくならないんでしょうね。
1346 いまも世界のどこかで戦争をしようとしている国がある。
1347 なくすことはできないんですかね。
1348 ジェイク そうですね。
1349 東山 このときのディシェーザー先生の悲しそうな顔は一生忘れられません。
1350 ベトナム戦争の枯れ葉剤で負傷した息子のジョンのことがあってから、
1351 「アメリカに正義はあるのか」「戦争に正義があるのか」という問を持
1352 っておられたのではないかと私は思います。名古屋の町だけではなく、
1353 日本国中の教会に赴任しながら、理解を深め合うことを願っておられ
1354 たディシェーザー先生はやがてパーキンソン病に倒れられました。
1355 新聞記者 捕虜になられた時のことをお話しいただけますか。
1356 ジェイク 捕虜？ 私が？ どこで？
1357 東山 晩年のディシェーザー先生はすべてを忘れておられるようでした。
1358 神様は先生の辛い記憶を忘れさせてくださったのでしょうか。
1359 おまえのすべての重荷を降ろしてもよいという神様からのプレゼント
1360 でしょうか。
1361 先生の最期の言葉は「次の説教はどこですのかね」でした。
1362

完

3. 会務報告

名古屋フルブライト・アソシエーション 総会(2024年11月9日)

報告

① 総会・講演会などのお知らせの変更などに伴う会員の実態

2023年度総会で、お知らせをすべてメールで行うことが決定されたが、その結果、名古屋フルブライト・アソシエーションとして登録されていた66名が、実質的に、27名になりました。また、日本イーストウエストセンター中部同友会の人数が21名(名古屋フルブライト・アソシエーションメンバー5名を含む)が13名(フルブライト5名を含む)に変更になりました。二つの組織が毎年一緒に行動することになっています。

② 日本イーストウエストセンター中部同友会について

昨年まで、塚田守が名古屋フルブライト・アソシエーションと日本イーストウエストセンター中部同友会の会長を兼務していましたが、ハワイのイーストウエストセンターとの関係で、山本恵里子さんが日本イーストウエストセンター中部同友会の会長になりました。

③ 2023年度(2023年4月から2024年3月)の事業報告

以下のように、講演会が行われました。

日程:11月11日(土曜日)

Zoomによる開催日程 2023年11月11日(土曜日)

総会:午後4:00~4:50

休憩:午後4:50~5:00

講演会:午後5:00~6:00

懇親会:午後6:00~7:00

講演会講師の紹介:

服部良子先生:石川県立大学教養教育センター 講師

テーマ：南洋群島とハワイとフィールド言語学

- ④ その他：Fulbrighter in Nagoya no.33 は、2024年3月ごろに、ホームページにアップしております。なお、Fulbrighter in Nagoya no.34 は、ホームページにアップすると同時に、添付ファイルで全員（名古屋フルブライト・アソシエーションおよび日本イーストウエストセンター同友会メンバー）に配布する予定（2月～3月）

審議事項

- ① 2023年度の決裁書（別表1）にありますように、赤字が出て、事務局補填になっていますが、今までの日本イーストセンター中部同友会や名古屋フルブライト・アソシエーションの預金の残金から出金が可能です。
- ② 2024年度事業計画予算（別表2）にありますように、紙媒体によるお知らせを止めることで、支出が60000円になっています。メール会員の27名のうち20名が会費を支払ってくだされば、会の運営が可能になりますので、ご協力お願いします。

別紙 1

名古屋フルブライト・アソシエーション

2023年度決算書

収入	金額	摘要	支出	金額	摘要
			総会案内(66人)名古屋フルブライト	22,044	
			総会案内(21人) EWC	11,557	
会費 (フルブライト)	66,000	3000X22	サーバー・ドメイン	41,250	
会費 (EWC)	8,000	1000X8	ウエブサイト移行作業	22,000	
			The Fulbrighter in Nagoya no.33 (5冊)	10,000	
			30X110(振り込み郵便費用)	3,300	
			講師謝金	5,000	
			通信代	585	
事務局補填	41736				
計	115,736			115,736	

2023年度収支決済につき、領収書、預金通帳等関係書類によって監査を行った結果、適正である事を認め、ここに報告します。



監事

小坂敦三 2024年11月9日

別紙2

名古屋フルブライト・アソシエーション

2024年度事業計画予算

収入	金額	摘要	支出	金額	摘要
会費	63,000	3000 X 20	講師謝礼	5,000	
			サーバー・ドメイン	41,250	
			ニューズレター発行34号	10,000	
			会場費	1,500	
			通信費	2,250	
計	60,000			60,000	

名古屋フルブライト・アソシエーション会則

制定 1983年10月 1日

改正 1993年 6月 5日、2009年 5月30日、**2012年10月14日**

第1章 総則

第1条 本会は、名古屋フルブライト・アソシエーションと称し、英文を **Nagoya Fulbright Association** と称する。

第2条 本会は事務所を名古屋に置く。

第3条 本会は、会員相互の親睦を図り、会員の経験、情報をもとに、より一層の啓発を図り、日米親善および相互理解を増進することを目的とする。

第4条 本会の会員は、正会員、準会員、賛助会員、名誉会員、シニア会員とする。

- 第5条
1. 正会員：ガリオア・フルブライト奨学金のグランティアー
 2. 準会員：フルブライト奨学金のグランティアーで日本に滞在しているアメリカ人
 3. 賛助会員：本会の目的に賛同し、役員会の承認を得た者
 4. 名誉会員：正会員のうち、本会に特別の貢献をし、役員会の承認を得た者
 5. シニア会員：正会員のうち、本人の申し出があり、役員会の承認を得た者

第2章 事業

第6条 本会は次の事業を行う。

1. 会員相互の交流、親睦を深めるための活動
2. フルブライトその他の奨学金を受けて渡米するグランティアーへの指導、援助
3. 日本に滞在するフルブライトグランティアーの研究活動 および滞在中の生活への指導援助
4. その他日米相互理解を深めるための活動および役員会で必要と認めた事業

第3章 総会

第7条 総会は毎年1回開催する。その他役員会で必要と認めた時には、臨時総会を開催することができる。

第8条 総会では、次の事項を行う。

1. 事業報告、収支予算、決算の承認
2. 役員を選出
3. その他の本会運営のための重要事項の議決

第9条 議決は出席正会員の過半数をもって成立する。

第4章 役員

第10条 本会には、会長1名、副会長若干名、幹事若干名、監事を置く。

第11条 任期は2年とし、役員の新選を妨げない。

第5章 会計

第12条 本会の運営資金は、会費および寄付その他の諸収入をもって、これにあてる。

第13条 正会員の年会費は 3,000円とする。

名誉会員およびシニア会員のうち申し出があった者は、年会費を免除される。

賛助会員（法人）は1口 年 10,000円とする。

賛助会員（個人）の年会費は 3,000円とする。ネットによる連絡を希望する場合には 終身会費 10,000円とする。

第14条 本会の会計年度は4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

役員

会長・事務局

塚田 守（椋山女学園大学 名誉教授 1981-83）

副会長

木下 徹（名古屋大学 名誉教授 1989-91）

山本恵里子（在野研究者 1998 元椋山女学園大学教授）

幹事

伊原 正（鈴鹿医療科学大学 教授 1985-1990）

加瀬豊司（四国学院大学 名誉教授 1974-76）

川島正樹（元南山大学教授 1995-1996）

藤本 博（元南山大学教授 1977-80）

星野靖雄（筑波大学 名誉教授 愛知大学客員研究員 1981-82, 1990-91）

Marc Bremer（元南山大学教授）

監事

小坂敦子（愛知大学法学部・国際コミュニケーション研究科 准教授 1986）

地村みゆき（愛知大学経営学部 准教授 2011-2012）

発行年月

令和7年2月15日

発行

名古屋フルブライト・アソシエーション

〒470-0134 愛知県日進市香久山1丁目3034-3 塚田方

電話：090-5863-2325

Email: mamoru@sugiyama-u.ac.jp

URL: <http://fbandewc-nagoya.jp/fb/>

印刷

ツゲ印刷株式会社 電話：052-621-2716